HAJ GARHWAR HIMALAYA EXPEDITION 1978

TRISUL I	7,120
TRISUL II	6,690
Unnamed Peak	6,100

1978年日本ヒマラヤ協会
ガルワール・ヒマラヤ遠征隊報告書

トリスル28日間

もくじ

もくじ

序
人と山との出会い

PART——I　実　践　*1*

隊の概要　*2*

行動記録　*7*

トリスルの28日間(写真)　*8*
先発隊　*19*
往　路　*25*
登　攀　*29*
ナンダ・デヴィのうた　*34*
帰　路　*35*
トリスルI峰登頂記　*37*
トリスルII峰登頂記　*40*
無名峰 6,100 登頂記　*41*
登頂交信録　*43*

反省会

現　地　*47*
東　京　*66*

行動表　*75*

日　誌　*79*

PART—II　総括　資料　他

総　括　*85*

基本戦略　*86*

タクティクス　*95*

チームづくりと隊の理念　*102*

部門総括

医　務　順化と健康管理　*107*

医　療　*111*

装　備　*113*

食　糧　*115*

GHE 78 に参画して　*117*

リエゾンオフィサーのこと　*126*

追　悼　亀井建樹　*127*

息子 建樹のこと　*128*

吾子は帰らず　*129*

神の御手の中で　*130*

鮮烈な想い出　*131*

登山小史—トリスルとその周辺　*133*

お世話になった方々　*138*

英文梗概　Twenty eight days in the Trisul　*139*

あとがき

序

隊長 稲田定重

インドでのめまぐるしかった27日間は、あっという間に終りを告げた。結果はトリスルⅠ峰（7,120m）へ6人、トリスルⅡ峰（6,690m）に7人、無名峰（6,100m）に2人と計15名のサミッターが誕生し、全員無事に母国の土を踏むことができた。

ヒマラヤの高峰に対する速攻の可能性が論じられ、実践され始まってから未だ日は浅い。けれど少数の精鋭登山者ならいざ知らず、大人数の平均的登山者が日本を出発してから帰るまでわずか28日間で7,000 m峰をめざすという、一昔前には夢想もされなかったことが試みられ、それを成しとげるに至ったということは、一体どうとらえればよいのだろうか？

人間の歴史の中では、常に先人の経験がとりこまれ、それが後に続く者に力を与え、更に高いレベルの仕事を可能にしてきた。ことにあたる側の実力がどうあれ、意識レベルでの成長・自負は虚構のように見えても、現実には巨大な力として作用する。

「速攻」という言葉で一括されて、それがヒマラヤ登山の一面での最先端のようにとらえられがちだが、内面は非常にドロくさいものであり、また幾つものバリエーションがある。登山史の主流における最先端の速攻もあれば、全く異なる意識の流れでの速攻もある。我々の試みが、ヒマラヤ登山の中において、どのように位置づけられるかの結論を出すには、もうしばらくの時間が必要なように思える。それは、この計画に参画した人間が、今後どのような軌跡をたどって成長（或いは退化）していくかを見極めなければ、広義の正しい評価はできないと思うからである。

全ての仕事において「能率」の追求は必然である。ヒマラヤ登山も、メジャーエクスペディションはそれなりに、またマイナーエクスペディションもそれなりに、必然的に能率（効果）を追求していく。「速攻」は、それを支える確固たる思想をベースとして、ふさわしい万端の要素が総合化されるべきものであるが、決して「完成」することはあり得ない永遠の命題であろう。ヒマラヤ登山の面白さの一面をここに見い出すことができる。

また、私達の隊は、「ヒマラヤ登山学校」を名乗ったことも事実である。当初、「登山学校」の名を借りて編成された遠征隊、という何となく後ろめたい気が随分とあったように思える。が、準備の過程が進むにつれて、或いは登山活動の中で、「登山学校」の意識は、少なくとも運営にあたる当事者の間では、次第に自覚されていった。終了した現在、それは参加した隊員個々の中でも、真剣な検討に付されるまでになった。これは「登山学校」という試みが、検討

に価する位置づけを必要としているからだと考えられる。

この国で、「登山学校」は不毛の分野の一つであるが、それだけに検討すべき事柄は多く、発展の可能性を大きく秘めているように思われる。高所登山に関してはなおさらであろう。

ヒマラヤ遠征は、また一つの社会的実験としてみても、様々な興味あるテーマを見い出すことが出来る。育った環境の異なる大勢の人間が短期間のうちに集い、一つの仕事をなしとげて、解散していく。そしてまた、部分的に結合して、壮大な仕事を求めていくという過程は社会そのものである。そして、ヒマラヤ登山は高い確率で人間の死がかかわり、隔絶された苛酷な環境の中で行われるだけに、極めて凝縮された実験となる。

「総括」ということで一区切りはつけているが、それは極めて限定された分野での、しかも部分の総括でしかあり得ないところにヒマラヤ遠征のもつ無限の価値が実感される。それだからこそ、とことん、のめりこみが可能になるように思われてならない。

この報告書は、我々のアクションと思索のほんの一部分であり、隊員にとっての最小限のメモリアルにすぎないが、ヒマラヤ登山の進歩にとって、何らかの働きができれば、これにこしたことはない。

1978年12月

人と山との出会い

Liaison Officer　Captain Mukesh Chopra

1978年8月26日　私は、日本ヒマラヤ協会ガルワール・ヒマラヤ・トリスル遠征隊に随行するように指示された。もちろん、私は喜んで承諾した。

何人かの友人から稲田隊長とその組織の活発な登山活動について聞くことが出来た。

そして、どんなにかすばらしいであろう山での数週間を思うと、感激と熱意が増してくるのを抑えることができなかった。山でのすべての行為が私をひじょうに感動させ、厳しいであろう任務を考えるよりまえに、私の心には楽しさへの期待が満ちていったのである。

ニューデリーのＩＭＦで私は、先発隊の野中と角田に会った。彼らは、特別にパッキングされ、荷造りされた560 kgの装備を持参していた。それらは良好な状態でベースキャンプに到着することを保証するに充分であった。

私は、すべての装備が完全に整備されて登攀に使用されるために、気のついた2、3の点について彼らに彼らに助言を与えた。

野中・角田と私は、9月3日にニューデリーを出発した。豪雨と洪水と地すべりが、あたかも待ちかまえていたようにジョシマートへの前進を妨害した。

重苦しい責任が私たちの肩にかかっていて悩んだが開通を待つしかなかった。けれど、稲田隊長より以前にジョシマートへ到着することが出来た。

9月11日　ただちに、42人のポーターと40頭の羊からなる私たちのキャラバンは、ラタからラタ・カラク、ダランシ、ディブルゲータ、デオディ、ベタルトリを経て、トリダンのベースキャンプにいたる長い行進を開始した。この行程が7日間と規定されていることを私たちは知らぬふりをしていた。

すべてを指令できるポーター頭の赤旗を見て誰かが言った“登山者は雄牛みたいに歩く”との言葉は、私たちを悩まし混乱させた。

しかしながら、幸運にも私達は何事もなく4,750 mのベースキャンプに到着することが出来た。

ベースキャンプは、デヴィスタン、ベタルトリ、ドゥナギリ、マイクトリ、ナンダ・デヴィなどの山々に完全にとりかこまれたやや平担な地域であった。

周囲には、すべて神秘的に白い砂糖のような山々が群がっていた。そして、頂上への斜面とは対照的に、下部側壁は岩くずのなだれによっておおわれており、巨大なガラガラという一斉射撃の音をたてて私たちを驚かした。

洪水をもたらした悪天候は、本隊のベースキャンプ到着まで私たちを拘束していた。ベースキャンプは、時おり嫌なみぞれや雪に見舞われることがあったが、私たちは日中の霧や雲の状態で首尾よくそれを予知することができた。

9月18日　全隊員がベースキャンプに入った。稲田隊長と野中副隊長がメッセージを読み上げ、簡素にベースキャンプ開きの儀式が行われた。このあと、小さなキャンプファイヤーを囲み、安中が作ったケーキとジプシー風ダンスを楽しんだ。

大人数規模（2人の女性を含む19名）の遠征は、確かに複雑で初めての試みであった。しかし、私たちは現実にその目標を団結してなし遂げ、フィナーレを迎えるという実にさわやかな体験をしたのである。

それは、すべて個性の強い隊員たちが失意と喜びを調和させながら、隊のためを考えて各々の部署を引きうけながら働いたたまものである。

私は、ありのままのトリスル遠征の出来事を伝え、主張しようと決心した。見たことのほとんどは少しずつ忘れられていくだろうが、登山の周辺をゆたかに満たす精神的なものとしてたくわえておく必要がある。これは全隊員にとって当然のことであろう。

トリスルの勝利の喜びを得るために、隊は結束して共同の行為を行った。登山の成功、不成功にかかわらず、遠征終了時の私たちの喜びは変わることはなかったろう。計画は困難かつ複雑を極め、隊員の大部分にとって経験したことのないものであった。しかし、稲田隊長は独特の整然とした態度で精密な方法をもってそれをなし遂げた。

1週間の短期間の中で、トリスルの頂上に13名の隊員を登頂させることに成功したことは、何という世にも稀な有能なリーダーであろうか。

遠征期間中には、がく然とする悲しいこともあった。隊員のひとり、桑原は重い病気にかかり、急きょバレーリーの軍病院に入院した。彼の危険な状況は全員にとって心痛むことであった。しかし、桑原に救いの手がさしのべられた。

野島は、遠征隊員として一緒に来た医師であったが、ベースキャンプにおいて、悪条件に耐えながら立派な仕事をなし遂げた。

トリスルの登頂は、Ⅰ峰隊とⅡ峰隊の2波によって計画された。ふたつの頂上は、まさに電撃的に攻撃された。登攀を成功させる上で第1、第2、第3とわずか3つの中間キャンプで充

分であった。

9月28日　水曜日のゆかいな、また不快なアタックの日の想い出が静かに回想される。それは、風が吹きすさむ暗くそして無情に寒い朝であった。

いつものように稲田隊長は前進を命じた。なぜならば、そのように行動することを誰も疑っていなかったからである。頂上もまた、手招きをしていた。しかし、雪稜上には幾つかの技術的困難さがあり、前進を大きく妨げていた。それは、クエッションマークでありジレンマとなって計画全体をとりまいていた。

私の体調は悪い方へ向かっていたが、すっかり慣れっこになっていて、障害の多いことを申し出なかった。太陽は、あたかもスプーンでクリームをすくいとるように雪面を横切って生命をもたらし、蒼氷は死の色をしていた。マッシュルームのような新雪は、金属片のクッションのようにきらめき、風によって表面が扇形に切られた氷壁は光を背にうけて輝き、いたるところに冷たく垂下していた。

斜面はけわしく70度もあった。和田と私は右手の雪のステップに向けて元気よく出発した。私たちを助けてくれる者はいない。同じような雪面が続いていたが、まもなく風の吹きすさむかたいブレーカブルクラストの斜面が始まった。典型的な風成雪なだれが起き易い状況にあった。気の狂うようなすごい寒さの中を私たちは怒ったようにして苦労して進んだ。休憩のための良い場所も見出せなかった。どうみても可能性はなかった。私たちはリズミカルに動いていた。時は矢のように流れていったが、私たちは少しずつ高度を獲得していった。

ちょっとした激しい動作でも心臓が早鐘のように打った。とうとう私たちは第3キャンプに着いたが、疲労こんぱいし、のどはからからに渇き、猛烈な頭痛におそわれていた。頑丈なテントと内部の食事が私たちを誘惑した。遠征の成功は、もう間近であった。テントの外では強風が猛り狂っていた。絶え間なくとどろく、耳をつんざくようなごうごうたる風の音は、私たちの頭痛を確実に一層悪化させた。雷鳴は時々砲火がさくれつするように来襲し、一切の勇気をくじくかのようにゴロゴロと稜線にとどろき遠方へこだました。

結果はほとんど明らかであった。引き裂けれるようにすさまじくうち震えるテントが私を納得させた。私たちは、隊長にこれから撤収する旨の救済を求めた。

このような状況にもかかわらず、トリスルⅠⅡ峰の登攀は完遂され、6人と7人の隊員がそ

れぞれの頂上に到達した。2名の女性を含めて、13人の隊員がひじょうな短期間でもって登頂に成功したことは、全く空前のことであった。

私は断言できる。どのような遠征隊も頂上へ必らず到達する希望と勇気、忍耐と熟練した技術を持っている。しかし、それ以上に、山に入るすべての者には燃えるような理念が必要である。頂上へ到達した者は、あらゆる沈着さと献身的な気質を備えている。

私は今、遠征をかえりみて、稲田隊長にひきいられたこの遠征は大きなニュースであり、インドと日本のすべての人々に尊敬の念を起させたと疑う余地なく言い切れる。

トリスルの近辺は、何かひじょうに特別な閑静さで、私や隊員をうっとりとさせ、私たちが初めてこの地に入ったかのようであった。

壮厳なたたづまいはとてもフィルムにとらえることは不可能で、その巨大なすべてを真実自分のものにするには登高しかあり得なかった。

支谷でさえヒマラヤの谷らしく、ひじょうに大きく、それぞれが重なり合い、あるいは合流していた。

隊は無形の足跡を印して遠征を終えた。負傷者もなく、実に良い気持で私たちは山でのすばらしい冒険に別れをつげた。

私は、多くの人々に私たちの大きな喜びを分かち与えたい。新聞やテレビで私たちの遠征の物語に接することによって、わずかではあるが私たちと同じようなインスピレーションを得るだろう。

＜おわりに＞

書き足りないこともあるが、私に割り当てられた手記の分はこれで終った。

私は、ほんとうに思い出深い経験の踏み跡を愛する山へしるした。

おわりに、インドの有名な登山家であるプレム・チャンド少佐の言葉で結ぶことにする。

"人と山との出会い、それは偉大な偶然の作品である。"

Parachute Regiment of Indian Army in Leh

PART—Ⅰ

実　　践

隊の概要

隊の名称　1978年日本ヒマラヤ協会ガルワール・ヒマラヤ遠征隊
HAJ GARHWAR HIMALAYA EXPEDITION 1978（略称ＧＨＥ78）

実行組織　日本ヒマラヤ協会Ｈ＆Ｓ実行委員会
会長　柴田金之助
委員長　岩水竜峰
委員　沖　允人　稲田定重　清水　澄　植竹清孝　佐藤　優　藤井　毅
事務局長　沖　允人
留守事務局長　増田秀穂

隊員　〔氏名・年令・住所・勤務先・HAJ以外の所属団体・海外歴・寸描の順〕

隊長　**稲田定重**（38）
979-15　福島県双葉郡

福島県双葉農業改良普及所，福島県庁山岳部日本山岳会，72ランタン・ヒマール74、カシミール、ガルワール、75HAJガルワール・ヒマラヤ遠征隊副隊長。　中途から参画し短かい準備期間だったが日頃のデスクワークが役立ったのか大過なくこなした。頂上をと意気込んでいたが、予想どおり？ＢＣに釘付けとなり御破算。帰国後、HAJの専務理事に就任、多忙さは益々殺人的となる。

副隊長　**野中和雄**（29）
328－01 栃木県栃木市上原園，

かもしか山岳会日本山岳会，72ドリュ・グランドジョラス両北壁、74マッキレー、76グランシャルモ西壁他。遠征出発１年前に結婚、出発直前に長女誕生。ヨーロッパ各地に長期滞在の経験を持つが、不思議にも口を出る単語は「グット」と「ノーグット」が80％。
しかし、これで大ていの用が足り、リエゾンオフィサーとは無二の親友になったのは全く人徳の至りか。“ジュードーの教師”というふれ込みで煙にまいていた。

隊員　**鈴木節男**（24）
065 札幌市

札幌市建築局，北海岳友会。
建築士だけにアプローチでは建物に興味を持ち熱心に観察していた。隊員中、最遠隔地にいたが、会合には欠かさず飛行機で飛んできた。キャラバンで体調を崩し、初期は体調々整に苦しんだが後半復帰し、6,100ｍ峰に登頂。写真のウデは隊員中随一。

隊員　**畠山秀男**（32）
026 岩手県釜石
新日鉄釜石製作所，白い蜘蛛同人。隊の映画撮影担当として45分の８ミリ映画を作成。ＢＣ入り後体調を崩したが、無名峰アタックのリーダーとして見事登頂を果たした。民謡のノドは絶妙で、夜のレクリェーションではいつもリクエストNo１。

隊員　**飯島孝夫**（25）
310 茨城県水戸市
茨城県土木部監理課．茨城県庁山岳部。　成田を「飯島君がんばれ」の横断幕に送られて出発。食糧担当として水戸の問屋にわたりをつけ、うまいものを安く調達した。勤務の都合で一時参加が危ぶまれたが、先輩ＨＡＪ会員の支援もあって無事Ⅱ峰に登頂した幸せな男である。

隊員　**安中秀子**（28）
379－22群馬県佐波郡
国立コロニー，女子雪氷クラブ，76ネパール。　２人だけの女性隊員の一人として常に話題の中心にいた人。重度心身障害者のお世話をしている心やさしいひとだが、何とか天下の上州はその総本山赤城山の麓の生まれもあってか男性隊員をしのぐ頑張りを見せた。記録担当として現地での詳細な記録をとり、また、本報告書の編集にあたった。

隊員　**角田不二**（25）
364 埼玉県北本市
富士フォルム，明治大学駿台山岳部ＯＢ会、日本山岳会，74ランタン・ヒマール他。　渉外要員として他隊員より20日早く出発した。100年ぶりの大洪水を突破し、予定より僅か２日遅れで野中副隊長と共にＢＣ入りしたのは立派である。全期間極めて好調で、事実上の登攀リーダーとして常に最前線に進出し、全員のけん引力となった。目下、80，81年カンチェンジュンガをめざして頑張っている。ＨＡＪの機関紙「ヒマラヤ」の編集長でもある。

隊員　**中岡　久**（28）
173 東京都板橋区
明治大学資金室，東京白稜会，74韓国雪岳山。　梱包担当であったが何事にも積極的に動きまわった。かなり高度障害にやられながらも持前の体力と気力で頑張った。帰国後、インドでの旺盛な食欲がわざわいしたのか２週間の入院生活を送った。長身で写真うつりが最高に良い男。

隊員　**北川勇人**（25）
160 東京都新宿区
日本レクリェーション協会，東京白稜会，76アラスカ・ディギー峰他。
中岡隊員と同じ会で“白稜の歌”をみっちり聞かされた。遠征日誌の代りにするんだとか理由づけて、毎日せっせと奥さんに絵ハガキを出していた愛妻家である。理論家肌で自己管理は綿密であった。将来単位クラブでのヒマラヤをめざしている。今回は野島ドクターとコンビで医療を担当。

隊員　**飛田和夫**（32）
183 東京都府中市
国鉄立川機関区，国鉄岳連・立峰山岳会立川登攀会ＯＢ，76パキスタン。

すばらしいファイターで、食糧担当として角田隊員と共に精密な計画のもとに毎日うまいものを腹一杯食べさせてくれた。出発前に200余頁の「事前準備・研究記録」を短期間に編集し、また、本報告書を編集するなどめざましい働きをした。BCまでは隊長のアシスタントとなり、登山中は常に先頭を切った。目下近い将来のカンチェンジュンガをめざして張切っている。

隊員　**釣部恵子**（24）
124 東京都葛飾区

ブッシュ山の会。
隊長と共に何度か休暇折衝をしたが取れずそれでもヒマラヤへの想い断ち難く職を辞して参加した。それでは28日間で帰るのはもったいないと、残った隊員と共にインド各地をめぐり、ネパールのトレッキングなどを楽しんできた。強烈な日射で気の毒なほど焼けた顔も元どおりの美人に復帰した頃帰国した。装備担当として活躍。

隊員　**野島照雄**（27）
168 東京都杉並区
国立千葉病院，慶応義塾大学医学部山岳部OB。専門は精神科のドクター。これまで何回か遠征隊に誘われたが「医師」としてでは嫌だと参加を断ってきた。今回は「隊員」として参加したが、不調隊員の健康管理と治療にBC及び下部キャンプに釘付けとなった。結果的に順化不足で登頂出来なかったのは何としても心残りで、この点隊員一同頭が上がらない。しかし、彼のすぐれた医療技術と誠意は何人かの隊員にとって生涯忘れ得ない貢献をなした。高度順化に関するユニークな知見が集大成される日の早からんことと、次の8,000 m峰の実現を期待したい。

隊員　**今井清和**（33）
259－01神奈川県中郡
ブラウンジャパン経理部，ニューロッククライマースクラブ。
高度の影響を強く受けて初期段階はまんまるな顔をしながら苦労したが黙々と頑張りII峰に立った。写真のウデも仲々である。どういうわけか帰路キャラバンから“ウン”がなく9日間の苦斗のあげく成田着陸寸前に開通。梱包担当。

隊員　**和田誠治**（29）
229 神奈川県相模原市
丸井広告事業社，稜朋会。
体力・技術とも充分で、国内では難ルートをバリバリ登っていた。しかし、今回は順化不調でローテーションに乗れず苦しんだ。最終日にC_2からリエゾンと共に一挙にII峰を狙ったが順化不足は如何ともし難く6,400 mで涙をのんだ。もう2日間の期間があれば確実に登頂できたと思われる。リエゾンとウマが合い慣れない英語で積極的につきあっていた好漢。

隊員　**高原　修**（34）
619—02京都府相楽郡
新幹線大阪車掌所，京都山友クラブ。　何事にも斗志満々で、積極的に環境と高度順化につとめ、食欲・アルコール量ともにトップ。帰路はリエゾンの飲み友達で大いに活躍したが、それが原因してか帰国後疑似赤痢と診断された。おかげで全隊員が強制検査され大いにうらまれた。撮影（スチール）担当。

隊員　**真島博志**（23）
601 京都市南区

国鉄梅小路貨車区，京都山友クラブ，77マッターホルンヘルンリ稜。

出発直前に休暇が困難になりあわてたが高原隊員の尽力もあって解決した。順化はスムーズ、ひじょうにまじめでマナー・メンバーシップが良好であった。隊員中の最年少者であり、今後が楽しみな好青年である。

隊員　**西田茂夫**（27）
757 山口県厚狭郡
広島鉄道郵便局下関分局，門司山岳会。

太っ腹で貫録充分の豪傑。現地では“空手”の名人というふれ込みで、ついたアダ名が「カラテ」。ちなみに、今回の隊は自称武芸の達人揃いで、柔剣道を始めズラリとおり、リエゾンやポーターたちも大いに恐れをなした次第。現地のすべてに真先に順応し、健康そのもので遠征を終えたが帰国後高原隊員の余波をうけて1カ月余も入院生活を送った。

隊員　**桑原健一**（29）
803 福岡県北九州市
北九州電報電話局，門司山岳会。

ＢＣ入り後カゼをこじらせ気管支炎を起し、一時は重篤な状態におちいった。軍のヘリコプターで救出されバレーリーの軍病院に入院したがまもなく回復し、一足先にホテルに戻り隊の帰着を待った。殆んど登山活動に参加できず不本意な結果に終ってしまったが、本人は隊員の親切に深く感謝している好漢である。再びヒマラヤをめざして7,000mの頂上に1日も早く立たれんことを皆が望んでいる。

隊員　**八嶋　寛**（28）
983 仙台市
宮城県学校生活共同組合，仙台山岳会，75アンナプルナサウス遠征。

78年ＨＡＪヌン隊に参加したが腹をこわして思うように動けず登頂を逸した。今回は現地参加で先発隊として活躍。また、後発として残り残務を処理した。黙々として何でも仕事を引受け、先頭に立ってルート開拓にあたるなど大いに功あった。みかけによらずユーモアがあり、途中参加というハンディを完全に消し去り隊にとけこんだ。

リエゾンオフィサー　**Captain Mukesh Chopra**（25）　インド陸軍パラシュート連隊（Leh）

〔故人〕

登攀隊長　**亀井建樹**　昭和25年7月21日生

登攀隊長　渉外担当として活躍が期待されていたが、昭和53年6月20日　カラコルム・ハチンダール・キッシュ（7,163m）において遭難死亡した。〔詳細については別項「追悼」参照のこと。〕

遠征の期間　本隊　1978年9月10日～10月7日（28日間）
先発（後発）
1978年8月20日～10月16日

成　　果　トリスルⅠ（7,120m）　9月28日　南稜ルートから新登頂。
（L）角田不二　八島　寛　飛田和夫　中岡　久　高原　修　西田茂夫
トリスルⅡ（6,690m）　9月28日　北稜ルートから新登頂。

（L）野中和雄　飯島孝夫
安中秀子　北川勇人　釣部恵
子　今井清和　真島博志

無名峰（6,100m）　9月27日登
頂。（L）畠山秀男　鈴木節
男

行動記録

目標をカシミール・ヒマラヤのヌン（7,135m）に置いて結成されたヒマラヤ登山学校隊は、77年秋，インド政府の突然の登山許可取消によって大きな岐路に立たされた。急ぎ転進計画をたて、沖允人氏による78年1月の現地渉外によってトリスルⅡ峰の許可がほぼ決定した。Ⅰ峰は他隊との競合を理由に許可されなかったものである。

しかし、登山時期の変更、7,000m峰でないこともあって相当数のメンバーが外れていった。そして、あくまでもヌンに執着するメンバーは別に隊をつくり、再度許可申請をして待機することになった。ガルワール隊は、78年2月に隊員を固定し、20名でもって構成することに決定した。タクティクスの基本は7000m峰の速攻に置き、現地渉外でもってトリスルⅠ（7,120m）の許可を取得することを前提としていた。以後、急ピッチで諸準備に入っていった。

御岳（3月），富士山（5月）の両合宿，基礎高所登山研究会（6月東京），関東集会（3月からほぼ隔週1回）などを柱にチームづくりと準備が進められた。

6月20日　登攀隊長及び渉外要員に予定していた亀井建樹氏がカラコルム遠征（山嶺登高会　ハチンダール・キッシュ）において遭難死亡するという事故があり、全隊員に大きな衝撃を与えた。

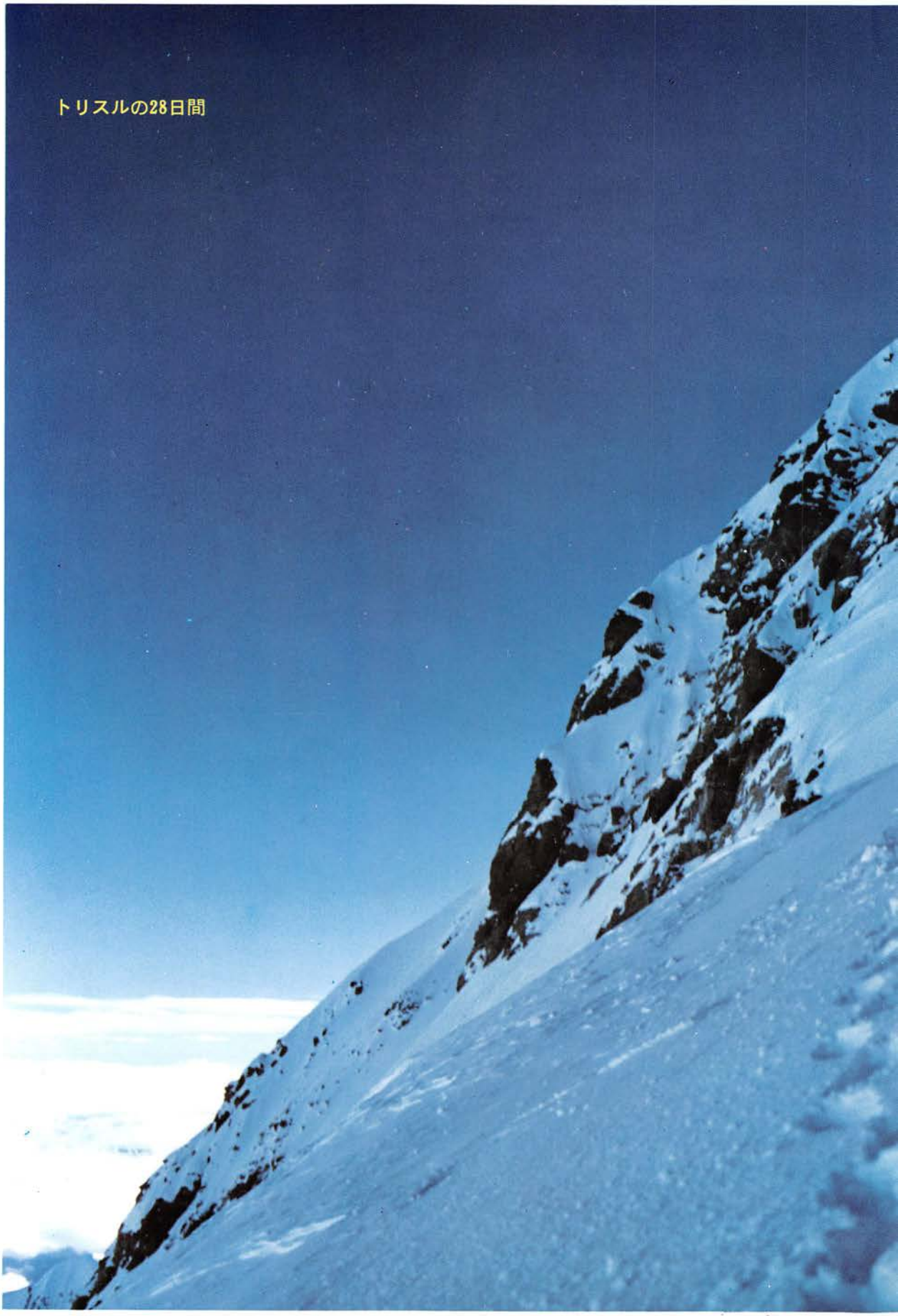
7月15日　225頁の「事前準備・研究集録」が全員の執筆によって刊行された。

出発間際になって1名が家庭事情で隊員から外れたが、ヌン隊から八嶋が加わり結局19名で遠征が実施された。

7月上旬　ヌン隊々荷と共に空輸された約500kgの隊荷の通関は、インド側の事情変化により困難をきわめた。しかし、ヌン隊先発とカトマンズから駆けつけた菊池　薫氏のサポートによって8月上旬漸くクリアーすることができた。1時は200％余の関税を請求されたものである。一方、ＨＡＪバツーラ隊の装備の一部も、伊東　満氏の手でニューデリーまで輸送されてきた。

また、ナンダ・デヴィ山群に設置されたという原子力追跡装置事件の余波から登山許可問題が再燃し、一時はトリスルⅡの許可取消の動きがあった。しかし、これはインド側の人脈を通じてかろうじて抑えることが出来た。かくして私たちは、漸く日本を発つことができたのである。

（隊長　稲田定重）


トリスルの28日間

トリスル主峰（7,120m）をめざして

Climbing the south ridge of Trisul Main Peak

チャーターバスでニューデリーを出発　－9.12－

Leaving New Delhi with charter bus

メールートで遅い昼食をとる －9.12－

Take a lunch in Meerut

治療をする野島隊員　－9.14－ラター

Be under treatment Dr. Nojima in Lata

羊飼いの少年

A boy of shepherd

ニューデリーからきたコックさん。
マナイタ代りに手のひらで何でも切る
A cock

デオディの上のシャクナゲ林で休む
Members rest in near the Deodi

ベタルトリ・ヒマールから
流下する氷河を横断する
— 9.18 —
A crossing the gracier
of from the Bethartoli
Himal

ベースキャンプまでもう少しだ
The final stage of march to Base Camp

顔立ちの引締った
ポーターが多い
A porter

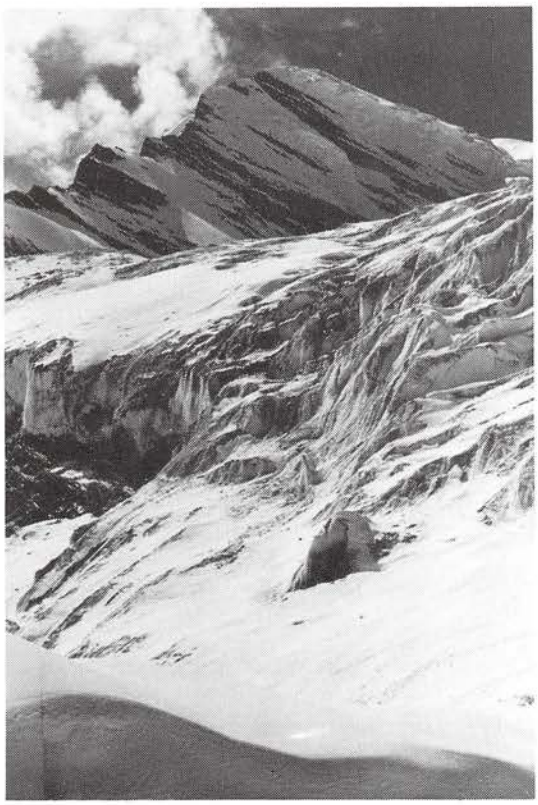
体力抜群、精力的に働いてくれた
ハイポーターのゴビン・シン
Exellent high altitude porter Gobinda Singh

ベースキャンプからのぞむP 6,648m（左）
とデヴィトリ（右）
Unnamed Peak 6,648 (1eft) and Devitori
6,788 (right) seen from the Base Camp

朝のベースキャンプ
The Base Camp on the left side of Trisul Gracier at 4,750 meters

C_1 への荷上げ

Way to Camp 1



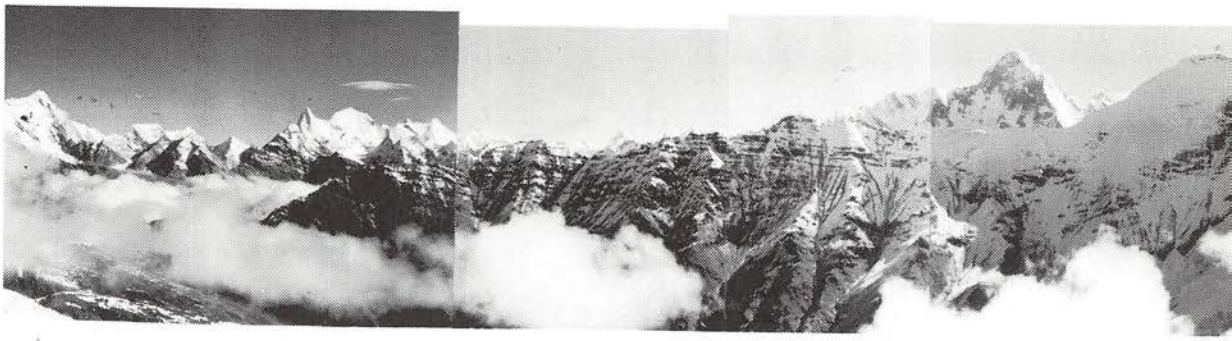
荷上げを終えてC_2で憩う隊員たち

Members rest in Camp 2

トリスル東稜とアイスフォール

The east ridge of Trisul Main Peak and ice fall seen from near the Camp 1

トリスル北稜 5,900m地点からの ナンダ・デヴィ山群（鈴木節男隊員撮影）



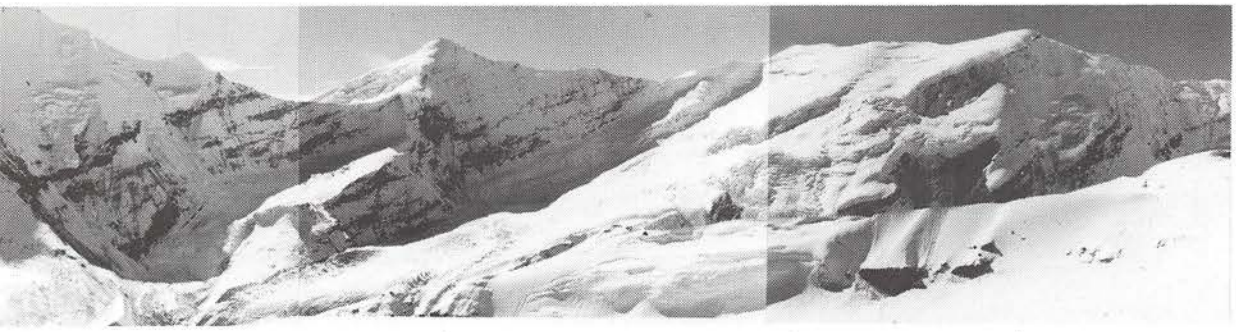
Ⅰ・Ⅱ峰コル下のアイスフォール帯

Ice fall area below the col of between Main Peak and IInd Peak

Panolamic view of Nanda Devi group seen from at point 5,900 meter on north ridge of Trisul Main Peak (photo by Setsuo Suzuki)

△ P. 6,100

△ Bethartoli Himal S 6,318



△ evistan I 6,678

△ P. 6,648

△ Devitoli 6,788

△ Mrigthuni 6,855

ムリットニィから落下するブロック雪崩

Block avalanche drop from the Mrigthuni

C2 とムリットニィ西壁

C2 and west wall of Mrigthuni

アタック開始
Attack

トリスルⅠ峰登頂、後方遠くにナンダ・デヴィ
On the summit of Trisul Main Peak

ベースキャンプ撤収の朝
－ 9.29 －
Withdraw Base Camp

別　　れ
Say good-by to Polish party

デポする装備の整理 －ヨークホテル－
Checking our deposit equipment in New Delhi

秀峰　ベタルトリ・ヒマール（6,352m）－ダランシから－

Bethartoli Himal (6,352) seen from the Dharansi

登攀を終えて－全隊員－ 9.30　ＢＣ－

Memorial photo at Base Camp with Trisul behind

先　発　隊

隊員　角　田　不　二

8月20日　成田→デリー

第1次先発として、角田がAir India 301便にて出発。デリー着は深夜となりHAJ定宿のHotel Yorkに落着く。

8月21日　デリー滞在

ホテルのマネージャー Mr. Soniと朝食。最近のインド事情・デリーの地理などを伺う。10時IMFを訪問。Mr. Munshi Rumと40分程話をする。"ガルワールは現在立入禁止地区となっており、トリスルIIの登山については保留扱いとしてある。もう少し待って欲しい"とのこと。我々はトリスルに登るために隊を組織したのであって他の山に変更になると、装備その他計画に大幅な狂いが生じ、非常に困るということを下手な英語で力説する。8月上旬の菊地氏の渉外以後、進展はない様子でやや焦りを感じる。土産品など手渡した後退出。

午後1時30分、Cox&Kings社を訪問。担当社員のMr. Gonsalvesと会う。契約内容の確認、今後の打合せなどする。好感のもてる若者である。

午後3時30分、Air IndiaにMr. J. Singhを訪ねるが、彼は不在とのこと。明朝10時再訪の意志を事務員に伝え、ホテルへ帰る。

8月22日　デリー滞在

午前10時、J. Singhを訪問。大人物という印象を受けるが、非常に親切にもてなしてくれる。"今のところトリスルIIは少し問題が残っている。しかし決して難しい問題ではない。あなたは期待してよいでしょう"と云われ、やや心が安らぐ。

その後、あちこち電話し関係筋へ協力方を依頼してくれる。口角泡を飛ばす話しぶりでまったく感謝の気持でいっぱいになる。一段落してから、インド登山界のことなど話しがはずみ、2時間近く話した後、退出する。

昼食をCoxのGonsalvesにふるまってもらい、その間にすっかり打ちとけて話しをする。楽しい男だ。

午後2時、彼と共にIMFへ。"ナンダ・デヴィエリアはクリアーできる状態になってきている"とのこと。昨日の話しとは大違いで喜ばしいことだが、インドのこと、まだまだ安心はできない。

夕方、書類の整理をしていたら、昨夕から申込んでいた日本の稲田隊長への電話がつながり、昨日、今日のことを報告する。

トリスルII許可確認

8月23日　デリー滞在

午前10時、IMFへ。"トリスルIIはもうノープロブレムである、OKだ"とRumが断言。嬉しさのあまり思わず彼の手を握る。"リエゾンオフィサーは9月1日に来る"とのこと。それではあまり遅すぎる、もっと早くしてくれないかと交渉するが、彼は"努力する"としか云わない。これからも日参してせっついたほうがよさそうである。それから正式なパーミッションレターはリエゾンに渡すとのこと。

午後から日本大使館を訪問。文化担当の奥田氏と会い30分程話しをする。いろいろと細かなサゼスションを受ける。

8月24日　デリー滞在。野中、成田→デリー

午前中はCoxとの契約書を翻訳する。おおむね問題ないが、本隊のキャラバン日程はもっとつめさせねばなるまい。

午後からデポ品の点検を始めた。が、函館山岳

協会のホワイト・セールを目指す人達が遊びに来たので、お茶を飲みながら談笑する。

深夜11時、第２次先発の野中副隊長を出迎えにデリー空港へ行く。非常に通関に手間取り、ホテル着は午前３時になってしまった。薬品・シート・ビールなどにTaxをかけられ、合計 270 Rs. もとられてしまう。

８月25日　デリー滞在

今日は、インドの祝日。商店・会社・官庁ともすべて閉まっておりなすことなし。午前中はオールドデリー見物。午後はオデオン座で映画を観る。

８月26日　デリー滞在

午前10時、ＩＭＦへ。野中副隊長を Rum に紹介し、彼からの土産品など渡す。パーミッションレターは明後日くれるそうだ。

午後からスーパーバザールで食糧買出し、75％程の購入を済ませる。

８月27日　デリー滞在

朝、ＨＡＪヌン隊の沖隊長より電話。ヌン峰登頂成功（隊員４人・シェルパ２人）とのこと。

今日はヒマチャルへ向うどんぐり山の会と明治大学駿台山岳部パーティが出発するとのことなので彼らのホテルへ手伝いに行く。我々も早く雑務を終えて山へ向かいたいものである。

夕方、ヌン隊の飯村氏が一人でデリーに帰着。稲田隊長と二度目の連絡。必要事項を伝える。

８月28日　デリー滞在

飯村．野中．角田で J. Singh を訪問。ヌン成功、トリスルＯＫということで終始なごやかに話しがはずむ。遠征後の再会を約束して退出。

午後ＩＭＦへ行ったらリエゾンが急に今日来ることになったというので、あわてるやら、嬉しいやら……。酸素会社へ行く用事をキャンセルして待っていたら１時間半程して現われた。Mr. Mukesh Chopra　デラダン出身、25才、インド陸軍パラシュート連隊の大尉である。夜は彼を誘ってディナー。彼の故郷や家族の話、恋人の話、デリーの最近の話題など大いに話がはずむ。今夜一晩デラダンの実家へ帰らせて欲しいとのことなので、明後日の再会を約束して別れる。終始にこやかで話しのわかりそうなリエゾンなのでほっとした。飯村氏は今夜、帰国の途に着いた。

ヌン隊帰着　引継ぎ

８月29日　デリー滞在

午前中は装備・食糧の購入。午後から、石油を布でこし、一斗缶からポリタンへ移す。

夕方、酸素会社へ行く。デリーの北の郊外の工場地帯の一角にあって、インディアン・エンジニアーという。タクシーの運転手も場所がわからず捜しあてるのにえらく苦労した。"ボンベは出来ているが、マスクとレギュレーターがまだ用意出来てない。明日また来てくれ……"まったくインドの会社なんて約束があてにならないものだ。

夜、10時。ヌン隊がバスで帰着。皆、陽焼けして元気そうだ。登頂してきただけに楽しそうな雰囲気に包まれていて、我々も闘志を新たにする。

８月30日　デリー滞在

野中は終日ヌン隊からの様々な引き継ぎにおわれる。特に装備の引き継ぎと確認に手間取る。

角田は酸素の調達。午後からはデラダンから帰ってきたChopraと一緒に動く。まず保険の契約、それからＩＭＦへ行って最終打合せと、約束のパーミッションレターを受取る。最後に山道具屋（West　Coast)へ行ってChopraの個人装備のアレンジ。彼は店内で道具を手にしてすっかりはしゃいでしまい、時間がかかることおびただしい。

夜はヌン隊のサクセスパーティに招かれて、モウリヤホテルへ行く。シタールの演奏を聞きながらの最高のインド料理は楽しかったが、Dry day で酒が飲めないのには一同ガッカリ。

８月31日　デリー滞在

午前中はヌン隊から引き継いだ装備の点検。ヌン隊の八嶋がトリスル隊に入ることになり、午後ＩＭＦへ届出を済ませる。（トリスル隊の中に直前にやめた隊員がいたので、これとメンバーチェンジ）。夜も装備点検に追われる。

９月１日　デリー滞在

早朝、Gonsalves より電話があり心配していたことが現実となる。デリー～ジョシマートは洪水の為通行不能とのこと。結局開通待ちの他方法がなく、ホテルの窓から今も降り続けている雨をうらめしげに眺めやる。記録的な大雨で、新聞も大々的に報じており、道路は所々70～ 100 ㎝の冠水とのこと。９月２日もなすことなく滞在。

リシケシで停滞

9月3日　デリー滞在→夜出発

雨はやんだが、道路情況が悪くまだ出発できない。Gonsalves は今夜出発がベターと云う。

午後7時、トラックが来て荷の積み込みを開始。午後10時満天の星の下を出発。Chopra もGonsalves も野中も私も皆、荷台の上だ。

9月4日　リシケシ→デラダン

夜が明けると、トラックは茫洋とした緑の原野を走っていた。やがて洪水地帯へさしかかる。一面の泥水でどこが道やら畑やらわからず、途中道を踏みはずしてひっくり返っている車なども見かけ緊張する。リシケシまで来てさらにショッキングな情報を得る。この先ジョシマートまで10数ケ所の土砂崩れと橋の崩壊により通行不能、開通はいつになるかわからないという。先行していたポーランドのドゥナギリ隊もここで足止めをくっている。Chopra の実家がここから近いので、とりあえず今夜は彼の家に泊めてもらうことにする。古い家だが、予想以上の豪邸である。

9月5日　デラダン→リシケシ

Chopraの御母堂から盛大なムガール料理のもてなしを受けたが、ここにいても情報が得られないので夕方リシケシに移る。一泊20Rs.のツーリストバンガローに落ちついて待機することにする。町には様々な情報が飛び交っており、開通は2～3日後という人もいるし、一週間かかるという人もいる。

夕方、Gonsalves と協議して次のことを決める。明朝、行ける所まで行く。Gonsalves は単身崩壊個所を歩いて越え、向う側の開通地点にもっとも近い町でトラックをチャーターする。こちら側はポーターを動員して崩壊個所の輸送を行なう。どこかでGonsalvesとドッキングし、ジョシマートへ向う。崩壊個所が延べ何十kmに及んでいるか、またポーター稼動の可能性、さらには徒歩による突破そのものが可能かどうかなど、実に様々な問題があるが、明朝さらに情報を集め、現場の視察を行なったうえで、できれば強硬突破を行ないたい。本隊到着も近づきつつあり、何としても急がねばならない。

9月6日　リシケシ滞在

Chopraの提案により、とりあえず軍隊に行くことにする。一番確かな情報が得られるし、Chopra が改修工事を急ぐように陳情もすると云っている。軍へ入るとさすがに彼が威力を発揮する。守衛達は皆最敬礼して我々を案内してくれる。何やら偉い人の室に通されて話をする。その人の言によると"今夜はスリナガールまで関通する。しかし、スリナガール～ジョシマート間に大きな崩壊が三ケ所あり、前後55kmに及んでいる。開通は明後日以後になるだろう。スリナガールでポーターを雇うことは不可能であり、また徒歩で崩壊個所を越えることは危険にきわまりない"。"明後日以後"とは具体的にいつのことなのか、くり返し聞くがはっきりした返事は得られなかった。とにかくそういうことなら、今夜スリナガールへ向けて出発と意気込んだが、荒れ果てた山岳道路の夜間走行はドライバーが拒否するというので、明朝出発とする。

ここ2～3日、イライラしっぱなしなので、気分転換にポーランド隊のホテルへ遊びに行く。彼等はドゥナギリの東北稜を登ることで総勢19人。隊長は74年にカンバチェンに遠征した人である。

悪路を前進

9月7日　リシケシ（10：30）→ルドラプラヤグ（18：00）

Gonsalvesは昨夜、デリーの本社との連絡により、本隊アレンジの為、すぐに帰るようにとの指令を受けここで別れる。リシケシを出て3時間もすると、まったく生きた心地のしない状態となってきた。悪路なんて生易しいものではない。日本だったらこの程度の改修情況では絶対に開通しないだろう。夜間走行の無理なことがよくわかった。途中、バスの転落事故があり大勢の人が死んだようである。それでも何とか通過し、スリナガールよりひとつ先の町、ルドラプラヤグまで達する。ここで、明日ジョシマートまでの開通の情報を得る。今回の遠征は、出発以後一喜一憂の連続である。

9月8日　ルドラプラヤグ（7：00）→ジョシマート（18：00）

今日もまたすさまじい走行。トラックの屋根に

いるので特に揺れが激しい。途中、工事の為4時間も待たされたりしたが、とにかく夕闇迫る午後6時、待望のジョシマートに到着。ドライバーも本当によくやってくれた。町の中心部にあるナンダ・デヴィホテルに落ちついてほっと一息。明日からのポーター交渉等は、このホテルのマネージャー Mr. Yashupa に協力してもらうことにする。

9月9日　ジョシマート滞在

野中はYashupa とともにレニへ隊荷輸送を行ない、ポーター交渉。角田とChopraはジョシマート軍管区へのあいさつと届出の為、ジョシマート残留。軍へ行くと、例によって長いこと待たされる。昼近くなって少佐の部屋へ通され、いくつかの質問と注意事項を受ける。その後、トリスルⅠに登ってもよいと云われ大喜び（Chopraからはそれ以前に許可を得ていた）午後はコマンダーに会わせてもらい、ここでは外交辞礼のみ。トリスルⅠはコマンダーからも許可されもはや事前渉外の仕事は終ったことを感じる。

夕方、野中が帰ってくる。何でも明日はナンダ・デヴィのお祭りとかで、ポーターは全く動かないとのこと。またしても一日遅れるわけだが、いかんともしがたい。それともうひとつやっかいなことには、レニ〜ラタ間にも1ケ所ひどい土砂崩れがあり、現在通行不能。明日には開通するであろうが大型車は無理というのだ。そこで明後日のキャラバンスタートを確実にするために明日タクシーを借り切って往復輸送を行ない、隊荷のラタ集結を完了させることにする。

9月10日　ジョシマート→ラタ

昨夜の計画通り、プログラムを消化する。夜はラタ村のナイケの家に招待され、ロキシーと夕食をふるまわれる。ここはリンゴがとてもおいしい。

キャラバンスタート

9月11日（晴のち曇り）ラタ（8：30）→ラタ・カラク（15：00）

待望のキャラバンスタート。一番最初は羊で6：30にスタートさせる。その後、続々とポーター達が集まってきて、来た順にノートにサインさせ、番号札を渡してスタートさせる。42人のポーターと40頭の羊で総量1.6ｔ程の隊荷が全部出発し終ると、8時をまわっていた。このあたりのポーターは殆どレニ、ラタ、スライチョタの3村から集まってくる者らしい。ラタからラタ・カラクまではひたすら登る一方のきつい道だ。1カ月近く山はおろか、トレーニングもしていないので少々こたえる。森林限界を越えるとやがてラタ・カラクだ。東北の飯豊連峰あたりを思わせる気持のよい草尾根で、水場も近く、良い所だ。

9月12日（晴のち 曇り）ラタ・カラク（8：00）→ディブルゲータ（15：00）

早朝、あたりの景色のすばらしさに目をみはる。昨夕は曇っていて何も見えなかったが、今朝はハティパルバット、ティルスリ、ベタルトリなど、今回初めてのヒマラヤ見参である。

草尾根のトラバースにかかると、前方にドゥナギリが美しい。ダランシ・パスからは目指すトリスルも見え、リシ・ガンガの奥にはナンダ・デヴィが秀麗な姿を現わす。高度の影響は全く出ず、快適に歩き、ダランシの美しい草原でしばし昼寝をむさぼる。下界の苦労が嘘のような毎日だ。この後800mの大下りとなり、下り切って川を渡るとディブルゲータだ。水場も近く、森の中の快適なキャンプ地である。標識に使う竹はここで採集できる。

9月13日（晴のち 曇り）　ディブルゲータ（8：00）→ベタルトリ（13：30）

300ｍの高巻きをした後、橋で左岸に渡るとデオディ。ここからまた200ｍ程高巻いてトリスル・ガルに入る。少し行くと、対岸の奥にチャンガバンとカランカが見える。ベタルトリに着くと、クッキングオイルの缶がひとつ破損しており、ボックス1箱油だらけになってしまった。やはりこういうものは、ポリタンクに移して輸送したほうがよさそうだ。

ＢＣ設営　偵察

9月14日（曇り一時雪）ベタルトリ（8：00）→ＢＣ（12：00）

ベタルトリ氷河を横断し、トリスル氷河のサイドモレーンに沿って登る。ゆっくり歩いて4時間ほどでＢＣに着く。高度4,750ｍ。付近は草原で

氷河とデヴィスタン、P. 6648、ムリットニィなどが眺められ、快適なBCだ。水場も近い。ポーター達が去るとあたりはすっかり静かになった。午後から食糧．装備の点検を始める。テントのポールが合わないものがあり、調整に苦労した。他は問題なし。

9月15日（晴のち曇り）BC⊃約5,100 m　発7：00〜帰14：30

角田とハイポーターのBaruでC₁地点偵察の為、トリスル氷河を遡る。サイドモレーンに沿ってしばらく登り、右から小氷河が出合った所でガラ場を下り、氷河本流へ降りる。このあたりもう一面の雪だ。ノーマルルートはここより少し手前から尾根に取付くらしい。我々はさらに氷河を遡るが、天気が悪く地理の把握ができない。やがて、また右から小氷河が出合っている地点に達する。おそらくこれがI・II峰間から下ってくる氷河であろうと判断し、このあたり雪崩の危険もなさそうなので、とりあえずここをC₁とする。標高5,100 m。（4日後にこの判断は誤りで、I・II峰間コルからの氷河はさらに奥であることが判明した）。しばらく天気がよくなるのを待ったが一向に回復せず、やがて雪が降り出したので下降にかかる。

9月16日（晴のち曇り、雪）BC⊃C₁途中のガラ場。

氷河へ下降するガラ場にロープをフィックスする。その他、トラバース地点などに若干の赤旗を設置、ルートの整備を行なう。

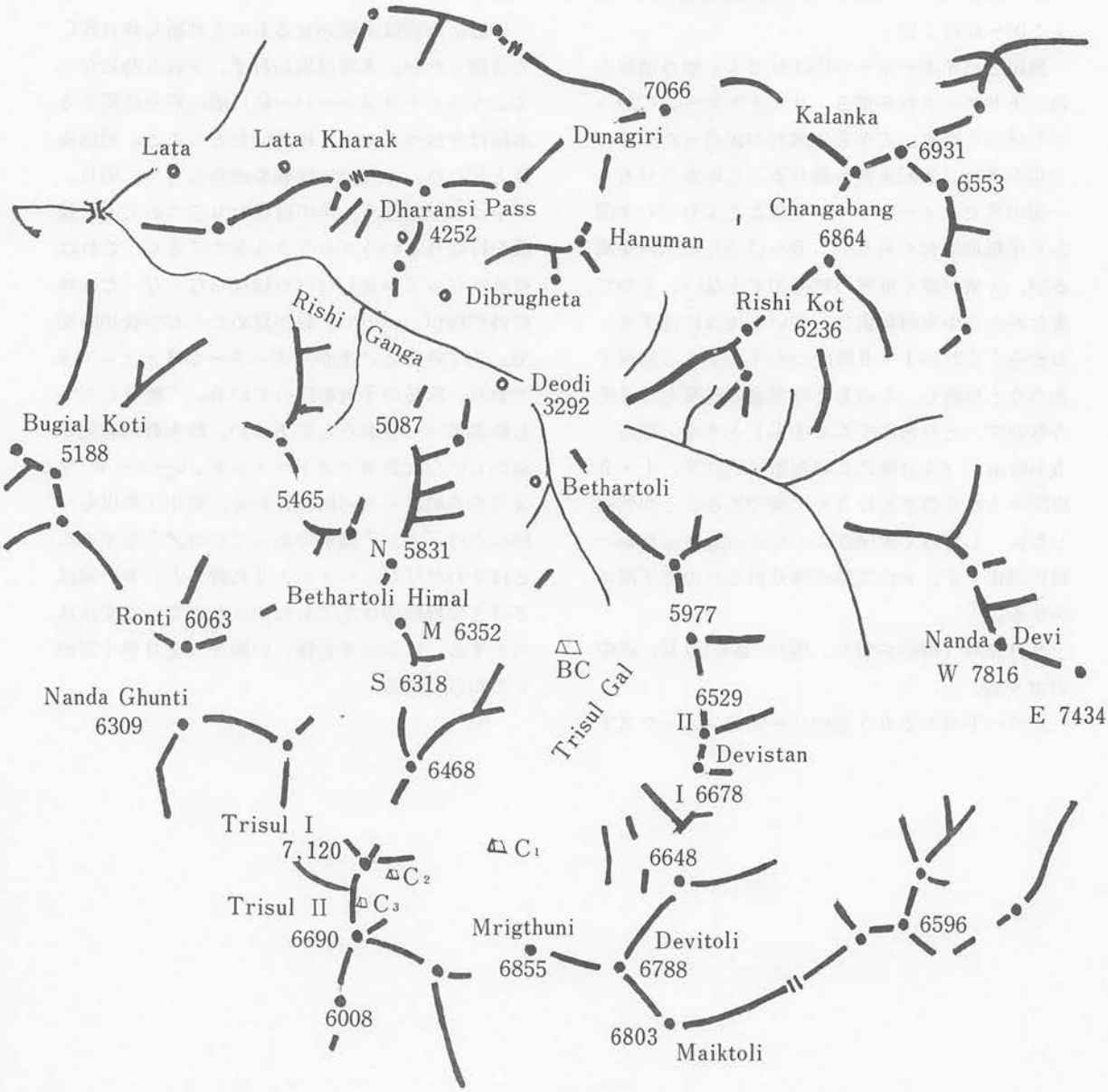
夕方、再三本隊をコールしたが連絡とれず。

本隊と再会

9月17日（晴のち曇り、一時雪）　BC滞在→夜ベタルトリ。

一応、今日は本隊が来るものと判断し終日BCで待機したが、本隊は現われず、午後5時になってようやくトランシーバーに八嶋の声を傍受する。本隊は今日ベタルトリに着いたとのこと。稲田隊長と代わり、お互いに情報を連絡しあう。明日、野中は本隊出迎え、角田はBaruをつれてC₁建設を行なうというプログラムをたてるが、これは夜半になって中止しなければならなくなった。妙に外が騒がしいので、目が覚めたのが午後10時30分。出てみると、下からポーターが3人上ってきており、隊長の手紙を持っている。"徹夜してでも酸素ボンベをおろして下さい。鈴木君の容態がおかしい"大急ぎでボンベ・レギュレーター・マスクを点検ポーターに背負わせ、野中・角田も一緒にかけ下る。"無事であってくれ！"念ずることはそれだけだ。ベタルトリに着くと、幸い彼はさほどの危機的状況でもなかったので、まずはほっとする。はからずも懐しい面々と1日早く対面したわけである。

トリスルとその周辺



（飛田和夫　作図）

往　　路

隊員　安　中　秀　子

9月12日　デリー→リシケシ

気をもんだ洪水の余波も、昨日1日の停滞だけですみ、午前11：00バス到着。

荷を積み、すっかりその気になって30分も走った頃、バスは郊外の、とある所に停車した。これからバス交換だという関係者の話に、隊員一同"最初からこっちのバスで来ればいいのに"などと言う。すかさず隊長いわく"そういうのは日本人的思考であって、ここはインドだということを忘れるな"。

インドでは車によって、走行許可範囲に相違があるそうで、車検さえ受けてあればどこでも走れる日本とは、多少違うらしい。

河川氾濫後のすさまじさは、随所にその跡を留め、当時の様子を思うに不足はなかった。今なお橋桁の下にうずまく濁流は猛り狂いながら下方へ移行をくり返していく。

まっ平な大地を、どこまでも続く1本の道。舗装道路の両脇に、幾条かのレンガが配置され、その両側は木々が並木を形成していた。広大な耕地はよく区画整理され、時折トラクターなどの大農具も見かける。

走れど、走れどついてまわるのはサトウキビ畑、思い出したように一画にオクラやカボチャが作付けされていたりする。畦畔にはススキに似ている植物や、芙蓉のような花も見えた。

インドは農業従事者の9割以上が小作農だそうで、貧富に大なる差があるらしい。

メールートという所で遅いランチタイム。カレー・ヨーグルト・サラダ（といっても玉ネギやトマトをぶっきりにしただけ）等を空腹にまかせ、皆もりもり食べる。

食堂から出ると、ものめずらしさの為か、バスは大勢の人に囲まれ、動き出すまでたいへんにぎやかだった。

バスはまた、ひたすら走り続ける。線路を横切り、用水路を渡り、たくさんのチェックポストを通過した。

地平線がなくなり、いくらか起伏のある地形になったリシケシという町、夜も深まる22時到着。途中の夕食で飲んだ乳酸飲料水が全員に好評であった。名をラッコーという。

土砂崩れに肝を冷やす

9月13日（リシケシ→ジョシマート）

以後、国境警備隊支配下になる為、橋・鉄道などは、くれぐれも撮影してくれるなという隊長からのきつーいおたっし。

リシケシの出口の検問所でひっかかり、逆戻りして車の整備、延々1時間半。その間、我々はヒンズー寺院など見学。お坊さんのくれた聖なるガンジスの水は、手に受けてみるとなんとも汚ない。

バスはガンジス川を右手に見ながら蛇行をくり返す。濃いピンクのホウセンカが咲き乱れ、大きなサボテンも見られた。

路肩は随所でゆるんでおり、ガケ崩れも数多い。そんな所をいとわず前進していく運転手に、皆心から感嘆する。

かえり見すると、○○林道のような景色がくり広がっていく。段々畑には里芋・ヒエ・稲・オクラなどがあり、昨日とは異なる様相を呈している。見かける村人も多少身ぎれいで幾分豊かそうに見られる。スクールカラーなのか、配給されたのか、子供達の着ている服にブルーが目立った。

ガンジス川を対岸に渡り、谷底に落ちている車を見たりして、肝を冷やしながら、ジョシマートへ到着したのが21：40。その名のきれいなナンダ・デヴィホテルに泊まる。

キャラバン

9月14日（ジョシマート→ラタ）

ポーターに預ける荷物を計量・梱包して、8時頃歩き出す。コスモスがきれいだ。1時間程歩き町を抜けた所でトラックに乗る。隊荷と隊員とポーターで屋根も中も満員。隊長は前の遠征時のポーターに幾人も会う。

ガルワールは、雲母の入った岩石が多いそうで足元には風化した砂がキラキラ輝く。

下車地点のラタ部落下の道路に幕営。軍用道路はなおも川に沿って上流へ続く。夕方雨。数人が上の村へ酒買いに行く。

9月15日（晴のち曇り）ラタ→ラタ・カラク

くっきりとうかび上った山々と、山ぎわに少し残る雲。奥の山がかむったほんの少しの雪は昨日のなごりだろうか？

朝早く村人が目の治療を受けに来る。汚ない手ぬぐいや布で目をこすってはどうにもならないと、ドクターは何もしない。村人は帰らない。仕方なく彼は、不本意な手当をする。村人は幾度も頭を下げて帰って行った。

歩き初めて30分。ラタの入口で子供が道をふさいで"キャンディ"とか、"スィート"とか言っている。どう扱えばいいのか？

ラタ・カラクまでは、そこから左上気味に進み、一旦水場に出て、その後はきつい登りとなる。パックランチを食べながら、松など多い樹林帯の中を汗を流して登る。セミがうるさく鳴いていた。

ラタ・カラクに近づくと、草木の丈が急に低くなり視界が開けてくる。草原に腰かけて眼下にダウリ・ガンガを見やる。あたりはハハコグサや野イバラが多い。

隊員が宿泊地に着く頃、羊やポーターはすでに到着済み。茶など出してくれる。ナナカマドが少し色づき始め、スイバに似ている草が露営地をおおっていた。小休後、少し先の丘へ登って行く者や、炊事場でラインダンスを披露する者あり。本日はナンダ・デヴィの歌を皆で学習した。

9月16日（晴のち曇り一時雨）　ラタ・カラク→ディブルゲータ

夜半、せきをしている者や呕吐している音が聞こえる。大声で呼びつけられて野島さんは大変だった。

少し登ると白い山が見える。ナンダ・グンティ、ベタルトリ・ヒマール、デヴィスタン等、足元はエーデルワイス、その他諸々の花が咲いている。

そこから、長い、長いトラバースの道。ドゥナギリが大きい。ダランシ・パスにケルンが1つ。その先も多少のアップダウンをともなったトラバースルート。通称"ダランシ"と呼ばれる所で昼食の為、ポーターが待っている。不調者が出て、ここからポーター・八嶋・北川・真島の4名がサポートに向う。他は前進。ナンダ・デヴィゲートというあだ名の石門をくぐり、右側が大きなカール状になっている所をまききると左側に一気に下り込むことになる。

隊員は三々五々散らばってしまい、ポーターはすでにほとんど先行している。Mr. Gonsalvesはすっかり見下して、"ドイツ隊は速かった"とか、"明日の行程は問題だ"とか、うるさいことばかり言う。

草原が終り、樹林帯の下りとなる。沢を丸太橋で渡り、再び登りとなる。のびやかな草原状台地を、3～4分横ぎり5分程下り込んだ沢のそばがディブルゲータである。

17：45、下ってきた飯島の話を受け、中岡がランプと食糧を持ってサポートに向う。18：15、高原・真島・Gonsalvesがザイルとカッパを持ち出向く。19：30、和田が野島・真島に付き添われて自力で到着。20：20、鈴木が隊長他大勢の人に助けられ到着。

夕食後、隊長から本日の行動について話があった。今後の対策として、先発隊を出してポーターをリードすること、各人気ままな歩き方を止めて規則正しく歩くこと、などを言い渡される。

今日は時間のとり方とは裏腹に、気ぜわしかった。ガーベラの花によく似た薄紫の野菊、もう少しゆっくり見たかった。

9月17日（晴のち曇り一時雨）　ディブルゲ

ータ→ベタルトリ

北川・中岡・八嶋・高原の4名は先行する。40分程の登りが終るとナンダ・デヴィが見えた。トラバース気味の下降、時折り、枝沢があり水には不自由しない。デオディの手前でリシ・ガンガにかかった立派な橋を渡る。

ラリグラスの下の風はさわやかだ。登行時の暑さを連れ去ってくれる。トリスル氷河とリシ・ガンガの出合へくると、リシ・コットが美しい。

まもなく道は、内院へのルートを左に分けている。木々にはサルオガセがまとわりつき、多少、森林の興亡が気にならなくはない。

つつじのような植物が多くなり、2つの氷河の合流点付近がベタルトリ。隊長が皆に、モレーンのケンカの話しなどしてくれた。

—屠殺の模様—

羊が食べたいという隊員諸氏の要望に応え1頭犠牲になる。

テント場の上の傾斜した草地で、荷物運搬用の羊が草を食べている。ポーターが1人行って連れてくる。メェーと悲しそうに鳴いた。下ってくる羊を仲間の羊が一斉に振り返って見ている。羊は嫌がっていた。悲しそうに見えた。

首すじの毛を分ける。角にロープをかける。砥いだ刃物を、分けた首すじにひとたち……と同時にロープを引く。首は簡単に離れる。用意してあった容器に血を抜きとる。バタバタしている足を上げ血を下げる。四肢の膝に、一振りづつオノを入れる。

動かなくなった頃（約10分）四肢のそこからナイフを入れ皮をはぐ。傷をつければあとは毛をかきわけながら、先に背中の方をはぐ。きれいにはがれる。腹の方をはぐと、生臭いにおいと一緒に内臓がガバッと現われる。胃は大きい。肝臓は片方で普通の鯉位の大きさだった。次々に内臓を出し、内容物を洗っていく。後は肉をブロックに切って解体終了。

羊の肉をおいしい、おいしいと食べていた時、具合の悪いはずの鈴木さんが、大声で何度も野島さんを呼んだ。

話しが"酸素だ"なんだとなり、全員に不安が波及していく。ポーターが酸素ボンベを取りにBCへ出かける。隊長はトランシーバーを離さず、看病には野島・飛田があたる。

真夜中12：00、ポーターと一緒に、野中・角田が下山してきた。

BC着

9月18日（晴のち一時雪）

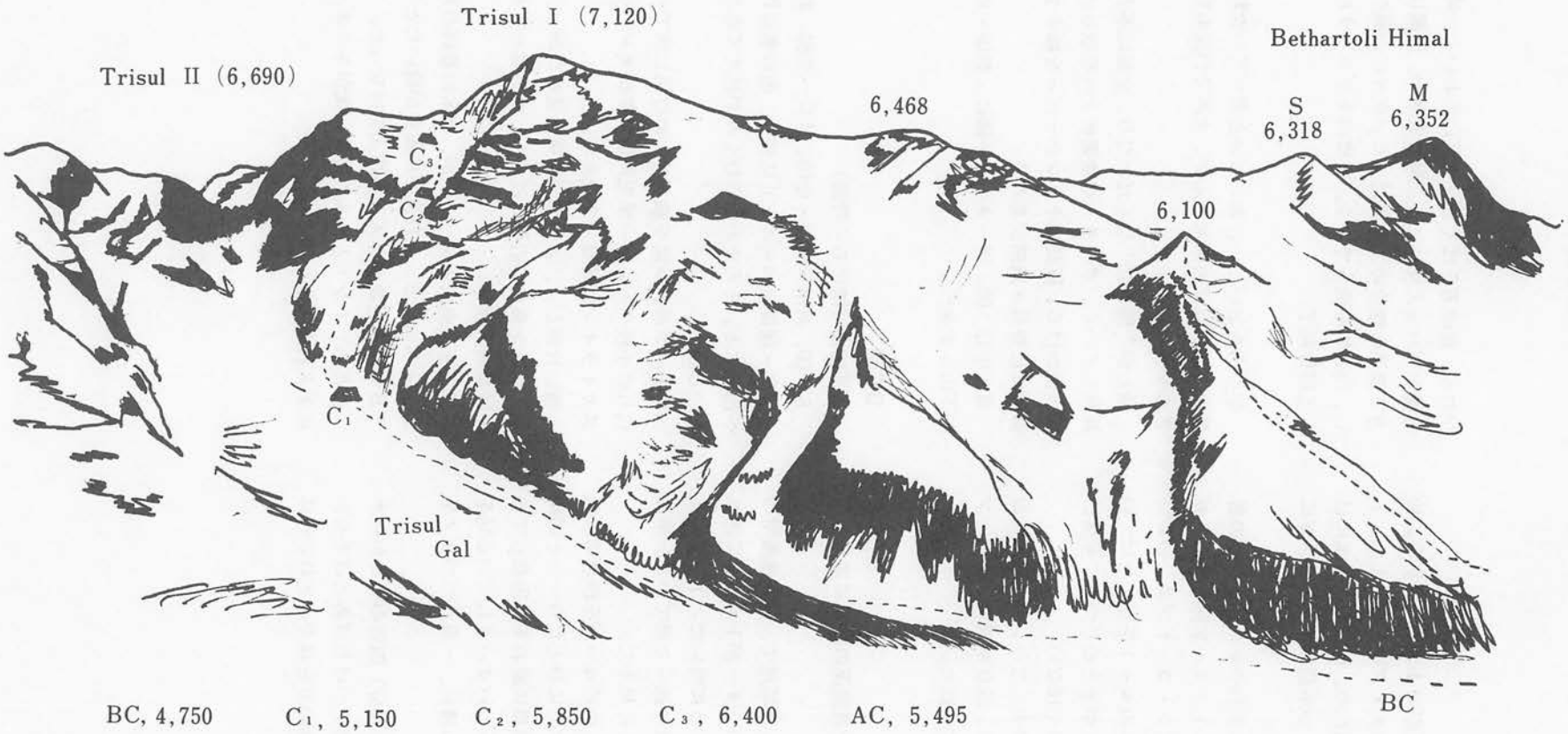
5：00、角田・北川・中岡、BCへ先発。鈴木・野島・隊長はベタルトリに残り、他の者はBCへ出発する。そろそろ顔のむくみが見えてきた者もいる。

モレーンのガレ場を横ぎり、ぬけ出た所でペグ代りの小枝を折る。一足先に出た羊がモレーンのスカイラインに連なって見えた。

強い日差しと、さわやかな風を受けながら、デヴィスタン真向いのBCに着く。今日はめずらしく隊員の方が早い。

昼過ぎ、角田とポーターが、鈴木の看病の為ベタルトリへ下る。入れ違いに隊長が着いたところでBC開きと亡井さんの追悼式を行なった。

はためくインドと日本の国旗、我がトリスル隊に幸あれと願う。



SKETCH—Devistan I 頂上から

（1975年岩手県ガルワールヒマラヤ親善登山隊撮影写真による）

飛田和夫作図

登　攀

隊長　稲　田　定　重

ベースキャンプ

標高は、4,750 mで"Tridang"といい、これまでトリスルをめざした各隊が、いずれもBCを置いた所である。計画では、あと200 mほど標高を上げたトリスル氷河左岸のサイドモレーンの上端近くに設置する予定であった。しかし、水場の関係とベタルトリからの距離の長さもあって、ここに落ちついたものである。

BCの裏には、多少白濁しているが、トリスル北稜からの氷河支流の流れがある。正面にはデヴィスタンI・IIの西面が間近にそびえており、ナンダ・デヴィはトリスル氷河を隔てて障壁の陰に隠れて見えない。上流には、ムリットニィとデヴィトリが、なだらかで広大な斜面となって広がっている。ふり返ると、リシ・ガンガの向うにドゥナギリ、ハヌマン・ピークがそびえている。まばらに生えた草もあり、BCとしてはまず申し分ない環境だが、C_1建設予定地までの距離の長さが気になる。

隊員用テント8、隊長用テント1、リエゾン用テント1、大型メステント（20人収容）1、ポーターテント、それに石積みのキッチン、台地の中央にHAJ旗とインド国旗がひるがえって何となく人くさい"ムラ"が出現したようなBCである。

順化行動

9月19日（雪のち晴）

天候はまだ不安定で、変化はめまぐるしく、朝BCは銀世界となる。高度障害が程度の差こそあれ殆どの隊員に現われている。キャラバン途中でダラシン・パスを越えただけではこの高度に順化しきれないらしい。不調の和田・畠山・桑原と介添の野島・稲田を除いて12名がC_1の設置と荷上げに勇躍出発して行く。稲田はリエゾンとタクティクスについて協議する。懸案となっていたトリスルI登山の件は快く了承してくれた。ついでにP. 6648にも登頂してよいという。P. 6648は、未踏であり、魅力的なピークであるが、日程的にかなりきつくなるようだ。日だまりの中でリエゾンと四方山話をするが、仲々如才がなく人間も良さそうで、これからの登山活動は円滑に進められそうである。

C_1へは、トリスル氷河左岸のアブレーションバレーに沿い約4.5㎞、さらに氷河本流に降りて約2㎞程行く。特に危険や困難はないが、ロングルートであるのがきつい。この日は、東稜末端の北斜面5,050 m地点に荷物をデポし、18時から19時30分に全員帰幕する。殆どの隊員はクタクタになってBCにたどり着いた。野中は鈴木の介護のため、休む間もなくベタルトリへ下り、代って昨日から介護にあたっていた角田がBC入りする。

9月20日（雪のち晴時々曇り）

どうしてもC_1の位置が低すぎるので、角田・八嶋を先行させ、東稜取付のトリスル氷河左岸の5,150 mに移しかえることにする。本隊は6時30分にBCを出る。荷上げおよび前日のデポ地からの隊荷ボッカが今日の仕事だ。C_1まで来るとトリスル氷河はどんづまりに近く、コルまではすぐである。対岸のムリットニィが頭上を圧するようにそびえ、ブロック雪崩を盛んに氷河本流に落としている。

今井・稲田はC_1を往復。畠山ら4名は、C_1への$\frac{1}{2}$地点から不調のため、BCへ引返す。ポーター3名　リエゾンも荷上げに加わる。隊員だけ

で荷上げする予定であったが、不調メンバーがいるため、彼らの好意を素直に受けることにしたものである。野中は鈴木とともにBCに入る。

角田・釣部・飛田・安中・高原・八嶋・真島・北川・中岡・西田・飯島の11名はC_1泊り。C_1は冬天4張である。

9月21日（晴時々曇りのち雪）

天候が比較的安定してきた。角田・八嶋はトリスルⅡ峰氷河を5,950 mまで到達し、C_2を5,850 mに決定する。二人は今のところ極めて好調である。他のC_1メンバーは、デポ地から隊荷をC_1へボッカのあと、C_2の少し手前（5,800 m）まで荷上げしてC_1に戻る。我々の行動原則は、新たに獲得した高度には泊まらないということを基本にしている。

日中になると強烈な幅射熱のために氷河上の行動能率が極端に低下する。

ポーター3名がC_1へ荷上げ。野中・今井・野島が上って、C_1は14名とふくれあがった。

夜になり、桑原の症状が悪化し、和田・他で看護する。畠山もかなりひどい。鈴木もペタルトリと同様の症状を訴えたが、野島の指示で投薬し、おさまる。予想外に故障者が多く、稲田は当分BCに釘付けになりそうである。

9月22日（晴）

7時30分頃から桑原の容態がにわかに悪化し、急迫をつげる。意識レベルの低下、呼吸数・脈拍の増加がみられる。食欲は全くなく、水分も受けつけない。直ちに酸素を毎分2リットル吸入させ、野島からの無線による指示で看護を行なう。野島には至急BCへ下るよう指示し、ゴビン・シンを彼のサポートに上げる。またリエゾンと協議し、ハイポーターのナライン・シンをジョシマートに走らせ、軍のヘリコプター出動を要請する。この件についてはニューデリーの日本大使館に念書を出し、また先発隊がジョシマート基地の司令官を訪れて万一の事態の際の出動を依頼しておいたものである。

11時すぎ、イタリアのムリットニィ隊6名が着くが、薬剤師のみで医師はいない。11時35分、野島が息せき切って到着し、直ちに治療に当る。野島の到着までの時間の何と長かったことであろうか。点滴と注射を行い、13時30分頃漸く小康状態となる。気管支炎と診断する。鈴木・和田が懸命に看護、リエゾンとポーターは、明日のヘリ飛来に備えてヘリポートの建設や担架作りにかかる。

上部では、角田・高原が先行してⅠ・Ⅱ峰間コルまでの偵察を企画したが、ルートが意外に長く、6,200 mまでで、コルに達することはできなかった。C_1の隊員は、全員C_2まで荷上げし、C_2往復の今井・八嶋の他はC_2泊まりとなる。野中はフォローのためC_2からBCへ下ってきた。野島は終始桑原に付添って治療にあたった。

9月23日（晴のち一時雪）

桑原の容態は依然として同じで、ヘリの一刻も早い到着を祈るような気持で待ったが、仲々現われない。治療は、本人の意識レベルが低下しているため、3～4人がかりで行なう。

午前中、しきりにドゥナギリのポーランド隊、ナンダ・デヴィ内院の隊などに無線で連絡を求めるも応答なし。500ミリワットでは出力が不足で、やはり基地用に1台強力な無線機の必要を痛感した。内院に来ているITBP（インド・チベット国境警察）隊が、強力な無線機を持っていると予想されるので、アジュら2名を軍及びITBPへの連絡を依頼するために派遣する。

C_2に泊まった隊員は、C_2の少し上部6,000 m付近まで到達したのち、BCへ下る。C_1の近くで真島・釣部が不調になったが、真島については飛田ら4名がサポートして下ろす。C_1に着いて間もなく回復した。水分摂取の不足と疲労であったと思われる。釣部も間もなく回復し、独力でBCに入る。

隊員が次々に到着して、BCは久し振りに活気をとりもどす。これで第1段階の行動は終り、あとは一気に頂上をめざすことになるわけだが、順化量は最小限しか獲得していないと考えられ、まだ不安が残るが、やむを得ない。野中は和田と共にC_1に向う（和田の順化量が不足しているので）。

畠山の症状は峠を越したようで、かなり気分がよくなり、食欲も出てきて安心する。鈴木は相変らず38度台の熱がある。

終日待ったが、ヘリは来ない。必ず来ると我々を励ましていたリエゾンもしょんぼりして気の毒

なくらいだ。

ＢＣに到着した隊員の顔は、５日間の連続行動で真黒になり、唇はひび割れて痛々しい。元気づけのために羊を一頭料理し、マトンカレーに舌づつみをうった。ミーティングを行なって24，25日は休養とすることを告げる。予定では、休養は１日であり、日程の遅れも加わっており、２日間の休養はひとつの賭けである。

軍用ヘリにより救助

９月24日（晴のち曇り）

今日は、待望の休養日のため皆ゆっくりと起きてくる。７時40分から１時間のミーティングを行ない、第１段階の行動の反省と今後の予定を相談する。アタックパーティ編成は明日発表ということにした。

今日こそはとヘリの飛来を待つ。

９時20分、ベタルトリ方面に爆音が聞こえると間もなく待望のヘリが姿を現わした。大型の軍用ヘリで、２～３回ＢＣ上空を大きく旋回して手製のヘリポートに砂煙を巻きあげて着陸する。それっということで桑原をシュラフに入れ、担架に収容し、ヘリに運び入れる。ヘリにはパイロット(少佐）及び軍医中佐（Sqnlers Yohan）が乗り込んで来た。付き添って稲田が下ることにするが、パイロットは再度ＢＣに戻ることはできないと言う。しかし、重要な連絡もあるので、ジョシマートで強力に交渉して必ず引きかえさせるつもりでとりあえず乗り込む。

野島が英文で記した軍病院へのレポートを軍医中佐に託す。これには桑原の経過・治療状況・診断・今後依頼する処置などを詳しく記載しておいた。酸素ボンベも積み込む。

ヘリは、ＢＣ滞在後数分で舞い上がり、トリスル谷に沿って下降、リシ・ガンガに出て忠実に谷あいを下る。ヘリ内には酸素吸入設備があり、ボンベの積込は必要なかった。軍医と二人で酸素吸入をさせながら、高度 4,500 *m*でリシ・ガンガを抜け、５日行程を僅か25分でジョシマートの陸軍基地に着陸した。ヘリポートには軍関係者が多数出迎えており、急を報らせに下ったナライン・シンも嬉しそうに手を振っている。彼は19時間走りに走って23日午前３時にジョシマートに到着し、軒下で仮眠後、午前７時に司令部へ駈け込んだという。正に驚くべきがんばりである。なおナラインは遠征経験も豊富で、技術・人物ともしっかりしており、ガルワール地域では抜群のハイポーターである。

パイロットと交渉した結果、司令部の了承が取れ、ヘリは再度ＢＣへ飛んでくれることになり、あわただしく用件を済ます。桑原はこの間一時ジョシマートの軍病院に収容されることになった。

大使館・留守事務局への電報連絡、桑原の所持品の点検引継ぎなど、ヘリ着陸から30分以内で済ませる。桑原は当初ジョシマートの軍病院に入院をと予定していたが、設備が悪いということで、約400㎞離れたバレーリーの軍病院に入ることになる。酸素が充分ある所に降りたせいか桑原の状況は目に見えて良くなったようである。

10時30分、あとのことを軍医や関係者にくれぐれもよろしく頼んでナライン・シンと共にヘリに乗り込む。少し気持に余裕が出てきたので、リシ・ガンガルートを機上から観察しながら、11時、ＢＣに到着する。ヘリは直ちに引返し、全員が見送る中をトリスル谷に消えて行った。これでとりあえずの緊急措置が終り、心底ほっとする。できれば隊員１人を付き添いのため桑原と共にバレーリーへ派遣したかったが、ヘリの搭乗スペース、ＢＣ体制の弱さなどの関係で不可能であったことは極めて残念であった。

11時30分に野中・真島・和田がC_1から到着し、桑原を除いて全員がＢＣに集結したことになる。

隊員は、個人荷の整理をしたり、日本から持参したカセットテープを聞きながら日向ぼっこをしたりでのんびりと休日を楽しむ。15時にイタリア隊（ミラノ）のリーダーとリエゾンオフィサーが遊びにくる。リエゾンはシャルマといい、ＣＩＢ（中央情報局）のメンバーであった。彼が、イタリア隊は全く貧乏で旨いものが何もないとこぼすので、副食物をダンボールにひとつプレゼントする。リーダーは、ボローニナの本屋をよく知っているとのことなので、稲田は探書リストを渡し、本探しを依頼しておいた。

リエゾンがしつこく云うので、夜キャンプファ

イヤーを行なうことにした。リエゾンの名司会で全員が歌をリクエストされる。味をしめたのか、シャルマがまたやって来て夕食を共にし、そのまま泊って行く。イタリア隊BCは、我々より40分くらい上に作られている。

アタック開始

9月25日（晴のち曇り）

8時からのミーティングでアタックパーティの編成を発表する。隊員の順化状況．他を考えてトリスルⅠ峰隊とⅡ峰隊に大別し、順化未完了の畠山らに対しては、BCから程近い6,100 m峰へのトライを指示し、細々と注意を与える。

- トリスルⅠ峰隊　（L）角田不二
  - A　角田・八嶋・飛田
  - B　高原・西田・中岡
- トリスルⅡ峰隊　（L）野中和雄
  - A　野中・安中・今井・飯島
  - B　北川・釣部・真島
  - C　野島・和田
- 無名峰　（L）畠山・鈴木

Ⅰ峰隊は、27日にC_3以上のルート工作と偵察をAパーティが行ない、Bパーティが荷上とサポートを行なう。Ⅱ峰隊は27日にC_2を出発し、登頂の後C_3へ下る。Ⅰ峰のアタックは28日に行なうことにした。

午後、内院から戻ったアジュ（パンジャブ大学学生）をバレーリーに派遣し、桑原の看護と行動のサポートをはかるため下らせる。（彼は28日にバレーリーに到着、ニューデリーへ桑原をガイドしたのち、再びジョシマートに戻った。）

アタックは、BCからダイレクトに1日でC_2に上るため、慎重を期す者は1日早くC_1に上ることとし、順化が不足している者も今日中にC_1に上ることとする。13時、稲田・野島・和田・北川・釣部・リエゾンで出発する。シャルマもぜひC_1へ行かせてくれと云うので渋々同行する。全く変なリエゾンで、イタリア隊も大迷惑だろう。彼はしきりにイタリア隊の英語が下手なことをくどいている。日本隊はもっと下手だろうと云うと、とんでもない、日本隊はベリーナイスとおだて上げる。事実、イタリア隊はリーダーを除いては殆ど英語ができないようであった。C_1ではとっておきのウィスキーを大半飲まれてしまった。

BCの隊員はアタックに備えての準備。夜はてんぷらなど豪勢なごちそうを作った。

9月26日（晴のち曇り）

BC隊は；6時30分出発、10時C_1着で、全員好調の様子。ゴビン・シン、ナライン・シンの2人のハイポーターもC_1に上ってくる。彼らは専ら下部で行動したが、雑用をよく処理してくれ、行動の陰の力として大いに功績があった。なおゴビン・シンは1975年HAJ隊でも活躍したハイポーターである。

休憩のあと12時、C_2へ向う。稲田も共にC_2へ上るわけだったが、ひどい腹痛で出発が遅れ、野島と共に5,350 mまで往復し、C_1にもう一晩泊る。リエゾンは、すごい速さで先行パーティを追いかけ、C_2を往復し、和田と共に戻る。

C_1からC_2へのルートは、東稜末端からⅠ・Ⅱ峰氷河にトラバースし、Ⅰ・Ⅱ氷河左岸沿いに行くが、東稜取付までが傾斜がややきついだけで、あとは特に問題はない。

畠山らは、トリスル北面の5,495 mに前進キャンプを設け、BCへ戻る。

C_1の石油ストーブの調子が悪く、散々苦労してメタで食事を作る。調子のよいストーブとガスコンロはC_2に上ってしまったようだ。C_2は明日のアタックに備えて早目に就寝した。

9月27日（晴のち曇り～雪）

アタック隊は、予定を少し遅れて4時30分にC_2を出る。C_3までのルートはⅠ・Ⅱ峰氷河を行くが、起伏の多い長いルートのため遅々として高度が上がらない。加えてC_3設置のための荷上量が意外に多く消耗する。午後の交信で本日のⅡ峰アタックは無理と判断し、明日アタックを行なうよう指示する。

Ⅰ峰隊は、角田・八嶋で約6,600 m付近まで偵察とルート工作を行ない、C_3に下る。高原パーティは遅れ、コルへのC_3設置は不可能となり、結局Ⅱ峰隊と同じキャンプとなった。

畠山パーティは、Ⅰ峰北稜の6,100 m峰にアタックした。頂上直下は、35～40度の斜面で雪の状態悪く苦労したが午前11時20分に登頂に成功した。

頂上には、先人の登頂の痕跡が見られた。彼らはこの日 5,495 mのアタックキャンプに泊った。

稲田・リエゾン・和田・野島は C_2 に上る。アタック隊には明朝遅くとも午前2時の出発を指示する。

登頂トリスルⅠ・Ⅱ

9月28日（曇り、風雪）

夜半からの風雪が引き続き、ＢＣ入り以来最悪の天候となった。どうやら小さな低気圧の通過らしく、無気味な朝焼けの雲がナンダ・デヴィにかかっている。

Ⅰ・Ⅱ峰アタック隊は、午前2時に出発するが、風雪で前日のトレールがすっかり消え、悪天候と暗闇の中でルートファインディングに困難を極める。特にコル直下にはクレバス帯があって、コルに上ると、傾斜の緩い広い雪稜がⅡ峰へ続くが、今度は深いラッセルに難渋した。懸念していた頂上直下も雪壁はなく、午前6時Ⅱ峰頂上に立つ。頂上は、50m×20mぐらいの広い雪のドームであった。30分程頂上にとどまり、交信・撮影のあと下山を開始する。

Ⅰ峰隊は、Ⅱ峰隊より若干Ⅰ峰寄りのルートをとりコルに達し、南稜に取り付いた。

5時40分、6,700 m地点からの交信では、風強くガスのため視界不良でアタックに危惧の念を伝えてくる。しかし、天候は次第に回復に向うとの判断でアタック続行を指示する。

7時15分、6,900 mに達する。頂上ピラミッドの困難な雪壁帯にかかるが、有難いことに雲が切れ、頂稜がくっきりと姿をあらわしてきた。

このあと交信が途絶えてやきもきするが、10時5分に角田の息せき切った声が飛び込んできた。10時ちょうどに頂上に達したとのこと、そして、6名の隊員のはずんだ声が次々にトランシーバーを通じて伝わってくる。

頂上は雪の三角錘であった。

パンチチュリ山群に若干雲がかかっている他は晴れ上り、遠く西ネパールまで望め、大展望を目とフィルムに収めることができた。

御両親から預った故亀井隊員の遺影と遺品を雪の中に埋める。彼の意志のひとつが果たせたわけである。

Ⅰ峰登頂成功はⅡ峰隊にも伝えられ、全員が喜びにわき立った。Ⅱ峰隊は、10時30分に C_3 を出発し、次々と C_2 に到着する。疲れ切った顔に登頂の喜びが一様に表われている。

野島・和田・リエゾンは、C_2 から直接Ⅱ峰のアタックをめざして、午前3時45分に出発したが、ルートに不安があり、C_2 に引返し、6時まで待機し再び出る。しかし、野島は、胃の激痛のため間もなく C_2 にバックし休養する。和田とリエゾンも懸命にがんばったが順化不足はどうしようもなく、6,400 m付近で登頂を断念し、C_3 で休んだあと C_2 へ戻った。

また、畠山・鈴木は、5,495 mの前進キャンプを出て 6,468 m峰の偵察を行なった。このピークは、トリスルⅠ峰の北稜上にあり、1974年にインド隊によって登頂されている。

彼らは、約 6,000 m地点に達したが天候悪化で中止し、この日のうちにＢＣに下った。

Ⅰ峰隊は、16時に C_3 に到着したが、高原が視力障害を起し、歩行困難を来した。しかし、単純な高度障害と判断し、C_2 まで下ることを指示する。(翌日は平常に戻った）けれど、高原のサポートのため極度にペースダウンし、21時に漸く C_2 に到着する。極度に疲労していたが、C_2 メンバーが用意していたあたたかい飲物と食事が彼らを蘇生させた。

なお、Ⅱ峰隊は、釣部ら3名の C_1 泊りを除いて一気にＢＣまで強行下山した。野島は、胃炎もおさまり、単身 C_1 へ下った。

かくして、長い一日が終りを告げた。

9月29日（曇りのち雪）

今日も天候は芳しくない。

C_2、C_1 とも撤収し、食糧と燃料の他は殆どの物資を回収して下山する。稲田は、早朝、ＢＣアレンジのため C_2 を出る。イタリア隊キャンプで歓談、祝福を受けてＢＣに着く。14時30分、後発が到着し、全隊員がＢＣに集結を完了した。

ミーティングで、パッキング、帰路キャラバンについて指示したあと、16時から梱包作業に入る。

登山の無事終了を告げるかのように静かに雪が舞って、あたりを銀世界に染めていく。カートン

数は予定より多くなり、ポーター不足を懸念する。

19時から登頂成功を祝ってキャンプファイヤーを催す。25日に到着して近くにテントを張っていたポーランド隊とイタリア隊も加わって4カ国参加の国際色豊かなものとなる。ポーランドの連中はとても歌がうまく、我々の方もリエゾンの司会で負けじと出す。とっておきの「ナポレオン」やウィスキー・日本酒・ロキシーとアルコールが総動員された。ポーターたちの歌やダンスも出て、登山のフィナーレを隊員も一緒に踊りまくり、心ゆくまで楽しんだ。キャンプファイヤーが終ってからも、厳しい日程を無事に消化し、多くの登頂者を出すことができた喜びに、各テントはいつになく遅くまで灯がともり、歌声が聞こえていた。

ナンダ・デヴィのうた

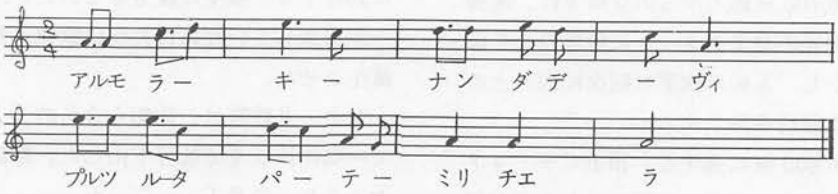
ガルワール・ヒマラヤの盟主ナンダ・デヴィは、同時に麓住民の尊敬を集める信仰の山でもある。ラタには、ナンダ・デヴィを祀った寺院もある。ちょうど先発が行った時は、寺の祭りでポーターを集めることができなかった。

桑原隊員の手記ではないが、少々ヤケッパチに聞えるポーターたちの「ナンダ・デヴィのうたは、キャラバン中やBCで何度も聞かされた。

テープにとってきたのを音譜に移してみた。

採譜者によれば、譜にとるのは大変難しかったそうで「これは歌なんでしょうか？」と言っていたという。

たき火を囲んで楽しくうたい、踊ったあの日が想い出される。



2. メルクートウ ガナブール
ナルダデル クルタピラ ミリチェラ

3. アルモラーキー ララバザーラ
ナラナシ マタキシーミ ミリチェラ

4. ナラマータ パニナーラ
ナルナサンダ カーナマール ミリチェラ

（採譜 小田沢ひろみ）

行動記録——Ⅳ

帰　　路

隊員　安　中　秀　子

9月30日（雪、雨、曇り）　ＢＣ→デオディ

昨日梱包した荷の上にも、各テントの上にも、いつにない積雪量。しかし、次第に青空が見え、出発時はまあまあであった。昨夜、共に楽しんだポーランドやイタリア隊の人が見送ってくれる。

来る時の心地よい風も、今は肌寒い。あれだけ重苦しかった足どりなど思いも及ばぬ身軽さで、皆どんどん下って行く。慣れ親しんだ景色が次第に視界の外になる。

ベタルトリから大粒の雨が降ってきた。リシ・ガンガとの出合が近くなるころ、途中の岩小屋で大休止。異口同音に"腹へった、何か食べたい"と言いながら過ごしたあの切なさ。デオディまでは遠かった。

10月１日（晴）　デオディ→ディブルゲータ

今日の行程は短かい。皆思いきりスローペースで歩く。宿泊地に着くと、隊長が"これだけ遅く歩くのもたいした技術だ"などとのたまう。

17：00から現地反省会を催し、野島さんの食事時の話しなど、皆ギョッとしながら耳を傾ける。隊長の意図したように、比較的具体的な話しに終始し、かなりの辛辣な言葉もでた。

10月２日（晴）　ディブルゲータ→ラタ

今日は往路の２日分を１日で歩く。ダランシの稜線に近づくにしたがって、背後のベタルトリ・ヒマールがクローズアップされ、前方にはニルカンタが小さく望めた。ドゥナギリやハヌマン・ピークは大きく威圧的だ。

霜柱のとけやらぬ草原の道を小さな起伏を越えながら行く。前後して歩いているポーターが、あめやビスケットを請求してくる。１人にかかわりあうと、とりとめがなくなるのでしらばくれていた。ダランシ・パスで、あらぬ方向を指して"デヴィスタン"だなどと教えるポーターがいる、嘘ばかり言ってこまる。

ラタも近くなった頃、ムリットニィへ登るというインド隊に会う。皆"おめでとう"と言ってくれる。

約束の待合場所に先行パーティはいない。捜したら車道まで下ったとのことで後を追う。全員が着く前に隊長とリエゾンはジョシマートへ出発していた。車道にはイタリアのトリスル・スキー隊が幕営していた。

暗くなる。早く着いたポーターは、帰りたいから荷を運んだサインをくれと、ワイワイ言う。隊長も、リエゾンも、Gonsalvesもいなく返答に困る。我々の所在もいったいどうなるのか、見当がつかない。時間はやたらと過ぎていく。

その内、路上に大きなシートを敷きつめ、何となく野営することになり幾人かのポーターは、明朝来るからと帰っていった。

数少ないカートンボックスを探して食糧を見つけ出し飢えをしのぐ。路上でたき火をし、夜遅くまで歌などうたう。ポーターも威圧感のある人がいない為か、いつもよりずっとのびやかに見えた。（隊長らは、ジョシマートからCoxのバスを連れて迎えにくる予定だったが、道路閉鎖によりやむなくジョシマートに泊った。）

10月３日（晴）　ラタ→スリナガール

ブーという車のクラクションで眠りをさまされる。それもそのはず、我々は道いっぱいにゴロ寝していたのだから。周りの畑にはすでにたくさんの人が働いていた。

７：00過ぎ、軍隊の車２台とともに、角田とG-

onsalvesが来る。まだ届かぬ2つの荷物と、ポーターへの賃金支払いの為、野中・角田・Gonsalvesを残して他はジョシマートへ向かう。スリナガール着20：00。往路に比べ、ガンジスの水が数段の差で、きれいになっていた。

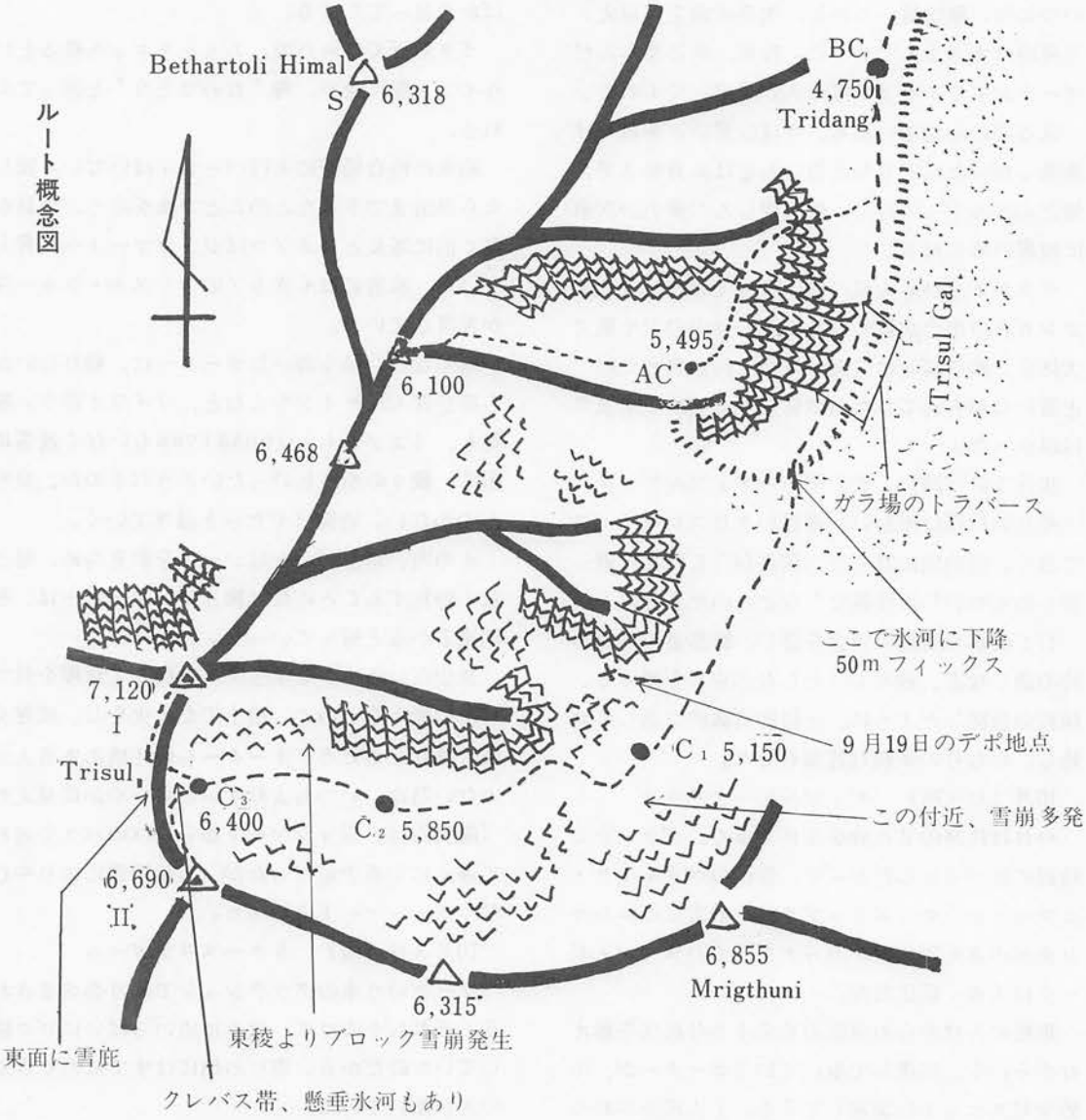
10月4日（晴）　スリナガール→デリー

早朝、軽い食事のあと暗い中を出発。制服を無くしたどじなチョープラさんが、リシケシから自宅へ向う。

11：00頃から約2時間、車はちっとも進まない。何かと尋ねれば、トラック組合のストライキだそうで、大きなトラックが道いっぱいに延々と連なっている。迫力満点だ。彫りの深い顔立ちが真顔になると、なんとなく不気味である。

21：15、デリーのヨークホテル着。

元気になった桑原さんと再会を喜んだ。彼は、私たちの話しに目を丸くして驚いていた。深夜、事務局へ登頂成功を知らせた。



隊員　角田不二作図

登頂記

トリスルⅠ峰（7,120m）

隊員　高　原　　修

9月28日、1時起床。昨夜23時に「もう起きましょう」と云っていた飛田隊員が、今朝はすでに朝食の準備を済ませて、今や遅しとばかりに皆の起きるのを待ちかねている。他の隊員は、昨夜は良く眠れたようだ。全員体調良く、食欲も旺盛だった。

出発2時30分。前日、角田・八嶋両名の偵察の結果、6,600 mのⅠ峰寄りのコルまで所要時間が往復1時間30分であったこと、上部はピークまで一気に突き上げており、登頂の可能性の高いこと、コルから上部の未知のルートでの安全性を高めるには、コルで夜明けを迎え、ヘッドランプに頼らず行動することがより確実であろうということ、等の点を考慮された結果であった。

隊は当初、3人ずつの2パーティに指示されていたのだが、角田・八嶋両名の体調が非常に良く、同じザイルパーティ予定の飛田隊員より前日に提案があって、よりスピーディなアタックを目指すには、2名ずつのパーティが良いという結論を得ていたので、角田・八嶋、中岡・西田、飛田・高原でそれぞれザイルを組んだ。そして、ルートにそれほど難しい場所はないということでゼルブストは使用せず、二重フューラーで代用することとなった。ツェルト、メタクッカー、非常食等は、予定されていたとおりで、当初の2パーティで分担された。アイゼンをつけ、Ⅰ・Ⅱ峰間コルを目指すⅡ峰隊と別れ、私達6名はⅠ峰寄りのコルへ向う。月明りも無く、全くの暗闇の中を、ヘッドランプだけが頼りの登高であった。夜半に降り積った雪が約30㎝と、予想外に多く、期待していた前日の踏跡はあとかたもなく消えてしまって、ルートファインディングが難しい。

中間のステップから上部で、雪の下に約30㎝のクレバスが現われる。昨日はこんなことはなかったそうで、氷河活動が絶え間なく続いているのだと思うと、雪壁上部の巨大な雪庇が今にも落ちてくるのではないかと錯覚してしまう。降雪のおかげで、ルートもわかりにくく斜度も増したのでアンザイレンするよう指示される。スタカットで2ピッチで予定よりややⅠ峰寄りのコルに突き上げた。Ⅰ・Ⅱ峰間のコルより50mばかり高いと思われる。4時45分だった。ザイルを解き1本たてる。ルートファインディングとラッセルで予想以上に時間がかかったけれど、再び行動する頃には薄明るくなってきて、周囲の輪郭も見えはじめ、行動に余裕を持つことができた。

ほどなく南稜に取り付いてからは、急激に明るくなってゆく。全員、この斜面を登り切ればピークだと信じて、いよいよ登頂の確信を深め快調に登っていった。気がつくと、いつしか周囲の山々より高く登っており、ここで1本たてる。眼下には遠く近く、雪を抱いた鋭い山頂があった。私は、頂上は目前だと信じて、テルモスとフィルム予備の入ったザックをデポし、アタックザックにカメラだけを持った。この時テルモスをデポしたことが、酸素不足による視力障害の引き金になったと思う。

しかし、この斜面を登り切ったところはニセピークであり、頂上はここから更に100 mほど高く痩せた雪稜となってそびえていた。東面は雪庇状となって、その先はスッパリと切れ落ち、谷をのぞくことさえ出来ない。西面は1,000 m以上の高差を伴う雪の急斜面となって一気に落ち込んでいる。ルートとなった南稜は、ニセピークから最後

の取付までの約50mが馬の背状のステップで、非対称な痩尾根になって続いている。いきなり眼前にあらわれた険しさに、しばし息をのむ。とても登れそうに見えない約50度の雪壁に、八嶋・角田パーティが敢然とアタックしてゆく。1パーティの行動がやっとの尾根上であり、我々は2人の勇敢な登攀をながめているうちに、スケールの大きさにも馴れて、やがて、あらたな登頂の意欲が湧きあがっていった。必ず登頂するんだと自分に言いきかせる。やがて順番がきて、飛田・高原、中岡・西田の順でアタックをかける頃には疲れも恐怖心もなくなって、激しい闘志で登高して行った。スタカット3ピッチ、あとはコンテで頂上へ10時35分着。10時に頂上に立った角田・八嶋パーティと次々に登頂してくる隊員とが抱きあって互いの健闘をたたえあう。

みんな本当に登頂おめでとう!! この喜びを誰に感謝すれば良いのだろう。私達の力だけでは成しえなかった……。遠征に参加出来た事も、また、当然この頂上に立つべき筈の人々もあったと思うと、うれしくて悲しくてやりきれない想いだった。先着していた角田・八嶋パーティは、すでに隊長との交信を終り、私たちの心の支えであった亡き亀井建樹氏の遺影を頂上に埋めて下山していった。

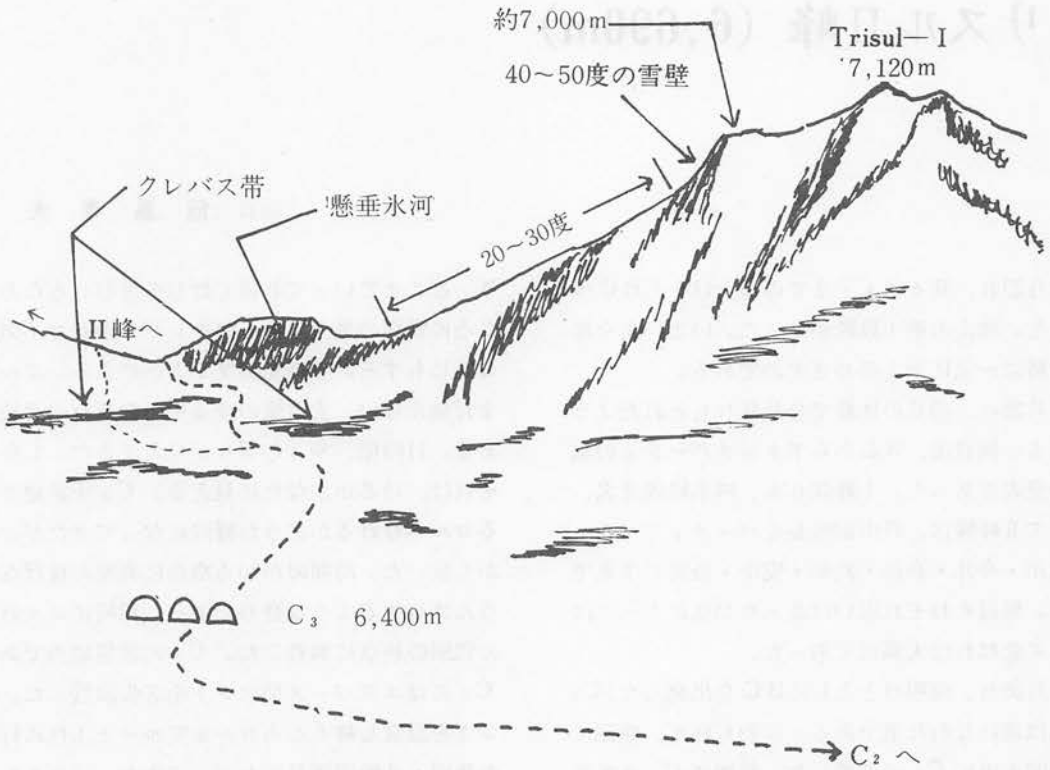
最後に頂上に立った中岡・西田パーティと共にC_2の稲田隊長と交信する。頂上は東から西にゆるい傾斜のある雪の片斜面で、10人位立てる広さがあった。東側は雪庇の先がスッパリ切れ落ちていて、やはり谷をのぞき込むことも出来なかった。西側は急傾斜の雪面が途中で見えなくなる角度で落ち込んでいる。北方間近に7,816mのナンダ・デヴィが美しく、堂々とそびえている。あと360度のパノラマの中に私達より高い山はない。

記念撮影して約1時間ゆっくりした後、再びパーティでアンザイレンして、頂上直下の雪稜に至る斜面を短かくピッチを切って行き、スタカット5ピッチで抜ける。この時、スリップ!! の声にはっとして見ると、西田隊員が40mザイル一杯に西の斜面に流されていた。中岡隊員のピッケル1本のビレーで良く止まったものだ。ところが、同じ斜面で私がスリップ!! 頭を斜め下にスリップしたため、ピックで体勢を直して15mで止った。確保されている安心感からの不注意な行動だった後ろ向きでピッケルをしっかり打ち込んで下降すべきであった。こんな所でアクシデントを起こしてはならないと自分に云い聞かせた。この頃から私の視界にはモヤが立ちはじめ、C_3に帰った時には雪面の起伏も踏跡も全くわからなくなっていた。しかし、それが酸素不足による障害だとは隊長との交信まで気付かなかった。ヒマラヤでモヤがかかるなんて何と珍しいことだろう? とばかり思っていたのだ。

C_3帰着は、角田・八嶋パーティが13時30分、私達4名は17時30分である。4時間の差は頂上でゆっくり時間をとったことと、最後のコルでゆっくりしたこと、それに行動ペースの差であろう。C_3到着後テントを撤収したのだが、私は疲労も激しく、視界もままならぬためC_3に泊って翌日下山したい旨C_2の隊長と交信してもらったのだが、歩ける状態であれば全員C_2へ下山するようにとの指示で、大変心苦しかったが撤収された隊荷は他の隊員が負担するよう指示があり、私はアタック時の状態のままで下山させていただいた。実際荷は重かったのだが、隊員諸氏は40kgにも50kgにも重さを感じた事だろう。

C_3を出発してプラトーを抜ける頃には完全に日が暮れた。新月なのか、氷河の谷間のせいか、今夜も月明りはなく真暗闇だった。新たな踏跡が氷河の左岸沿いにつけられていたのでそれに従って慎重に下山して行った。そんな中で角田隊員は隊を指揮し、八嶋隊員はルートの途中に頑張って全員の下山をサポートしていたのだった。全員がC_2へ帰着したのは21時だった。起床してから20時間経っていた。C_2での隊長との再会、そして、Ⅱ峰隊との再会は昨日までのものとは異なった力強い親密さを感じ、あらためてうれしさがこみあげてきた。

TRISUL—Ⅰ 南稜ルート図



C_3（6,400 m）～稜線（6,600 m）	クレバス多く要注意。上部に懸垂氷河があり、これは左に迂回したあと直上する。ラッセルは膝から深い所で腰くらい。但し稜線直下は急傾斜のため胸までくる。
稜線～前衛峰（約7,000 m）	トリスル氷河側はずっと雪庇が張り出しており、ナンダキニ側を登る。ナンダキニ側は稜線上はさほどでもないが、少し降りると、すぐ急斜面となり、下部はスッパリ切れ落ちている。落ちたら氷河まで止まらないであろう。前衛峰（肩）手前の雪壁は慎重を期してスタカットで登高。全体にアイゼンがよく馴染む堅雪。ナンダキニ側から強烈な風に吹きまくられる。
前衛峰～Ⅰ峰（7,120 m）	なだらかな雪尾根で全く問題なし。但し予想外に長く感じられる。

トリスルII峰（6,690m）

隊員　飯　島　孝　夫

9月23日、我々はC_2までの荷上げをしBCへ下った。登山の第1段階が終った。いよいよ今度登る時は一気に頂上をめざすのである。

9月25日、前日の休養で全員疲れもとれたようである。朝食後、隊長からアタックパーティの編成の発表があった。I峰隊6名、無名峰隊2名、そしてII峰隊は、野中副隊長をパーティリーダーに北川・今井・真島・釣部・安中・飯島の7名である。隊員それぞれ思いはあったが私にとってはII峰に登れれば大満足であった。

9月26日、夜明けとともにBCを出発した。C_1までは通いなれた道である。荷物も軽く、快調に3時間半後にC_1に到着した。最初にC_1まで来た時の約半分の時間であった。ポーターの到着を待ち、12時30分C_1を出発した。ポーターから荷物を引き継ぎ登りだしたが10kg程度の荷物でもずっしりと重く感じる。氷河をはさんで対岸のムリットニィの山裾には雪崩が轟音を立て、谷に落ちている。C_1へのルートはトリスルI峰東稜末端を巻いて、I・II峰間コルへ続く氷河の登りである。傾斜はそれほどないが、長い長い登りの連続である。C_2へは午後4時ごろに全員到着した。

9月27日、3時50分に起床し、前日につくっておいた紅茶とビスケットで軽く朝食を済ませ、C_3用のテントや食糧や登はん用具をかつぎ、4時30分にC_3向けヘッドランプをたよりに出発した。空には満天の星が輝やいている。夜が明けて来るころには背中の荷物がだんだん重くなり、歩く時間より休む時間の方が多くなってきた。登山の第一段階では6,000 mまでしか経験していず未経験の高度に入った原因もあるのかもしれない。ルートは氷河中央よりややトリスルI峰南稜寄りに取り、どこまでいっても続く登りを進む。ところどころに雪崩の後や幾重ものクレバスが有り不気味な感じもする。7時30分プラトーに入る。コルはまだ見えない。大雪原のゆるやかな登りの連続である。11時頃、やっとコルが見えてきた。しかしそれは、はるかかなたに見える。C_3予定地であるコルへ行けるかどうか疑問になってきたがとにかく歩いた。時間のかかる割合に高度の稼げないうんざりするような登りである。13時にコル直下の雪原の終点に到着した。C_3の設営地点である。C_3にはエスパース型テントを3張設営した。テントを設営し終るころコルまでルート工作に行った角田・八嶋両隊員がもどってきた。「ここからならI峰・II峰とも十分射程距離にある」との自信に満ちた言葉を聞き、勇気づけられた。なにしろ、C_3からは、I峰・II峰とも頂上が見えないのであるから不安であった。明日のアタックに備え、各テントに早々に入り、夕食のしたくをしたが、コンロの不調でなかなかはかどらなく苦労をした。今夜の夕食は安中隊員による特製雑炊である。呼吸の苦しさも忘れ、腹いっぱい食べた。テントの外に顔を出すとナンダ・デヴィが夕焼けに染まり、なんとも美しい光景である。18時に隊長とのトランシーバーの交信を終え、朝食用の紅茶を作りシュラフにもぐり込んだ。前夜I峰隊のテントから聞こえた歌声も明朝のアタックとあってか今夜は聞こえない。シュラフに入り、ここまで来た道のりや、日本のことなどを思い浮かべているうちに眠りについた。

9月28日、ふと目がさめると1時30分であった。となりのテントはまだ起きていないようである。いよいよ今日はアタックかと思うと気が引締まる

思いである。紅茶とビスケットで朝食をすませ出発である。Ⅰ峰隊と健闘を誓い合い2時30分に出発した。C_3を出るとすぐコルへ続く急な登りが始まる。雪がしまっておらず交替でラッセルして登る。膝ぐらいまでもぐり、かなり呼吸の苦しい登りである。Ⅰ峰側を見ると、Ⅰ峰隊のヘッドランプの明りがちらちらと光っている。しばらく行くとコル直下で大きなクレバスにぶつかってしまった。そこでしばらく立往生していると、Ⅰ峰隊の方からルートが左に寄りすぎるとの声がかかった。しかしここまできたら右にも左にも行くことが出来ないという判断で、クレバスとクレバスの間を渡ることにした。無事渡り終え、少し登るとコルに出た。コルに出るとかなり風が強く、急に体が冷えてきた。コル到着は4時である。ここまで来れば後は稜線沿いに登るだけである。ところどころに急な登りがあったが、ザイルを使うことなく、午前6時トリスルⅡ峰 6,690 mに登頂した。頂上に着く頃夜が明け始め、遠くナンダ・デヴィの雄姿やトリスルⅠ峰が姿を現わした。頂上では風が強いため、記念撮影をして30分で下ることにした。C_3に降り、トランシーバーを聞いていると、午前10時、Ⅰ峰隊の角田パーティが登頂に成功したことを知り安心してBCに向けて下山した。

全体的に見てこの山はルート的な難しさよりも、遠いということで体力を要求される山であった。特に高度順化が出来ていない前半の荷上げはかなりの苦しさであった。

登頂記

無名峰（6,100m）

隊員　畠　山　秀　夫

9月26日、午前6時50分に、BCからよく見える5,495 mピークに、鈴木・畠山　ポーターのバルーとピサンの4人で向う。ピークまで、バルーの話しでは6時間位かかると言うことだが、3時間もあれば行けそうである。

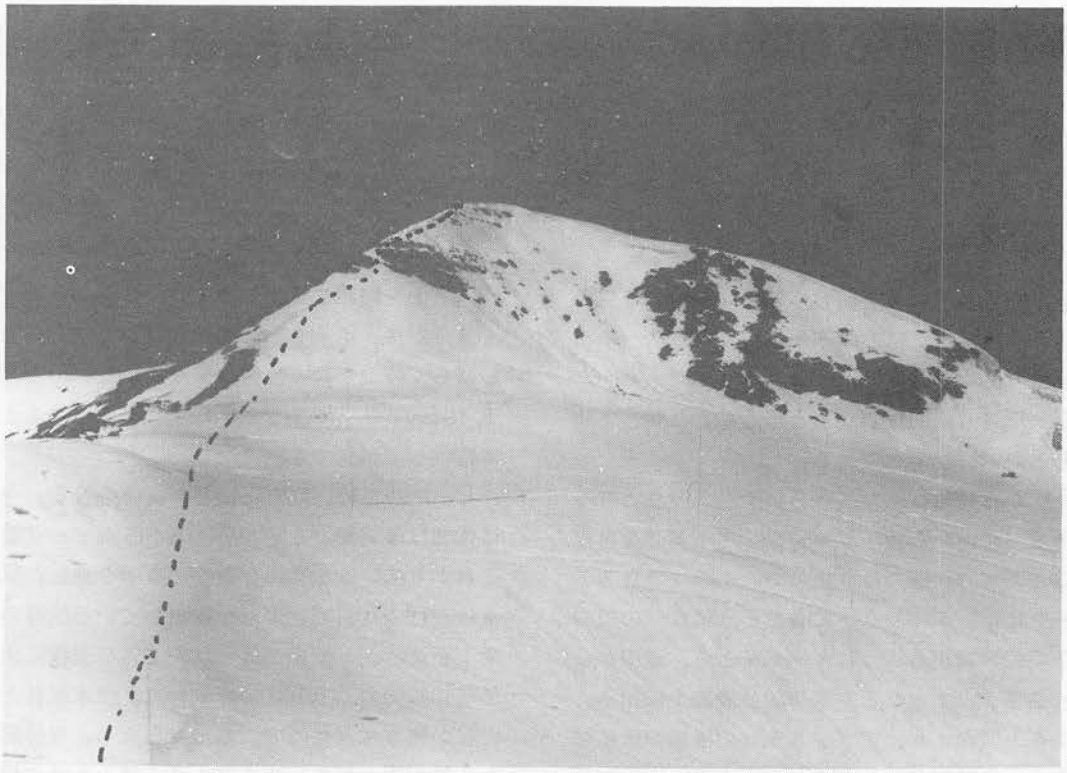
BCから10分行った所からガラ場の登りとなり30分登った所から稜へ取り付く。アイゼンを付けるほどの雪の状態ではないので、そのまま登る。ピークには、ダイレクトに登れそうにないのでやや下の稜線に出るようにルートをとる。途中からキックステップとなる。8時50分稜線上に出る。ナンダ・デヴィが、デヴィスタンの稜線の後に顔を出す。9時20分、5,495 mピーク着。BCが下に小さく見える。トリスルは手が届くほど近い。6,100 m峰へ雪稜がゆるやかに延びている。このままつめて行けば問題なく行けそうである。写真を撮り、明日のルートと行動を検討して、午前11時に下山を開始する。午後1時BC着。

9月27日、ポーターの準備が遅れているので、しばらく待つが仲々出発出来そうにないので、5,495mピークにテントとコンロをデポするように指示して出発する。

ピークまでは、昨日と同じルートを登る。今日は体調は最高だ。8時40分、5,495 mピーク着。これより広いゆるやかな雪稜の真中を進む。500 mほど行った所で、ガレが露出している稜線のやや下を進み、ガレ場が終った所で再び雪稜に出る。午前10時50分、6,100 m峰取付点。鈴木隊員との距離が開きすぎたので、ちょっと待つ。取付附近から雪が深くなりヒザまで入る。頂上までの傾斜40度位。20 mほど直登し、思い切って左の6,468 m峰側へトラバースしてガレ場を登る。斜度は35度位だが、一歩踏み出すたびに足元が崩れて仲々進めない。トラバースと直登をくり返して11時20

分頂上。ここは絶好の展望台である。正面にナンダ・デヴィ、その左にチャンガバン、カランカ、さらにドゥナギリがよく見える。11時30分、鈴木隊員が登頂。記念写真を撮ってから6,468 m峰のルート偵察をしようと思い、頂上からちょっと下るが、ガスが濃くなってきたので下山することにする。雪稜をどんどん下る。登ったルートの反対側にクレバスが見える。午後2時、5,495 mピーク着。デポしてあるテントを張って今夜はここに泊る。

9月28日、ナンダ・デヴィ方面は雲が多いが、トリスルはよく見えるので、6,496 m峰に向うが6,000 m附近まで行った所で、急にガスが濃くなったので引返す。テントを撤収して、1時間位昼寝をしてから、ガスの中をBCに下山する。午後2時BC着。



Unnamed Peak 6,100　（点線は登攀ルート）

登頂交信録

1978・9・28

<角田>こちら角田です。感度良好でしょうか。ただいま、トリスルⅠ峰に登頂いたしました。了解でしょうか。

<稲田>トリスルⅠ峰の頂上に達したとのこと、本当によく頑張ってくれました。ありがとうございました。到着した時間は何時ですか？どうぞ。

<角田>ただいま、角田・八嶋両名、トリスルⅠ峰頂上におります。10時に頂上につきました。まもなく飛田以下4名到着いたします。360°の素晴らしい大展望です。

<稲田>ごくろうさまでした。ごくろうさまでした。本当によかったです。空気が薄いですから、ゆっくりとしゃべってください。頂上の様子、まず、お知らせ下さい。どうぞ。

<角田>頂上はトリスル氷河側は雪庇になっており、あまりそちらへは近よれません。ロンティ氷河側、ナンダ・グンティ側は斜面になっています。全体に傾斜しております。あまり気持よく……雑音……　ここより高い所は他にどこにもありませんので、まちがいなく頂上です。了解でしょうか？

<稲田>ハイ、了解しました。頂上からトリスルⅡ峰の氷河は見えるでしょうか。どうぞ。

<角田>裾は見えます。見えますが、雪庇が発達しており、近よることができません。氷河を見おろすことはできません。したがって山頂から、C_2・C_3を見おろすことは残念ながらできません。どうぞ。

<稲田>ハイ、了解しました。頂上から見える主な山を言ってみて下さい。どうぞ。

<角田>まず、ナンダ・デヴィ、チャンガバン、カランカ、リシ・パハール、ドゥナギリ、それからカメットも遠くに見えております。…… 雑音…それから向こうに、ナンダ・コットらしきものも見えております。

その他ピークはあまり判然としませんが、ナンダ・カート、マイクトリ、デヴィトリも見えております。……雑音……遠くの方に見えているのは雑音……も見えております。

<稲田>アピ・ナンパがたぶん見えると思います。その前にパンチチュリの5つの山々が、三角形になって見えると思いますが、どうですか？

<角田>そっちの方は雲が多くて、うまく判定できないのですが、パンチチュリはナンダ・デヴィの方から見るとどちら側でしょうか。

<稲田>ナンダ・デヴィの後に見えます。ナンダ・コットとナンダ・デヴィの東峰の間あたりに見えるはずです。どうぞ。

<角田>ナンダ・デヴィ東峰 …… 雑音 ……パンチチュリ山群だと思います。

<稲田>カイラスは見えませんか？どうぞ。

<角田>カイラスはどっちの方向になるのでしょうか。

<稲田>カイラスはリシ・パハールの遥か後、アピ・ナンパ山群の左の方に見えるはずです。どうぞ。

<角田>ちょっとかすんで判然としません。

<稲田>了解しました。頂上からの記念撮影・自分達の撮影、それから亀井さんから預ったものを、頂上に埋めてきて下さい。どうぞ。

<角田>ハイ、これから頂上での儀式を一通り済ませて、10分後にまた交信します。了解でしょう

か？どうぞ。
<稲田>ハイ、了解しました。10分後にまた交信して下さい。どうぞ。

<稲田>野中君、野中君感度あったら、どうぞ。
<野中>こちらC3 感度あります。どうぞ。
<稲田>こちら感度良好。C3 の感度いかがですか。どうぞ。
<野中>今の角田さんとの交信……雑音……
登頂できて本当によかったです。
<稲田>チャンネル1にきりかえて下さい。どうぞ。
<稲田>チャンネルI、C3 の感度いかがですか？どうぞ。
…… 雑音 ……
<稲田>ではもう一度、チャンネル2にきりかえて下さい。どうぞ。
<野中>きりかえました。どうぞ。
<稲田>チャンネル2の方が良好のようです。どうですか。どうぞ。
<野中>良好です。どうぞ。
<稲田>トリスルI峰隊は、午前10時ジャスト、八嶋・角田の2名が頂上に到着いたしました。おわかりですか？どうぞ。
<野中>ええ、その辺は、先程の交信をキャッチしました。どうぞ。
<稲田>彼等が頂上でのいろんなことをやって、後は10分後にチャンネルIで交信するはずです。どうぞ。
<野中>ええ、その点も…… 雑音 ……
<稲田>そちらのようすはいかがですか？どうぞ。
<野中>こちらからは全然見えません。雪庇にかくれて、彼等の姿は見えません。どうぞ。
<稲田>それはわかっております。そちらの状況とはC3 にいる人間、その他の状況です。どうぞ。
<野中>こちらC3 では、今テントを撤収して、ボチボチ帰る予定です。どうぞ。
<稲田>こちらC2 から上っていったリエゾンと和田さんはどうしていますか？どうぞ。
<野中>彼らの姿は見えていません。けっこうかかっているんじゃないかと思います。どうぞ。
<稲田>ハイ、了解しました。テントは何張撤収しましたか？どうぞ。
<野中>テントは2張撤収しました。一応エスパース3・4人用とダンロップのテントは残してあります。どうぞ。
<稲田>ハイ、了解しました。一応テント一張の中には炊事用具・食料そういったものを現時点ではまだ入れておいて下さい。どうぞ。
<野中>テントの中に炊事用具並びに食料は残しておきます。どうぞ。
<稲田>ハイ、了解しました。それではC3 の人間はただちに下ることになりますか？どうぞ。
<野中>……雑音……ちょっと感度が悪くなってきました。……雑音……
<稲田>何時に下りますか　どうぞ。
…… 雑音 ……
<稲田>何時に下りますか？どうぞ。
<野中>もう一度お願いします。どうぞ。
<稲田>今すぐ撤収にかかるわけですね。どうぞ。
…… 雑音 ……
<野中>もう一度言って下さい。どうぞ。
<稲田>何時にそちらを下って、どこまで下る予定ですか？どうぞ。
<野中>できればC1 まで下りたいと思ってます。どうぞ。
<稲田>何時に下りますか？どうぞ。
<野中>今からですから……雑音……
C1 までは一気に下れると思ってます。どうぞ。
<稲田>そちらを出発するのは何時ですか？どうぞ。
<野中>こちらは遅くとも、10時30分頃になると思います。どうぞ。
<稲田>10時30分に出発するわけですね。どうぞ。
<野中>こちらを10時30分に出発します。どうぞ。
<稲田>ハイ、了解しました。それから、たぶん途中でいきあうと思いますが、リエゾンと和田さんの調子を見て、無理させないで適当なアドバイスをして欲しいと思います。どうぞ。
<野中>わかりました。途中いきあったら、和田さんにそう伝え、トランシーバーを渡します。どうぞ。
<稲田>ハイ、わかりました。その渡したトランシーバーはずっと開けておくように言っておいて

下さい。どうぞ。
<野中>ハイ、わかりました。どうぞ。
<稲田>ハイ、それでは頂上のもようをもう少したちましたら、そちらにお知らせします。どうぞ。
<野中>ハイ、これで終了します。

<稲田>角田君、角田君どうぞ。
<角田>こちら角田です。感度ありますか？応答願います。どうぞ。
<稲田>ハイ、良好です。どうぞ。
<角田>ただいま亀井さんの遺品の埋蔵、並びに展望写真の撮影をすませました。高原パーティはまだ登っていません。登るのを待った後、下降にうつりたいと思っております。了解でしょうか。どうぞ。
<稲田>了解です。高原パーティはおよそどの位で頂上に着くでしょうか？どうぞ。
<角田>もう20分位かかると思います。どうぞ。
<稲田>了解しました。現在の体力・気力いかがですか？どうぞ。　……雑音……
<角田>頂上の方は、私も八嶋さんも好調です。
<稲田>下降にあたって問題になる個所は、頂上ピラミット位のものでしょうか？どうぞ。
<角田>問題になる個所は頂上直下が急な雪壁が続いている所がありまして、そこがひじょうに問題です。そこを慎重に下りたいと思います。どうぞ。
<稲田>フィックスを持ってたら、そこに思いきりフィックスをはって、後続パーティの安全を計って下さい。どうぞ。
<角田>了解しました。フィックスは持ってませんが、ザイルを結んで慎重に下降したいと思います。どうぞ。
<稲田>高原パーティも持っておりませんか？どうぞ。
<角田>持っておりません。
<稲田>それではザイルを手離すわけにはいきませんので、スタカットで思いきり慎重に、その場を通過して欲しいと思います。どうぞ。
<角田>了解しました。今、八嶋さんと代りますので、しばらくお待ち下さい。
<八嶋>八嶋です。感度いかがですか？
<稲田>良好です。そちらいかがですか？どうぞ。
<八嶋>たいへんすばらしく、隊長のおかげさまで……。ありがとうございました。どうぞ。
<稲田>とうとうヌンの仇をとったようなもので、本当によかったと思ってます。こちらに来てもらったかいがあったと、そんなふうに喜んでます。どうぞ。
<八嶋>ありがとうございました。……雑音……
<稲田>ありがとうございました。もう一度、角田君に代って下さい。どうぞ。
<角田>代りました。
<稲田>本日C_2まで、そこから下降できますか？どうぞ。
<角田>ハイ、下降できます。どうぞ。
<稲田>わかりました。そういうことでC_3は撤収させます。C_3は1張だけ残して撤収させます。その一張には、今朝ほど登っていった和田さんとリエゾンオフィサー、それから、これから登る予定の野島さんの3人を収容いたします。
<角田>了解しました。
<稲田>現在、トリスルIパーティはシュラフを持参してますか。どうぞ。
<角田>スリーピングバックは、C_3に置いてあります。
<稲田>ハイ、わかりました。C_3においたスリーピングバックのうち、3つはC_3に残してきて下さい。どうぞ。
<角田>ハイ、わかりました。どうぞ。
<稲田>そのほかは、特にございません。後続パーティの安全を、ピラミッドの下で確認して、以後おりてきて下さい。
<角田>ハイ、了解しました。後続パーティが、今、ボツボツ見えてきました。
<稲田>ではそういうことで、交信を終了いたします。なお、こちらのトランシーバーは、いつでも開けておきますので、下降の状況を1時間おき程度にこちらに知らせて下さい。どうぞ。
<角田>ハイ、了解しました。
<稲田>C_3、C_3感度ありますか？
<野中>感度ありました。先程の話をキャッチしております。どうぞ。
<稲田>チャンネルを2にして下さい。

今の交信をお聞きになった通り、上に1張残してただいまから下降に移って下さい。どうぞ。

<野中> …… 雑音 ……

<稲田>できるだけ後続隊の撤収品が少ないように考えてしてきて下さい。

<野中> …… 雑音 ……

<稲田>食料・燃料等はそこにそのままにしておいて下さい。どうぞ。

<野中> …… 雑音 ……

<稲田>それでは、帰りブロックが時おりくずれる個所がありますので、注意しながら、はやく下降してきて下さい。いったんC_2に寄って、そこでまた、一部の撤収品を下げることになります。どうぞ。

<野中> …… 雑音 ……

<稲田>ハイ、その通りです。その他の要点は、こちらに来てから話します。よろしくお願いします。これで打ちきります。

（採録　安中秀子）

反省会——現地

10月1日

ディブルゲータにて

＜稲田＞　9月11日にインドに着いて、洪水・土砂崩れなど思わぬ災害があったが、予定より1日遅れただけでＢＣに入れた。
ＢＣに入って登山行動を開始して11日間という短期間で、トリスルⅠ峰に6名，Ⅱ峰には7名が登頂した。
他の無名峰にも2名ほど登った。
全員が登れなかったことは残念だが、隊としてみると約80％登ったということで、外見的には成功と受けとられると思う。しかし、内容的に見た場合ひじょうに反省する点が多いと思っている。

タクティクスに関して

＜稲田＞一応ＢＣから上の行動に限定して、良かった点，悪かった点，無理があったと思われることなどを出してほしい。高度順化の面では、オーソドックスな方法をとったがそれが能率的に行われたので短期速攻形式になった。まず最初にあのようなタクティクスの是非について話を。
＜飛田＞キャラバンが終って18日ＢＣに着いたがあの時点で翌日休養があればよかったと思う。
＜稲田＞その点だが、けっきょくＢＣ入りまでに1日行程の遅れがあってやむを得ずとれなかった元気な人たちには動いてもらい、不調の人には休んでもらうという原則には従ったが、たしかに1日休養があればよかったと思う。
ただ、休養を1日とることがその後のタクティクスにどのように影響してくるかとなると、かなり難しい問題が生じると思ったので私としては翌日からの行動をとった。
かなりきつかったですか？
＜角田＞日程的な問題は初日の休養だけでなく、皆感じていることがあると思う。
はじめは、12日か13日で7,000mを登るという前提があったわけで、それを否定しない限りあのような急なタクティクスはどうしようもないと思う。きついからどうということになったら、はじめからこの計画はあり得ないと思う。
だから、それに耐える体力をつけておくのが前提である。
＜飛田＞もっともだ。今回、登山期間13日でとにかくその中でやっていこうと皆が思っていたわけだ。しかし、ＢＣに着いた時に1日休養が欲しいと感じたのは正直なところだ。
＜角田＞途中、小さな事故などもあり、疲れてＢＣに着いて1日休養が欲しかったというのは常識論的には正論だと思う。
ただ、次回、12日か13日で7,000mを登るという計画を組んだ時に、ＢＣに着いた翌日の休養をとるかというと、とるというタクティクスは組まない

と思う。
たまたま1日余裕のある登頂だったけれど、次にやってみてどうなるかわからない。
<稲田>八嶋さんは、ヌン隊に参加したわけだがトリスル隊のタクティクスを比べてまず最初に感じたことはどういう点か。
<八嶋>だいたい期間が同じくらいだからやり方としては同じようであった。
キャラバンの有無とか、ヌンは隊長が遅れて来るとか、登攀隊長が高度障害で動けないなどがあったが、人数が少なかったので能率的に行動できた。
　トリスル隊は、訓練が不十分という点もあって遠慮したかたちで物事がなされたので、パーティ間の命令系統などにあいまいさが目立った。
遠征は、民主的な中にも時には強引にやらせることが必要だと思う。
リーダーの権限が確認されていなかったように思う。
<稲田>行動の強度についてはどうか。
<八嶋>ヌンは人数が少なくて動ける人が常時2～3人だったので、リーダーの指示でキャンプがどんどん出来ていった。
トリスルの場合は、9人とか10人とかの人数を中央でコントロールして、その日毎に命令を出してやっていくような型だから、ヌンとはずいぶん違ったと思う。
これだけの人数を順化させて、タクティクスを組んでいくのはすごくむずかしい。
かなり強引だと感じた点もある。
さっきのBCの休養については、日にちがあるかどうかでなく、休養が必要かどうかで予定をたてるはずである。
いろんな面で日数が遅れていれば遅れている程皆疲れているわけで、休養が必要だったと思う。
にもかかわらず行動を進めていったということでかなり無理があると思った。
しかし、短期間でこれだけの人間を上にあげる為には、そういう方法が必要なのかと判断がつきかねている。
<稲田>正直な感想としては、BCに到着するまでこれほど弱いとは思わなかった。このキャラバンルートは、たった4日間なのだから、いくら経験がないといってもたいして負荷のかかるルートではないと、当初思っていた。
ふだん日本の山を歩いていて、ヒマラヤに来るという意識を持つぐらいの人だったら、それなりに訓練されているはずと思っていた。
それが、ひじょうにもろい面があったというのは予想外だった。
　だけど、それでBCで休養をとらせてやっていけば、タクティクス全体がその後の行動に関しても、もっとレベルを下げた行動をということになって、相当に当初の計画からは後退することになる。
やはり、来た以上は何としても登頂にもっていきたい。また、もっていけると判断した。
それは、全員登頂にもっていけるというのではなかった。
7,120mの頂上に立てる人間は相当限定されていると、キャラバンなどを見ている中で判断した。
　従来どおりのタクティクスを実行して、いわゆる全員登頂主義というよりも、タクティクスの過程でふるい落とされる人は落とされていくだろうということで、強い者優先でもって行くしかないと考えた面が強かった。
かなり疲れていたとは思う。しかし、その後においてそれだけに耐えられなくては短期速攻形式のヒマラヤは成り立たないということで、行動させていくことが基本にあって予定どおりになった。
個々人に合ったタクティクスでは決してなかった。

キャンプの位置はどうか

<角田>キャンプ地構成などはどうか？　C_1・C_2・C_3と、およそのカンで場所を決めていったけれどもあれで妥当だったろうか？
　動いている途中でキャンプ間が長すぎるという2～3の不満の声も聞こえたが。
<稲田>全体的にはBCの位置設定が若干低かったからで、それが最後までひびいていた。
<野中>一応、計画では4,900mだった。
<稲田>最初、BCはトリダンを越えて大きな押し出しがある付近に作る予定だった。
ところが、先発が水がないということを理由にあそこに決めた。

<野中>それとポーターがこの辺だということで
<稲田>もともとトリスルのＢＣはトリダンで、歴代の遠征隊をみてもわかる。当然、ポーターの言うとおりにすればあそこにつくられるのは当り前である。
だからあえて、私たちはそこを避けてＢＣをもっと上にあげるという意志がないと上にはもっていけない。
<角田>ただ、結果論的にはあそこでよかったと思う。あの高度であれだけ故障者が出たし、各キャンプ間とも平均的距離・平均的登降時間ではないかと思う。
<稲田>結果的にはよかったけど、計画の際はどうか？
<角田>先発２名の、もっと上にあげるんだという強い意志が欠けていたことは指摘されてもやむを得ない。
<稲田>けっきょく、あのＢＣの低さというより遠さが次のＣ₁を5,150mとした。計画では5,450mあの岩峰の下の平担につくるはずだった。
Ｃ₂は6,000m前後、Ｃ₃はコルあたりとなっていた。
Ｃ₁の位置がＣ₂を低くしてＣ₂～Ｃ₃間の距離を長くし、あそこでもかなり無理をかけている。
<角田>Ｃ₂～Ｃ₃間で無理はないと思う。
<稲田>やはり、Ｃ₂の位置が低かったということはタクティクスに大きくひびいている。
<角田>Ｃ₂の位置が低かったというのなら、全部のキャンプが低かった。
<野中>けっきょくＢＣが低かったということ。
<北川>しかし、地形的に考えた場合、Ｃ₁はあそこでよかったのではないか。
<稲田>地形的にはたしかにそうだ。だけど、5,450mあたりの地点もひじょうによかった。
Ｃ₁はあそこにきりつくれなかったということでなく、あそこにつくらざるをえなかったということになってくる。これはＢＣの位置から考えて。
<角田>ＢＣをあれ以上あげるということを考えた時、本隊がベタルトリからキャラバンで来てかなりのデメリットがあると思う。
<稲田>デメリットはある。
<野中>休養などのかね合いもあるし。
<北川>しかし、ＢＣに着く日はかなり早くて、もっと遠くでも別にかまわなかった。
<角田>だけど、現実的にかなりの故障者が出たわけで、特にＢＣに着いた翌日に休養日を設けてないから、ＢＣに着く日はその意味では短かくてゆっくりとしている方がよい。
<稲田>問題になるのは、4,750mという高度がＢＣに着くまでの時間とか、あるいは故障者の想定とかで決められたのではなく、それが他律的に決められたという辺だ。
<角田>なぜあのようなＢＣ設定・キャンプ構成がなされたかというと、大勢に流された設定のしかたであったと言えるわけで、その辺反省している。

ルート工作の必要性

<西田>Ｉ峰からの帰り道、もう少しフィックスなどがあったらと思う。下りでＩ・Ⅱのコルまで下って、登りと違ってて……中断……。
<角田>あれは、前日にコルまであがる最良のルートを設定したわけだが、懸垂氷河を右にう回して上のテーブル状に出て、そこから直上して登るというルートであった。
その時、かなりのラッセルがあってトレースをつけてきたので、まさか、あれだけ深い足跡が一夜にして消えてしまうとは思わなかった。
その辺まちがいなのだが、翌日まっくらな中を出発してわからなくなってクレバスを渡ったり、おかしなルートをとって稜線にあがった。
帰りは明るいので正しいルートがとれた。
それで踏み跡が２方向についてしまったので後発がわからなくなってルートを指示しろと上からどなってきたりしたわけだ。
ほんとうは、Ｃ₃～稜線間はフィックスの必要な個所だった。時間的には少し余裕があったのだが、トレースさえつけておけば大丈夫と判断したのが一夜にして消えてしまいあの事態になった。
その辺Ｉ峰へいった他の人はどう判断しますか。
<中岡>余裕がなかったからしかたがないと思うけど、Ｃ₃～コル間でフィックスが欲しいなと思うところがあった。
<稲田>ファイナルキャンプ以上のフィックスは

かなり省略してやるより方法はない。
3分の2ぐらいは前日トレースしておいて、翌日後の3分の1をいくというのは、かなり日程に余裕があってもほとんどできない。
そこにアタック時に最も危険なことが集中してくるということがあるわけだが。
<角田>しかし、あそこはファイナルのすぐ上だからやはりフィックスしたほうがよい。
その上は自力でやって当り前だが。今回、フィックスは、BC近くのガレ場とC2～C3間のクレバスの上に1ケ所、これは後で雪に埋って使えなくなったが、2ケ所だけだった。その点についての意見を。
<北川>フィックスはいらなかったと思う。
<野中>Ⅱ峰に関してはひとつもいらない。
<角田>いらない々で赤旗だけで済ませたが。
<北川>Ⅰ峰もフィックスはいらないのではないか。あのぐらいのルートでフィックスが必要な人は頂上へいく資格がないと考えた方がいい。
<稲田>フィックスの考え方は二通りある。ひとつは安全の意味で下降時など考えてどうしても必要だというとき、また、フィックスはなくても充分技術的にこなせるけれど、ファイナルの上のアタックはかなり高度が伸びるので、スピードアップという面でつけようというとき。
多くの隊では後者の理由によるフィックス設置が多いように見うけられる。
所要時間を想定して、かなりの遅れが推測される場合はフィックスをつけるべきだと思う。
<角田>私は、C3～稜線間はフィックスをつけるべきだったと思う。下る時、視界がきいてたからよかったが、疲れて頂上から下ってきてもしふぶいていたらかなり複雑な稜線～C3間を、6人が安全に降りられたかどうか全然自信がない。
<和田>そういう意味で標識旗の件だが、私たちが最後に行って、C2～C3間に全然赤布がなかった。上部の状態を聞くのを怠って出発し、また、パートナーがある意味では初心者のリエゾンだったこともあって、C2を出てクレバス帯を越えた時、いったいC3がどのあたりなのかわからなくなった。
コルだということなのでコルをめざして進んだ。トレースはすっかり消えていてくるぶし以上のラッセルだった。あの辺に1本でも赤布があれば早く行けたと思う。
<北川>C2までのトレースが消えたことはなかったもので。C3もそれと同じように判断した。
<和田>日本の冬山などの常識として、あれだけの距離に1本もないなんてありえないと思った。
<北川>天気がよくて、トレースも消えないという頭があって誰も立てなかったということがあると思う。
<釣部>C2～C3間で竹ざおを上げているとき一度疑問を感じて口にしたのだが、運ぶ人はそれだけで自分の役目を果たしているような感じがあって、立てる役までしてないというか、必要ないというか。あいまいなところがあったように思われる。
<角田>アタック前BCでの休養時のミーティングで、偵察の結果あの雪原はひじょうに広いから赤旗は必要だという意見が出ていた。C3上部にトレースさえつけておけばと判断したのと同じようなまちがった判断であそこの赤旗は立てられなかったと言えるのかもしれない。
<野中>C3まで完全にトレースをつければ翌日もあると思った。その辺、高さがちがうので風に消されたなどと思いながら下ってきた。
やはり立てるべきだとか、下降にC3から竹を持ってくるべきかなと考えただけでC2へ下ってしまった。
<稲田>赤旗が荷上げされたということは、立てようという意志のもとに上げられたのだから、立てなかったのは荷上げの面からも問題がある。
<高原>赤旗は最初にタクティクスの中に入れておくべきだと思う。
<野中>とにかく荷にくくりつけてしまってはだめだ。C1～C2間はさげて運搬した。
<釣部>さげるのも大変だから、横に束にしたときは、その人でなく前後の人が抜きながらさしていけばよい。
<中岡>上げた赤旗をさす人やフィックスをセットする人を決めておけば問題なかったと思う。
<角田>本来ならそれらは、ルート工作隊によって荷上げの前になされていくはずだが、今回は荷

上げ隊と大差ない位置での行動が多かったので。

リーダーシップのこと

<野島>全体のリーダーシップは隊長がとっていたけれど、パーティのリーダーに関してはひじょうにあいまいであった。たとえば、誰かが遅れた場合など責任をもって面倒見る人などが不明確だった。それが赤旗やフィックスの件にも出ている。

<稲田>現場の判断としてはリーダーを指名しておいたはずだ。ここから上は角田氏にまかせ、野中氏が上った場合は彼にまかせるとして現場の判断優先とした。

ただ、まかせられた人たちが、位置づけはされていても強力なリーダーシップを発揮し得なかった面があるかもしれない。3人行動の際のリーダーも指名してはいたが、計画当初からの恒常的なリーダーということではなく、行動の中で随時指名をしていったから。

指名された人にとってはとまどいとか遠慮とかがあって、全体の命令系統を甘くしていたかとも考える。

<北川>そのことは、各自の自覚が足りないと思う。食事時間に遅れたり、ピシッとすることなく各自がダラダラやっていることが多かった。

<高原>むしろ逆であると思う。単一山岳会からの遠征隊のように、以心伝心で簡単にすむことであっても、今回のように各所から集っていると相手に気がねして言いにくい点が多い。

<北川>そういうことではない。朝の集合時間などに集まらないのは各自の自覚の欠如以外の何ものでもない。

<角田>その自覚というのは本当に足りない。時間も全然守られていない。それとは別に、上部の命令系統がしっかりしてなかった点について。

たとえば、隊長が桑原さんの件でBCに釘付けになり、野中さんもC_1とBCの往復で、自分が上部のリーダーシップをとれと言われていたが、その役目をきちんと果たせなかった。

加えて、隊員全員の気持もちゃらんぽらんだった。そんなだから、ちょっとしたことですぐ小さな事故が起る。

いろいろ自力でやって当り前のことが自分でできない。その辺に意志力の弱さが露呈していた。

<野島>自覚がないのもたしかだが、高原さんの言ったように、自分がどこまでしてよいのか判断つきかねる点も多いのではないか。

<角田>それは社会人の常識として……。

<野島>いや、社会の常識でなく山のそれとして自分の常識としていることが全然できてないようなことがある。そんなときに、言っていいのかどうかというような問題がある。

だから、前もってそういう細かなことを東京などで打合わせをしてもう少しリーダーシップなどについて話し合ったらよかったと思う。

<角田>事前にそこまでするのは不可能と思う。

<稲田>野島さんの言うように、その辺の不足はあったと考えている。出発前に確認事項を文字にして配布しなかったのを反省している。

前の遠征には確認事項を文章化して持参し、何かことが起るとそれを基準に判断した。デメリットな面もあったがかなり有効であった。思考の柔軟性を欠き易いというようなこともあるが。

総体的に準備不足であったことは否めない。

何回か会議をもったわけだが、あの段階ではあれぐらいを処理するのが精一杯だった。

それだからこそリーダーシップを握る側で国内で検討できなかったことはこちらに持ち込むべきだと思う。

赤旗の問題だが、前の遠征では1本も使わなかった。理由のひとつには、採取予定地で竹が採取できなかったということもあるが。

あの遠征では、1本の赤旗もなくして幸い無事故ですんだ。それは、赤旗に頼らずしてルートファインディングをし、ガスの中でも確実に帰ってくるという強い意志を持たざるを得なかったということもある。そんなことでも赤旗をとらえたほうがよいと思う。

<角田>しかし、物理的にはあったほうがよい。そういう精神論でいったらロープもいらなくなってくる。

<稲田>精神論でないけれど、なくても行動できるという気力・注意力は大切にすべきだ。

<八嶋>赤旗で感じた問題は、今出てる自覚の問題・リーダーシップの問題と同じだと思う。今こ

こで各人が必要だったと言ってるが、ではなぜ和田さんは必要だと思ったらそのとき言ってつけてこなかったか？　そういった問題だと思う。

<野島>自分もC2から登るとき赤旗のないのに気がついていたが全然言おうとしなかったし、また、言ってはいけないような気もあった。皆、気がついていても自分の仕事じゃないとか。誰かがやってくれるだろうとかいう気持があったと思う。

<北川>赤旗の件に関しては野中さんと同意見で、トレースが消えることはないと考えた。だからつけない。ただそれだけの判断だった。

<和田>自分も野島さんの言ったようなことだと思う。赤旗の他にもそれと同じようなことがあった。私たちは最終パーティで、BCでの話ではザイルとツェルトがC1に上ってると聞いていた。それで、それらを持たないままC1に上ってしまい、C1でないままC2、C3に上ってしまった。しかし、何ら対策を立てるでもなく、ただ、ないない言って

それは、自分の中に誰かが何とかするんじゃないかという気持が多かった。

とにかく私たちのパーティにはすべての面でひっかかってきた。先行パーティはやりたいようにやっただけで、私たちがC1についたら使えるストーブは一台もなかった。C2に上っても同じような状態だった。

<野島>ザイルもツェルトもなく、でも前日にはトレースがあると思ったからそれでもいけるだろうと思っていた。しかし、翌日、朝暗いうちに出ようとしたらトレースがなくて、赤旗もザイルもなくて、そのうえリエゾンはライトを持っていなかった。

<和田>リエゾンのような、ある意味で素人の人に対し配慮を欠いた私たちも悪いのだが。

とにかく私たちは何もなくて平気で登ってきた。今考えると異常だと思う。

<野島>考えてみたら、そんなありさまで6,000mを歩こうとしたこと自体が非常識だったと思う。

<和田>自分たちパーティの場合、すべてがそんなありさまで、なんでそのとき言ったりやったりしなかったかと思う。

しかもC3からの帰り全くガスッていて、チョープラさんは平気でスノーブリッジのクレバスの上を越えてしまったりしていた。

<稲田>あのとき和田さんが、C2でザイルがないと言っているのは聞いた。だけど、C1にはあった。私はあのときC1からザイルは持ってこなかったのかいと言ったはずだ。

<野島>聞きました。でもC1にあったのは知ってるけどC2に上っていると聞いたから。

<中岡>最初、BCでパーティ編成が発表になったとき、4パーティだけだったんでそれきりしか用意しなかった。その他のパーティに関してはあまり頭になかった。

<稲田>私自身も第5のパーティを組織できるかどうか自信がなかった。

その他の問題がたくさんあったから。その点ミスだったと思う。

出発のとき漫然と出発していった。やはり、前のパーティのようにチェックすべきだったと思う。

<野島>自分自身も漫然としてて、隊長の命令だから行こうかという具合で今から考えるとどう考えても非常識だった。

体の不調もあるが、何となく前記のような不安があって、きちんとした体制でなく漫然とした態度だった。

ただ、心の奥に、こんなことでいいのかなというのがあって、それが少し出発を遅らせてしまっていた。だが出てみたらとても歩ける状態でないというのが実情だった。

<稲田>それと高度順化の面でかなりの不安が残っていたことも事実だ。特に野島さんに関しては、C2からあのままダイレクトに上っていくのは恐いなと思っていた。

<野島>自分でもそう思っていた。

<稲田>だけど野島さんはそれまでずっと病人にかかりきりだったし、もし行ける可能性があるなら出発してもらいたいと思ってあの日出てもらった。

<野島>隊長がたぶんそういう気持だろうと思って、じゃ出なくちゃ悪いかなという気持もあった。だから、すべてのことに関して自分が正しいと思うことを主張できなかったというか、ごまかして

きたというか……。
<稲田>C₂ 泊りそのものからして、私自身や野島さんには不安があった。

早朝出発のこと　他

<北川>Ⅱ峰のアタック出発2時半は早過ぎでないかと思うのだが。
<野中>早過ぎたと思う。
<稲田>早過ぎとはどういうこと？
<北川>暗くて途中クレバスにぶつかってどう越すか迷った。一度テントにもどろうかなどということになった。
ルートにトレースもなくて早過ぎたんじゃないかと思う。
<稲田>出発時間に関して私はいつも考えるのだが、あれは決して早過ぎないと思っている。
というのは、上部はかなり未知の要素を持ってるから。
暗くてルートが発見できないような地形は、もっと難しい地形の場合とか、もっと錯綜している地形の場合で、そういう場合だったら明るくなってからとか、明るくなる寸前とかに出る必要があったと思う。
しかし、連日の行動ののろさと、レベルの不均衡のことがあって、早くてルートファインディングに迷おうとも、帰りの時間がかなり気がかりになってくるということで早く出発させざるをえないと判断した。
現実にクレバスの前に行ってウロウロしたが、あそこはそんな錯綜した危険性をはらんだ地形でなかったはずだ。
<北川>あのときクレバスの手前で皆止ってしまってかなりの時間立ったままだった。
それで、これからどうしようということで、下のテントにもどろうという意見や、夜明けを待つという人がいたりして、そのままではしかたがないので自分が先に様子を見に行った。登っていったら上にぬけた。
<今井>あのとき途中まで登っていったらバリンという音がしたので、気持悪くなっておりてしまった。
感じとしては、この傾斜なら行けると思ったし、たぶん大丈夫とは思ったが、あの音を聞いてから気持悪くなった。暗くてわからなかったし。
<角田>Ⅱ峰隊の中には、前日に上に行って見てる人が1人もいなかった。
<八嶋>ルートファインディングしてなかったことと、早く出るという問題は別だと思う。
ルートが確認できなかったのは、暗いかどうかは別として完全にミスだ。
Ⅰ峰の下りで確認したところ、Ⅱ峰隊のルートはクレバスのスノーブリッジを渡っている。
かなり危険なルートだ。アタックだということで事前にルートをチェックすべきである。
<飛田>Ⅰ・Ⅱ峰間を同じルートでコルまで上っていたら……？
<角田>最初はそのはずだった。Ⅰ・Ⅱ峰隊はコルまで同じルートをとって……。
そもそもC₃ はコルのはずだった。ところが荷上げ状況などからしてあのようになった。
隊長と交信したとき、隊長はC₃ をコルに上げたいということだった。
しかし、荷上隊がどうも6,400mのここがC₃ によいということでそうなった。
あのとき自分は、Ⅰ峰に頭がこり固まっていて、Ⅱ峰のことは考えてなかった。
C₃を6,400mに作ったらⅠ峰を登るのに有効な稜線への道はどこであるかということで、Ⅰ峰へ行くためのトレースをつけて帰ってきた。
その間、トリスルⅡのことは全く考えてなかった野中さんがいるし、自分などが考えなくてもよいだろうと思った。
実際、Ⅱ峰はそれで登ってきた。
　暗いうち出発してどうかということだが、月もなくて暗い中のルートファインディングは難しいが、あの程度のルートだったら暗くても登れたというのも、また事実だ。
トリスルⅠに限ってみた場合、あの時間に出て結果的にはよかった。
なぜなら、帰りに故障者が出て、C₂ に着いたのがあんなに遅くなった。もっと遅い時間に出ていたらと考えると恐しい気がする。
<北川>Ⅰ峰はあの時間に出る必要がかなりあったと思うが、結果論かもしれないが、Ⅱ峰の場合、

朝8時にはC₃にもどったわけで……。
<稲田>あの場合、ラッキーだっただけだ。
その前8～9日間の行動を見ていると、とても遅い時間には出発させられないと不信感を持っていた。
とにかく帰りの時間ということで。必らず今までいろんなトラブルが生じ、かなりの労力をとられたし、ましてファイナルから上のアタックだと今までに倍加する故障とかを考えなくてはならない。早過ぎるということは、何時の出発であってもないだろうという判断しかなかった。
ほんとうだったら、あれぐらいの300 mという高度差だから、当然7時か8時に出発してスマートに登ってさっさと下ってこれるわけだ。
だから所要時間から割り出した早発ではなかった。
<北川>たとえば、私たちの倍かかったとしても8時間か9時間で登ってこれる計算だが……。
<稲田>たしかに3～4時間で登っているが、あれを日中ギラギラ太陽の照りつける中で登って下るということを考えた場合、果してどうだかということは予測がつかない。
<北川>八嶋さんの言われた、私たちのルートが危険だったということは、もし落ちていたとしたら原因としては暗くてわからなかったという点も入ると思う。
<野島>その話を聞いて驚いたのは、皆がクレバスの前でウロウロしていたとき、北川さんが"オレがジリジリして行っちゃった"ということだ。そのときザイルは？
<北川>つけてない。
<野島>その辺、リーダーシップの問題もある。いくらジリジリしていても自分が行っていいのかどうか。また、行く場合、ザイルをつけて行く場所のわけで、前が進まなかったということは、何かあったから進まなかったはずだ。
<今井>あのとき、自分が先頭を歩いていて、バリンという音を聞いて気持悪くて下った。
いろいろ考えてそのうち角田さんから"ルートが違う。左側からまわりこめ"の声があった。
では、ザイルをつけて進もうかということで…。
<角田>クレバス帯はザイルをつけるのが常識ではないのか？　Ⅰ峰隊もトレースが消えてややルートに迷ってちょっとヤバイと思ったとき、6人全員ザイルをつけた。
<今井>ザイルをつけて行こうかと言ってるうちに北川さんがさっと行ってしまった。
<北川>ザイルつける必要があれば自分はザイルを背負っているのでつける気でいた。
後からきた人もザイルつけないできたのだから、もちろんザイルなしでいけるという判断できたわけだ。
<今井>結果的にはそうなった。北川さんがさっと行って事故もなかったし。
<北川>事故が起きないというより何でもない斜面だった。
<野中>その辺、早いから暗くて見えなかったし、でも後になって八嶋さんにああ言われるとヤバイ気がする。
稲田さんには、早く出ないと皆が遅くてどうしようもないという心配があったが。それまでがバテバテで、荷上量が多すぎたのかもしれない。だから遅くなった。

アタック問題

<中岡>C₃設立日の翌日のアタックはどうなんだろう。自分としては1日ぐらい余裕があってアタックと思ってた。
BCで日程を聞いたときはちょっと迷ったが、自分としては隊長の言うとおりにしてれば登れると思ったのでそうした。
結果的には1日余ったから、1日おいても大丈夫だったという気がする。
<稲田>アタック前日テントを設置して、そのまま登ってくるというのは、計画の当初から重荷になることはわかっていた。
一番の原因は日程的なことで、短期間の日程にしばられたこと。
もうひとつは、Ⅰ峰はルート工作に1日費やしてその上で登るということがあった。
この距離ならやれるだろうと考えた判断である。
Ⅱ峰がもっと高度差があって、常識的に考えて無理だというようなときには、Ⅰ峰に向かう人間にはⅡ峰を、逆の場合はⅠ峰をあきらめさせる、そういうタクティクスをとったと思う。

C_3 がコルまで上らないのは誤算だった。
ひとつには、予想外にメンバーがバテたこと、それは荷上量の多さもあったろうが。
<中岡>C_2 からC_3 にいくまでだいぶバテて翌日不安だった。結果的には上まで行けてついていたなと思った。
<角田>あの山の場合、C_3 設立の翌日アタックが有効だと思う。
高いところに長い間いるのはよくない。C_3 予定地を決めて稜線に上った段階で、トリスルⅠ峰は確実に登れると思った。
<野中>トリスルⅡに行く人もコルまでⅠ峰に行く人と同じルートを使った方が楽に行けるんじゃないかと思って聞いたのだが、違うということで左に行った。
<角田>C_3 からダイレクトにⅡ峰に登れるが、一旦コルに出てからの方が安全だということは言ったと思うが。
<野中>自分たちはあれが安全だと思った。
<角田>上から見ると、あれよりもっと右へいった方がいいように思える。
<野中>右だと大きいクレバスがあって、かなりの急傾斜を行かなくてはならない。
<八嶋>下から見ているとコルまで行けそうに見えたけど、実際は下から直接は行けなかったらしい。一緒に登ってたらⅡ峰隊はだんだん左の急な方へ行っちゃって、トランシーバーも交信できず声を出したが間にあわなくて……。
<野中>自分たちは、あれが一番傾斜がゆるいと思った。
<八嶋>それでも左に行きすぎていた。
<野中>ということは、かなり大きなクレバスがあってすごい傾斜なんだ。
<八嶋>もっとコル寄りの方ですよ。
<北川>我々の出たのはほとんどコルだ。
<野中>我々のルートのずっと右というとフィックスが必要だ。
<角田>あの暗い中を出発して反省すべき点というのは、きちんとザイルをつけなかったということだ。
<野中>結果的にはザイルをつける程のルートではない。
<角田>それはわかんないわけで、Ⅰ峰はトレースが消えていてぶっつけ本番で登っていって片足をつっこみかけたクレバスがあった。
<野中>そんなクレバスは全然なかった。
<北川>あそこでつけるんだったらC_2 ～C_3 間もつけなきゃならない。
<角田>Ⅱ峰のことはよくわからないが、暗い中でクレバス錯綜地帯を歩くときはつけるべきだ。
<稲田>暗やみで登りづらかった、ルートを発見しづらかったということだったら、それ以上に暗やみの対策ということが必要だったわけだ。
<野中>やはり、高度差 300 m で、荷がないんだから明るくなるころ出ていけばすんなり行ったと思う。
あの辺歩きさえすれば行けるのだから。

パーティ編成

<野島>気になることは、北川さんが1人で行ったということで、その辺いくら寄せ集めパーティでもきちんとすべきだったと思う。
寄せ集めだから問題で、1人で出かけてもしそれで落ちたらどういうことになるのか。
<北川>1人で行ってくるということでなく、そのとき、けっきょくじだんだ踏んでいたので、ちょっと様子を見てくるということで。
それで下から、"どうだ?" "行けます" ということで結果として登れたということだ。
他に登った人はどう思ってるのか?
<釣部>コルに上がる手前で行きづまったとき暗いということや、全体のリーダーシップをとってる者も明確でなくて不安を感じた。
その場はどうにかぬけ出て頂上に行けたが、自分のリーダーであった北川さんが、皆が登る前に下降してしまって、その後C_3 ～C_2 でもリーダーが先に降りてしまった。
私たち2人は、野中さんパーティについておりた。そういうことも含めて、中央から振り分けられたリーダーの責任について少しはっきりしていないようだった。
その人をリーダーとしている者には不安があった。
<野中>荷上げのときから一応パーティは組んでいたが、バテたりしてかなり差が出てそれがアタ

ック時も同じようになってしまった。
けっきょくザイルをつけてないから……。
<中岡>Ⅰ峰もそういうのがあったが、上の方へいったらずっとザイルをつけていたので、自然どちらかがリーダーシップをとりながら行った。
<飛田>Ⅰ峰は、隊長から3人パーティふたつという指示だったが、C_3で私が2人パーティにしてくれるようお願いした。
前日、自分がかなり遅れてしまったし、角田さんと八嶋さんにはぜひ立って欲しいということで自分がぬけた。
それで、体力のある2人に先行してもらって、後の方は2パーティだったがだいたい4人で行動していた。
<角田>あれは飛田さんの言う前に自分もそうしたいと考えていた。
2人1組の方がスピーディだと思ったので、6人でⅠ峰に行ったが、あの隊の場合、何となく皆が一致していた。
<稲田>アタック時のパーティ編成と、パーティの行動のしかたということは、3人で自活して頂上を往復して帰ってくるんだということを出発前日のBCでかなり言ったと思う。
そういう点で、たとえ安全なところに行っても、その日の泊り場までリーダーがリーダーシップをとって連れてくるのが当然だと考える。
私もC_2にいて、北川さんが1人でひじょうに早く下ってきたとき危険な感を持ったのだが、別にあそこから下は危険なところもなかったので、待ってて3人で下るようには強いて言わなかった。あれはミーティングでやったような原則論でとおすべきだった。
<北川>あれは完全に私のミスだった。
<角田>Ⅱ峰隊の場合、野中さんがリーダーで他の者はそれについている感が強かったのではないか。
<野中>それほど難しい山ではないし、BC出る時から北川さん・釣部さんは前日出かけてるし、その辺からバラバラだった。
C_2に上るのに遅れた人も出たし……。
<稲田>たしかに山の難しさはそれほどでなかったろうけど、人間の側の難しさは予測できないから。
そういう面で万全の対策をとるべきだ。
<野中>その辺は、Ⅰ峰に行った人もC_3入りの日は全部同じだった。
<中岡>C_3までは、Ⅰ峰もⅡ峰もなかった。
メンバーを逆にしても同じかもしれない。
<野中>荷物を背負ってどんどん歩けなんて言えないし、それで大巾に時間がかかった。
<角田>荷上げはどうなっていたのか？　荷上げはほとんど見てないので、終ってみてほんとうに申しわけないと思っている。いいところばかりをしたようで。
<野中>重い荷物背負っている時は、ラッセルの方が楽だと考えたり……。
<中岡>C_3まではⅠ峰もⅡ峰もなかった。皆重い荷物背負ってたし。
当初の計画では、その日のうちにC_3からⅡ峰を登るはずだったができなくなってしまった。
<野中>歩き出した時点で、荷が重くてだめだと思った。
<角田>自分はそれ以前にあの雪原に登っていたが、トリスルⅡ峰に登ってからⅠ峰に登るのは相当の体力の持主でないと無理だと思った。
ただ、可能性があればそれはすばらしいことで、別に異論はとなえなかったがかなり難しいと思った。
<稲田>あのとき真島さんから“Ⅱ峰に登る人はⅠ峰に行けないんですか？”と聞かれて、“そんなことはない”と答えた。けれども、Ⅰ・Ⅱ峰のパーティを分けた時点では、Ⅱ峰に登った人は絶対Ⅰ峰には登れないと考えていた。
もし、それぐらいの体力があるんだったら全員をⅠ峰に向かわせていた。
あの1日のスペアは、可能性として残したものでなく、むしろⅡ峰に登ってC_3まできり下れないとき、その不調者に関しては翌日収容できるぐらいに考えて日程をつくったわけだ。
両峰に登らせる心づもりでⅡ峰に振り分けたのではない。あの振り分けはそう理解してもらえばいい。
<角田>そう言っては何だけど、Ⅱ峰隊の中でⅠ峰に登れる体力のあったのは前の行動などから判

断して野中さんだけだったと思う。

<北川>いや、自分はあの日すごく調子がよくてⅠ峰を登るぐらいの体力はあったと思っている。ただし、それに不満があるわけではない。

もうひとつ、あの晩真島さんがⅠ峰へ行きたいと言ったので、行きたいんだったら隊長にトランシーバーで頼めばとすすめた。

<角田>そのときC$_3$で体調がよくて、自分はⅠ峰へ行けたということもあるかもしれないが、判断はそれ以前の段階でするしかない。

<北川>今はあったことを話しているのだが、言えばよいと言ったときに真島さんは、"でも、隊長が決めたんだから"これでいいということになった。

<中岡>それと同じことは、逆に自分たちにも言える。Ⅰ・Ⅱ峰にわけたのは隊長の判断ひとつであって、それ以上のことは自分からは言えない。ぼくとか西田さんとかがⅡ峰で、北川さんとか真島さんがⅠ峰であってもおかしくはないと思う。

<野中>それはあくまでもC$_2$までの荷上げで決めたことで。

<角田>それは前段階の行動で判断するしかない。当日のコンディションなどわかるはずないんだから。

<北川>もしあのとき、真島さんが登りたいと申しこんだ場合どうなったか？

<稲田>そういう申し出があれば、いろんな状況で判断した。

<北川>逆にⅡ峰隊の方で、C$_3$に着いたら調子が悪いという人もいるんだろうし、そのとき交代があってもふしぎはないと思う。

<稲田>私は下部キャンプにいて、上部に接してないものだから申し出がない限り判断の材料は一切持っていない。

私としては、積極的な意思表示があった方がひじょうによかったと思ってる。それがなければ、このままの状態が継続してるのだという判断きりできない。

<北川>真島さんは行きたくて、かつ調子がよかったら申し出るべきだった。

<稲田>当然だ。けっきょくそれは検討の材料になるのだから。

<高原>異論なのだが、BCに入ってから体力を回復するのは不可能であると隊長がはっきり言ってたと思う。

だからそれに順応できるような強い体力と意志をつけておいて、そう言う以前に体調を崩さないような努力をべきだ。

自分で体調を崩しておいて当日体調がいいからⅠ峰の方へとかいうことは、自分が振り分ける立場ならどうかということを考えたら全然問題にならない議論だと思う。

<野島>同意見だ。C$_3$に上った時点で、調子がいいとか悪いとかで、ではⅠ峰に……というのは変だと思う。調子が悪いから登らないというのならわかるが、前者はナンセンスだと思う。

山登りというのは、その場の気まぐれで動くものではないと思うし、3日前なら3日前に決めたことをきちんとやるべきだ。

それができないならやめるという立場をとるべきだと思う。組織がこれだけ大きくなれば隊長としてもそれでいいと思う。でないと、このような大組織の場合、C$_3$であっちへ行く、こっちへ行く……と言ってたらこれだけ大勢の人間が安全に山登りすることはできない。

<北川>それはちがうと思う。BCで真島さんが聞いたとき、Ⅱ峰登って好調な者はⅠ峰にも行けるということであった。C$_3$に着いた日Ⅱ峰には登れなかったけれど体調はよかった。

<高原>それ以前の認識が甘いと思う。

<野島>私が言ってるのは、前日C$_3$でオレも調子がいい、真島君、君も調子がいい、じゃ我々はトリスルⅠに行こうじゃないか……という話は全くナンセンスだということだ。翌日の行動については隊長がどういう考えでやったかだいたい察してたけど。

<北川>そういうことでなく、日程的にいってⅡ峰隊はⅠ峰も登るという計画だったわけで。

<稲田>いや、Ⅰ峰も登れる可能性があるということで、さっき検討の材料にしますと言ったのは、原則的に6名・7名で行ってもらうが、体調のよしあしで組み合わせにかなりの変動が出るときは補充することがあったかもしれないということだ。

"オレは体調がいい""じゃあ行ってこい"という

ことではない。

<北川>完全に計画どおりいった場合、27日にⅡ峰を登って、28日にⅠ峰を登ることが可能なわけだが。

<角田>それは、ＢＣでの休養段階で、おそらく不可能だと思ってた。ただもし、そういうことができればすばらしい記録になるわけで、可能性が薄かったからこそ組まれたんだと思う。

<稲田>いや、可能性にかけて組んだのでは決してない。むしろⅡ峰隊の安全とか、事故とか、いろんなことを想定して１日早くアタックさせるべきだということで組んだ。だが、真島さんから可能性がないのかと聞かれればあると答えざるを得ないわけで、なぜかと言うと、物理的に24時間という時間が確保されているから。けれども、Ⅱ峰を登らせてⅠ峰も登らせるということであの１日をとるんだったら、あのパーティ編成は全く別なパーティになっていた。むしろ、Ⅰ峰の組をⅡ峰にもってきてということも考えられた。

自分としては、両峰登頂は100％見込みがないということでもってパーティ編成をした。Ⅱ峰に登った人たちを、とにかく余裕をもってＢＣまで収容するということでの１日の余裕だったと解釈してほしい。ただ、アタック出発前にそれは言えない。

健康管理に関して

<稲田>今回の遠征をふりかえって特徴的なことは、故障者の続出ということで、過去に参加した隊などにくらべ、ひじょうに発生率が高い。それも低地で出たり、ちょっと考えられないような故障が続出している。その辺の原因はどこにあったか興味深いなと思っているが、そのあたりから話してもらいたい。

<北川>桑原さんの件だが、事前にもっと早く見つけられなかったか。また、避けられなかったかということだが。

<野島>ＢＣに入って３日目に、自分はC_1に出た。朝、隊長と話をして、私が残るから隊長行って下さいということにたっていたのだが、隊長は私に遠慮したと思うのだが、私に行ってくれということになった。もっと具合が悪くなるようだったら呼び返すからこういうことだった。

一気になぜあれだけ具合が悪くなったかというと私は脱水だと考える。もしあの日、私がそこにいればあれ程にならなかったろうという感じをもっている。

ＢＣに入って次の日の夜、私は桑原・畠山２名は次の日動かすのは無理ではないのかと隊長に報告したのだが、翌日、本人たちが行きたいというので、私もどの辺まで止めてよいのかわからなかった。やめさせた方がよいとは思ったのだが、日数も短かいし、あまり言って登頂の可能性を消すようなことをしても悪い気がして言わなかった。それで少し歩いてみたら桑原さんは全然だめなわけで、畠山さんも途中で引き返してきた。やはり予想どおりだなと思った。その翌朝畠山さんはそれ程でもなかったが、桑原さんは少し意識のレベルが低いような気がした。

私の言葉を隊長が遠慮してとったのだと思うが、ともかく行ってくれということになった。私としてはどこまで医者の権限があるかわからなかった。

<角田>それは誰の責任でもなく、隊員としての参加なのだから、野島さんが登りたいのは当然だ。隊長がその気持をちゃんと配慮するのも当り前のことであると思う。隊付きの専任のドクターがいなかったことが原因だということになってくる。

<稲田>いや、その配慮も桑原さんの安全性を見極めてから配慮するのが当り前だと思う。あの日正直に言うと、野島さんにはＢＣにいてもらった方がいいと思った。しかし、桑原さんの症状も私の自己判断で、ドクターが出かけている１日ぐらいでそう悪化しないだろうと考えた。

<野島>その点もっとはっきり言っておくべきだったのだが、少し登りたい気持が強かったものですから。出発前、桑原さんを見たとき少し心配だなと思った。それで隊長に、桑原さんと話をしてくれるように言って話をしてもらったのですが、変には思いませんでしたか？　それでおかしいと思えば隊長が残れと言うと思ってそう言ったんですが。

<角田>この問題は、医者が医者としてではなく、

隊員として参加してきたことにあると思う。
野島さんがこの隊にいるのは単なる偶然で、もしかしたらドクターはいなかったかもしれないし、そしたら桑原さんの発見も、ＢＣに残る残らないも問題外になってくる。
理想的には、野島さんが隊員として山頂をめざし、それとは別にドクターがいるのが一番いいわけだ。
<**野島**>まさか自分がこれ程働くことになろうとは思わなかった。せいぜいカゼ薬をやるぐらいだと思ってた。もうひとつは、20人近くの人間が1ケ月ぐらい普通と違う環境で生活するのに専任の医者がいないのは無理だと思う。
隊員と兼任ということなら2人は必要だろうと考える。そうすれば交代で何かできると思う。
<**稲田**>その点はC_2で野島さんが登れないとはっきりわかった時点でいろいろ話してみたのだが、やはりそのような対策をとるべきだということになり、これからの計画に生かそうという結論に達している。
<**北川**>いくらドクターとしての参加でないといっても、ドクター1名きりいないと迷惑かけてしまって登れなくしてしまう。
<**野島**>それと感じているのは、同じテントの人がどうして言ってくれないのかということ。
飯や水が口にできるかどうかを確かめたり、飯を運んでやったりする配慮が欲しいと思った。
キャラバン中から、いちいち私が食べられるものを聞いて歩かねばならなかったことなど、えらく負担だった。
<**稲田**>私も毎朝、健康チェックの意味で具合の悪そうな人には聞いてたわけだが、あとから考えてバカくさいなと思った。そんなことは本人か本人の最も身近の人が申告すべきだ。自分の健康に関心を持つんだったら自分で申告すべきだと思う。
　自分の症状とか、症状の進行にむとんちゃくで成り行きにまかせていた人がかなりいた。
<**角田**>自己管理のできない人がたくさんいたと見うける。
<**野島**>無理をしたとか、どうしても頂上にいかなくてはなんていうことで。
第3者的に見ると、何か皆が自分の健康にむとんちゃくで無理しすぎていた。もちろん、無理をしなければ登れなかったのかもしれないが。
<**角田**>ヒマラヤ登山なんていうのは、ある程度無理をするのが当り前で、それに耐えられる者でなければヒマラヤなんてこない方がいい。
<**野島**>それはそうで、気持もわかるけど無理のできない身体ってのもある。行けないときは行けないでしかたないんだから。
私がふしぎに思ったのは、ＢＣに着いて2日目、桑原さんがC_1まで行くと言ったのにはびっくりした。どこまで行けるのかと思って出かけたら、案の定ちょっと歩いただけでもう行かれないというありさまだった。イタリアパーティのＢＣの少し先にある川を渡ったところからＢＣにもどるのに3時間半もかかった。
そういう状態に追い込まれるのを覚っていながら自分で自分をコントロールできないのが奇異な感がした。
<**角田**>桑原さんの場合、重症なわけでその辺が判断できないというのは病的な気がする。
それとは別に、あちこちで小さい事故が起きている。それらの場合、ちょっとしたことでへたばって自分のやるべきことを自分でしなくなってしまう。意志の弱さというか、レベルの低さというか、出ていると思う。
そんな気がしたものだから、さっき、無理のできない人はヒマラヤになどこない方がいいと言ったわけだ。
<**野島**>無理ができないというより、けっきょく皆が余裕がなかったのだと思う。10の力を出さなくていけないときにこういうところにくる人間は20ぐらいの力を持ってなくてはならないと思う。
　所が今回のメンバーは、10の力の要るときに11とか12のギリギリの力きりない人間が多かったのではないか。
そういうことが身体的故障などにもつながってくるのではないかと考える。
　けっきょく、余裕が少ないからいろんなことの判断ができなくなってくる。これがＢＣ３日目で感じた大きな印象だ。
<**稲田**>私もそれはキャラバンをスタートして2～3日で感じた。その辺の見極めと、その上でのプランニングはこれからものすごく考えなくては

ならない。

実際びっくりしたのだが、これぐらいのキャラバンルートでバタバタと倒れていくことは、普通の体力さえ持っていればありえないと考えていた。前の遠征でもこれに倍加する悪条件の中で、雨にたたかれながら12日間も歩いた。だが1人として故障者はなかった。それらしきものはあったろうがすべては自力で処理してきた。

医者はいたけど、手をわずらわせる者はいなかった。というようなことを考えると、事前の計画の段階でそれを再考してみるということが重要だったがそこまでいかなかった。その辺が判断の甘さだったと思う。

それ以前の段階で、無理してラタまで着いたからということも言えないと思う。

普通の遠征の場合、デリーにいても買出しだ、渉外だ、パッキングだということで各人が激務をこなしてきている。その面で日程的・体力的にきつかったということはそんなに言えない。どうしてということになってくると、野島さんが言ったような結論に行きつかざるをえないということになってくる。

仕事の負荷ということだったら、バリバリやってきた人に出ていいはずだが、実際ずっとみてきてそういう人にはほとんど出ていない。

<野島>私は前にも言ったけど、精神科の医者で、食事時などは面白く見ていた。

たとえば、盛りつけをするのはいつも同じ人だしそういうことは普通の状態だったらありえないと思うのだが。

ただ奥に座って食べる人は、いつもただ黙々と食べている。遅くきて皆が待っているのにそしらぬ顔でどんどん食べてしまう。

かんづめなど開けた時に、人数分の1に分けて配るはずだが、それにとんちゃくなく自分だけ食べる人もいる。ひじょうに食事時は面白い。

これは、ひとつにはずうずうしいとか、めんどうくさがりやということもあるが、自分は今回を見ていてやはり余裕がないのだと思った。

食事時にそれだけ余裕がないんだから行動に余裕が出るわけがないし、自分の体のことを考える余裕も出ないことになるのではと思う。

<北川>やっぱりそれはある。高いところへ行ってると余裕なくなる。さっき釣部さんに指摘されれたようなことも余裕のなさだと思う。食事時もそうだった。

<野島>私が言っている食事風景というのは、ひとつの精神状態というか、余裕を見る1バロメーターとして見ていたのだが。

例を上げて申し分けないが和田さんのことを言えば、具合が悪いときなどは全然配慮がないわけで後半になってなおったらずいぶんいろんな配慮が出てきた。

各隊員の性格にもよるけど、ポーターとの接し方とか・話し方とか・話す頻度とか・調子のよい時は回数が増えてるし、不調のときは本当に何もしない。

山登りというものがそこまで追い込められたら危険だと思う。まわりのことが配慮できない状態で山登りするのはかなり危険だ。

<角田>上部でテントを張るにしても、除雪するにしても、脇でボケッと見ている人と、積極的に動く人といる。私は野島さんのような見方はできないので、ボケッとしてる人がいると腹立たしくなるだけなのだが。

<稲田>言われてみればいちいち思い出す。

<西田>個人の性格が出てるんではないのか？

<野島>たしかに性格もある。性格とか、生活環境とか、日常の生活態度などもあるけど。

ただ一般的な常識人としてこういう混成チームに加わってひとつの山をめざすという大前提を考えた場合に、その配慮ができないというのは、常識人としての欠陥があるのか、あるいは精神的・身体的余裕がなくなっていたのか、どちらかだと思う。

<稲田>調子が悪い状態でも積極的にそれを克服しようという態度の人がいた。無理してもやるというような。

<野中>なかなかできないんだな、それが。

<釣部>高所に上がるとその人の弱点が一番出ると思う。

<稲田>もうひとつ思ったのは、高度順化ということは、少なくともキャラバン期間はそうダメージになって出てこないわけだが、それがひじょう

なダメージで出てきているという点は、環境順化の要因が強かったと思う。
ひとつは食べものの好き嫌いに端的に出てくる。このような荒々しい風土に対して自分がのまれているというような人が何人かいた。
その辺の対応も、ヒマラヤとか海外の山へ行く場合は大きな要素になると思う。
<**鈴木**>私が一番迷惑かけてるわけだが、私の身体の調子を最初から言うと、日本を出る前日に熱を出して病院に行って手当を受けた。
デリーからラタに着いた時点でも多少熱はあったが、ラタ・カラクで本当にあつくなった。
それでも無理して4,100*m*ぐらいの高さまで行って帰ったがそのとき頭が痛くなってその日38.4℃になった。
キャラバンは続けたがとうとうベタルトリで倒れてしまった。倒れて皆より2日遅れてBC入りをした。隊長によれば、熱なんて精神力で下げられると言うけど、私にはその精神力が欠けていてなかなか下がらなかった。皆に迷惑かけたことをこの場を借りておわびしたい。
<**稲田**>精神力で熱が下がるとは言わなかったよ。
<**野島**>精神力で熱は下がらない。
<**稲田**>けっきょく、熱によるあのような状態でなくて、かなり精神的なものもあって、それがあの症状を引き起しているんだから、熱が下がったからといってC_1に行くとかいうようなことでは何も解決できないというようなことを言った。
<**鈴木**>皆が登頂に出かける前日、はじめて37.4℃まで下って、これなら行けると思った。
そしたら翌日36.6℃まで下ってもう大丈夫だと思って、その日に5,495*m*まで畠山さんと一緒に行ってきた。これは快調に登れ、この調子なら翌日、向うの6,100*m*ピークも2人で行けると思った。
5,495*m*地点にACを設けて6,100*m*にたどりつければと思い、ポーターに隊長テントを上げさせた。27日にめざすピークを往復して2人とも元気だった。
自分で6,100*m*まで体がもつかどうか疑問だったが比較的順調だったので自分としては自信をつけて帰ってきた。
<**稲田**>こういう話はドクターの方から言うのが筋だろうけど、熱が37℃に下った、36℃に下ったというのは、たしかに身体的なコンディションがよくなってきたことだと思う。
だけど私は、身体的にも精神的にも順化した結果が37℃に下げたのだと思った。37℃に下がった自信が36℃に下げ、36℃に下げたことがあの山を登ってこれたというように考えた方がかえってよいと思う。38℃の熱があったから登れないのではなくて。
こういう風土とかへの順化がもっと早くできていれば、札幌から持ってきたカゼももっと調子よくなってたと思う。
<**野島**>鈴木さんの場合、ひとつだけ言えば、あせりだった。あせってたというか、気負ってたと言うか、初日の行動からしてある意味においてはおかしかった。ラタ・カラクに上った日から。
<**野中**>オレはあまり体温がどうのなんて考えない方がよいと思う。
<**野島**>だからあせった未、自分のコンディションを考えてますますあせって行くというのが鈴木さんの状態のわけだ。
<**鈴木**>頭が痛くてね。
<**野島**>鈴木さんは、ラタ・カラクに上った日最後に上ってそれなのにまた、上まで行ったりした。具合が悪いのにあんなことをするわけで、その日の夜中にぼくを起した。
その辺からあせりがすごく出ていた。もう、皆から遅れてしまったというような。皆は元気なのにオレだけ一人でとり残されて、遅くなってしまって、熱も出てきて困ったというような。
で、熱が出たというのはうまい具合に理由がつく札幌から持ち込んだカゼという。
自分は完全に理由があるから、これで自分の身体は調子悪いんだということになる。それが最大の原因だと思う。
<**鈴木**>そこまで複雑に考えていなかった。
<**野島**>はっきり言って鈴木さんの場合、身体的にはそれほど高度障害ということに関する問題ではなかった。
<**角田**>野島さんが、野中さんと私の分の薬を2人分パックにしてくれたけど、あれはたぶん2人分だけだと思う。だけどヒマラヤはそれではすま

ないことが多い。ポーターが調子悪くなって1人に薬をやると次から次へと悪くなくとも来る。そこで、お前にはやったがお前にはやらんというと、ポーター対策上大変まずい。その辺について

<野島>その辺のとこ、すっかり忘れてた。

他のことでも本を読んだり、他人に聞いたりしてだいたい頭の中ではわかっていても見ると聞くとでは大違いで、私もいろいろ参考になった。今後くる時はもう少し工夫ができるだろうと思う。

<西田>いろいろ日頃からの精神的訓練が必要なのだと思う。

<稲田>前の遠征のとき自分は、毎日39℃～41℃の熱でザーザー雨の降る中の行動だった。

<野中>やっぱり山は根性だ。寒いの痛いのなんて言ってたら登れない。

<稲田>高度障害で頭痛というのは、軽い方の障害だ。

<角田>あれは、朝、頭痛くても動くと治る。

<西田>動くときには痛くないんだけど、じっとしてるときの方が痛い。

<角田>極論だけど、むちゃくちゃに強烈な意志があって登れば、たいがいの頭痛はどこかへ行ってしまう。

<稲田>頭の痛さは寝てて治るものではない。高所では行動しなくては治らない。

<中岡>行動しているときは、頭の痛いことを忘れていたり、気がつかなかったりしている。

<北川>ふしぎと歩くと治る。

<野中>オレはBCで半日寝てたら治った。

<和田>自分は最初あれだけ吐いてかなり衰退した。ある程度意識して努力もしたけど、BCの直前になったらピタッととまった。

高山病にもいろんな症状があるだろうけど、そういうのはあんまり本で読んでなくて、自分がほんとうに高山病かどうかわからなかった。

まして、酒飲んでからバタッと調子悪くなったものだから酒のせいかと考えたりした。

<稲田>高度障害を克服するポイントは、ひとつは基礎体力、もうひとつは気力だということだ。今までずっと、日本の高所医学のいろんな機会に言われているわけで、それはひじょうに真実味を持っていると思う。

いわゆる高所への適性というものは、生理的に何千m上ったから赤血球がこれだけに増えてきて順化するんだというものだけでは決してない。

食糧に関して

<野島>甘いものばかり多くて、しょっぱいもの、たとえば、センベイ類が欲しかった。

<野中>食糧はだいたいあれでいいと思う。

<稲田>別に不足のものはないと思うけど、不要なものとか、もう少し増した方がよかったとかについては？

<北川>漬け物が食べたかった。

<飛田>漬け物は入っていたはずだけど。

<稲田>自分たちが上っていったときはひとつもなかった。

<釣部>新しい前進キャンプができると、そこに最初に入った人は食べられるのだが。

<野島>後から行くと何もない。食いあさったあとばかり。

<和田>我々はいつもラストパーティだったので、残っているものはアルファ米とかラーメンぐらいで、嗜好品類は何もなかった。

<稲田>そういう面で、後から行った者には不足しているように感じられたと思う。

<西田>お茶をもう少し欲しかった。他は充分あった。

<角田>食糧は、いろんなものをごそっと持ってきて、BCから好きな物を上げていく方法と、今回のように、完全に9人日分1パックレーションにして上げる方法と2通りある。レーションにした方が便利で合理的なんだけど、今出たようにうまいものから食べて、後続パーティにはろくなものが残らないとか、規格化されて味気ないとかの欠点も出てくる。その辺の比較はどうか。

<稲田>パーティの性質にもよる。少人数の、目的意識レベルから統一されたみたいなパーティの場合、レーションシステムというのはひじょうに有効だ。

今回やって感じたことだが、いろんなバラつきのあるパーティの場合、レーションシステムというのは守られなくなってしまう。来年はレーションシステムはとらない方がいいと思う。

<野中>レーション化した方が食糧係は楽だ。
<角田>レーション化しないと、荷上げ管理の人間が1人必要になってくる。
<稲田>人数が多ければ多いほどレーションを崩しやすくて、そうでない荷上げが簡単になってくる。人数が少ないと、単品が少量になってきてレーションでなければ荷上げのしようがない。
<野中・中岡>やっぱりレーションシステムの方がよいと思う。
<稲田>それは完全レーションならいい。だけどレーションシステムが消化できるかどうかはパーティの質によってくる。
けっきょく、レーションシステムどおりに食べてればいいけど、なかなか守られない。
<角田>いや、システムどおりに食う必要はないと思う。ボックスが上ったら食いたいものを食っていけばいい。
<稲田>そうやると、さっきも話に出たように後の連中は食えない物ばかり残るということになる。
　だから、そんな状態をあらわさないためには、かなりのレベルの高さが要求される。大切なのは、レーションシステムを完全に守るという意識の下で食糧にとり組むということではないのだろうか。
今回はレーションなんて意識しなかったようだ。
前進キャンプに上って、今日は何を食おうかという具合で。
だから荷上げは簡単でも、それを食う人間が意識しないから、レーションシステムで上げてもレーションは崩れていくことになる。
レーションというのは、好きな物を選んで食べるのではなく規格品だ。メニューと同じだ。
だからメニューを守らないとレーションは簡単に崩れていく。
<飛田>たとえば、C_1に天幕3張、9人で上がったときに計画ではひとつのボックスを9人で食べるわけだった。ところが、天幕ごとに全部1ボックスずつ入れて、結果的には好きな物を食べてしまった。
<稲田>それは当然だ。食べる方が"好きな物を食えばいいや"という考えで食うのだから。
その段階でレーションシステムは終りなのだ。
荷上げだけのシステムだったということになる。
<角田>食事というのは、とかくそうなりやすい。
<稲田>あまりレーションシステムを意識しない献立を作って、それを荷上げするというしかない。
<釣部>今回のような短期の場合は、それでもいいけど、これが長期だといろいろ問題だと思う。
<稲田>大変な問題だ。とにかくC_1に食糧が何十キロ上ってくるといっても食えない食糧が上ってることになるわけだ。今回アルファ米が余っていたけど、これがもっと長びくとアルファ米もラーメンもなくなって、食えない副食物ばかり残る結果になる。
<野中>そんなことにはならないと思う。それだけの分上げるのだから。
<稲田>レーションの中のうまくないものばかり残ってしまう。
<安中>でも主食というのは、数を勘定して上げてある。
<角田>アルファ米とかラーメンがなくなってるということは、そのレーションが終ったと判断できる。というのは、9人日分だからアルファ米とラーメンの欠如は簡単に計算できる。
<安中>だから副食物は食べ込むかもしれないが、主食はそんなことはないと思う。
<角田>主食は計算が狂わない。
<野中>いや、副食物だって食べ込んでいない。
<稲田>じゃ、特定品目が食べこまれているんだ。
けっきょく好きな食べ物を食べようという態度はレーションには許されない。
<北川>箱の中をもっと細かく区切って、1食分を明確にして、1袋とったらそれ以外は手を出せないように完全にしたら？
<野中>漬け物まで幾つかに分けて？
<北川>紙に書いてあるものを守ればいいのではないかと思う。
<八嶋>それは無理だと思う。今回、箱をそう呼んでいただけで、本当の意味のレーションはなかった。
<稲田>各テントにひとつずつ配置というやり方をあらためればあれでよかったかもしれない。
レーションシステムは最もいい方法のことはたしかだ。しかし守るのが難しいという点に若干難がある。

<八嶋>3張のテントで1箱を1日に食べるというやり方をとれば、本当のレーションだったかも。
<角田>ただテント毎にわかれるとそれも面倒になる。
<野中>けっきょく各テントに入っていい物をつまんでたから問題が起きた。
<稲田>だから相当現実に即応したシステムをとらないとだめだということだ。
それに、梱包し易さということも考えないといけない。いくら精密にやるといっても分けられないものもあるから。だから、そういうふうにパッキングされた食糧をどういうふうに配置するかというだけの問題だ。
<野中>たしかに今回、先々にしか考えなかった。ポールの話から始まって、食糧もまず行ったらうまい物から食って登ろうというふうで。
<和田>何もいいもの食えなかった。
<野島>メタで食える物を食うという感じだった。

装備に関して

<和田>　ストーブがひどかった。
<野中>石油が悪いのか、ストーブが悪いのかとにかく悪すぎた。石油はデリーでこしてきたし、BCでもう1回やったのにあのありさまだ。
<釣部>コンロは日本では全部点検してきた。
ヌン隊が使ったコンロがひどかった。3台が特にメチャメチャだった。
<稲田>私が一番苦労したのは、ヌン隊に貸した装備がかなりなくなっていたことだ。
<野中>ああいうやり方はだめだ。デポしてあるテントがまずポールが合わない。とにかく、デポ品とか、どこかからまわる装備とか、その辺がいつまでたってもあやふやだった。
<角田>ひとつの遠征隊の装備は独立して揃えた方がいい。
<野中>少し経費がかさんでもその方がいい。
<稲田>重要な装備というのは、あまりあてにしない方がいい。
<角田>今回、キャラバン出発までそのトラブルが続いてしまった。
<稲田>O氏流のひじょうに機能的な考え方というのもかなりドロくさく考えた方がいいと今回痛切に感じた。
<野中>実際、オレの家でパッキングしたのは25kgピタリでOKだったけど、他のはラタに着いて再度やり直さねばならなかった。
<角田>あのデリーのゴタゴタした中では、装備を引きついで、それをパッキングしてという繁雑な作業が正確にできない。
それでキャラバンのとき重さが合わなくて雨の中でやり直した。あれが全部日本でやったものだったら、あんな繁雑なことはなくてすんだはずだ。
<野中>先に使う隊はいいけど、引き受ける方の隊が大変だ。
<稲田>特に個人装備などは命とりになる可能性がある。
<角田>自分はピッケルと羽毛服をヌン隊に貸して紛失している。
<稲田>引きつぐとき、数量と規格の確認をすごく徹底すべきだ。
<野中>だから今回のを引きつぐのは、スノーバーとかフィックスロープとか。
<稲田>単純なものを引きつぐべきだ。今回、特に共同装備で不足を感じるものはなかったが、質の悪さがストーブに象徴される。
燃料系統は重要だから気をつけたい。

抜けていた酸素

<角田>それから酸素がだいぶ抜けていた。
完全に自分のミスなのだが、キャラバン中ガタガタ揺れて酸素がぬけた。酸素を買う場合、カラと満タンの重量規格をきちんと調べておいて、そして満タンにしたときの重さを計るべきだ。
あとは、締め具関係を徹底的に点検して調べる。このふたつが必要だ。私は、ヌン隊が同じものを使って何のトラブルもなかったので、ついうっかりしていた。
<稲田>ヌン隊は酸素を使わなかったはずだ。
<八嶋>使わないけど、C_2 からおろすときにボンベを軽くしようというので抜いた。
<稲田>圧力は調べたのか。
<八嶋>点検してない。抜くときは、マスクをかけないで直接抜いて皆でまわして遊んだだけ。
<角田>では、抜けていたかどうかはわからない

わけだ。
<稲田>今回は全部半量だった。1本は全くのカラだったし。ボンベの表示の規格を確認しないとただの鉄びんを背負ってきただけになる。
その上、いざというときに命にかかわるわけだ。
<釣部>ボンベはフランス製？
<角田>ユーゴスラヴィア製だ。デリーで酸素を扱っている会社はたぶんひとつきりなくて、メディカル・エンジニアーという。マスクはインド製で、ボンベ1本950 Rs.、詰めると1本の充てん費が25 Rs. だ。1本は満タンのを買って、2本はヌン隊からもらった空ボンベに充てんした。
そのうちどれがカラになったかわからない。
<八嶋>その点もう一度会社に行って確認して、それで今回の報告の中でワクを設けてやらないとだめだと思う。ふだん身近に接してないからよくわからない。
<稲田>会社では不足して詰めたわけでなく、正常に詰めたのかもしれない。日本では170気圧だが、インドの法律ではもっと少くしか詰められないのかもしれない。
<野島>ヌン隊で腹立たしいのは、薬を用意するよう言われたのでこちらで用意した。そして、トリスル隊の分までヌン隊が持っていった。
それできちんと保管して9月上旬には連絡するという約束だったのに何の連絡もなく、前日にあわてて無理して揃えるというハメになった。
<稲田>帰ったら紛失物一覧表を作ってヌン隊に渡そうと思っている。
<八嶋>装備の現地引きつぎは、詰めるときにチェックしておいて、リスト表を入れデポしておくべきだ。慣れてくればどんどん現地に残していってそれを利用するのは有効だと思うが。
<角田>引きつぎをやる人が責任感が強くないとだめだ。
<八嶋>終った人の方が問題だと思う。
<角田>あてにしてやってきて、不足してたらどうしようもない。リストを作り、保管と規格を揃えるということをきちんとしないといけない。
<稲田>細かい物まで引きつぐのはよくない。こまものはデポの対象から外すべきだ。
<野島>隊としてライトが欲しかった。
<野中>あっちこっち貸しまわしになるから必要だったと思う。
<稲田>貴重品ボックスのことだが、上部に上る際は鍵のかかるきちんとしたものが必要だ。
特にポーターだけ残して隊員が全部上ってしまうときなど。今回のような問題が生じてくる。
<角田>実は、186ドルと500 Rs. ほど隊の金が紛失した。鍵のかかるトランクは持っていたのだがザックに入れたままテントに置いて上部に上ってしまった。
<稲田>けっきょく、金を持っていると思われる人は特に気をつけなければならない。

<稲田>この後の計画、たとえば報告書などの検討もしなくてはならないので、別な機会にまた反省会を持ちたいと思っている。
今日はどうもごくろうさま。

（安中秀子採稿）

反省会——東京

1978・11・26
東京・八ツ山園

※
＝テープ・レコーダーの操作ミスにより、15分程度の録音の空白がある。よってメモによる概略を示す＝

<角田>今回のトリスルは、1峰に6人、2峰に7人で、全体の60％の登頂率だったわけだが、登山学校という視点から考えた場合、その登頂率はどうであろうか？

<中岡>学校というのを頭に持ってきた場合、もっと山を落としても、登頂率を高めるべきではないかと思う。

<角田>例えばトリスルより低くても、難度の高い山がたくさんあるが、その点に関しては？

<稲田>あの期間内において、ルート工作などしながら登っていたのでは、とても登頂できない。

＝以下録音＝

学校としての山の選び方

<角田>ＢＣから頂上までの登山内容から判断した場合、少し貧困な山でなかったかという気はある。それでは、今、途中から出たような盛りだくさんの内容、ヒマラヤ登山のオーソドックスないろんな変化を盛り込んで、なおかつ7,000 mを2週間位で登るということになると、非常に困難な気がする。

その場合、高度はやはりある程度落として、6,500 m位が適当だと思う。10日間で60％以上の人間は6,690 mのトリスルⅡ峰の高度に順化したわけだから、あの位の高さで、もう少し内容的に高度なものを。そういう意味では、トリスルは今回の目的には合ってなかったと思う。

<飛田>隊員になるにあたって、自分は高い所へ登りたいとか、困難な山へ登りたいとかあるわけで、その辺の自分の判断がまずあると思う。

<稲田>7,100 mというのは、あの期間でこういう構成のチームでは限界であろうと思う。だからこれで技術的要素が加わってくるとおそらく無理だと思う。

<野中>ルート工作が必要なようでは、全然無理

<稲田>来年のキャシードラルは6,400 mだが、あの山はかなり変化は持っている。一応ヒマラヤの要素は全部備えている。だからあのような山の選び方もあるわけだ。

<角田>頂上にテントを張るとか？

<稲田>頂上にテントを張って、そこをC_3にするという案がある。

行って登った時点はかなり喜んでいるけど、時間がたつとどうしても、だんだんものたりなさが出てきてしまう。高度に関しては満足だけど。

<野中>やはりそれは技術面だと思う。自分は完全にそういう気持がある。

<北川>正直言って歩いていれば着いたという感じで、意欲が湧かなかった。

<野中>それも後からではよけいそうなる。

<北川>毎日同じところを登ったり降りたりしているだけではよけいだ。ザイルも使わなかったし。

<稲田>高度との戦いは苦しさだけで、快感はあまりない。高度をあげるに従って、登攀みたいな充実感がでてくるなら、確か満足なんだろうけれど、どうしても充実感は技術的な内容からきてしまう。

<野中>だけど技術が難しければ、10日位では全然だめだ。1ケ月で出国から帰国までという短期速攻では、技術的に難しい山で、登れる山は無い

と思う。
<中岡>やはり、それと隊員の資質になると思う。技術的難度が高くなればなる程、隊員は選ばれなくてはならない。そうすると一般公募の登山学校スタイルでは難しい気がする。
<角田>短期速攻というのは、ある意味で登山学校には合ってない気もする。オーソドックスなもっと日数かけた遠征の方がいい。ただそうするといろいろ問題がでてくるのだろうが。
<稲田>時間でもって制約されてしまうから、大衆性と言うのがなくなってくる。
<野中>何と言っても時間が問題で、1ケ月位ならみんな休みはとれるけど、それ以上になると無理になる。
<角田>例えばトリスルの場合でも、もし45日位あったとしたら、デリーでの準備段階などで、隊員がもっといろんなことをできたと思う。その方がはるかに勉強にはなる。
<飛田>参加する人が大分少なくなると思う。
<稲田>経費も高くなる。が、内容は豊富に盛り込めるようになる。技術から渉外から全ての面で、いわゆる充実感は30日間とは比較にならないと思う。

この遠征のとらえ方

<野中>まず登山学校でヒマラヤを1回経験して、次に自分で行こうという考えの人が多い。
<角田>その辺に関連してのチーム作りと、組織運営のことだが、今回最初3人パーティを組んで、あれは実際には全く運用されなかった。トリスルを振り返って、チームのあり方で何かあったら、どうぞ。
<野島>自分は帰ってきた時点で、何かパック旅行みたいな気がした。最初いわゆる登山学校という申し込みのしかただったので、なんとなくそういう感じの人が多くいるのではないかと思う。ただ参加して、歩いて登るというだけで。いろんな面でわからない点が多いということもあったとは思うが、帰りのデリー空港で、つくづく思った。
<飛田>その辺は自分自身の気持の持ちようだと思う。自分は帰国して、全くそうは思わなかった。とにかく全体でやったんだと思ってる。パック遠征とか、パック登山とか言われているが、今回の場合、自分は違うんだという考えをもっている。
<野島>だからその辺は人によってとり組み方が違うから、準備の段階などから遠征として一生懸命した人と、そうでなくなんとなく行ってしまった人と、その差が随分出たのでないかと思う。
<野中>その辺は地域的なこともあるし、どうしても関東でばかり、事前集録だ、梱包だとやってきたし、行ってからもそういう人が動くようになった。
<角田>そういう問題に関して、そもそも登山学校というのは、どういうふうなかたちの遠征なのかというのが、日本では全く定義決定されてない。それはやった本人が、そうしていかなければならないと思う。例えば学校という言葉のイメージは、いろいろあると思うが、同じ山の学校でも三ツ峠で技術講習会をやるというのと、ヒマラヤを学ぶというのは、全く意味あいが違うと思う。

これは個人的意見だが、ヒマラヤ遠征は他人に教えられるものでなく、覚えていくものだと思う。そういう中で登山学校というのは、何をどう教えるのかという問題が、当然出てくると思う。結局機会のない人に、単に遠征の機会を与える場であるという見方もできるし、いやそうでなく、1から10まで手とり足とり教えるべきだという見方もでてくる。

その辺の位置づけが曖昧のまま、JACのタルコットがあり、HAJのヌンがあり、トリスルがあり、今日に至っている気がする。ヒマラヤ登山学校というのは、これからはある程度、その辺の曖昧さをなくしていって、理想的な運営はこうあるべきなんだという方向性を持った上で、これからやっていかなければいけないと思う。その辺の方向性というのは、それを経験した我々が考えるべき問題である。
<稲田>やはり、これは経験してないと分らない。はたから、登山学校というのはこういうものだろうと考えても全然わからない。

登山学校というのは世界にもいろいろある。インドの国立ヒマラヤ登山学校の場合、一定の授業料をとって運営している。各州の山岳連盟からの推薦が要り、そして学校に入って講義があり、単

位制になっている。実技も何単位かあり、最後に6,000 m程度の山に登って卒業式となり、徹底的な学校方式になっている。それからフランスの登山学校も、全くの学校システムになっている。

今回の我々の場合は、そもそも学校というのはいかにあるべきかということで計画したのでなく、学校という名を借りて遠征隊を組織したという感じで出発した。だから学校とはどうあるべきかというところに立って、遠征したわけではない。なるべく一般の遠征隊に近づけるということが、この遠征隊の理想的な姿だというふうに考えていた。

しかしやってみて、それは非常に難しいことだと思った。これだけの準備期間では、どうしても遠征隊でもない、登山学校でもないという、曖昧さの中で過ぎやすい。どっちかに徹すればよかったのかも知れない。確かに、いわゆる隊員の自主性などピシッと限定してしまって、学校なら学校方式に徹しきった方が、よかったと思う。そうでなければ本当の遠征隊ということで、その集まってきた中から、リーダーをやり、渉外をやるというふうな形でやるべきだ。ただ、いわゆる遠征隊に近づけるということは、インストラクターが入ってくるから、それをむずかしくしてしまう。インストラクターを入れるのなら、完全な学校方式をとった方がむしろ易しくなってくる。

<角田>その辺、なんとなくスタートしたのだが、スタートしていく中で、徐々に東京集会などで、ある程度の雰囲気的なもり上がりはあった。それで事前集録の中で隊長が書いていたが、結局登山学校的性格を無にして、普通の遠征隊に近づけることが、登山学校として成功なのだということが最後になって出てきた。それで、そうなるかと思ったが、なりきることは出来なかった。理想を言えば、今回のような形でスタートした以上、登山学校的性格が無くなって、完全に普通の遠征隊のような形になるのがよかったと思うが、そうもなりきらなくて、何となく中途半端だったという気がする。

登山学校のあり方

<稲田>登山学校のあり方にもいろいろある。本当の遠征隊に近づけて行くんだったら、いわゆる登山学校は座学と言うか、国内段階に留めて、そしてその卒業生が、隊を何人かで組織して、自分達でリーダーを選び、さらに1年なら1年の準備期間をおいて、完全にやる。そういうのが、かなりいい線ではないかと思う。やはり遠征隊に近づけるということで、行くということになれば、いわゆる登山学校の関係者が連れて行ったのでは、そうならないと思う。だから2段階に分けて考えるということも1つの方法としてでてくる。

<角田>そういうような方法を考えた場合、地域性が問題になってくる。だから理想的に言えば、全日本的なレベルで隊員を集めるよりも、関東なら関東だけで、近畿なら近畿だけで、隊員が集まってやっていくというふうにした方が、準備段階からの運営がずっとスムーズに、理想的な線でいくんじゃないかと思う。

<稲田>今、協会では、やはりピシッとした学校にしようということを考えている。それは大体、過程を3つに分けようということで、1つはいわゆるヒマラヤ登山の共通的な概念を得るということ。文献のこと・研究のしかた・気象等、全ての面を講義ということで、48時間なら48時間かける。それを卒業した者は、いわゆる実技ということになる。始めの講義の間も登山技術の実技はやるが、ここで言うのは遠征にからむ実技ということで、それを2つに分け、1つは準備の実技。それから現地へ。総括も含めて。そういうふうにして、やるべきなのでないかと思う。さもないと学校とは言えない気がする。

だから定例日を決めて、例えば東京のオリンピック青少年センターだとか、どこかを学校にするということで。1年間なら1年のカリキュラムを全部作って、テキストを作って、それに従ってやっていく。あるいは山での実技ということで、やはり教程を作ってやっていく。それから実技に入っては、そこの第1期生なら1期生という中で、ほとんど自主性を持たせてやっていく。指導者はそれにアドバイスだけをしていく。2年間位でいわゆる1期を終るというふうにする。そういうことが必要ではないかと考える。

<角田>それも、もしやるとしたら、そうとう煮つめてからスタートしないと、なかなか難しい。

<稲田>具体的にそうなると、講師集めとかをかなり大がかりにやらなくてはならない。
<角田>だけどそういうふうにすると、かえって意欲を失ってしまうのでは？
<野島>今回の場合、登山学校と言っても、そこで何かを教えてもらうというより、むしろある1つの場を与えられたというか、きっかけというか、それでともかく行ってみようということだった。これからも、そういう人の方が多いのではないかと思う。
<稲田>だとは思う。参加する側にとっては、要するに山に登ればいいということだから。
<高原>逆説的になるけど、自分の場合だったら、次は自分らの親しい仲間で、別な充実感を求めて行くとか、そう考えさせる要素も欲しい。
<角田>次に自分でやるのに役にたつという遠征でなければならない。登山学校の最大公約数はそんなもので、自分で遠征できるだけの経験を身につけなくてはならない。
<高原>やはり1つの中心になるような、基本の考え方があった方がいい。
<稲田>登山学校というのは、やはり限定して考えなければならない。全部の充実感を得るということになれば、やはり自分が1から企画して、そして最後にまとめるということで、全部自分の力でやれば、ひじょうな充実感がある。
<野中>そういうのはどこの隊でも1人位しかいないのじゃないかと思う。K2にしても、エベレストにしても、誰かがやった後を、みんなただくっついて行っただけで、これと同じだと思う。
<角田>それは言える。
<釣部>ある程度は参加した側の、学校なら学校の利用のしかたというか、そういう事もある。
<稲田>とにかく短期で行って帰ってくるという減点が、学校という減点に加えて、もう1つ付いているから、結局両方が充実感を無くしている。しかし、そういうものだと割りきるしかないと思う。短かい時間で帰って来れば、何かの部分が必ず犠牲になっているわけである。高度は獲得したけど技術がとか、技術的には充実感あったけど高度がとか、両方満足させるということは、1ケ月ではまず不可能だ。

トリスルはある面で、学校形式の短期速攻登山では頂点だと思う。いわゆる高度を獲得したという点で。タルコットは全員登れたけど、あれは高度もなかったし、技術的にも問題なかった。だからあのレベルよりは、こちらの方が確かに充実感はある。

学校の運営

<高原>方法としては、その都度々登山の性格をもり込んでいく方が、現実的かも知れない。
<角田>集まった隊員の思考にもよる。人が集まってみて、初めて方向性が打ちだされてくるというのが、本当かも知れない。
<高原>最初に限定すると、無理が生じたりする。
<野中>隊員の質・レベルも未定で、集まってみて、それからやってだから。
<稲田>それまでの間に1つ1つのつながりがあれば、そういう方向で人が集まってくるんだけど。とにかくここに集まった人は、今から1年前は全然知らないわけで、そういう人を集めるとなると、1つの目標を掲げなければならないわけである。その目標は山の名前か、又はその内容である。だけど一般的に言って、山の名前を掲げないと人は集まって来ない。その辺に難しさがある。名前を先に言ってしまうと、すでにその登山の質が、そこで決定されてしまうわけである。
<中岡>登山学校ということを考えた場合、今年ヌンへも行ったけど、比較したらどうなるのか？
<稲田>やはりヌンの方が高い。
<中岡>自分もヌンの方が高いと思う。それにヌンの方が人数も少ない。

当初トリスルでなくヌンということで集まり、人数も30余名だった。そこで、ヌン峰で、隊員30名で1ケ月の登山期間というと、かなり登頂率も低かったと思うのだが？
<稲田>今回のトリスル隊をヌンに。っていったら、登頂率はずっと低かったと思う。それとヌン隊は、あの9名がトリスル隊のような構成だったら、たとえ9名であっても、おそらくあの登頂率はもっと下った。ヌン隊の場合は、我々の隊みたいに、全くの見ず知らずが集まったというわけではない。9名のうち東京理科大のチーフが3名入

っている。登頂者の大半が彼等だった。だからリーダーシップなんかは、その先輩・後輩でとっていた。

確かに名前は同じで、同じ位の高さの山へは行ったのだけれど、チームの質やリーダーシップ・メンバーシップというのが、我々の場合と非常に要素を異にしていて、いわゆる一般の遠征隊に近かった。そうなると隊の運営というのはひじょうにしやすくなるけれど、学校とはまたちょっと違っていた。

<角田>あの隊は名前だけ登山学校で、内容的には全く普通の隊だったという感じだ。

<稲田>登山学校に徹してやるということになれば一面で参加者にひじょうな不満がでてくる。自分等の自主性が何もないのではないかということになるから。だけど遠征隊に徹するということになると、その面でまた、困難になってきてしまう。おそらくレベルダウンが必要で、山の高度から何からダウンさせないと、こういう形式で人を集めて、これだけの準備期間では。

<角田>自分は山のレベルがダウンしても、その方がいいと思う。もしインストラクターがいれば最初だけその人達がリードして、いろんなことチェックして、それに示唆を与える程度にする。後は集まったメンバーでやっていく、というふうにしたらいいと思う。その場合日本全国ということになると、ものすごく難しいと思う。が、終ってみてそういうことの方が、その後に自分で遠征する場合、はるかに役にたつと思う。

<稲田>人数が多くなればなる程、1人が働く分量というのは少なくなってくる。小人数になればなる程、1人にかかる仕事の分量が多くなるから、それだけいろんなことを経験できるということになる。

<角田>いろんなカリキュラムを考えておいて、これとこれは今回の遠征にもり込まなければいけないとか、そういうのは詳細に点検する必要がある。

<稲田>計画をたてる時は、どうしても一般遠征隊のレベルでたてるわけで、しかし、果たしてそれがいいのかどうかということになる。例えば、それが今の登山界の主流から遅れていたとしても、それをあえてやるということも、経験という意味で、一面では必要だということになる。

日山協推薦とのかかわりあい

<角田>地域的にはインドが一番入り易いのだろうか？

<稲田>地域的にはそんなに差はないんだけど、今の日本国内の登山の推薦状とかのシステムが、インドを選ばざるを得なくさせている。日山協の段階でチェックされる。

山を申請する時点で、隊員が揃ってなくてはならないということがある。だけどその時点では、隊員は全然そろってなく、計画だけがある。もう1つは、そういうのを果たして日山協で認めるかどうかということがある。

日山協の推薦を受けるということになると、もし時間的余裕があれば、最初トリスルならトリスルと掲げておいて、みんなが集まってきた時点で、リストから何からつけて、日山協の推薦を得るというようなことができる。しかし、その時点では結局、許可が不確定のわけで、人を集めて、山を掲げて申請したけど、許可にならないという場合がでてくる。そういう恐れがあるので、どうしても最初に山を固定しなくてはならなくなる。

あのシステムが改まらないかぎり、ネパールやパキスタンでのこういう試みは難しいと思う。とくに最近、早めに申請せよというふうになってきているので。

<高原>あれは向こうの国が、日山協の推薦状を持ってこいと言っているのか？

<稲田>単一山岳会でもネパール政府は受けつけている。しかし、このことは国内で申し合わせが出来ている。日山協・外務省を通して申請する規約を破ろうとすれば、都道府県山岳連盟などに所属できなくなる。

<高原>そういう障害が生じるんだったら、これからそれをとり除くことも考えないとならない。小さなパーティだと日山協あたりでも、資金の面がどうとか、かなり難しいことをいう。

<稲田>1つには日本ヒマラヤ登山学校というものを作って、その登山学校そのものを日山協が公認してしまう。その方が可能性が高い気がする。

そこの卒業生はとにかく卒業の段階で、チェックされて行けるんだということで、ネパールとかパキスタンにも、最初から山を申請できる特例事項をつくる。それで日山協の了解をとれるのだったら、世界のどの山も選ぶことができる。

<角田>だがネパールはキャラバンが長いから、1ケ月ということになると問題だ。登山期間を確保する為には、キャラバンは長くても4～5日ということになる。

高度順化について

<稲田> 7,000 m峰を純登山日数が10日というのは、やはり極限だ。

<角田>今度のトリスルの場合でも、ダランシで4,000 mの順化があったからよかった。高度順化の最初のワンステップを、ダランシでやっているということになる。

<稲田>ヌンは登山日数14～15日位かけている。

<角田>ちょうどダランシの分だけ、あっちが長くなっている。

<稲田>ダランシみたいな条件がなければ、10日間というのはかなり難しくなってくる。

上部の障害は順化でなんとかなるが、ＢＣでの障害は防ぎ様がない。ではＢＣを障害のない2,000 m位に作るかというと、こんどは上部ができない。ＢＣでの高度障害は短期速攻であっても、普通の遠征であっても、ほとんど同じだ。エベレストみたいに、少し前の段階で順化行動をしてからＢＣに入るという方式もできるが。

<角田>順化は1ケ月位たっても、かなり残っている。自分がアンナプルナ一周した時、5,300 mの峠を越えるのに、だいたい順化した時と同じペースで歩けた。

<稲田>高度順化の面など、医学的な面から見た速攻をどのように感じたか？

<野島>行く前に日程や山の高さをまわりの人に話したら、みんなが無理だろうと言った。ほんの少しの人数が登れるだろうということで。そういう意味では比較的成功だったという印象を受けている。他に思ったのは、高度順化というのはそんなにわかってないということ。高度障害は高度だけでなく、いろんな要因がからみあっているということ。ある意味では、自分が予想したよりは、全員順化したと思う。自分はもっとたいへんなものだと思っていた。

桑原さんがあゝなったのは、今から考えるともう少し早く手をうっておけばという感じで、そうすればあそこまでいかなかったと思う。専任の医者がいれば、あんなことはなかったと思う。

<稲田>こういう構成のチームで、あの10日間という日数は短縮できるか？

<野島>できないと思う。個人差があるから、中にはできる人もいるだろうが、できない人もでてくる。それで日数が短かくなればなる程、やはりできない人が増えてくる。

<稲田>体へのダメージという点では、どういうふうにみてきたのだろうか？　あれ以上ダメージを与えて、もっと短期で登るというのは？

<野中>ダメージでつぶれちゃうと思う。

<野島>限界でないだろうか。自分はあれでも無理という気を、半分以上持っていた。

<野中>キャラバン中は荷は背負わない方がいいと思う。

<稲田>結局あの日数を縮めようとすると、生理的なダメージは大きくなってくるのだろうか？

<野島>身体に対する無理ということにおいて、キャラバンは長ければ長い程いい。

<角田>今回の隊は、順化パーセンテージからすると、いい方だと思う。と言うのは、同じ時期に自分のクラブでも遠征して、ＢＣを4,200 mに設置した。それでＢＣ入りの時、3人の内2人までが、2日間行動不能だった。しかたなく一度3,000 m台に降りて、また登った。それでも登ってはきたけれど、4,000 mを越えてそんな調子だったわけだ。3人のうち2人といったら65%になる。トリスル隊の場合、ＢＣに入って翌日、かなり高い割合で上へ登っている。

<稲田>全体をみると、7,000 mに登ったから、7,000 mに登れるだけの順化はしたということだろうけど、身体そのものは順化してないと思う。

<角田>ただ登はん速度を見た場合、100 mを1時間で登っている。一応ラッセルもあったし、暗がりの中でルート判断に迷って時間をくったりもしたが、それでも1時間に100 mの高度はかせい

でいる。だいたい並のペースで、それだけから判断すれば、順化していたとは思う。

<稲田>順化量としては、最少限度だったということだろう。もう少し順化していると、もっとスピードが上がる。

<野島>例えば日程的な問題もあって、BCに着いた次の日、皆、本心から言えば、休みたかったと思うが、結局、なんか追われるような形で、どんどん上にあがっていったみたいだ。

<中岡>それがよかったという気もする。追われるという形で行ってきちゃった。

<野島>最後まで日数が少なくて、そこまでともかく行かなくては、というようなことがあったから。

<野中>その辺確かに C_2 から C_3 に上るあたりは遅かった。自分はあれで、明日、1峰へ行けるのかなと思った。順化は最少の量だと思う。順化できたから登ったんでなく、登りたいから登っただけであって。

<稲田>以前行った山で、5,700 m～6,300 mの600m差を最初7時間かかったが、完全に順化できたら、1時間15分位で登れるようになった。今回登ってみて、C_1～C_2 あたりでも、けっこう時間かかってたから、やはり順化はまだまだしてないと思った。

<角田>速攻というのは、ある意味では順化しないで登るとも言える。

<野島>考えるに、重い障害をおこしてないという表面的なことからすれば、順化してたということになる。

<中岡>気になるのは、C_3 に行く時とアタック時と、スピードが極めて違っていて、自分は C_3 にいく時どうしようもないような状態だったが、翌日の登頂日は、ほとんど前日より早いペースで歩けた。

<野中>その辺は背中にかかる荷物で、だいぶ違うと思う。

<角田>それとアタックということでの気のはりなどもある。

<野中>頭は痛くないけど、C_3 まではとにかく足が動かなかった。

<稲田>やはり速攻というのは順化してないのだと思う。

<中岡>順化しなくてもいいのなら、もっと日数をつめて、一気にやることもできるのではないか？

<野中>荷上げが追いつかないと思う。

<稲田>荷上げをしないと仮定して、ルート工作に行った八嶋さんの場合とか。

速攻の可能性は

<角田>八嶋さんはヌンで6,000 mまで行ってたのだけれども、高原さんと自分と3人でルート工作に出た時、彼は調子が悪くて、引き返した。自分もその後、2人で6,200 m位に行った時、やゝもうろうとしていた。あの時、あのまま下におりないで、一気に登頂というと少々難がある。

<稲田>遠さを抜きにして、単に高さだけを考えた場合、一気に歩き続けてということになると、6,000 mあたりが限界だと思う。

<角田>6,300～400 m位なら大丈夫だと思う。

<稲田>それには条件が付く。途中で泊ったら、もうだめだ。おそらく、一晩泊ったら、その日に障害がでるだろう。

<高原>荷上げは順化を早めるという面で大切だと思う。

<角田>結局、身体に負荷を与えるから。

<稲田>身体に負荷を与えるというのは、高度をあげるということだから。重い荷を担げば呼吸は速くなるし、酸欠状態になるのでは？ 6,000 mラインを空身で行ったのと、荷を背負ったのでは、身体が感じる高度はだいぶ違う。

<角田>よく一般に言われている4,000 mと6,000 mに線をひけるというのを、今回つくづく感じた。6,200 m～300 mの山は一気に登れるが、それ以上はやはり無理ではないか？　6,200～300 mに順化した身は、7,000 mはたやすく登れ、その順化で7,500 m位まではいけると思う。

<稲田>今回もう少し順化量が多かったら、あの C_3 からもう少し高い山まで、1日で立てたろう。

<野島>今回、ダランシ通過時、最初の日と2日目は一気にあがった。普通にダラダラ歩いて着いたのなら、あの後とてもあんな行動はとれない。最初、ある意味で無理しちゃって、また少し下って、まあ楽をしたというような。そんなかたちで

歩いていったから、よかったのだと思う。
<稲田>昔、ヒマラヤ登山というのはラッシュで登っていた。ロングスタッフもトリスルを登った時はラッシュで、そのまま登り続けて頂上に立った。
<角田>ただあの場合は、その前にラマニ氷河から5,800 m位の峠を越えている。
<稲田>あの初期はずっといろんな山を彷徨して歩いていた。ロングスタッフにしてもそうだし、殆どの人がそうだ。速攻で登ってると言うけれど、結果的にはポーラーを体験した後で速攻で登ってる。
<角田>順化から見た場合は、そっくり同じパターンになっている。そういう意味では、少しトレッキングでブラブラ歩いて、5,500～600 mまで登り、それからどこかのＢＣに入れば、ラッシュも考えられる。
<稲田>メスナーにしても同じだ。季節は違っているけれど、１年中高い山に登っているのだから。
<野島>速攻々と言うけれど、表面的にある一部分だけとって言ってるだけで、ずっと日本あたりにいて、いきなりヒマラヤへ行くのとは違う。
<角田>結局速攻といっても、本質的にはたいしてかわらないわけだ。
<野島>結局はどんな人でも、ある意味において高度順化という経過を経なければ、人間はそれ程身がもつものではない。
<稲田>速攻の可能性ということで、8,000 mにあれ位ラッシュで登れると断定を下すのは無理だと思う。メスナーがエベレストを無酸素で登ったから、人間はあそこまで無酸素で登れるんだとかいう表現は意味がない。
<野島>それを言うなら、医学実験的に鍛えていけば、もっと上に登れるかも知れない。
<稲田>日本国内でも低圧室を使えば、そういうことはできる。
<野島>ただ低圧室などで一気に下げた場合、やはり身体の障害はかなりきている。それから考えれば、１週間位で０m～7,000 mまであげるということは、生理的に不可能だと思う。
<稲田>出発前10日間位国内の低圧室を使って、１日目の高度ということで、あそこまでいって下ってくる。次の日は低圧室に泊らせるということを、6,400 m位までくり返していったら、はたしてヒマラヤはラッシュで登れるかということになってくるが。
<野中>身体動かしてないから難しいと思う。
<野島>一般的には高度障害は、高度だけのことをいうけど、よく見ると高度以外のいろんなことが含まれている。高度障害という言葉を使わずに、例えば寒さとか異なる環境とかを大きく含めて、「高山障害」位の命名の方が適当だと思う。
みんな上部では、かなりの脱水状態になっているだろうと思う。
<角田>真島さんがＣ₁上部でバテた時も、やたらと水を欲しがった。
<高原>あれは体温交換というか、そういうことが、うまくいかなかったからだと思う。身体にさわっただけで、とても暑かった。
<稲田>低圧室を使って、誰かをモルモットにしたてていったら、おもしろいと思う。
<野島>しかし、低圧に耐える力は、何もしないでただ座っているだけではだめだと思う。もし理論的にはついても、要因はそれだけではないし。
<稲田>体の生理的条件、例えば赤血球などは？
<野島>そういうのは確かにあがる。
<稲田>だから有利にはなる。意志力を上げることはできないだろうが。
<角田>出発直前の富士合宿なども有効だと思う。
<野中>いいことは確かだけど、行く前は忙しい。だからそれを遠征期間に入れてしまうとかしないとやりずらい。
<稲田>キャシドラールは３日間位やるらしい。それというのも、あの山は自動車でもって、一気に4,000 m位まで行ってしまうので。
登山期間が短かいということがあるから、国内でいわゆるダランシ・パスをつくると同じようにやってみて、その順化が残っているうちに、インドへいってしまうという方式をとる。ただ、出てくるのは日数的な問題である。
<稲田>とにかく忙しい人ばかり集まってくるので、短かい登山期間が要求される。これで高度だけが問題ということで、山の高さを7,000 mじゃなくて6,500 mにおろしたら、無理なく登れるか

と言うと、全体の緊張感とか何かがうすれて、またある面での問題がでてくると思う。

高度順化と意識の問題

<角田> 6,500 mなら 6,500 mだということになるし、6,000 mに設定すれば 6,000 mということになって、そこまでの意識しか持たないと思う。

<稲田> たぶんその面で、チームワークとか、障害の発生とかがでてくる。順化行動にも真剣味は減ってくると思う。そういう面で別な困難さが出てきて、結局は 7,000 mに設定してやっても、同じような負荷がかかるかも知れない。

<野中> 登山学校に入ってきて行く人間が、そこまで考えるかというと、自分達みたいに経験してる人ならそう言えるけど、そうでもないと思う。自分はマッキンレーに行く時、初めての 6,000 mということで気が張っていた。だからそういうのはあたらないと思う。ただ知識が豊富になって、7,000 mも短期で登れるんだからということが、意識の中にでてくるとどうだか？

<稲田> 自分の経験だけでなく、他人の経験もとり込むことができるから。"あの人達、あれで 7,000 mを登ったから、今回は 6,400 mで易しいや"とかいうふうに。我々の場合にも、今回それがあったと思う。やはりパミールであれ位で登ってるんだから、自分らも登れるんだということがあった。

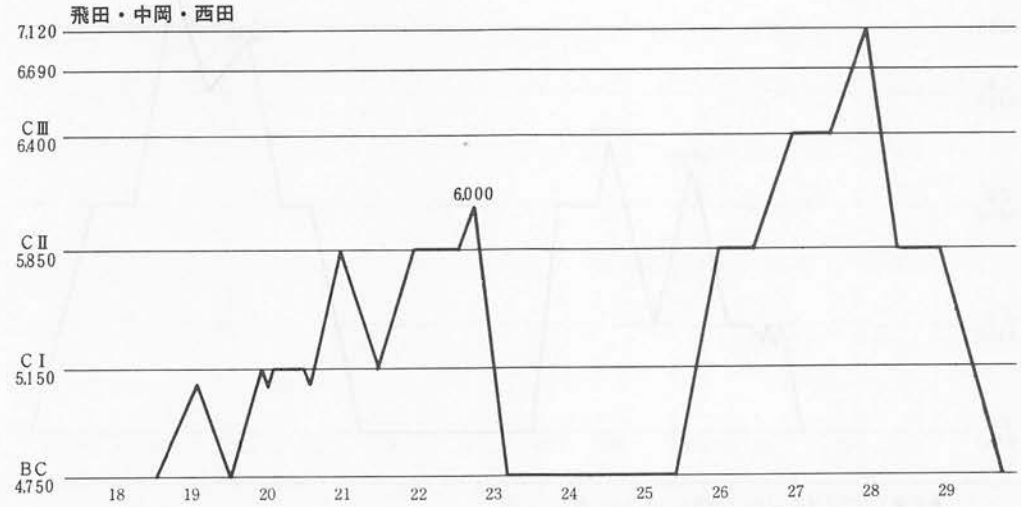
ひじょうにおもしろいのは、ヒマラヤ登山全体が進んでくると自分のレベルも進んできてるように錯覚してそれが一種の実力になっていく。だから今から10年前に、こういうことを考えたとしたら、非難ごうごうで誰も集まって来なかったと思う。

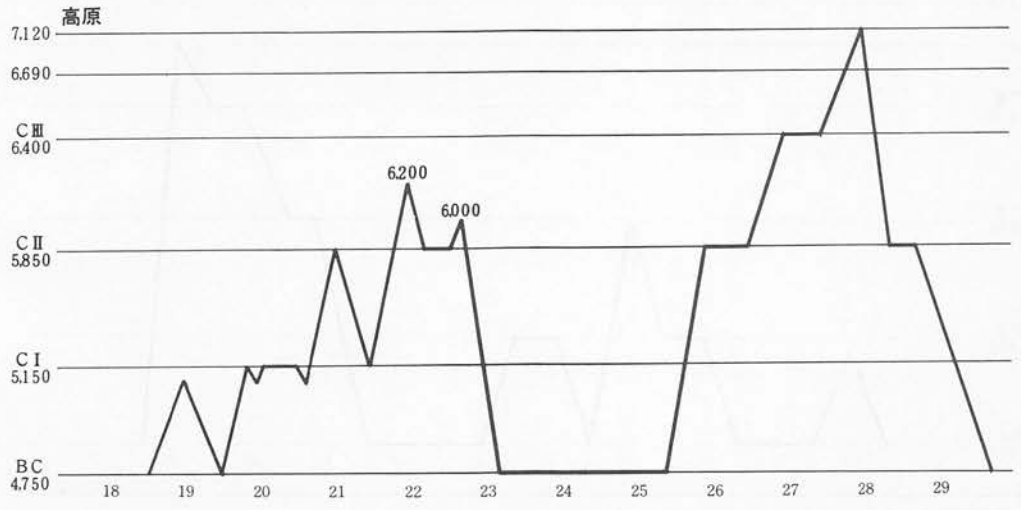
そしてもう10年もたったら、おそらくまた違った状況になっていると思う。こういう形式で誰が 8,000 mを登ったとかいうふうに。そうすると、じゃ、自分も登れるんだということで、案外登ってしまう。今、ガイドがそちこちに遠征隊を出しているけれども、あれも、だんだんエスカレートしていくと思う。今、7,500 mまで来ているけれども、8,000 mのそれがでてくるのも、近い将来だと思う。　　（採稿　安中秀子）

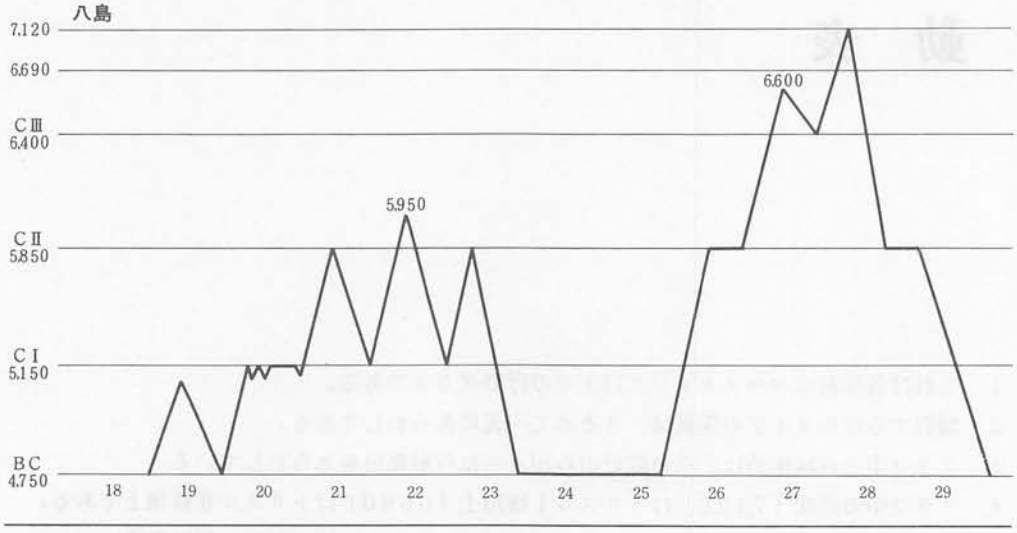
行　動　表

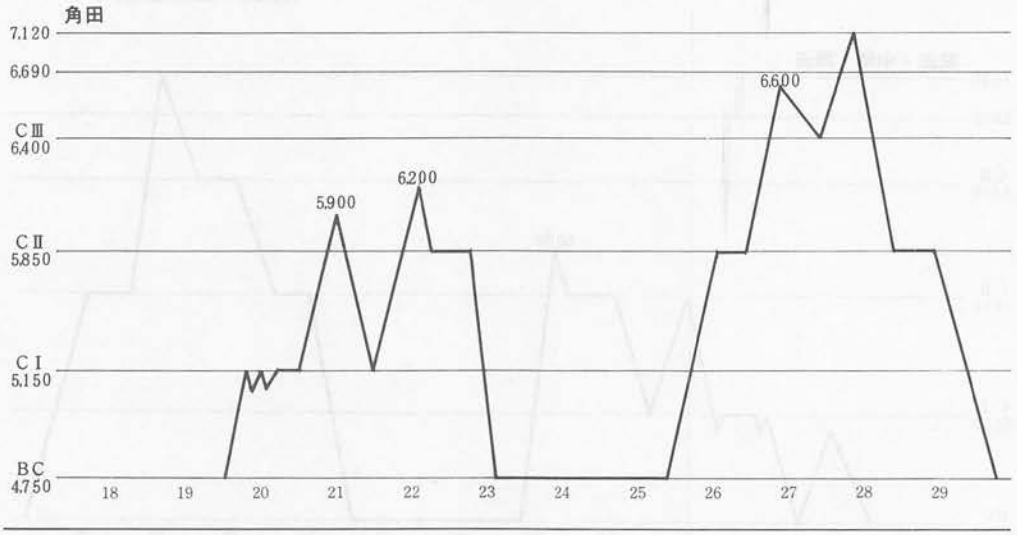
1. これは各隊員のベースキャンプ以上での行動グラフである。
2. 類似する行動タイプの隊員は、まとめて一表にあらわしてある。
3. グラフ中の点線部分は、その隊員のみがとった行動部分をあらわしている。
4. グラフ中の高度「7,120」はトリスルⅠ峰頂上「6,690」はトリスルⅡ峰頂上である。

（隊長　稲田定重）

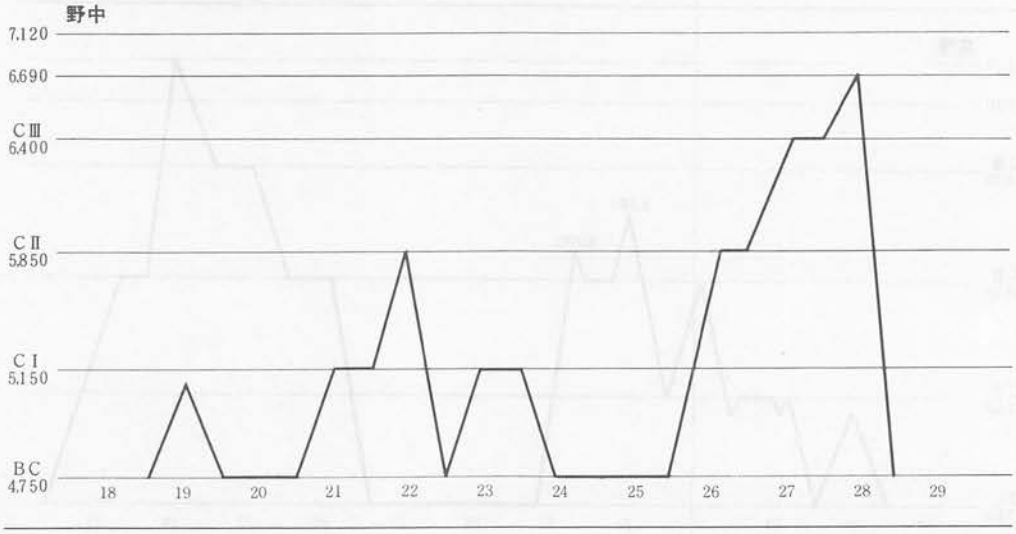






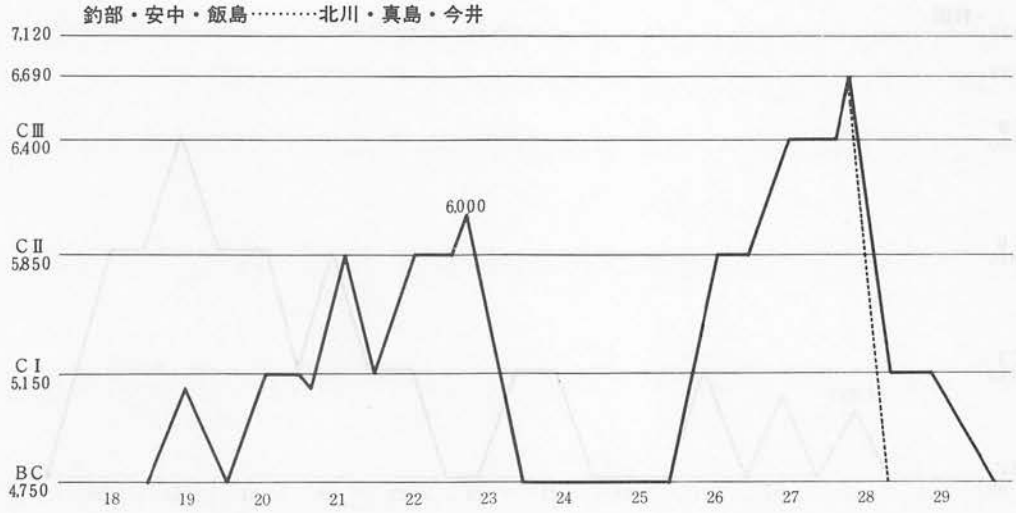


※先発入山で15日に5,100，16日に5,000を往復している。

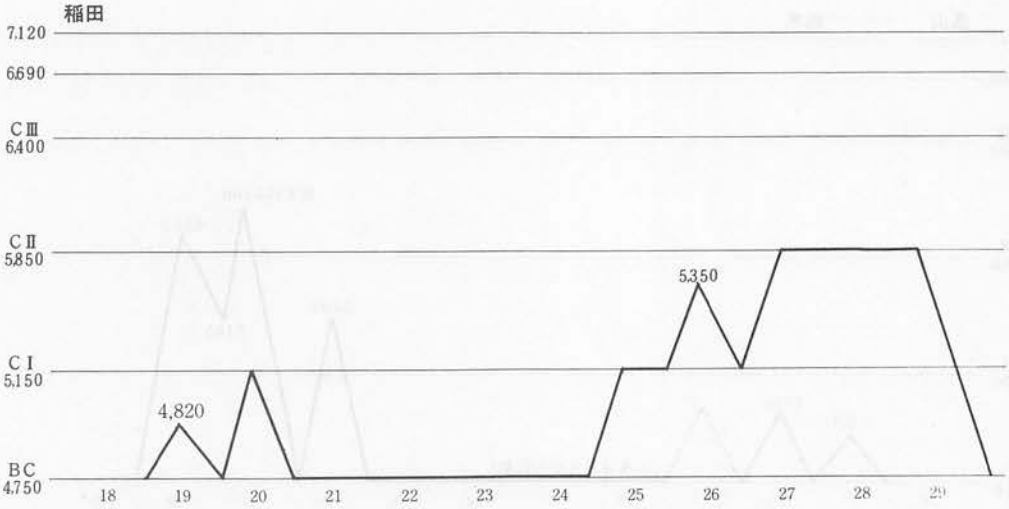


※先発入山，16日に5,000を往復している。

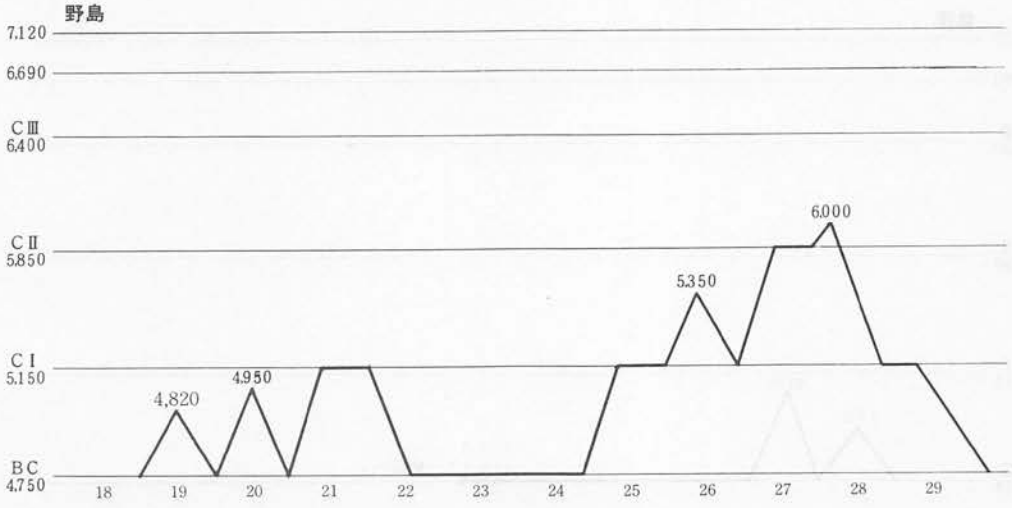
釣部・安中・飯島……北川・真島・今井

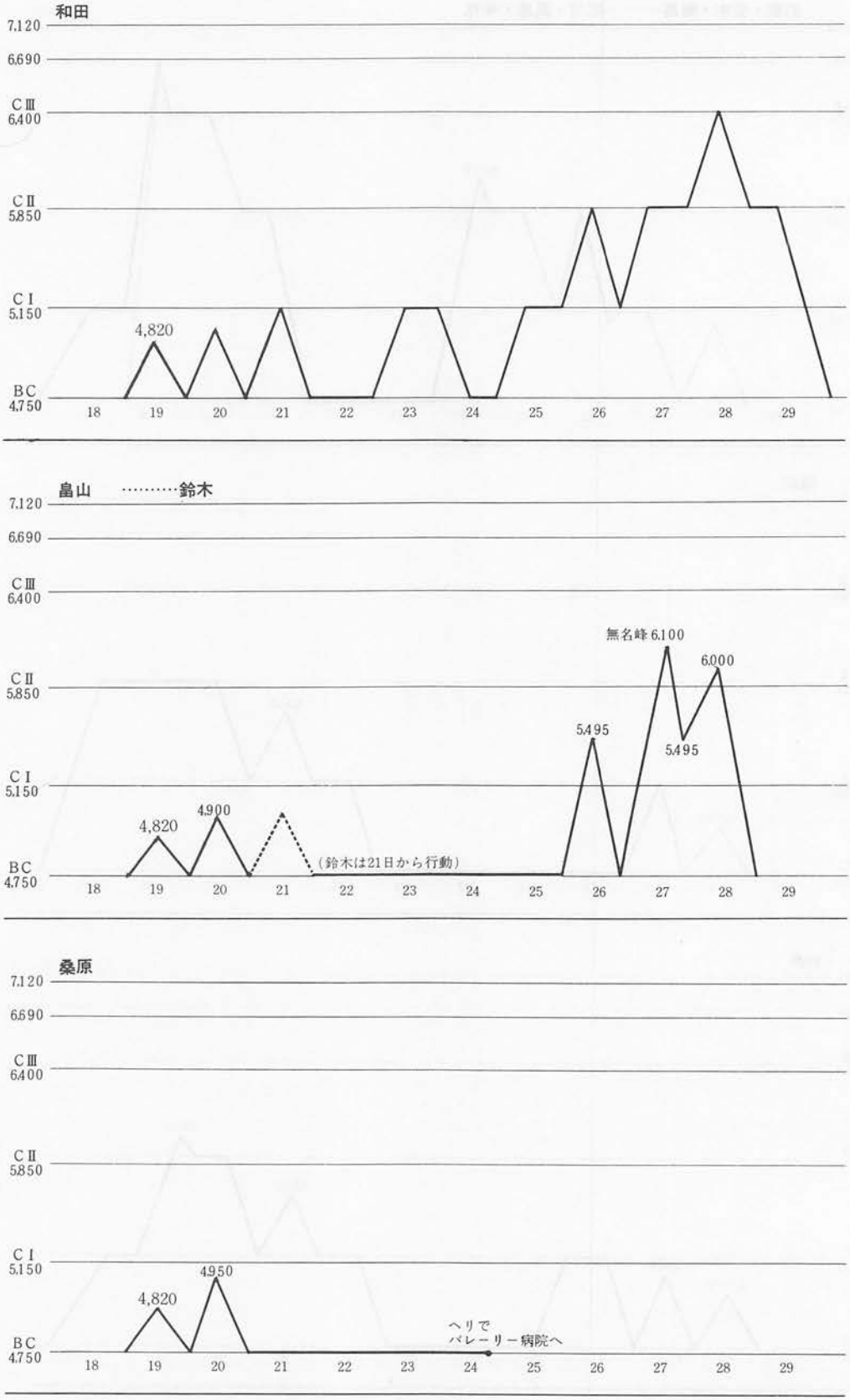


稲田



野島




和田
7.120
6.690
CⅢ 6.400
CⅡ 5.850
CⅠ 5.150
BC 4.750
4,820
18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29
畠山 ……鈴木
7.120
6.690
CⅢ 6.400
CⅡ 5.850
CⅠ 5.150
BC 4.750
4,820
4.900
(鈴木は21日から行動)
5.495
無名峰 6.100
5.495
6.000
18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29
桑原
7.120
6.690
CⅢ 6.400
CⅡ 5.850
CⅠ 5.150
BC 4.750
4,820
4.950
ヘリで
バレーリー病院へ
18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29

日　誌

1977. 4. 20　IMFより、1978年8月のヌン登山を許可する旨の手紙が来た。

4. 29　富士山で合宿。運営打合せ。沖・小川他　参加。

5. 3

6. 4　HAJ理事会で、ヌン1978、サセル・カンリ1979計画を承認。

8. 3　サセル・カンリの概念図の下図できる。

15　ヌンの登山料2,000 Rs. をIMFへ納入。ヒマラヤニュースNo.1発行。

9. 15　Trans Himalayan Travel社（Mr. A. Fida）へ現地手配の見積依頼。

24　HAJ 1975ヌン隊の山森氏から資料をもらう。

25　リエゾンオフィサーの派遣と現地協力をカシミール登山局のMr. Ashrafに依頼。

10. 9　Mr. Ashrafより、リエゾンをMr. Aslamにすること、現地の協力をする旨の手紙くる。

13　広島で説明会。

15　マナリより、ハイポーターのリスト10名を知らせてくる。
長崎で説明会。

16　小倉で説明会。

20　ヒマラヤニュースNo.2発行。

28　IMFより、ヌンの登山を中止されたい旨電報連絡がくる。早速、すでに準備しているので特別に許可してもらいたいとの電報連絡をする。Air IndiaのJ.シン氏、カシミール登山局、フィダ氏などからも側面的バックアップをしてもらう。
2～3回電報のやりとりあり。

11. 15　ヌンの登山許可は、かなり見込うすいという結論を得る。第2次案として、トリスル、ニルカンタ、ホワイトセール、クル・プモリ、パプスラ、キャシードラルなどをIMFへ打信する。

21　ヒマラヤニュースNo.3発行（ヌン登山禁止の速報と今後のこと。）

27　京都で説明会。

30　「トリスル、パプスラ、ホワイトセールはすでに他隊に許可。ニルカンタ、クル・プモリは禁止区域。キャシードラルはルートによって許可」という連絡がIMFからくる。すぐに、キャシードラルをバラシグリ氷河側から入りたい旨連絡。ついでにトリスルII、カーイジ（ラダック）他の許可について問合せる。

12. 4　東京で説明会。

9　名古屋で説明会。

14　J.シン氏より、インド側の詳しい状況連絡あり。

16　IMFより「トリスルII、ムリットニィ、ペタルトリ・ヒマールが1978年ポストにあいている」旨

連絡あり。

1977. 12. 24 トリスルⅡ峰の申請書送付。

25 ヒマラヤニュースNo.4発行（1月打合せ会連絡、3月，5月合宿の連絡）

26 トリスルⅡは許可見込、ヌンは検討中の電報がJ．シン氏より入る。

28 ネパールでロールワリン・ヒマール登山に関してExPress社のB．R-

〜 anjan 氏や登山局と面談、1978年中の許可取得の見込みはたたない

31 ことが判明。

1978. 1. 4 沖がIMFと接衝。トリスルⅡ峰の許可を稲田隊長として取得。2,000 Rs. を支払う。ヌンは許可を得ること

〜 で保留してもらう。現地手配について、インドのエージェント3社に

9 説明し見積を依頼する。

12 1月7日付で、IMFよりトリスルⅡの申請が完了したむね連絡あり、また、ヌンが特別許可された場合は早急に連絡するむね付記してあった。

17 これまでのいきさつと、協力へのお礼をJ．シン氏、カシミール登山局長、マナリのダルマ氏などに出す。

21〜22 インストラクター打合せ会、隊員打合せ会、於．東京・うずら荘。

24 ヒマラヤニュースNo.5発行（打合せ会の報告、3月合宿のこと）

25 インドのエージェントを検討の結果Cox & Kings社に内定、さらに細部について、打合せの連絡を出す。

1978. 9〜10月、トリスルⅡ峰に決定。8月のヌン隊は8月しか休みのとれない人を中心に編成し、ヌン不許可確定の場合は、カーイジ峰(6,401 m）に向かう。ラダックトレッキング班は別行動とする。今後のスケジュールなど決定。

27 トリスル隊、カシミール隊のタクティクスについて細部打合せ。

29 インドの旅行社へ手配依頼。

2. 5 トリスルⅡ峰隊、カシミール隊参加申し込み締切る。この後はインストラクターの考えで若干の補充隊員を加えることがあるが、新たに公募はしない。また、ヌンの許可が入った場合でも、カシミール隊独自でおこない、トリスルⅡ峰隊からの隊員の移動はおこなわないことを再確認した。

6 1977年タルコット隊々員桧山氏に話を聞き、アドバイスを受ける。

10 二重靴、羽毛製品の一括購入の申込を締切った。小川インストラクターが手配する。

17 インストラクター打合せ会、カシミール隊（名古屋）

19 インストラクター打合せ会、トリスル隊、カシミール隊（栃木）

22 個人装備表第2案できる。配布。経過、概況など配布。

23 ニュースNo.6を発送、IMFへ両隊のリスト発送。

24 トリスル関東地区集会でチーム作り。於．HAJ東京連絡所。

3. 1 この日よりトリスル、カシミール両隊は独立して準備をおこなう。

3 Cox社から見積来る。

8 インストラクター打合せ会（合宿、他）於．名古屋（稲田・小川・沖）

9〜10 インストラクター打合せ。於．東京（稲田・亀井）

14 タクティクス第1次案作成。

18 インストラクター打合せ会。於．名古屋（稲田・沖）

19〜21 御岳合宿（タクティクス説明、検討。技術訓練。パーティ編成決定）

25 長崎海外登山研究会からスライド借用、ルート研究。

27 関東地区集会。於．HAJ東京連絡所（食糧基本計画検討。角田不二隊員参加確定。亀井氏壮行会。）

4. 3 亀井隊員羽田発ラワルピンディへ。

5 食糧スタッフ打合せ会。於．HAJ

東京連絡所。
6　Cox社から契約ＯＫとの返信。
8　ガルワール・ニュースNo.1発行。御岳合宿報告、富士山合宿通知。
18　関東地区集会　於．ＨＡＪ東京連絡所。
20　全体基本計画作成、インストラクターへ送付。
22　Coxとの契約締結。
5．3～5　富士山合宿。技術訓練。
5～6　山中湖畔清渓寮で検討会（全体基本計画・業務分担決定）
9　全員にエントリー・ビザ下りる。
10～23　食糧発注（水戸・東京他）
11　ガルワール・ニュースNo.2発行。（富士山合宿報告・実行計画作成指示・一人一研究執筆・事前集録執筆開始）
16　トモミツにバッグ注文。
19　インストラクター打合せ。於．岩手県沢内村（稲田・沖）
20　東日本ヒマラヤ研で7,000ｍ峰の速攻について発表。於．岩手県沢内村。
24　関東地区集会。於．ＨＡＪ東京連絡所。（装備・食糧・梱包・医務）
25　個人装備一部送付（野中あて）
27　食糧集荷完了（埼玉県北本市、角田隊員宅）
29　食糧一次パッキングとリスト作成。
6．4　梱包（ヌン隊）於．栃木市野中宅。
5　隊員派遣依頼状発送(高原・真島）
10　隊員全員のパスポート受領。
10～11　基礎高所登山研究会　於．東京・健保会館。
※12　宮城県沖大地震Ｍ7.5。
17～18　隊荷梱包作業　於．栃木市野中宅。
19　ガルワール・ニュースNo.3発行。
23　亀井隊員、ハチンダール・キッシュにて死亡との連絡入る。
27　隊荷日通航空へ引渡し。
29～30　事前集録編集。
7．1～2　事前集録印刷　於．福島県富岡町。
4　インストラクター打合せ　於．名古屋（沖・小川・稲田）
6　亀井隊員追悼集会　於．ＨＡＪ東京連絡所。関東地区集会。
7　釣部隊員の休暇対策で交渉。於．東京。
9　別送隊荷ＡＩ399便でデリーへ。
12～14　事前集録印刷・製本　於．福島県富岡町。
15　事前準備・研究集録完成。発送。
15　菊地薫氏デリー入り、渉外応援。
18　ガルワール・ニュースNo.4発行。
21　計画書完成、発送。
23　故亀井隊員葬儀、於．埼玉県浦和市（野中・角田・安中参列）
31　CoxのKumar来日打合せ。於．東京。
8．4　釣部隊員休暇対策交渉。於．東京
4　故亀井隊員宅訪問。
7　通関完了との国際電話（デリーから）
8　菊地デリーを発ちカトマンズへ。
10　ガルワール・ニュースNo.5発行。
12　Cox，IMF，J.シン氏へ連絡文書発送。
14　外務省へ便宜借与依頼文書提出。
15～16　先発打合せ会。於．郡山市プリンスホテル（稲田・野中・角田）
18　隊員過納金返還。
20　角田隊員成田発13：45　AI 301便でニューデリーへ。
24　野中副隊長成田発13：45 AI 301便でニューデリーへ。
24　ガルワール・ニュースNo.6発行。
26　出発あいさつ状発送。
30　国際電話。八嶋隊員の参加決定。
9．1　トリスルⅡ許可正式に確定（Ｊ．シン氏から手紙来る）
1　装備補充。
3　先発隊デリー発、ガルワールへ。
6　隊外貨購入、於．福島。

1978. 9. 9　亀井隊員の御両親に出発あいさつ。於．東京。

10　成田発13：45　AI 301便でニューデリーへ。

〜

登　山

〜

10. 6　ニューデリー発23：30　AI 306便。

7　成田着14：45　AI 306便。

9　高原隊員疑似赤痢の疑いで隔離。全隊員強制検査。以後、西田・北川・中岡保菌者と判明入院。

13　帰国あいさつ状発送。

14　報告書発行計画通知。

15　野中副隊長帰国。

17　外務省領事部訪問、謝礼。(東京)

19　在印日本大使館へ礼状。

19　隊荷別送。（ニューデリー）

21　別送隊荷到着。

24　機関紙「ヒマラヤ」特集号へ原稿送付。

27　別送隊荷受領。於．成田（野中）

29　公式報告会。於．東京(隊員８名)

11. 4　反省検討会通知。

5　釣部隊員帰国。

8　1975年隊山倉氏へ伝達、於．福島。(反省、他)

13　Capt. Chopra へ原稿等依頼。

19　角田隊員帰国。

25〜26　反省検討会。於．東京・八ツ山園。

28　Cox社へ礼状。

29　Cox社へ送金（追加分）

12. 3　報告書編集等打合せ。於．東京。

11　八嶋隊員帰国（全隊員帰国完了）

（隊長　稲田定重）

PART——II

総括　資料　他

総　　括

隊長　稲　田　定　重

遠征の成功・不成功は、通常の場合目的とするルートから頂上に立てたか否かで客観的に判断される。

頂上に立てなくともひじょうに内容が濃く、客観的にも成功と思える遠征もあるし、たとえ頂上に立てたとしても貧しさを感じさせる遠征もある。その遠征が極めてプライベートな発想でなされ、自由な個人が結集して行なわれた場合、そのチームの価値感は登頂の成否よりも内向した評価が行なわれることが多い。

このたびの私たちの隊は、一面では「登山学校」を標ぼうした一風変った遠征である。

チームの成立も厳密な「同志」の結集ではなく、「短期間での 7,000 m峰登頂」という旗印のもとにさまざまな人間が、それなりの価値感を見出して集まった隊である。

登頂、あるいは、技術の練磨・遠征のハウツーを学ぶというような極めて唯物的な目標において共通する意識レベルにはあった。が、遠征隊を組織するベースとなる信頼感・連帯意識・思想的共鳴などソフトウェアともいえる部分では全くの白紙であったといえる。

したがって、私たちの遠征の総括は、戦略・戦術というような唯物的な面を主体として進めるのが妥当であり、それによってこの隊の内容の価値判断がなされるのが順当なように思える。

私たちは、出発の２ケ月前に「事前準備・研究集録」を全員の手によって作成した。

これは私たちにとって、展開しようとする行動のひとつのモノサシであったといえる。ここに記す「総括」は、このモノサシに当てて、実際はどうであったろうかという視点で進めることにしたい。

なお、隊員全員による総括検討は、現地および国内において行なわれ、別項におさめたので併せて検討してもらいたい。

「運営する側」と「運営される側」という当初大きく立ちはだかっていた垣根は、ずいぶん低くはなったがやはり最後まで残っていたということも感じとれるだろう。

基本戦略

“日本出発から帰国まで28日間で7,120 mの高度に立つ”という、私たちの行動の大前提は、100%とはいかないまでも達成された。

この大前提は、多くの人に相当疑問視されたものである。

まづ、私たちは出発前どのような基本的戦略を組んでいたのかについて話したい。

※ GHE78の基本戦略

（「事前準備・研究集録」から転載）

今回の遠征は、日本出発から帰国まで28日間という短期間で7,120 mの高度に、安全に、そして原則として全員が登頂することを骨子としている。

高度順化を主たる問題として、果たしてこのようなタクティクスが可能であるかどうか、その検討は別項の「GHE78のタクティクスに関する諸問題」においてふれたい。

結論としては、「困難な要素を含むが充分可能である」と考えている。

1. 目　　標

1) ◦トリスルⅡ峰全員登頂を第1目標とする。
　◦トリスルⅠ峰に可能な限り多くのメンバーを登頂させる。
　◦上記両峰はポーラーメソッドによる速攻形式とする。
　◦日程的に余裕があれば、P. 6648（デヴィスタン南方）をラッシュタクティクスにより試登する。

2) 以上の登山行動を円滑に行なうために
　◦現地交渉によりトリスルⅡ峰に加えて、トリスルⅠ峰（南面ルートから）およびP. 6648の許可を取得する。
　◦先発隊により、下部キャンプの位置選定と一部キャンプの設置、隊荷の大半をBCまで輸送し、本隊を受け入れるようにする。
　◦トリスルⅠの登頂許可を得られない場合は試登許可を得て対応する。

2. 登山行動

1) 隊を二つに分け、各隊に登攀リーダー1人が付き、登山現場のリーダーシップをとる。
2) 各隊を3パーティに分け、各パーティにパーティリーダーをおき登攀行動の核とする。各パーティをローテーションの1単位とする。
3) 各隊の行動は、登攀リーダーが把握し、隊長の承認により行動する。
4) 登山行動を5期に分ける。
　第1期　先発隊によるルート開拓と下部キャンプの選定、C_1建設、本隊受入準備。
　第2期　6,300 m付近までの順化とC_3建設。
　第3期　トリスルⅡ及びⅠの登頂。
　第4期　P. 6648の試登及び順化不調者によるトリスルⅡ及びⅠ登頂。
　第5期　後発隊による撤収。
5) 各パーティは、第3期において順化程度・技術・体力等を観察して再編成し、アタックを行なう。
6) オーソドックスな高度順化の方式を適用する。

7) 司令部の機能は、第2期後半にはC_1、第3期にはC_2に移す。

8) 隊長は、独自の判断により順化行動を行ない、原則として、第4期に順化不調者をひきいてトリスルⅡ・Ⅰの登頂を行なう。

9) 各隊は日差行動を原則とする。

10) 高所ポーターは使用しない。

3. キャンプ位置

BC　4,950 m（トリスル氷河左岸、アブレーションバレー上端付近）

C_1　5,550 m（トリスルⅠ東稜末端）

C_2　6,100 m（Ⅰ・Ⅱ峰氷河プラトー下部）

C_3　6,600 m（Ⅰ・Ⅱ峰のコル）

※P. 6648　ABC（トリスル氷河右岸、4,950 m）

C_1（北西稜上部 6,300 m）

＜以上、「事前準備・研究集録」から＞

目標の設定に関して

トリスルⅡ峰の全員登頂とⅠ峰に可能なかぎり多くの者を登頂させるという目標は相互に関連するものである。当初のタクティクスでは、全員でⅡ峰に登ったあと、体力・技術ともに耐え得る者がⅠ峰に向かうということであった。

しかし、大洪水によるアプローチの遅延は、結果的にBC着を1日遅らせ、隊員の順化不良が休養日を1日延長させるなどして日程的に追いつめられた。

加えて、BCの位置の低さは、以後の前進キャンプの位置を低くする結果となり、ファイナルキャンプをⅠ・Ⅱ峰コルに設けることを不可能にした。

このような要因が重なって、アタック段階では、当初からⅠ峰隊とⅡ峰隊に分割せざるを得なくなった。

Ⅱ峰のみを目指せばサミッターの数はもう少し増やすことができたのは明白である。

しかし、アタック時に数名の隊員はⅠ峰だけなら充分に登頂し得る態勢にあり、また、私としてはやはり 7,000 m の高度を獲得させたかったので、あえてⅡ峰を捨ててⅠ峰にしぼったわけである。

それでは、Ⅱ峰に登頂した隊員の中でⅠ峰に、また、Ⅰ峰に登頂した隊員中更にⅡ峰に登り得る者がいなかったであろうか。

これは、未知数ではあるが後者においては更に2～3名の者には可能であったように思われる。けれど責任ある後方支援を期待することが出来ない以上、突入させることはできなかった。

全員登頂は目標でありながら不可能となったのは、まず、必然であったと思われる。

28日間という大前提は1日たりとも崩せない以上、順化の個人差を確実に救うことは不可能であるという認識は出発前からされていた。

P. 6648 は、当然ながら日程的に論外に去った。また、たとえ日程が少しとれたとしてもルートの困難さからみて登頂の可能性はひじょうに少ないものになったろう。

私たちの事前研究では、資料の少なさ、読み取りの甘さからルートの技術的判断を誤っていたのである。

結果として、P. 6648はポーランド隊がIMFの許可を取得して登山にかかっている以上、私たちが割りこむことは全く不可能であった。

しかし、国内段階でもっとつめて、不確実性の要素の強い目標設定には慎重であってよかった。

特に、日程に余裕のない場合は、目標を分散させることは好ましくないと反省される。

目標達成上の手段に関して

＜トリスルⅠ峰の現地許可取得について＞

私たちは、トリスルⅡ峰の許可をIMFから得ていたものの、Ⅰ峰の許可は申請が却下されていた。

この事実を承知の上で 7,000 m 峰登頂をほぼフィックスして準備を進め、出発した。

Ⅰ峰の許可は、リエゾンとの交渉により取得するということで、言いかえれば、短期間での 7,000 m という前提はリエゾンの胸3寸に委ねられていたのである。

もし、とれなかったら" 7,000 m 台への試登"

を行なうというのが次の策であり、公的には決してIMFのレギュレーションを踏みにじろうとしたものではなかった。

HAJ隊が1975年リシ・パハールにおいて試みたケースと酷似しており、また、その"実績"があったからこそ発想されたものだった。ネパールやパキスタンではとても通用はしない。

さまざまな分析の結果から、インドの登山事情にはまだそれだけの融通をきかす余地があると判断したからである。

けれど、リエゾンはIMFから全権を委任されてきているとはいえ、決してノーマルな方法ではない。

インドの登山規則も次第に整備されてきているので、近い将来にはこのような方法はとれなくなるだろう。

かつて「良き時代のヒマラヤ」では、私たちが今回とったような登り方が自由に行なわれたものであり、登山者の心情にまことにフィットしたものであった。

現在のところ、リエゾンの許可で何とか登れる可能性はあるものの、それは手続上コンプリートなものではない。

だから、交渉過程・以後の言動・IMFへの報告などいづれも細心の心くばりを必要とする。

その過程のいづれかを誤れば問題は大きくなる。私たちの場合、IMFに報告するまではI峰登頂を外部に対しては一切明言しなかった。

IMFに対して正確な事実を報告し、その許可を得てはじめて内外のジャーナリズムにオープンしたものである。

しかし、この方法は、リエゾンの強力なフォローと、彼との緊密なコミュニケーションがあってこそはじめて可能なものであることを明記すべきである。また、リーダーは、最悪の事態を覚悟して決断せねばならない。

先発(後発)隊の位置づけ

「28日間の7,000 m」を掲げるならば、国内準備を除いて、目的地において登山行動を含めた一切の過程をこの期間内に処理するのが至当である。

しかし、現地では、ある程度の絶対的時間経過を待たなければ進め得ない仕事がある。特にインドおよび発展途上国では、予期しないことにぶつかる。

私たちは、特に登山期間の記録短縮が目的ではないのでこの点にはそうこだわらないことにした。

短期の7,000 m峰登頂は、登山行動そのものにおいてまづ解決すべきことがひじょうに多いからである。

また、本隊の特性上、短期間とはいえできるだけ登頂の確率も確保することが命題でもあった。このような理由で私たちは先発隊を送り、また、後発を残すことによってより確実性の高い布陣をとったわけである。現地エージェントを積極的に活用したのもこのためである。

幸か不幸か、本年のインドは通関事情が大巾に厳しくなり、また、国防上の理由からか、登山許可事情もぎりぎりまでゆれ動いたために、先発の効能は絶大なものがあった。

恐らく先発を派遣しなかったら隊荷通関はおろか登山許可さえ取消され、本隊の登山行動そのものが不可能な事態に追いこまれていたろう。

特に、7月15日にカトマンズから応援に駆けつけた菊地薫会員の存在は貴重であった。

亀井隊員のアクシデントという全く思いもかけない事件がまき起こした結果であるが、隊員外の力を借りることができたのはひじょうに幸運であった。HAJの組織力に感謝するほかない。

しかし、この点は今後大いに反省し、隊の独力ですべての課題解決をはかるという姿勢と方法を強化しなければならない。

私たちの先発がインドに着いた時は、最も困難な問題は何とか目途がついており、登山許可確定が最大の関心事であった。先発はこれをよく解決すると共に、物質調達などをスムーズにこなした。

しかも、本年の特殊性とはいえ、未曽有の大洪水に遭遇しながらもわずか1日遅れでBCに全隊荷と隊員が集結できたのは先発の働きに負うところが極めて多い。2名の先発を20日前から派遣したが、これは最低限の日数と人員であったと考えられる。

当初計画では、BCからの帰路隊荷輸送まで後

発に託すわけであった。しかし、P. 6648の登山不能により全員一緒に下山の途についたのでこの必要は消えた。

後発は、隊荷の整理・保管・返送・IMFへの残務処理・他を比較的短期間に片づけた。その後、彼らはアフターエクスペディションを存分に楽しんで帰ってきた。

後発は4名が残ったが、これは必要絶対人数ではなく、有能な者1名が残りさえすれば充分に片のついた仕事の質・量であったといえよう。

今後ともヒマラヤを対象にこの種の企画を行なう場合、先発・後発の必要性は当分高いと考えられるし、別にそこまで「期間」のワクを意識することはない。

現地の有能なエージェントを使ったとしても隊員が行かなければ進まない仕事がある。

また、渉外も経験累績の上で極めて重要な分野であり、能力があって意欲のある者には体験させるべきである。

本隊でも諸官庁のあいさつまわり、他にできるだけ多くの隊員と一緒に行ったのはその為である。

現地エージェントの使用に関して

エージェントに限らず、隊以外の力に頼ることは、経費がかかること・登山隊の主体性の減殺・遠征の面白みを少なくするという点で利用をいさぎよしとしない風潮がある。

私たちは、「Cox&Kings」というインドでは大手の業者を積極的に利用した。

これは、私たちの隊の能力がエージェントにおんぶしなければ出来なかったという恥ずかしい理由からではない。

彼らが処理した仕事は私たちで充分にこなせる範囲にあった。

私たちは次のような理由からエージェントを利用したのである。

1. 経費上のメリット

ア. 私たちの隊は、一定の負担金を徴収し、この負担金の範囲内ですべてをまかなう必要があった。インドでは、突発的な事件による出費がえてして多い。

予算以上の出費をまかなう方法は、隊員から負担金を追徴する方法しかない。しかし、これは一定の契約をとり交した以上できないことである。

たとえエージェントのコミッションまで含まれているとはいえ、契約さえきちんと締結しておけば当初から予算以上の出費は見込む必要がない。

これは大きな安全弁である。

イ. 私たちが計算したところでは、インドのエージェントのコミッションは20～30%である。私たちだけで全てを処理すればこのコミッションがそっくり浮くというものではない。

慣れない仕事を処理する場合の都市滞在は意外と多く要し、諸経費もふくらむ。

下手すれば、エージェントに依頼した方がずっと安くついたという場合もある。

この事例は、過去にインド・ヒマラヤを訪れた日本隊の中に幾らでも見出せる。

2. 日程的問題

何よりも不確定要素が多くなる。短期決戦の場合、1日のロスでも痛い。

今回の登山期間はわづかに正味9日間であった。もう1～2日日程が遅延したら登頂は夢と消えたであろう。

信頼できるエージェントを上手に使えばダイヤどおりの運行の確率は高められる。

3. エージェントの位置づけ

エージェントは、遠征の共催者ではなく、ポーター同様、私たちにとって"手段"にすぎない。彼らをどのように使いこなすかはマネージメントの重要な一面である。主体性の減殺うんぬんは、隊側の意識と能力の如何にかかっている。

現実をふりかえってみると、私たちの場合別にこの面の問題はなかったように思えるが、テクニック上改良すべき点は幾つか見出せる。

ア. 契約に際しては、できる限りのケースを想定してスケジュールの遅れ、コストアップを

生ずることのないようにしたい。

私たちの場合、都市滞在（登山期間以外、キャラバンも含まれる）と登山期間に分けてそれぞれ1日当り○○ドルという契約で行なった。

結果的に、都市滞在の期間延長、登山期間の短縮ということで、機械的にアップされた経費を支払う結果になった。

やはり、めんどうでも全経費を細かく試算し、全期間いくらという契約を締結すべきであった。これならコストアップはあり得ない。

ラタからのキャラバンスタートが1日遅れたのは、洪水のためとはいえ、エージェント側のアレンジ不足に起因するものであった。

このような問題が起きてもコストに響かないようにする方法はあるわけだ。

イ．責任範囲において一部明確でない点があった。

私たちがエージェントの守備範囲を犯し、また、彼らが自分たちの守備範囲を怠るということが幾つかあった。小さなことだったのでトラブルにならず納得されたが、契約および事前のブリーフィングで徹底しなければならないことである。

そのためには相当の語学たん能な者の存在をどうしても必要とする。この点若干弱いところがあった。

エージェントを使う隊は、使う側に能力不足、特に語学力で自信がないからという事例が多い。これは正に本末転倒である。使いこなすには充分な語学力と渉外能力が必要である。

これに欠ける場合は、隊の主体性減殺はおろか、トラブルのもととなり、ひじょうに不愉快な思いをする。

よく「インドのエージェントは悪質だ」という声を聞く。よく調べてみると使う側に欠点がある場合がほとんどである。

相手は名にしおう「インド商人」なのである。彼らを性悪説でみるわけではないが、契約にはうるさく、また、行為には相応の代価を要求する。コミュニケーションが悪ければお互いの誤解の積み重ねで結果的にそうなってしまうのである。

実際、私たちが使ったエージェントは、別の隊に言わせればひじょうな悪者になっている。私たちの場合、別に彼らを非難するに足る問題は発生せず、むしろ彼らは契約どおりベストを尽したと考えている。

これは、リエゾンオフィサーなどすべて現地の人間を扱う場合に共通することである。

リエゾンオフィサーに関して

私たちのリエゾンオフィサー Captain Mukesh Chopra は実に良い人間であった。

隊の行動全般にわたって強力な権限を有するインドのリエゾンとの関係は隊にとって極めて重要で、登山の成否を左右する。

彼との関係のベースとなるのは、月並だが"信頼関係"以外に考えられない。

彼は「HAJ隊は、今年のインド・ヒマラヤ隊の中で最も規模が大きく、力のある隊」ということで誇りをもって参加したという。まことにくすぐったい言葉であったが、彼の誇りを私たちも大事にしたいと考えた。幸運にも彼がいばって連隊に帰れる成果を上げることが出来たようである。

彼らの多くは軍人である。隊に毅然としたリーダーシップ、メンバーシップが確立されているか否かがまづ信頼を築く第一の条件である。

リエゾンの任につく者は多くの場合それぞれの職域でエリートであり、富裕な階級の出身であるのでプライドは高い。

彼のプライドを尊重し、こちらも登山隊である誇りをもって対等につき合うことが結局はベターな方法である。贈り物もそれ相応の理由をつけてやらねばかえってマイナスである。

私たちの場合、彼との信頼関係は今回の登山を行なうには充分であったし、トラブルは全く無かった。ただ、反省されることは"言葉の壁"を乗り越えて全隊員が積極的に対応すべきであったろう。重要事項を協議する必要のあるリーダー側は別として、いくら言葉が下手でも彼とひじょうに良い関係を結んだ幾人かの隊員がいたことをよく

考えてみたい。

登山行動について

1. パーティ編成

主として準備段階をスムーズに進める必要から地域性および隊員の特性を組み合わせて3人1組のパーティを編成した。

後にこのパーティは登山行動にまで延長するものではないことを確認した。

現地では全く別の視点（順化状況・体力・技術・リーダーシップ）からパーティ編成を行なった。このやり方はおおよそ妥当であったと考えられるが、下記の点は反省される。

ア. 国内準備段階のパーティ編成は、リーダーが各隊員の特性、環境を充分に把握し得ない段階から編成する必要に迫られたために、隊員の能力の組合せがベターでなく、各人の力量を充分に反映できない組合せが一部に見られ、パーティ間に格差が生じた。

イ. 国内、外を通じて、パーティリーダーの権限があいまいであったことが細部ではあるが欠陥として露呈した。

特にメンバーへのチェック＆ガードの機能が不足した。

ウ. 登山行動における順化段階でのパーティリーダー交代はやむを得ない面があるが、リーダーとなった本人の意識にとまどいがみられた。

イ. ウについては、準備段階から全員で明確な確認と意識づけを行なうことによって相当解決出来る。

2. 登山行動

ア. 洪水による日程遅延は、当初計画した先発隊による C_1 建設を C_1 偵察にとどめてしまった。また、P. 6648 の試登とスペア日数を使っての順化不調者の第2次アタックを不可能にした。

これは許された日程上、全くいたし方のないことであった。

オ. 登頂者数が19名中15名にとどまった。

当初から順化の個人差を肯定し、これを解決するキメ手を日程の関係から持てなかった。

わが隊にとって全員登頂は、はっきり言って努力目標でしかなかった。

しかし、全員登頂を支えるだけの荷上、物資配置は当然とられていた。

「全員登頂の機会は確保されていた」のではあるが……。

今後とも、この種の短期速攻方式では、目標の山の高度を下げない限り全員登頂を確実になしとげることはまづ不可能であろう。

ただ、登頂率を上げることは出来る。今回のケースでは15名にプラスアルファの登頂者を確保することは可能であったと思っている。そのためには、

① 医師ではあるが、隊での位置づけはあくまでも隊員として参加した野島隊員は、続出する故障者のためにＢＣおよび下部キャンプに釘付けにされた。ために順化量不足が災し、登頂できなかった。

これは、運営した側および全隊員にとってもまことに残念で申しわけのないことであった。最初からＢＣ体制の中に、隊員ではない専属の医師を置くことによって解決できたことである。

もちろんこの場合の医師は「隊員」ではなく、したがって「全員登頂」のワク外として考える。はっきり「医師」として位置づけすることが重大な事故を防ぐ上にも有効である。

② 隊員の自己管理の徹底と気力の充実が必要である。

③ 日程的にかなり余裕のとれる山を選定することである。

日程の余裕のなさが隊員を心理的に追いつめ、ゆとりをなくさせた。それが登山行動・自己管理等すべてにわたって大きな影響を与えている。特に、精神的に弱い隊員にとっては重圧で、持てる力を減殺してしまう。

これは、今回特に感じられる。また、日程の余裕は順化不調者による第2次アタッ

ク、或いは補償行動を組織出来るという絶対的有利さがある。

④ 荷上の適正な管理

日程的に短かいこともあり、また、多人数であることから荷上管理はかえってルーズになったといえる。

必要にして充分な量の荷上は判りすぎるほど判っていることだが、徹底して考えたい。

今回のアタック段階では、C_2の設置高度とともに荷上量の多さが大いに関係している。

また、全般に多すぎる荷上量は、短期登山の場合行動時間の延長、負荷の増大によって順化の足を引っぱる結果になっている。

⑤ ハイポーターの積極使用

今回は2名のハイポーターをC_1までの荷上と雑用に使用した。

当初の考えでは、隊員数と荷上量からみてハイポーターは必要なしとしていた。その方が隊の主体性を高められるとの考えであった。

しかし、短期登山の場合、いったい何が主たる目標であり、何が従たる課題かということを厳しくしぼってかかる必要がある。ハイポーターを使用しないことが、最大目標たる「全員登頂」にとっていささかでもマイナスをもたらすとすれば、主体性うんぬんは捨て去らねばならなかった。

また、別な面で考えれば、ハイポーターを使う技術も登山学校・隊にとっては習得してよい技術である。

要は、一般的な遠征隊レベルでものを見る事なく、総合的かつ現実的な価値判断が必要であった。

3. キャンプの位置について

ア. B C

トリスル氷河左岸のアブレーションバレーの上端4,950 mに設置する予定が4,750 mのTridangになってしまった。

計画地点では、ベタルトリから遠すぎること、水を得るのが困難だということからであった。しかし、これはポーターサイドの意見であった。BCの低さが以後の前進キャンプの位置をすべて規制する結果となったが、幸運にも登頂の成否まで決定的に左右はしなかった。しかし、C_1までの距離の長さ、C_2からⅠ・Ⅱ峰コルまでの長さが隊員にとって大きな負担となった。

また、充分な上部の偵察・ルート工作が出来ない状態でアタックに突入したなどの影響を与えたことは事実である。

また、反面では、往路キャラバンで高度障害を受けた者が予想以上に出たことと、その回復が登山期間にも食い込んだこと、BCに入って高度障害を訴える者が続出したことを考えなければならない。

果たして、BCの位置を計画地点まで上げることが以後の行動に総合的に効果を表わしたかというと自信がない。

C_1の高度が5,150 mであるにかかわらず多くの隊員のダメージが大きかった。このことから、4,950 mをBCとした場合、順化段階をスムーズにこなせる隊員数はもっと減少し、登頂率を下げる結果を招いたと考えるのが妥当であろう。

主体性のあるBC位置の変更ではなかった点が問題視されるが、結果としてはベターであった。この点から、計画時点でのルート研究およびタクティクスの組み方、隊員の順化能力と力量把握などに甘さがあったことこそ反省したい。

イ. 前進キャンプ

C_1は、5,150 mと、計画より400 m低く、BCとの高度差は400 mであった。これは、BCからの距離が片道6.5 kmと遠く、これ以上の高度に設置することは荷上や順化行動からみて不可能であった。

C_2は、5,850 mとなった。距離は短かく、行動時間からみれば割合に余裕があった。しかし、C_1との高度差700 mは妥当であり、もう少し高度を上げようとするとルートの特性から距離が伸びすぎて荷上に支障を来したと

考えられる。

C3（6,400 m）は、Ⅰ・Ⅱ峰頂上までの高差と距離を考えれば順当な位置であった。当初計画したⅠ・Ⅱ峰コルへ上げれば幾人かの隊員はⅠ・Ⅱ峰の両峰登頂が可能になったであろう。ただ、登頂者数は減少したかも知れない。

コルにファイナルキャンプを設置するには、荷上量からみてひじょうに無理があったと考えられる。日程遅延の影響がギリギリの段階で明確に表われたわけである。

BC到着日が遅れ、休養日を1日延長した時点で荷上量の見直しを徹底的に行なうべきであった。軽量化をはかっていれば、コルへのファイナルキャンプ設置はともかくとして、負荷軽減によりアタックのスムーズさをもっと確保できたであろう。

4. 日程と行動

ア. アプローチ

往復ともダランシ・パスを経由するキャラバンとなって、予定した往路のリシ・ガンガルートは採用しなかった。

これは、大洪水によって河岸のルートが崩壊しているだろうという判断からである。幸いにも往路は3日間でラタに着くことが出来て日程的に遅れは出なかった。

ニューデリー到着は、10月4日と予定より1日早くなってしまった。

往路キャラバンは、ラタから5日を予定していたが、洪水による遅れを取り戻すべくディブルゲータから一挙にベタルトリまで入り、BC到着を1日の遅れにとどめることが出来た。けれど、往路キャラバンで発生した高度障害は幾人かの隊員にとってはキャラバン中に回復することなくBCに持ちこまれ、更に症状を悪化させる結果になった。

もっとゆっくりキャラバンに日数をかけ、BC入りすればこれらの隊員もある程度回復し、もっと足並み揃えた順化行動がとれたろう。この場合、全体の成果は低いレベルにとどまったかも知れないが各隊員の成果は平均化したであろう。

イ. 登山期間について

休養日2日、行動日9日、計11日で、行動日の内訳は、順化段階5日、アタック段階4日となっている。

予定では、休養日1日、順化段階5日、アタック段階4日、第2次登頂または予備日3日の計13日間を見込んでいた。

帰路のキャラバンの遅れと道路事情を考えて予定より1日早目にBCを撤収した。結果的には思ったよりスムーズに運行し、1日早くニューデリーに入ってしまった。

BC撤収を予定どおり10月1日とすれば、C2からダイレクトにⅡ峰をめざした野島・和田・リエゾンにもっと高い確率でアタック行動をとらせることが可能であった。

また、同一人が複数ピークに立つことも可能であったろう。

しかし、ポーターの呼び寄せ上、撤収日の決定は順化段階当初でしなければならなかった。この時期でアタック段階の情況を正しく推定することは困難であって、判断の基準は、帰路アプローチの不確定要素への対応におくしかなかったのである。

ウ. アタックについて

アタックに際しては、最初からⅠ峰隊とⅡ峰隊に分け、アタックメンバーはいづれか一方の頂上に立てばよいとの基本的考えであった。日程上からは、Ⅱ峰隊はⅡ峰登頂後Ⅰ峰にもトライできるチャンスがあったが、これはあくまでも日程上から機械的に言えることに過ぎなかった。

Ⅱ峰とⅠ峰を比較すれば、Ⅰ峰の方が当然登攀価値が高いわけであり、まづⅠ峰に登ってからⅡ峰へトライするのが至当である。

それをあえてⅡ峰に向かったのは、Ⅱ峰隊メンバーには申しわけないが、彼らはⅠ峰に登るだけの高度順化・体力などの諸条件に不足していると判断したからである。

この判断は結果的にも妥当であった。

おわりに

戦略に関して、私たちが行なったような短期速攻方式の遠征においては、総合的に次のようなことが言えると思う。

① 判断・決断を迫られる場合、その選択肢がひじょうに限定されること。

② 判断・決断にあたっては、総合的・多面的な仮説設定が必要となり、複雑なバランスシートを読み取らねばならないこと。

③ あるメリットを獲得しようとすれば、他の重要なひとつ、あるいは副次的な複数のデメリットの発生を覚悟しなければならないこと。

④ 事前の徹底的なルートの解析・メンバーの力量把握・想定される無数の事態の読みとり等が必要であること。

この点にいささかの甘さでもあると現地においては、より増幅された形で計画に支障を及ぼす結果となる。

⑤ ひとつのミス・トラブルは、それだけにとどまらず連鎖的に他の面に拡大されて行く。

総合的な是正・修正の措置が必要とされる。しかもその措置は短期間に取られるという困難をともなっていること。

⑥ 主たる目的と従たる目的を判然と順序立てて設定し、あいまいさを残してはならないこと。

⑦ 目的の設定にあたって、あるいは、目的が設定された後も、隊全体で厳しく確認し、高いレベルの合意を得なければならないこと。

⑧ 目的の思い切った限定が必要である。

犠牲にする部分はちゅうちょせず、それにこだわらないことである。

短期登山にすべての面での完全さを求めることは不可能であり、より硬直したアクションしか取れない危険を招く。

結果的に主目的の崩壊にまで発展し易い。

短期登山のリーダーシップは、たとえ技術的に容易な山であっても総体的には極めて高度のレベルが要求される。

目的の設定水準が高度であればあるほど、リーダーシップもそれに対応したレベルが必要となる。

リーダーシップの高度さに対するメンバーの総合能力はどうかというと、今回のような登山学校方式では高いレベルと斉一性を期待すること自体に無理がある。

前記したすべての事項はどれひとつをとってもそれ自体が絶対的困難さを持っている。そして私たちのような隊では、加えてチーム自体のもつ特性がその困難さを更に増幅させることになる。

最終的に言えることは、全体的に目標のレベルを落とし、余裕を作ることである。

それにより、安全性と目的達成の確率を高めることができる。

メンバーのレベルとリーダーシップのレベルを一般の遠征以上に厳しく認識して、戦略・戦術の計画が立てられなければならない。

「短期速攻のヒマラヤ遠征」は想像する以上に難しいというのが今回の遠征をとおしての正直な実感である。

タクティクス

まづ、私たちが出発前に考えていたタクティクスに関する諸問題への対応について記し、これを基準として実際行動を総括したい。

※　タクティクスに関する諸問題

（「事前準備・研究集録」から転載）

ヒマラヤにおける速攻形式登山の事例分析の中から、ＧＨＥ78における最大の課題は「高度順化」であるといえる。

純登山技術的にみれば、我々が登ろうとするルートは容易な部類に属する。地図・写真・記録などから分析するかぎり、ルートの困難さが先端部分の前進を著しく阻害したり、物資補給を困難にすることは考えられない。チームのレベルと山の難度から、ＧＨＥ78は、高度順化さえスムーズに行くならば全員登頂の確立が非常に高いといえる。

したがって、ここでは専ら高度順化にまとをしぼって考えたい。

1.　順化のための行動

行動は下記を原則として組立てている。

- 新たに獲得した高度には泊らない。
- 休養はできる限り低所のキャンプ（ＢＣ）でとる。
- できる限り多くの登降行動を行なう。
- 新たに獲得する高度は、１日500ｍ内外とする。但し、順化が獲得されたと判断した段階（アタック時）では、１日1,000ｍの行動が可能と考える。
- ファイナルキャンプは頂上から500ｍ内外に設置し（５～７時間の到達距離）登頂の確立を高め、安全を図る。
- 日程の中に予備日数を見込み、順化不調者に対応する。

以上の原則により作成されたのが、別項の行動表である。なお、資材・荷上量の軽減と安全性のために隊を２つに分けた日差行動を行なう。全員登頂を目標として、それに見合う荷上げと行動組立てを行なっている。

けれど、この原則どおりの行動はほぼ不可能になるだろう。原則を乱す最大の要素は、順化の個人差と健康状態と考えられる。

1)　順化促進と個人差の克服

順化促進には、厳然たる個人差があることは経験により知られているが、何が主たる要因であるかは推測の域を出ない。

また、順化の適性を事前にチェックすることも現在では確かな方法がない。したがって、キメ手となる対策を予め立てることは不可能である。特にわれわれの場合は、登山期間が短かいため、順化の個人差は直接登頂の可否に結びつきやすい。（長期の遠征であれば、初期に順化不調であっても行動表の組み直しや休養等でもって何とかアタック時には、レベルを揃えることが可能である。）

更に重大なことは、比較的余裕のない行動が順化不調と結合して重大な高度障害及び、それに起因する事故を発生させ易いことである。そして、一たん発生したアクシデントの救援行動が隊全体の順化を大きく左右しやすく、また、高所での敏速な救援行動が困難になることも考えられる。

キメ手とはならないが対策としては下記の

ようなことを考えている。

- 予備日数をある程度とり、特に、順化不調者のためのアタックを組織する。
- 順化は広い意味でとらえれば一種の環境への適応である。高所での順化だけでなく、インドという異なる環境への順化が先決で、特に食事・習慣への適応を積極的姿勢で行なう。
- 順化は、登降行動ばかりでなく、意思力による積極的行動がプラスして働くことから、隊員の自覚的行動に期待する。
- 基礎体力が順化獲得上のベースとなる。出発前の体力養成を重視する。
- 健康管理を重視し、ディチェックカードによる自己管理、パーティ内での相互チェック、医師資格を持った隊員による指導、登攀リーダー・隊長による管理等、一般遠征隊のレベル以上の健康管理を行なう。
- 出発前の健康調査により、各隊員の身体的特性のデータをできる限り収集し、医務隊員とリーダーサイドの判断材料とする。
- アプローチマーチのスタート即順化行動開始と考え、キャラバン期間を積極的に活用する。幸いわれわれのアプローチルートは 2,300 m 付近からスタートし、最も高い地点で 4,252 m まで上り、1,000 m 近く下降するのを最高に、登降を体験できる有利さをもっている。
- 先発隊員によって隊荷輸送・ＢＣ設営・ルート偵察と下部キャンプ地の選定など、できるだけの条件づくりを行ない、本隊は登山日数を有効に順化行動に使用することができるよう配慮する。
- 中間の、ＢＣでの休養時にパーティを再編成し、後半はレベルに対応した行動を組み立てる。もちろん前半でも体調を見て各人に対応した行動をとるようにする。
- その日の到達高度は、泊る予定のキャンプ高度より高い地点まで到達し、下って泊ることを原則に障害の緩和を図る。
- ドクターストップは絶対であり、全隊員がそれにしたがう。
- 全員登頂の可能性は高いが、絶対でないことを隊員全員が認識し、個々の順化レベルに応じた管理を全面的に承服することを確認する。

また、それを快よく受け入れるメンバーシップをめざして、チーム作りを進める。つきることは、たしかな信頼関係の組みたてである。

2. 休養について

登山期間が長期にわたる場合は、停滞日・休養日を含めて行動率は40～60％程度、能率良く動いても70％位である。また、絶対行動日数は40日が１つの壁といわれている。

ＧＨＥ78の場合は、登山期間が13日という絶対的な短期でもって、要請される最少限の順化行動のために必然的に行動率を上げねばならない。計画では、３日間の予備日数を差引けば、行動９日に対して、休養１日（連続行動５日）、行動率は90％であり、全期間で高々度に順化しようとする場合、有効とされる休養はできるだけ低いキャンプ（ＢＣ、又は、その下のレストキャンプ）で、２日程度が必要と考えられる。即ち、１日の休養では、ＢＣへの下降・ハイキャンプへの登高というエネルギーの消費を考えれば効率悪く、疲労回復も充分でないからである。われわれの場合、行動表では１日の休養をもって後半のアタックへ入ることになっているが、これは隊員の順化、疲労状況を充分に見極めて、弾力的に対応する方針で、あえて設定したものである。

後半のアタックは、パミールの事例と比較した場合、そのものだけではそう強度なものではないと考える。問題は前半である。ＢＣ入りの時点で 5,000 m までの順化はほぼ出来ていると考えるが、５日間でアタックに必要な順化を得ることができるかどうかである。おそらく個人差が顕著に現れ、タクティクスの再編を必要とするだろう。

現時点では、未知数な要素が非常に多く教条的には考えられない。行動の原則・パターンから物資量・荷上げ計画・ローテーションを企画するだけである。

3. 事故への対応

われわれのとろうとするタクティクスはオーソドックスなポーラーをベースとしているが、短期速攻形式のため、生体にかかる負荷は通常の遠征より相当に大きい。すなわち、直接の高度障害及び高度の影響が引金となっての疾病の発現、滑落・転落等の事故の可能性は充分にあることを承知せねばなるまい。反面、純技術的未熟による事故は、ルートの性格から考えて少ないことだろう。

＜対　応＞

○酸素の配置

ＢＣ及び、中核前進キャンプに医療用として酸素器材を配置する。酸素は６本程度と見込んでいる。

○医 療 対 策

ＢＣに、医務隊員の指示によって使用するレベルの高い医薬品と器材を配置する。各パーティには使用法を明記した常備薬品セットを携行させる他、各前進キャンプに医療器材を配置する。

○マネージメント

隊の医療レベルでは対応不可能な事態が発生した場合は、市街地の病院に収容する。一刻を急ぐ緊急事態の場合は軍用ヘリの出動を要請する。これは渉外過程で予め、ＩＭＦ、他の関係先と協議し、体制を整える。連絡はトランシーバーを補助として、隊員によって行なう。キャラバン途中の高点から直接ジョシマートへの交信が可能と推測しているが、往路テストを行ない交信図を作成したい。状況によっては登山中止があり得ることは当然である。

○国内での対応

留守本部を通じて、各隊員留守宅等の関係先に連絡する。事故処理に要する経費については、隊長を契約者とした保険金によってまかなうが、初動資金はＨＡＪ基金を必要に応じてあてる。

（以上「事前準備・研究集録」から転載）

行動原則について

別項で記したように、ファイナルキャンプの高度は計画を下まわり、Ｉ峰頂上への登頂距離は700ｍ余となったが、特に無理なものでなく妥当な範囲内にあったといえよう。

順化不調者のために準備した予備日数がＢＣ到着の遅れと休養日数の延長、帰路のために消費されたことは、登頂率を引き下げる大きな原因になったが、これは不可抗力の要因が半分以上あるにしても、今一歩、努力の余地があったと考えられる。

その他の行動原則はほぼ忠実に守られたと考える。そして、これらの行動原則はおおむね妥当であろう。時にはキャンプ間の高差700ｍを越えたとしても平均すれば550ｍ内外に落ちつくというのは、やはりひとつの真実を示しているように思える。

順化の個人差は想定した通りであり、如何なるチームにおいてもさけられない現象である。個人差を極力小さな範囲にとどめ、行動の斉一化を確保するために、メンバーに種々の努力を要請した。この面でも順化同様個人差が表われたが、順化を順調に獲得していった隊員は、個人的努力＝精神力と積極性においても強固な傾向が見られる。順化は単に生体の生理的適応ではなく、意思力による獲得部分が大きいことをあらためて認識したい。

健康管理は、医務担当隊員の献身的努力がみられたが、全体的に予想以上の障害の発生を見、１人の隊員をヘリコプターで救助する事態まで発生した。帰路の反省会でも出されたが、各人の自己管理が不十分であったことは否めない。リーダーや医務担当の完全なフォローは、短期遠征では非常に難しい。

短期速攻において、生体にかかる負荷はひじょうに強大であるにかかわらず、生体側としてのガードはきわめて限定される。自己管理の重要性が極めて大きくなるゆえんである。これらを除いて、計画した順化獲得対策がほぼ実行された事が15名の登頂に結びついたわけであるが、細かく検討するときりがないほど改良点が見出せる。

各人が自己及び全体の行動をふりかえって、次の遠征をこなすための材料として役立ててもらいたい。

休養について

予定していた1日の休養では、体力の回復とアタックに向かうための満々たる斗志を準備することは不可能であった。これは当初から想定されていたことでもあり、弾力的に対応した。一部の隊員は1日の休養でもってアタックへ出発させたが、これはそれまでの順化量と停滞による休養を勘案し、また、体力的ギャップを考えての処置であった。

2日の休養は、結果的に多少のデメリットを生じさせたものの総体的には、プラスの効果として作用したと考えている。むしろ、順化段階とアタック段階の間に、2日の休養をおくことは当初、計画に完全に組み込んでおくべきであった。

事故への対応

計画の上でもエマージェンシーの事態を想定し、それにもとづいて、日本大使館・IMF・現地の軍司令部等へできる限りの手配をしてBCに入った。不幸中の幸いというか、現実にヘリコプター出動を要請せぜるを得なくなり、事前準備が有効に機能してスムーズに救助活動がなされた。

9月22日朝の時点での判断であったが、もう少し患者の症状に留意すればもっと早く救助体制をとることができたと考えられる。24日のヘリ飛来は、BCの医療体制からみてギリギリの限界であった。あと1日、ヘリの飛来が遅れたら深刻な事態を招いたと考えられる。もちろん、ヘリが来ない場合も想定して、2次・3次の対策を準備し、また、最悪の事態への対応も手を打っていたが、幸いにそれを発動するまでに至らなかった。また、ヘリ出動を要請するまでに症状悪化を防ぐ手だてはなかったのか、症状発生を防止する対策はとられていたのかという問題もある。

まづ、症状悪化を防ぐ方法は存在していた。

① 医師としての資格を持った隊員の付きそいによって完全なフォローを図る。

② BC到着後、万全を期して休養に専念させること。

などによって事態の悪化は相当防止できたかも知れないし、たとえ防止できなかったとしても、これらの対策がとられてしかるべきであったろう。

けれど結果論では言えないが、そこまでの見極めができなかったのである。見極めが不可能なときは最悪の事態を想定した対策を講ずるのが正しいのは承知しながらもである。このことに関しては、別項で野島隊員が総括しているので、これ以上はふれないことにする。

酸素はユーゴスラヴィア製の230気圧6ℓを3本持参し、BCに置いた。ところが、そのうち1本は全くのカラであり、他の2本もほぼ半分しか入っていなかった。これには全く、がく然としたものである。

ニューデリーでは点検・確認しており、恐らく輸送途中の消耗であろう。そして、ボンベにも何らかの欠陥が存在していたにちがいない。そうでなければとても考えられないトラブルである。計画では6本のボンベを持参することになっていたが、インドでの調達が3本にとどまったことも誤算であった。

生命の安全にかかわる重要な器材の取扱いに関しては、完全すぎるということはない。

保険に関して

ヘリコプターにより救助された桑原隊員は、捜索費特約付き（保険金100万円）の傷害保険に入っていた。捜索費とは、捜索救助の直接費用及び、家族等が現地に入る際の航空費等も対象になるという事であった。

この保険は、原則として各隊員の任意加入とし、別に郵便局の簡易保険（疾病・傷害・死亡付）に全員義務加入としていた。なお、簡易保険には捜索救助などの特約はついていない。

桑原隊員の場合は、私たちは当然捜索費特約付であるからヘリ救助費用はもちろん、入院費・その他、本件にかかわる経費は保険の対象に

なるものと考えて帰国した。帰国後、保険会社に手続きを行なったが、予想に反して、本件は保険の対象にならないという回答がきた。種々問い合わせてみると、これは、特約条項第1条に規定する「急激かつ偶然な外来の事故」による遭難ではないということによるものであった。「急激かつ偶然な外来の事故」とは一体何なのかということである。本件の処理に関して、事例調査をする中で次の文献が、このことに関して実に要領よくまとめてあったので、その部分を紹介したい。(以下、下記文献からの抜すい)

※1970年エベレスト登山隊報告書

第Ⅰ部・登山報告

P 202～207　松田雄一『保険』

(3) 成田隊員の保険金が受領できなかった経緯

傷害保険の普通約款の第1条に「当会社は被保険者が急激且つ偶然なる外来の事故(due to violent external and fortuitous Accident)により身体に傷害を被りたるときは、この約款に従い保険金を支払う。2前項の傷害には中毒・麻酔・日射・熱射又は精神的衝動による身体の障害を含まず」と明記されている。

問題は①この三つの要件

Ⓐ 急　激 violent

Ⓑ 偶然なる fortuitous

Ⓒ 外　来 external

をみたす事故により生じたものであること、並びに②被保険者がその身体に被ったものであることを要することである。

今回の成田隊員死亡事故の経緯については別稿、高所医学報告の症例の部で、詳細に報告した通りであるが、当初は酸素の少ない異常環境での遭難事故と解釈し、当然約款に該当するものと思っていたところ、この3要件をみたさないということで、保険金支払いの対象にはならなかった。そこで、この点について、少しく専門的見地から説明し、今後の参考に供したい。

① 急激・偶然・外来の事故

傷害が発生する過程を分析するために、落石が身体にあたり傷害を受けた場合を例にとると、岩が落ちることが原因となり、身体にあたる結果を生み、傷害(負担する危険)を生むことになる。

急激・偶然・外来の3要件は、かかる原因から結果に至る各過程に如何に作用しているかによって、事故が保険の対象になる事故であるか否かが決せられるのであって、この過程に因果関係の生ずることは云うまでもない。

(イ) 急激の意義

英語の約款でいうViolentは、暴力的・突発的なことを意味し、前例における原因から結果に至る過程において、結果の発生を避けることができない状態を意味するものである。即ち傷害を生ぜしめる事故が、緩慢に発生しつつあるものであれば、当然これは避けられる筈のものであり、この点を考慮して急激であることを要件としたものと思われる。しかし一般的には、殆どの事故は急激と解して差しつかえない。

(ロ) 偶然の意義

傷害保険において偶然なる事故(accident)というのは、ⓐ原因の発生が偶然であるか、ⓑ結果が偶然であるか、ⓒ原因ならびに結果が共に偶然であるかのいずれかであることを要する。従って承知している原因からくる当然の結果は、原則的に傷害保険では担保されない。

ⓐ 原因の発生が偶然である場合。風のため落石が発生して負傷した場合は、負傷を生ぜしめる過程において、原因である「落石」の発生は偶然であって、その結果、石に当れば当然負傷することが予想される場合であっても、これは偶然の事故である。登山者が落とした落石のように人為が介在しても、被保険者の立場からみれば偶然の事故となる。また自分の過失で雪崩をおこして、これにま

きこまれた様な場合でも、行為の過程で、故意又は意識的なものがなければ、偶然と解釈してよい。

ⓑ 結果が偶然である場合。偶然でない知られている原因、被保険者の意思に基づく行為から、偶然なる結果、すなわち通常予想できない結果を生じた場合は、偶然な事故である。例えば、水泳の上手なものが、川で渦にまきこまれて溺死した場合などである。しかしながら被保険者の身体の欠陥その他の原因により、傷害が当然の結果として生じた場合は、偶然の事故とはみなされない。たとえば、心臓の弱い者が、水に飛びこんだ結果心臓麻痺を起こして死亡した場合。この場合は、当然の原因が当然の結果を生んだにすぎない。

(ハ) 外来の意義

英語の約款のexternal に該当し、internal に対応するものである。即ちこの要件は、原因の発生が、被保険者の身体に内在するものでなければ、外来のものであるということができる。したがって原因が身体内部の欠陥から生じたものでなければ、外傷がなくとも差し支えない。

要するに「急激」「外来」なる要件は、傷害保険で対象とされる「偶然なる事故による傷害」と、対象とされない「当然の原因から生ずる当然の結果たる傷害」との区別を明瞭にする基準として役立つものであって、実際上の効果は殆ど「偶然」の要件のなかに包含されるものである。

② 身体に蒙った傷害

傷害保険にいう身体の傷害 (bodily injury)とは常識的には「怪我」と解され「病気」と区別される。但し「怪我」というよりも広い意味を有し、外傷のない溺死・窒息死等も、この傷害には含まれるし、また内部疾患であっても、打撲による内部諸器管の出血等は含まれる。但し傷害保険普通約款第2項但書にのべている通り、光・温度・天候の影響による健康障害はのぞかれることになっている。

この但書によれば、高所へ上り温度が低くなったり、酸素が少なくなったりすることによる身体の機能的障害は、たとえ外来の事由によるものであっても、傷害ではないとされているので、注意すべき点である。

③ 傷害と疾病との相互関係

この関係はなかなか難しく、屢々問題になるところであるが、要は傷害が先か、疾病が先かということである。心臓の悪い人が山登りをして、心臓が苦しくなって岩から落ちて死んだという様な場合には、担保の対象にはならないが、水のたまっている氷河湖へ落ちて、身体がずぶ濡れになり、その結果肺炎をおこして死亡したというような場合には、担保の対象になるわけである。

今回の成田隊員のＢＣにおける肺炎は、ドクターの意見としては、回復し死亡事故とは直接の因果関係はないとのことであった。

しかしながら、この点が是認されたとしても前述の3要件がみたされることにならなかったため担保の対象にはならなかったわけである。(後略)

桑原隊員の保険金請求に関する保険会社の説明も趣意は全くこの通りであった。したがって傷害保険の対象にならないので、それに連動して捜索費特約も出ないということである。両者は独立でなくセットになっているのである。

桑原隊員のアクシデントは、高度の影響により増幅された「病気」であることは否めない事実であった。

今、くやまれることは私たちの側の研究不足である。先人の事例が既に出ているにかかわらず、それを生かすことができなかったという愚かさである。傷害担保にプラスして「疾病」担保をつけさえすれば本件はスムーズに保険金支払いの対象になったわけである。あえて、私たちの恥を公開した次第である。特約の保険が沢山でているが、保険の契約にあたっては特に特約条項に関して、とことん研究する必要がある。

今後の参考までに、私たちが契約した保険の

特約条項の一部を記す。

＜特別費用担保特約条項＞

（当会社の支払責任）

第１条　当会社は、被保険者が保険証券記載の旅行（以下「旅行」といいます。）行程中に急激かつ偶然な外来の事故により遭難（行方不明を含みます。以下「遭難」といいます。）し、または海外旅行傷害保険普通保険約款（以下「普通約款」といいます。）第１条の傷害を被り、その直接の結果として被害の日より90日以内に死亡し、もしくは30日以上の入院を要したことにより保険契約者・被保険者および被保険者の法定相続人が支出した費用のうち、次の各号の費用を、この特約条項および普通約款の規定に従い保険金として支払います。

(1)　捜索救助費用

(2)　航空運賃等交通費

(3)　ホテル客室料

(4)　移送費用

(5)　諸 雑 費

2.　この特約条項において

(1)　「捜索救助費用」とは、遭難した被保険者を捜索・救助もしくは移送（以下「捜索」といいます。）する活動に従事した者（以下「捜索者」といいます。）に対し、捜索に要した費用（以下「捜索費用」といいます。）のうち、捜索者からの請求に基づき支払われた費用をいいます。

(2)　「航空運賃等交通費」とは、被保険者の捜索・看護もしくは事故処理を行なうために事故発生地または被保険者の収容地（以下これらを「現地」といいます。）へ赴く被保険者の親族（以下「親族」といいます。）の現地までの船舶・航空機等の往復運賃をいい、２名分を限度とします。

(3)　「ホテル客室料」とは、現地における親族のホテル客室料をいい、親族２名分を限度とし、かつ１名につき14日分を限度とします。

(4)　「移送費用」とは、次の費用をいいます。

(イ)　死亡した被保険者を現地から保険証券記載の被保険者の住所に移送するために要した遺体輸送費用

(ロ)　傷害を被った被保険者を、保険証券記載の被保険者の住所へ移転するために特に要した被保険者の通常の額を超える運賃およびこれにつき添った医師・看護婦の護送費

(5)　「諸雑費」とは、親族の渡航手続費（旅券印紙代・査証料・予防接種料等）および親族もしくは被保険者が現地において支出した交通費・国際電話料等通信費・被保険者の遺体処理費等をいい、10万円を限度とします。（以上転載）

なお、郵便局の疾病傷害特約付簡易保険に関しては、契約前に相当突っこんで調査した。「ヒマラヤ登山の事故」に関しても支払い対象になるという口頭回答があったが、現在まで支払われた事例はないようである。私たちは、文書による確約を要求したが、それはできないということだった。“とにかく対象になります”ということを信頼して付保したわけである。しかし、今回の桑原隊員の入院日数が約款で定める「20日以上」に及んでいないこともあって請求には至らなかったものである。

簡易保険については、今後ともよく確認を続けたいものである。

チームづくりと隊の理念

遠征の目的達成のためには、それにふさわしいチームづくりと隊運営がなされなければならない。逆に考えれば、チームづくりと隊運営のレベルが目的のレベルを規制することになる。

この計画の企画に際してリーダーサイドでは、一応達成されるであろうチームと隊運営のレベルをまず仮説設定した。

そして、これに見合う目標の選定と目的の設定を行い、基本戦略を決定したわけである。

しかしながら、基本戦略の総括でも記したように、仮説設定には結果的にみて相当の“甘さ”があった。

ここでは、基本戦略展開のベースとなったチームづくりと隊運営にかかる面を考察してみる。総括のモノサシとして、「事前準備・研究集録」に記した「ＧＨＥ78の理念」を掲げてみる。これは、1978年７月段階におけるリーダーサイドの確認である。

※　ＧＨＥ78の理念

（「事前準備・研究集録」から転載）

1.　位置づけ

1)　性格

ＨＡＪが創立15周年を記念して実施するＨ＆Ｓ計画（ヒマラヤとシルクロードの計画）の一方のメーンとして、ＨＡＪの直かつ事業として継続的に行なうヒマラヤ登山学校の初年度事業である。ＨＡＪの多面的活動の主柱を成す登山遠征部門活動の基盤を涵養する性格を持つ。

2)　位置づけ

a　ＨＡＪとして

- 巾広い能力と志向を持ち、組織特性に適応する会員の養成。
- 組織の強化及び公益活動として。
- Ｈ＆Ｓプランのための人材発掘と養成。
- ヒマラヤ遠征を志向しながらも実現困難な会員内外に機会を提供する。
- 正しい、安全なヒマラヤ遠征技術の普及と高所登山技術の発展に資する。

b　参加者に期待するもの

- ヒマラヤ遠征に関する企画・研究・実務準備・実践・評価の全過程について体得すること。
- より高度な遠征への継承・発展を図ること。
- ＨＡＪの活動・理念に対する理解を求めること。

2.　組織とその運営

1)　隊の構成

隊長１，登攀リーダー２，隊員17，リエゾンオフィサー１，コック１

※ハイポーターは雇用せず、若干のＢＣポーターを置き雑用にあたらせる。

2)　準備

Ｈ＆Ｓ実行委員会によって統括されるが実務はガルワール委員会委員長（隊長）の責任のもとに進める。隊事務局を隊長宅におき、隊長の基本方針のもとに登攀リーダーが隊員を指導する。隊員は隊務各部門を担当し、部門チーフが中心になり実務準備にあたる。なお、現地での行動パーティとし

て、3人によるパーティを編成しパーティリーダーをおいてチーム作りを進める。

3) 隊員の概要

隊員の概要を知るために幾つかの指標を記すと下記のとおりである。〔注 1978年6月時点で〕

- ◦性別　男子17名　女子3名
- ◦年令平均　28.2才（23才～37才）
- ◦海外経験　11名（うち登山経験7名　ヒマラヤ3名，アラスカ4名）
- ◦高度経験　4,000～5,000m　5名
  5,000～6,000m　1名
  6,000m以上　1名
- ◦職業　公務員　公社員10名（50%）
  会社　法人等8名，無職2名
- ◦既婚者　6名
- ◦地域　東日本15名，西日本5名
  （13都道府県に分布）

一般的にいって、現在のこの国の中～上級と称される層を主体としている。（グレードⅢ級以上の積雪期登攀の経験を有する者の数50%）。今回の目標とする山のレベルからみれば、総合的にはほぼ支障なく対応できると思われる。

当初、企画側では、メンバーの意識レベルでも「パッケージ登山」的色彩が濃くなるのではと考えていたが、準備過程においてそれは次第に消えて、一般の遠征隊と比較し得るレベルにあると考えられる。

4) チーム作り

ヒマラヤ遠征は、通常の場合組織による登山である。組織はそれを構成するメンバーの能力と共に、集団として高度に機能する能力があって始めてパワーとなるものである。ここにチームワークの重要性がある。

通常、遠征隊は企画段階から多くの人間が関与して作り上げるか、もしくは強い個性が最初に存在して、その個性の主張によってメンバーが結成され、チームの性格が作られて行くものである。しかし、今回のヒマラヤ登山学校は、一定のシステムを設定し、不特定多数の者に向けてメンバーとなる機会を与え、重大な肉体的欠陥がある場合は別として、いわゆる「選考」は行なわれていない。また、企画時点から、あらましチームのレベルを想定し、そのレベルに適合すると思われる目標＝山を選定した。結果的にチームレベルは、企画側の予測を上回ったことは喜ばしいことであった。

このチームは、準備過程で次第に変質し、当初考えた登山学校式管理のワクで対応することは不自然になってきた。

登山学校式管理では、原則的な集団の倫理をわきまえれば（いわゆる初歩のチームワーク）ほぼスムーズに運営できると考えられる。

しかし、チームが次第に運命共同体意識を高め、主体的行動を欲するようになると、より深化されたチームワークが必要となってくる。主体性の発揮は自然の欲求であり、特に登山者においてはその志向が高いので当然ななり行きと言えよう。また、企画側としてはこの学校の目的から言っても歓迎すべきことである。そんな意味で企画側としては積極的にそれを促進した。

育ってきた過程が千差万別であり、一面識もない人間がわずか1年の短期間で、しかも広域チームということで極めて限定された接触の機会しか期待できない中でのチームづくりは確かに困難なことである。このような方法でここまでチームが成長してきたのはメンバーそれ自体の自覚がなければ実現するものではなかった。

ア　メンバーの参加

本来なら計画の発想時点からメンバーのすべてが介在するのが望ましいが、このチームは計画が先にあって、この計画に興味を示す人間が集合したわけであり、発想の段階へのメンバーの参加は全くない。これは「登山学校」というシステムが持つ致しかたのない性格である。

計画の骨子は固定しており、このチームのチームづくりおよび戦略の組立てはこれらの基盤を肯定した上で開始されたわけである。

企画サイドでは、登山学校の目的を達成する上で、いわゆる“生徒”側の自主性を最大限に生かした運営をするのがより望ましいとの方針に立っていた。このことは同時に参加者の意向でもあったし、既に他の「登山学校」からその教訓を得ていた。

a. 合宿

チームワークの原点は、まずお互いをより深く知ることである。山行はそのための最も有効な手段の一つである。

3月の御岳，5月の富士山での各3日間の山行は技術訓練を主としながら夜のミーティングも重視して行った。全員参加という事実は決定的に重要であった。

b. 集会・研究会

1月下旬東京，5月富士山合宿下山後の山中湖，6月上旬の東京での「基礎高所登山研修会」では、隊の運営・戦術検討・高所登山への基礎的認識などについて検討し合った。文書や手紙による意思疎通にはどうしても壁があるので、きめ細かな意思疎通を図る上で効果的であった。

また、関東地区では登攀リーダーを中心に2月以来、数度の「関東地区集会」をもってきた。10名前後の参加者であったが、終了後のアルコールの効果も加わって、隊務の進行とお互いの融和にあずかって力あった。

c. 隊運営におけるメンバーの参加

a）国内

○部門担当

全隊員が原則として一部門を担当し、研究、実行計画の作成とその実務推進にあたった。各部門にはチーフ1名をおき、リーダー側の指示を受けて部門スタッフを指揮する形とした。

○全体会議

各合宿・研究会の折に主要事項については全体の検討を経て決定することにした。また、全体の動き・経過について報告し、全員が統一した認識に立てるよう努めた。

b）国外

アプローチ、登山行動期間中は、主要時点で全隊員会議を行ない、意識の統一をはかる。

アプローチマーチスタート前（於ラタ）BC到着時・休養時・BC撤収前・アプローチマーチ終了時（於レニ）

c）帰国後

○報告書の編集方針・内容・隊の総括等に全員の意思を反映させる。

○公式報告書への参画

d）グループリーダー

国内準備においては、地域性を加味して3名1単位のグループを構成し、実務（主として共同装備調達）推進とチームづくりをはかる。

2）リーダーシップ

企画当初、この登山学校は隊長とインストラクターが隊運営の全てに責任を負い、実務の主力となり、準備・登山活動すべての段階に亘って、“生徒”である隊員を指導するというのが基本であった。このことは出発を間近にひかえた現段階でも基本的には変らないことである。

しかし、前記のように一人前のヒマラヤ登山者を育てることがこの登山学校の終局の目的であるならば、それによりふさわしい方法を手段としてとることがベターとなる。

つきつめれば「登山学校」の色彩を全くゼロに帰すことが、登山学校の究極の目的の一面であろう。隊員結集時からつみかさねてきた人作り・チーム作りが成果を上げて、次第に登山学校対生徒・インストラクター対生徒という意識が薄まり、目的とする山の登頂に向けて団結した強固な機能集団に転じつつある。このことは、登山学校として目的の過半を達したということになろう。インストラク

ターはむしろ隊長・登攀リーダーという呼び方がなじみ易くなっているが、チームの成長にともなって更に次元の高い指導力が要求されてきている。

それは、成長し高い自立性を持った隊でのリーダーシップであり、20名という大集団でのそれであるということで、リーダーサイドから見れば容易ならざることである。それは一般的な遠征隊内部におけるそれとほぼ同質であると考えられる。

（以上「事前準備・研究集録」から）

コミュニケーションの重要性

国内準備段階では、幾つかの方法は実現し得なかったが、基本的にはこの理念にもとづく方策は踏襲されていたと考える。

しかし、認識においては遠征の実践を終えた現在、あらためてチェックしてみるとかなり実態把握にズレがあったことを認めざるを得ない。
また、基本的には前記のような理念を設定すること自体の妥当性が検討されなければならない。

実態把握のズレは、絶対的コミニュケーション不足に起因している。

準備段階の短かさに加えて、全国に散在するメンバーからなる広域チームでは、顔をつき合わせてのコミュニケーションはひじょうに限定されざるを得なかった。
これを改善するには、ミーティングの機会を増やせばよいわけだが、経済的・時間的に極めて難しい。
キメ手とはならないが、

① 準備期間を長くとって通信を主として、どんな形でもよいからコミュニケーションの絶対量を増やすこと。

② 各人の意識啓発と主体的参画を促進するようにコミュニケーションの質的改善を図ること。

などであろう。「絶対量を増やすことが質の改善につながる」わけである。

全体のミーティングが極めて限定されるので、補完的意味でより狭い単位でミーティングや山行を持つこと。この場合、リーダーサイドが極力それに参加すれば少なくともリーダーサイドの認識は高められたと考える。
基本的には、メンバー全員がコミュニケーションの重要性をよく認識し、積極的な努力をすればほとんど解決できることなのだが。

また、以上のようなことが無理であれば、チームの構成単位を関東とか、東北地区とかに限定して成立させることも一方法であろう。

理念それ自体について

ＧＨＥ78の理念は、いわゆる登山学校のカラーを極力解消して通常の遠征隊レベルまで押し進めることを基幹としていた。
つまり、登山学校という名で結集されたチームの特異性を消去しようと試みたわけである。
登山学校のカラーをなくすことが登山学校の真の目的にかなうものだという認識であった。

残念ながらこの方向は直感的に表現すれば50％程度しか達成されなかったようである。

では、最大限の努力と効果的な方策を駆使すれば100％まで達成されたであろうか。答は「否」である。
やはり、チーム成立の特異性とメンバーがこの遠征に求める価値感の相違は“この期間”では如何ともなし難かった。
私たちの場合は不可能であったが、通常の遠征隊レベルに到達できる方法は存在している。

それは個々人の価値感にはふれないでおいて、全体として新たな価値感を創造し、この価値感をもって“統一認識”とすることである。
これを行なうためには、相当の時間的経過をかけての共通したトレーニングが必要となる。

共通トレーニングを完了した段階で、または相当に進んだ段階で全員の参画によってはじめて企画に着手する、自らの手で遠征をゼロから構築するというステップシステムをとることである。
したがって、メンバーの結集にあたっては山の名をフィックスすることはできない。「遠征構築の方法」を掲げて人間を結集することになる。
これは困難なことだが可能である。

共通トレーニングは、一定のカリキュラムによる講義と実技訓練である。この場合、共通トレーニ

ング過程での登山学校はチームの成立と遠征隊づくりの媒体役にまわることになる。

トレーニング段階終了後の登山学校はどうあるべきか。

遠征準備段階を効果的に進めるための助言と援助機能・現地の実践段階でのトレーナーおよび総括段階での助言援助機能を果たすことになろう。

もちろんこの段階では新しい「生徒」が入ってきており、そのトレーニングと併行して進められるわけである。

共通トレーニングでは指導者としてのリーダーシップを発揮してもかまわないが、以後はリーダーではない。外部指導者またはメンバーの一人として位置することになる。

メンバーの一人として位置する場合は、もちろん全員の合意によってリーダーとして位置づけされる機会もあるわけである。

話を戻して、結果的にみて不可能と思える理念を掲げたこと自体は悪いことではない。

要は、その理念を準備段階だけでなく実践段階でも信念をもって進めることであった。

多少のロスあるいは失敗を招くことを恐れないでそれに徹すべきであったと考えられる。

けれど実践段階では「登頂」という目的の崩壊を恐れて理念の上で次々と妥協におちいっていった。

これは専らリーダーサイドの責任である。

それでは、「登山学校」に徹した場合はどうであったろうか。

今回の隊は、「登山学校」の名を冠していたのだからその方式に徹し切っても不思議ではなかった。

ただ登山学校と称しながらも“学校らしい”システムは極めて貧弱であった。

“学校”は、一定の数育課程の積上げがあって、実践が位置づけられるのがノーマルである。

私たちの場合、“入学”が即実践であった。

このような変則的状況で実践段階を“学校方式”で運営した場合“パッケージ登山”の色彩は一層強まったであろう。

一定のトレーニング課程を経て意識が統一された状態でならこの方式はそれなりに割切って受入れられたであろう。

しかし今回の場合、隊員は企画サイドの思惑がどうであれ、“ヒマラヤ7,000 m峰に登頂するため”にこの隊に参加したのである。

そして、パッケージ登山的思考は決して持っていなかった。隊員は“学校”に入ったのではなく、“遠征隊”に参加したのであった。

このような状況下で“教育”は一種の押し付けまたは、主体性の喪失と受けとられ、かえって“教育効果”を減殺し、登頂という目的達成まで危うくする。

しかし、全く自主的な運営が可能なまでに成長したチームではなかった。

リーダーサイドが当初めざした路線を弱めて実践ではいわゆる学校方式との折衷ともいえるやり方に妥協せざるを得なかった主たる理由はここにある。

いづれの方式に徹し切るに際しても、それなりの過程を正しく積み重ねた上ではじめて可能になることである。

順化と健康管理

隊員 野 島 照 雄

はじめに

短期間で、できるだけ多くの隊員が7,000m峰の頂に立つこと、これが我々の遠征隊の一大目標であった。企画段階においても、技術的には困難ではないとの事で、登頂の成否はあくまで高度順化を含めた隊員の健康状態にかかってくる事が予想された。そのためには、疾病の予防・早期発見・早期治療を目的とし、以下の点を考慮した。

① 出発前に隊員の健康状態のチェック・既往歴・性格等の調査を行なう。

② 遠征中は高度障害の発見と高度順化の資料として、チェックカードに毎日の健康状態を記入する。

③ 疾病特に急性の高山病による死者を出さない事を最低限の目標とし、緊急薬品・輸液の類を多く準備する。また、最悪の場合にはインド軍のヘリコプターの出動を依頼できる様にする。

障害と順化状況

① ジョシマートからBC

ラタからのキャラバンは高度差も激しく、決してのんびりとしたものではなかった。3,686mのラタ・カラクでは大部分の者が軽い高度障害にかかり、頭痛・息切れ・食欲不振を訴えた。4,252mのダランシ・パス通過の当日には、自力歩行が困難な隊員も現れた。元気なものでも、風邪・下痢・食欲不振を訴える者が多くなった。A隊員は、過換気症候群を呈し、BC入りが2日遅れた。

② 第Ⅰ期の登山活動（9月19日～25日）

BC到着時には、ほぼ全員が高度障害を訴えるが外見的には元気な者と、不調を表わす者との差がはっきりとする。これはキャラバンの疲れからBCに到着してヤレヤレといった者と、今後の上部への行動を積極的に考えている者との差が出たように思われた。

B隊員・C隊員は、BCに上った翌日から39度近い発熱・頭痛・吐気・呕吐・咳嗽がみられ、抗生物質・解熱剤・鎮咳剤等を投与する。両隊員とも気管支炎・高度障害と思われた。C隊員は5日後には軽快するが、B隊員は重症となり、ヘリコプターの出動を要請。バレーリーの軍病院に降した。

（詳細後述）

D隊員はC_2からC₁への途中、熱射病様の状態となり、一時歩行不能となった。

E隊員もC₁からBCに戻る時、ふらつきが強くなるが、自力でBCに到着する。

ほぼ半数の隊員に浮腫が顕著に認められ、利尿剤を投与した。

ともかく全員が過労気味となった。そして、隊全体の事を考えて設営・食事の仕度等を率先して行なう者と、周囲の状況を考える余裕がなくなったのか、利己的・自己中心的と思われる行動・態度の目立つ者との差がはっきりとしてきた。

③ 第Ⅱ期の登山活動（9月26日～29日）

2日間の休養も手伝って、第Ⅱ期に比べて隊員の歩行速度はかなり速くなってきた。BC、C₁においては、頭痛等の訴えもなくほぼ全員が5,000mの高度に充分に順化したと思われた。

Ⅰ峰登頂隊には、幻覚様症状の出た者がい

た。F隊員はⅠ峰からの下り、周囲に2～3人の人間がいて、自分の名前が呼ばれる感じがし、思わず答えそうになったという。G隊員は6,200m付近で、トレールがコンクリート道路のように感じられ、野良仕事をしているポーターたちが見えたという。これらが錯覚か幻覚かはっきりと判断することはできないが、極度の疲労と低酸素症によって起きたものと思われる。同じくⅠ峰からの下り、H隊員は視力障害をきたし、他のメンバーの助けを借りてC_2に戻った。翌朝には、特に障害はなかった。これは単なる疲労や雪盲では説明できず、低酸素の網膜への影響ではないかと思われる。

これらⅠ峰隊に比べⅡ峰隊には目立った症状はなかったが、Ⅰ隊員は登頂後他のメンバーと別れ、一人で先にBCまで下ってしまった。彼の性格に帰するところもあるが、自己をコントロールする力を失っていたと思われる。

④ 高度障害の症状

今回の遠征中に表われた主な症状を記す。（表1）

予想以上に多かったのは、社会性の低下・思考力の低下等いわゆる精神症状的なものである。これらは確かに低酸素による影響も大きいが、単にそれだけでは説明がつかない。その他、様々な因子が関係しているものと思われる。

表1　高度障害の主な症状

息切れ
頻脈
頭痛
睡眠中の呼吸不整 … チェンストークス様
咳
嘔吐
浮腫　　顔面が顕著だった
倦怠感
社会性の低下……利己的な行動
不安・焦燥感
精神的萎縮
幻覚様症状

特異な例

① A隊員（過換気症候群）

＜経過＞

出国時より風邪気味であったA隊員は、キャラバン第1泊目、午後10時頃突然「破傷風じゃないかと思います。薬を下さい」と不安をありありと浮べて訴える。翌日、4,252mダランシ・パス通過時、歩行速度が異常に遅くなり、態度も依存的となったため、結局ポーターの助けを借りてキャンプ地に着く。この日、37度台の発熱があり、解熱剤を投与する。

3日目、夕食時に食欲がなく一人テントで横になっていたが、突然「息がつまりそうで苦しい。手足がしびれている」と大声で言う。四肢が強直し、呼吸数がひどく多く不安状態であった。血圧がやや低かったため、点滴注射を行なったが、ゆっくり数を数えたり話をする事で呼吸困難は軽快した。翌日も依存的な態度が目立ち、不安状態が続いていたため、ベタルトリに2日滞在してからBC入りをする。

BC入りの翌日も同様の症状を呈したが精神安定剤・睡眠剤を投与し、以後呼吸困難はみられなかった。しかし、その後下山まで、周囲への配慮のない自己中心的な言動が目立った。

＜考察＞

A隊員の呼吸困難の発作は、過換気症候群と呼ばれるものであって、真の呼吸困難とは異なり、決して体内の酸素量が減少したものではない。その原因としては、精神的なものが考えられる。

登山を始めて3年という経験の浅さ、初めての大きな長期間の山行、初の海外登山に対する気負いと不安感、他の隊員は食事をしているのに自分一人はテントに横になって遅れをとっている。ひどい高度障害に陥るのではないか。いや、既に陥っているのではないか。これらが彼の不安感を盛り立て、あの様な症状を来したものと思われる。そこにはもちろん、A隊員の性格・精

神の脆弱性が大きく影響している。

A隊員の場合、純粋な意味では高度障害とは言えないが、酸素不足を含めた山自体の環境に対する反応と考えれば、広い意味では「高山病」といっていいだろう。

② B隊員（意識障害・呼吸困難）

＜経過＞

キャラバン後半より下痢・全身倦怠が出現、BC到着翌日には頭痛・食欲低下・動作緩慢がみられた。その夜、「俺と一緒のパーティの奴は御苦労なことだ」とつぶやいていた。

翌朝、C_1 に向かうも歩行速度が極端に遅く、途中から空身で引き返すが少し歩いては横になる状態であった。この日自分の行動食、飲水を持つことすら忘れて出ている。体温は38.5度、咳嗽がみられたため抗生物質・解熱剤・咳止めの投与を開始する。

翌21日、39.5度まで発熱。受答えははっきりしていたが、21日以後の記憶はほとんどなく、気がついたら病院にいたとの事である。

22日、意識がもうろうとし、呼吸困難が強まったため酸素を吸入。C_2 にむかっていた野島（ドクター）が呼び戻される。

血圧120／60、脈拍不整・呼吸不整・チアノーゼ（－）・顔面浮腫顕著・全肺野に湿性う音を聴取。意識状態は問いかけに応じる事なく、体動激しくせん妄状態であった。

直ちに点滴を開始。ネオフィリン・ステロイド・ケフリン・ラシックス・メケロン等を注射する。呼吸が少し落着いたところで酸素吸入中止（残り少ないため）。夕方には37度台に下熱するが意識レベルは変わらず、夜間体動が激しく突然大声を出したりする。尿失禁もみられた。

翌23日も同様な症状で時折全身の震えがみられ、又寝袋に入れておいてもすぐに抜け出し、衣服も全部脱いでしまう状態であった。

24日朝、インド軍のヘリコプターがBCにやってきて収容、バレーリーの軍病院へ移送した。B隊員の意識が戻ったのは、それから3日後であった。

＜考察＞

B隊員の場合は先のA隊員の場合と異なり典型的な高度障害と考えられる。

BC到着時より、頭痛等の高度障害の諸症状が強く、又発熱のためにますます酸素需要量を増した。一方、低酸素・気管支炎のために供給量はますます減少していった。また、呼吸回数の増加に伴い、肺からの水分蒸発量が増したにもかかわらず、経口摂取量が減じ、脱水をもたらした。これらの結果がこの様な高度の障害をもたらしたと考えられる。

③ J隊員（高度順化の遅かった例）

＜経過＞

キャラバン初日、酒を飲みすぎたせいか夜間に何度も呕吐する。翌日は歩行速度が遅くしばらく休んでいると眠ってしまう状態であったが、なんとか自力でキャンプ地に到着。その後も食べると吐く状態が続いたが、BC入りの日は好調だった。

翌日、頭重感が強く再び呕吐があり、動作も緩慢で口数も少なかった。結局、B隊員の看護もあり、第Ⅰ期の登山活動中は殆どBCにいる状態だった。

第Ⅱ期に入ってからは呕吐もなくなり至って快調。歩行速度も順化行動の充分な他の隊員よりも早く、冗談もとばし、雑用も積極的に行う様になる。これが本来の姿と思われた。

＜考察＞

J隊員は国内でも素晴しい登攀歴をもち、その活躍が期待されていたわけだが、結局頂上に立つ事はできなかった。順化に時間がかかり、日程がなくなったためである。

しかし、彼の場合一度順化すれば、他の隊員のそれよりも確実なものである事を後半の行動が証明している。短期間の登山の場合、順化速度が問題になる。

考　察

① 健康管理について

ともかく、キャラバン開始から病人の多い隊であった。自分の身体を管理することは日本にいる時でも難しい。しかし、ヒマラヤではわずかな体調の崩れが登山活動に影響を及ぼすばかりでなく、命取りにすらなる。医師が同行するのが当然であろう。

我々の隊にも医師は一人いた。しかし、それは専任の医師としてではなく、あくまでも隊員としての参加であった。そのために隊員の健康管理等お座なりになったことは否めない。21日に、もし医師がＢＣにいたら、Ｂ隊員はあれ程の重症となる事はなかっただろう

しかし、たとえ専任の医師がいたとしても全隊員の健康状態を完全に把握するのは困難であろう。そのためにも、自己による健康管理が要求される。今回我々の使ったチェックカードは、それに客観性を加える一つの方法であったが、充分には活用されなかった。それは、記入するのは比較的余裕のある時で、登山行為が困難になって、精神的にも体力的にも不調の時は記入されなかったからである。

では、この自己管理の欠陥を補うにはどうしたらよいのだろうか。一つの提案として、２～３人の小グループを作り、相互の健康状態に責任をもつというのはどうだろうか。もちろん、ザイルパーティでもこれは可能である。ともかく、山における全ての時間、相互の健康を確認し、責任を持ち、具合の悪い時にはその看護を引き受けるというグループがあったなら、Ｂ隊員のような重症は避けられたかもしれない。メンバーシップが確立していない我々のような寄せ集めの遠征隊においては、特に必要なことであろう。

② 高度順化

19名の隊員のうち６名がＩ峰に、７名がＩＩ峰に、大した障害もなく登頂した事は、一応短期間（ＢＣ到着後、10日目に登頂）で高度順化が出来たと言ってもいいだろう。これには、キャラバン２日目に4,252mの高度を経験した事が大きく寄与していることを忘れてはならない。しかし、果して充分な順化だっただろうか。隊員は日程に余裕がなかったため、少し位体調が悪くても追われるように上へ上へ登っていった。苦しくても両足で登ればよいというルートの易しさにも助けられた面がある。困難なルートだとしたら、突破できない隊員が何人もいたはずである。チェックカードの記入もれ、C_1・C_2におけるレーションボックスの開け方等に精神的・身体的に余裕のなかったことがよく表われている。C_2からC_3への登りの時間のかかり方と共に、不充分な順化の結果といえないだろうか。

③ 環境への順化について

ヒマラヤ登山では、昔から高度障害・高度順化ということが重要な問題としてあげられ、それらに関する研究や記録も少なくない。我々の隊の成否も順化できるか否にかかっているとみていたし、また重症者を出してしまい、改めて高度障害の恐しさを感じている。これからも、ヒマラヤ登山を考える上で高度による影響を無視することはできないだろう。

しかし、今回の遠征でもう一つ強く感じたことがある。それは、精神的な萎縮・消極的な言動（自分のことで精一杯なのか）周囲に対する配慮のなさ・生地の性格が前面に出る利己的な行動・不安・焦燥感等が予想以上に多くみられた事である。一言で言えば、精神的余裕の欠如した行動様式といってもいいだろう。これらは以前から高度障害の一症状として考えられてきた。しかし、幻覚等と異なり、純粋に低酸素による精神機能への影響とは考えられない面がある。そして興味あることに、この行動様式は初めての合宿に参加した新人部員のそれにひどく似ている。

日本を飛び立って10数時間後には、言語・風俗・習慣・食生活の全く異なった国である。当然、そこに一種のカルチャーショックが生じるが、それを克服する間もなくＢＣにむかって歩き出している。現地食は口に合わない事が多く、慣れないうちはひどく不潔に感じられる。空気は薄くなるし、体調も乱れてくる。前途に不安を感じるが、一方頑張らねば

という気負いも強い。

そして、山々は今までの経験にないほど大きく・高く・険しい。まさにこれは、「山」に慣れていない「新人」の状態と同じである。A隊員の例は、このような状況のもとで起きたと考えられる。

もちろん高度順化と同じように、これらも除々に克服されていくのであるが、やはり個人差が大きい。性格・体力・経験・日本での山の登り方等が微妙に関係してくるのである。

今後、ヒマラヤはますます大衆化していくと考えられる。それに伴い、「新人」の参加も多くなることだろう。高度順化ばかりでなく、環境への順化をも考えなければならない時期に来ているようである。

医　　療

隊員　野　島　照　雄

医療のレベル

インドの山奥で、果してどの様な医療活動ができるのか。手に負えない患者が出たら、どうしたらいいか。何よりも隊員と医師との両立はうまくいくのだろうか。

忙しさにかまけて充分な準備もできなかったが、企画段階では以下の２点を考慮した。

① 健康管理　　ともかく重症者を出さないため、予防・早期発見・早期治療をこころがける。

② 処置　　投薬・注射等の内科的処置・小外科的処置・救急処置（挿管を含む）までを可能なものと考えた。

それ以上の処置、例えば開腹手術が必要なものなどは、ヘリコプターの救援を依頼する。

疾病状況

① 隊員

- 高度障害　　軽症から重症まで、様々な高度障害がみられた。（詳細は「順化と健康管理」）
- 頭痛　　セデスがよくきいた。
- 風邪　　第Ｉ期登山活動終了まで、よくみられた。咳が多かったが、これは肺のウッ血等高度の影響があろう。咳止めのメジコンは、殆んどきかなかった。
- 下痢　　ラタ・カラクまでは、一応生水を飲む事を禁じたが、Ｉ期の登山活動まで多かった。下痢止め（ビスマス＋タンナルビン）で一時的にはおさまるも、再び症状の出る者が多かった。抗生物質（ケフレックス，アンピシリン等）も著効は示さなかった様におもわれる。なお、帰国後の検便では３名に赤痢菌が発見された。
- 浮腫　　第Ｉ期の登山活動中、半数の隊員にみられた。利尿剤（ラシックス）を投与した。
- 雪やけ　　日中、氷河の中を歩く時は、殆んどの隊員がガムテープやタオルで顔面をおおって行動した。化膿した者には、抗生物質の軟膏（アクロマイシン軟膏）を塗布した。
- 雪盲　　軽い障害があっただけ。予防が大切である。
- 靴ずれ　　意外に多く、化膿したものは膿を出し、軟膏を塗布した。
- 凍傷・凍創　　Ｉ峰隊に多くみられたが、いずれも軽症だった。水胞を形成しているものに対しては、不潔な環境の下では、できるだけ破らないように努めた。予防的にユベラニコチネートを服用したが、効果の程は疑わしい。

② ポーター

高度にはさすがに強く、高度障害は殆んどなかった。

打ち身・腰痛・化膿創・結膜炎・咳が多く、鎮痛剤・咳止め等を与えた。一般に医薬品をほしがる傾向が強く、ビタミン剤は重宝した。

咳が多いのは、結核等の基礎疾患がかなりあるためと思われた。

③ 現地の人

キャラバン中、部落を通過するのは、ラタだけなので医療に対する要求は少なかった。結膜炎・腹痛・巨大な甲状腺腫・ガマ腫がみられた。抗生物質は原則として投与しなかった。

医薬品について

① 内服薬

鎮痛剤を大量に持っていったが不足気味だった。

その他の薬は大部あまった。下剤は必要がないと思い準備しなかったが、後半便秘で苦しんだ隊員が出た。

内服薬は、鎮痛下熱剤さえ大量に準備すれば、あとは少量でかまわない。

② 外用薬

リップクリームと日やけ止め以外は殆んど用いなかった。パテックはポーターたちに人気があった。

③ 注射薬

強心剤・利尿剤・抗生物質・昇圧剤・ステロイド等の注射薬・ラクテック・マルトス輸液類は余分なのではと思われる程用意した。結果は抗生物質が不足した。

注射薬は、一度B隊員の様な重症者が出ると大量に用いるため、余るのを覚悟して大量に準備すべきだろう。

④ 酸素ボンベ

企画では医療用に6本準備するはずであったが、デリーで購入できたのは3本だった。しかも、その内の一本はキャラバン中に空になっており、又別の2本は半分位ぬけてしまった。購入時・輸送時の厳重なチェックが要求される。

又、一度重症者が出れば長時間使用する事になる。医療用3本は余りにも少なすぎた。毎分2ℓで流し、72時間使える位あれば充分であろう。

総　括

ともかく、誰一人欠ける事なく帰国できた事を率直に喜びたい。不備な点は多々あるが、専任の医師の不在はやはり痛かった。あくまでも隊員としての参加であるならば、2人以上いる事が望ましい。

高所医学は興味深い分野である。客観的データーを集める余裕のなかった事が残念である。

なお、「順化と健康管理」の考察の中には、大部独りよがりの点があると思う。これも一つの見方だと思っていただきたい。

装　　備

副隊長　野　中　和　雄

私たちは、短期速攻登山で7,120mに登るので身軽に行きたいと思った。ルートは未登であるが、技術的にはそれほど困難なルートではないだろうということが事前研究でわかった。天候も比較的良いという。キャラバン、ベースキャンプでのテントに炊事用具などはエージェントのCox社が用意してくれるという。さらにHAJデリーデポ品も使用することができる。遠征を終えたバツーラII峰隊、ヌン隊から若干の使用済装備類を譲りうけることができる。こんなことから私たちは、日本の冬山で使っている装備類を各隊員が持ちよることを主体にした。

個人装備

- 靴は全員ダブルを使用した。I峰登頂者の中にはそれでも凍傷になった人がいた。
  7,000mクラスの山ではダブルが良いと思う。
- ユマールは一度も使わなかった。木曽御岳・富士山などで訓練をしていったが、ルートにはユマールの助けを借りるような所はなかった。
- II峰においては、ザイル・安全ベルトなども使用しなかった。
- キャラバン中は、運動靴・トレパン姿が多かった。行動中天気が良ければ半そでシャツだった。朝・晩はセーター、夜は羽毛服を着こんだ。ベースキャンプでも同様だった。
- BC～C_3までは日本の春山のような感じだった。C_3からアタックのときは冬山のときの風雪のきびしさだった。
- ほとんど日本で使い慣れている物を持参した。
- テルモスから飲む熱いミルクティーは、次のピッチへの活動力となり、ヒマラヤ登山には欠かせないものだろう。

3人用共同装備

準備段階で3人パーティを作り、各人に持ちよってもらった。石油コンロは石油が悪かったり使い方が激しかったりで使用不能になってしまったものがあった。日本からは航空貨物で送り、帰りは手荷物となり、別送に出した人と出さない人がいて不公平になってしまった。

登攀用具

スノーバー・フィックスロープ・アイスハーケン（スクリューおよびチャンネル）など多数持って行ったが、スノーバー3本とフィックスロープ100m使用したのみだった。旗用竹は、ディブルゲータでポーターにとってきてもらった。旗は、C_2～C_3の間が少なくて2次登頂隊がルートファインデングに苦労した。

露営用具

各キャンプにおいて快適な生活が出来る事を重点におき、タクティクスにもとずいて用意した。ベースキャンプはCox社で用意した2人用夏天9張、食事兼会議用大テント1張で、ひじょうにぜいたくであり、快適だった。ビニロンシートはキャラバン中は荷物にかけたりポーターが広げて屋根を作ってその下に寝たりで大変有効だった。

炊事用具

ほとんどのものをデリーで購入した。圧力鍋はインド製であり、キャラバンとBCで使用した。

インド産のパサパサの米も水を多く入れて炊けば日本風になり、けっこううまく食べられた。

燃料用具

石油は120ℓをヨークホテルのマネージャーMr. ソニーに頼み購入した。布でこし始まったらホテルのボーイがきて手伝ってくれた。石油の質が悪く、日本の石油のように白くない。10ℓのポリタンに入れてBCに運んだ。ポリタンも悪くキャラバン中に少し漏った。BCでさらにコールマンの石油こしできれいにした。BC以上の荷上げには、デリーで購入した2ℓのポリタンを使用した。石油が悪いのか石油コンロが悪いのか、どうも調子悪かった。C_2・C_3は主にブタンガスを使った。計画では高所で低温の所では火力が弱いだろうということで使う予定はなかった。先に登山を終えたヌン隊では使用してみて調子が良かったというので残ったものを持参した。私たちの最終キャンプでは、石油コンロより調子がよかった。6,000m台のキャンプ地なら充分使えると思う。石油より便利で使いやすい。キャラバンとBCの燃料は薪だった。BCでは毎日2人のポーターがベタルトリまで薪を拾いに行った。照明には、BCで石油ランプ、C_1以上はローソクを使った。

トランシーバー

ソニーの500ミリワット4台・100ミリワット4台持って行ったが、100ミリワットは使用不能だった。500ミリワットでも大きな尾根のかげになった所では入らないこともあった。BCではアンテナを張り、感度を良くした。

リエゾン支給品

二重靴・オーバーズボンをデリーの登山用具店で買って与えた。キルティングコート・ロングスパッツ・ピッケル・ゴーグルなどは日本から持って行った。靴はデリーで買うと安い。リエゾンが良い人だったので支給品については全然文句がでなかった。

ポーター支給品

ポーターのアレンジはCox社でやったので私たちはノータッチだったが、BCには6人のポーターを置いてC_1への荷上げ・ベタルトリへ薪とり・コックなどとして使ったので、軍手・ゴーグルを支給し、シュラフを貸してやった。ヘッドランプの予備を用意すればよかったと思う。

その他

バツーラII峰隊よりの購入・ヌン隊との共用、そしてデリーデポ品の借用と合理的方法により、多くの装備を整えたのだけれど、中には使用不能のものがあったり、紛失したものがあったりで日本での計算どうりにはいかない。先発の荷作りなどがめんどうになった。

ほとんどの装備類は日本の冬山程度で充分だった。

食　糧

隊員　角　田　不　二

食糧は角田・飛田が担当した。具体的に準備にとりかかったのは、4月にはいってからである。梱包が6月中旬の予定になっていたので、2ケ月半程の余裕があった。

計画の立案にあたってまず考えたのは「荷上げ管理に手間取らないようにすること」であった。それはこの登山が極めて短期間に事を決しなければならないものであり、現場では悠長な品目調整などしていられない状況が予想されたからである。

その為には、朝・昼・晩すべてをあわせて何人日分かを1ボックスにする総合レーションシステムが、ベターではないかと考えた。そうすれば各キャンプの滞在人日数にあわせて、何処へ何ボックス荷上げすればよいか計算するだけでよく、現場では何も考えないで済む。

では何人日分を1ボックスにすればよいか？これは荷上げし易い重量にすることを、最優先して決めるべきである。遠征隊の食糧は常識的に1人1日1kgと云われている。私はこれにやゝプラス？して、1.1〜1.3kgと考えた。何故プラス？したかというと、隊長から隊の性格を考えて、ある程度質の高い食物を用意するように云われていたからである。そうすると最も荷上げし易い10kg内外の重量にするためには、8〜9人日を1箱に納めるのがよいのではないかということになる。その頃タクティクス試案として、3人1組1パーティによる行動ということが、云々されていたので、それでは3で割り切れる9人日分という結論になった。

但し、この総合レーションシステムにも欠点はある。第1に梱包時までに全てを完成させなければならない為、調達を全て国内によらねばならないことだ。これは経済的合理性に著しく背反する。ビスケット・缶詰などはインドにもよい製品がある。第2に融通が効かないことだ。

しかし、これらのことは冒頭に掲げたファクターを最優先させる為に、敢えて儀性にすることにした。C_1 以上の滞在日数が非常に短い為、さほどの障害にはならないだろうと考えた。また第2の欠点に対しては、レギュラーボックスの他にサプリメンタリィボックスというのを用意し、この中に特にうまいもの（嗜好品的なもの）のみを詰めるように工夫してみた。

なおBC食は現地食主体で、調味料と若干の補充食を国内調達というオーソドックスなスタイルとした。

この線で試案を作り、関東地区集会にはかった。皆あまり興味ないのか、一言の文句も出ず、試案はあっさりと承認された。ただ隊長が、「うまいものを食わせろよ。」と繰り返し言うのみであった。"うまいもの"と言われるのが一番こまるのであるが、だいたいにおいて食糧係というのは、こういうものであろう。

献立については一々記さない。大方の遠征隊と大差がないからである。まあ並のレベルよりはましなものを用意したつもりである。試案を若干是正して原案を作り、これを5月の富士合宿で実際に運用してみた。この時もおおむね好評であった。

合宿が終わるといよいよ調達活動に入った。飛田隊員と2人で忙しく動きまわったのも、今は良い思い出となっている。米類は全て岩手の日高食品からワンタッチライスを取り寄せ、漬物・佃煮類は埼玉の酒井甚四郎商店から調達した。その他の品目は殆ど水戸市の吉岡商事から問屋卸しの値

段で融通してもらった。水戸での調達は飯島隊員および茨城県庁山岳部の桧山氏にも協力してもらい、大いに助かった。乾燥野菜類は東京シャモアスポーツからやはり卸値でわけてもらった。あと若干のおちこぼれ品は近くのスーパーマーケットで購入した。だいたい6月初旬までには、すべて角田宅に集荷完了した。

この後飛田も泊り込みで、2人してレーション作りに励んだ。八畳二間が足の踏み場もなくなる程の量で品目を調整し、必要人日数に量を調整し、ビニールパックしてひとつずつ箱に納めていく作業はさすがに骨がおれた。すべてを完了したのは、野中宅での梱包予定日の前夜であった。

実際の運用はどうだったろう。反省してみると、まず腐敗品目が2つあった。甘納豆とサラミである。甘納豆は湿ったものを採用したのが間違いであった。そのほうがうまいだろうと思ったのだが、これは乾燥したものでなければ、長期の保存には耐えられない。サラミは食べやすいようにとの配慮から、小さなスティックサラミを使ったのが間違いである。これは真空パックされていない。ソーセージ大の大きなものならよくパックされており、腐ったという報告は聞いたことがない。

ボックスの使用に際しては、基本献立は殆ど守られず、中にあるもののうち、うまいものからなくなっていくという現象が見られた。その為後から来た者は、ろくな物が食べられないという弊害が生じた。100％基本献立通りに食べろ、というのも融通がなさすぎて無理な話だが、ただこのあたりの判断は程度問題であって、隊員の理性を期待するしかないように思う。偉そうなことを書いているが、一番理性のない食べ方をしたのは、誰あろうこの私である。呆れた食料チーフもあったものだ。

品目に関しては、塩せんべいのようなものが食べたかったという声があった他は、特に注文らしいものはなかった。

総体的に見て、2～3の失敗はあったものの、大人数による7,000 mの短期速攻登山の食料としては、おおむね妥当な線をいっていたのではないかと思っている。

最後に協力していただいた方々、特に調達に際して紹介等をいただいた多くの方々に心から御礼申し上げる。

GHE 78に参画して

次の大いなる夢のために

野　中　和　雄

次期の大いなる遠征のために体験をつんでおこう。そしてまだ見ぬヒマラヤに行きたいと思ってから久しい。自分の育った山岳会は岩登りが主体であり、2度のヨーロッパ行ではグランドジョラス北壁等の登攀であった。マッキンレーは、確実に頂上に立てるという点で選んだ山だった。そして、今回のトリスルへの参加だった。77年の2月に結婚して、4月には10年勤めた会社を変え、12月に計画に加わってから忙しくなった。関東地区集会その他の集まりが多く、山へ行く機会が少なくなってしまった。御岳合宿・富士山合宿などで全国から集まったメンバーとチーム作りをした。6月には泊りで梱包、仲間とも仲良くなってきた。事前集録の原稿作り・東京検討会・郡山での先発隊打合せなどあり、その間に子供ができてますます忙しくなってきた。54日たった子供を家に置いて、デリーに向った。デリーでの仕事も終え、トラックでリシケシからジョシマートまで行く道路の悪さにはビックリした。いつトラックが濁流に落ちやしないかと心配だった。キャラバンは、ポーター達とのんびり歩き楽しかった。ベースキャンプも全員そろったときの食事どきなど楽しかった。山ではなるべく高々度の経験をしたいと思っていたが、6,690 mどまりだった。C_1 に2日、C_2 ・C_3 に各1日泊り、ルートのトップには1度も出られなかったし、いかにも物足りない登山行動であった。大人数・短期間しようがなかったかな。先発・後発をやり、実務の点では大いに勉強になった。18人の仲間達とも仲良くなれた。皆良い人たちだった。これからも山へ行き・本を読み今回の貴重な経験を生かしてアンデス、ヒンズークシュ、ヒマラヤ8,000 mのジャイアンツを目ざしたい。山の本にうずまり、山を語り、グラスを傾けるときが最高に幸せだ。そんな環境・仲間を作り、夢を育てていきたい。

もう一度行きたいヒマラヤ

鈴　木　節　男

一度はヒマラヤへ行ってみたい。岳人であれば

だれもが夢見ることであろう。

私にとってこの夢は、ＨＡＪのトリスル遠征によっていとも簡単に実現しました。このような企画には私も大賛成であり、今後とも多くの人々にヒマラヤを登るチャンスが与えられることは喜ばしいことだと思います。

私は北海道からのただ一人の参加者であり、地理的条件から隊員の皆さんと話しをする機会が少なく、また梱包等もすべて東京周辺の隊員の方々におんぶする格好になってしまい、迷惑をかけてしまいました。

私も計画段階から梱包・発送にいたるまで自分の手でやってみて、遠征の準備というものをもっと苦労しながら勉強しなければならなかったのですが、それらを十分に消化しないまま遠征が終ってしまい残念でなりません。これらの経験が今後飛躍につながるものだと思います。そして今後のヒマラヤ登山学校の隊員の選考にあたっては、隊員の地域性を重視して企画した方がスムーズな運営ができると思います。

最後に、インドという国へ行ってみての感想ですが、確かに貧しい人間が多いのですが彼らの目は澄んでおり、自分に与えられた人生を精いっぱいに生きぬいて行くんだという強い生命力を感じました。もう一度行けるチャンスがあれば是非行きたいものです。

楽しかった無名峰への３日間

畠　山　秀　男

初めての海外遠征、漠然とはしているが、一つでも多くの事を体験してみようと思い、遠征に参加した私だが、高度障害で寝込む事まで体験するとは思ってもみなかった。自分としては、貴重な体験をしたものだと思うのだが……。

私の場合トレッキングではなく、登山を通じてヒマラヤを経験してみたいと思い、遠征に参加したが、ＢＣにばかり長くいたので、ヒマラヤ登山をしたという実感があまり湧いてこない。それでも無名峰に向った３日間は楽しい登山が出来、6,100 mの小さなピークでも経験できた事は良かったと思う。高度障害に悩まされ、８ミリ撮影も考えていた通り出来ず残念であった。しかし、地方にいる私にとって多くの人達と知りあい、そして一緒にヒマラヤ登山が出来たことは、良い思い出になったと思っている。

かけがえのない経験

飯　島　孝　夫

この遠征を終えて感じたことは、第一に今までヒマラヤというものが自分にとって夢の存在であったものが、身近に感じられるようになったことである。第二にヒマラヤ遠征というものは、単に頂上に行くためのものだけではなく（もちろん登頂することも目的であるが）行こうと決心し、そのためにトレーニングをし、準備することが遠征の始まりであり、成田を出発し、現地に到着し、デリーでの生活やキャラバン中、登山期間を通じすべてが遠征であったように思える。まして私の場合、初めての遠征であったために強くそう感じたのかもしれない。そしてこれは、私の人生においてかけがえのない経験をしたように感じる。

幸いにも私はトリスルⅡ峰に登頂できたが、それにもまして私にとって貴重なことは、18名の隊員はもとより、現地のリエゾンオフィサーを始め、ポーター達など数多くの友人を得たことである。

毎日々バスにゆられて行った道、キャラバン中のこと、つらい荷上げに毎日を送った登山期間、ベースキャンプでののんびりした休養、どれをとっても私にとって良い思い出となった。

これからもこの経験が私の山行においてはもちろん、人生においても大きなプラスになるように思う。また、できるならもう一度ヒマラヤへ行って見たい。それも気の合った仲間と数人で行って見たいと思うのである。

碧い空　仲間たち

角田不二

もともと高所トレーニングのつもりで参加したこの遠征については、当初から次期計画のためのプロセスとしか考えていなかった。しかし終ってみると、なかなかどうしてこれはこれでひとつの完結したドラマであったという感懐を禁じ得ない。とにかく実にいろいろなことがあったのである。隊の中枢にあった亀井兄の死、通関問題、ガルワール入山禁止問題、洪水と土砂崩れによる輸送の遅れ、病人続出、重症者のヘリによる救出etc……。これらひとつひとつの障害が身にふりかかるたびに隊はそれを必死で払いのけ、道を開いていった。その過程の中で私は実に多くの貴重な経験を積み、多くのことを学んだ。現在はもう次の遠征の準備にとりかかっているが、トリスルの経験が今後大いに役立つことはまず間違いない。

貴重なものはもうひとつある。この遠征をとうして、気のおけない楽しい仲間たちと出会ったことである。そのうちの何人かとは、次の遠征でも苦楽をともにするであろうし、また国内の山でザイルを組もうと云ってくれる仲間もいる。

山ヤにとって財産とは何であるか？　金や家など縁のない我々にとって財産とは、充実した登攀と苦楽を共にできる仲間の存在以外にはあり得ない。

今回の遠征は、山自体にはさしたる困難もなく、むしろ簡単に登ってしまった感もあるが、それ以外のファクターにおいて私は満足させてもらっている。ガルワールのあの碧い空と18人の仲間たち、それから、ルイやチョープラやアジュもそれぞれ忘れ難い人たちだ。今後も生命の続く限り数多くの遠征を実践していくつもりでいるが、いついかなる遠征の場にあっても私は、“人”を大切にしていきたいと思っている。最後に稲田隊長他すべての隊員諸氏、とりわけ２人の美しい女性隊員（私の美的センスを疑いたい人は疑って結構、ただしそいつは仲間と見做さない……？）に心からなる感謝の意を表することによって、この大真面目（？）な感想文を締めくくることにする。

日々　断想

安中秀子

9／14。夕刻、ラタ部落まで酒買いに行く。案内してくれたポーターのおかげだろうが、皆やさしかった。帰り道、彼は、インドの人は男も女も粗末な物を着ているが、日本人はいい物を着ている、などと話しかける　私には適切な返事ができない。貧しいことを、そうでないと言えないし、そうだと言い切るのも抵抗ある。言葉の不確かさを利用して、とぼける位がせいぜいだった。

9／16。私達より遅く着いたポーターなど、1人もいない。だいたい気ままな行動が多すぎる。もっときちんとしたペースで歩くべきだ。それに、隊長不在の時には、代って次々にリーダーシップをとれる人がいなければ、今日のように隊が離れた場合は、身動きがとれない。はたして自分はどうであろうか？

9／23。気力のない者、体力のない者、セルフコントロールのうまくいってない者。自分もたかが6,000ｍ位で、頭が痛いとか、体がだるいとか、ねごとの多い日が続いた。

9／25。同じに成田をたってきて、ＢＣに入っただけで不調になった人がいる。だから私はC_2まで登れて、Ⅱ峰を目指せるだけでも幸せなのかも知れない。もっと、もっと多くを求めて、たくさん、たくさん幸せになりたい。よくばって、よくばって生きたい。

9／28。身体右半分に冷気を浴びながら、Ⅱ峰へ登っていった。コルから上はまろやかな雪原で、雪面は柔らかく、くるぶしまで沈んだ。山頂に立った。思った程の感動はなかった。デヴィスタンやP.6648が、ちゃちに見えた。自分の位置をずらすと、周りの景色が、こんなにも違って見える。今まで本当にわかっていただろうか、これから理

解できるだろうか、ふり返るとI峰が大きかった。

マイペースの7.000m

中岡　久

山を始めた頃は夢想だにしなかったヒマラヤ。そして山へ行くようになってからは憧れ続けたヒマラヤ。そのヒマラヤへ今秋行く事が出来た。しかも7,000 m峰の一角に立つ事が出来た。素晴らしかった、良かったというより他の言葉は見当らない。

しかし出発前は誰でもがそうだと思うが、多くの不安があり、恐れがあった。それは第一に初めてのヒマラヤ登山だということ、第二に7,000 mという高度だということ、第三にこの隊が一般公募による隊だということに対する不安・恐れであった。はたして自分は初めてのヒマラヤへ行ってわずか半年余りしかつき合いのない人たちと7,000 mの高峰に登れるだろうかということであった。しかし、行くんだと決心してしまったら、あとは何とかなるさと思うようになってしまったから不思議なことであった。何もかもが初めての経験なのだからじたばたしても始まらないと思ったからだ。もちろんうまくいくようにと多くの努力はしたつもりであるが。そして、結果としてはそう思ったことがうまくいった一つの要因ではないかと思っている。つまり、登山そのものがそうだと思うが、特にヒマラヤなどという日常性から離れたところへ行くにはそういう考え方も必要なのではないかということだ。

高度に対しての不安がやはり一番強かったが、これも日本で考えるだけではどうにもならないわけで、先の如く何とかなるさという方式であった。そして高度の影響が出たと思われるのはキャラバン中のダランシ・パスへの登りの時とC_2～C_3間の時で、これが高度障害の一種なのかなと感じたが、それ以外は割と快調であった。結局、全般的にはまあまあだったわけで、少し拍子抜けしたくらいだった。マイペースでいったのが良かったのだろう。

初めて組んだメンバーということで個々の問題ではいろいろあったと思っている。しかし全般的にはまとまっていたのではないかと思っている。ただ、今回の場合は期間が1ケ月という短期間だったことと、トリスルという山を考えた場合においてはまとまっていたのではないかと思うわけで、それ以上のこととなるとどうかという不安はあるが。一般的に言って、HAJのような"みんなのヒマラヤ"という形での公募による隊員募集は多くの問題を持っていると思う。例えば参加者の意識の問題とか、指揮命令のこととかで。しかし、今回の場合はそこまで行く前に登山が終わってしまったということで表面には多く出なかったのだと思っている。ともあれ、こういう形でのヒマラヤ登山は多くなるだろうし、なるべきだと思っているが、より良い方法を積極的に見つけていくべきだろう。

自分にとっては初めてのヒマラヤ登山が7,000 m峰の登頂となって残ったのは本当に幸運であり、うれしいものである。そして、それ以上に実際にヒマラヤに接し、インドに接し、人間に接したことは貴重なものである。これをステップとして次には自分なりのヒマラヤを考え、実施していきたいと思う。これが最後だとは決して思いたくないものである。

高度障害のこと

北川勇人

ヒマラヤ登山で最も重要な一つの要因は、高度障害であると思う。そこで私は隊員の健康調査、あるいは疲労調査が必要と考えた。そしてドクターの野島さんと相談した結果、健康調査カードだけを作成し、実施することにした。というのは今回の遠征が非常に短期間であることを考えた結果だった。またドクターとは帰国後、脈拍数・呼吸数などのグラフを作成し、それがどのように高度と関連しているか調べようという話もあった。し

かし、毎日全員が提出するはずの健康調査カードはほとんど提出されず、グラフ作成は不可能となった。そこで蛇足とは思われるが、私の個人的な高度障害の経過を報告しておくことにする。

3,686 mのラタ・カラクに一泊した時に始めての高度障害を感じた。しかし、軽い頭重感と息苦しさで行動には支障なかった。

4,750 mのＢＣに最初に泊った時、やはり次の朝、次の症状があった。頭重感・息苦しさ・全身倦怠などでその日の行動が危ぶまれたが歩き始めたらすぐ直ってしまった。

5,150 mの C_1 から 5,850 mの C_2 へ始めて登った時、今回の遠征で一番ひどい高度障害になった。私の日本での安静時脈拍数は60、呼吸数は20だが脈拍が100、呼吸が32にもなってしまっていた。症状としては頭痛・頭重感・全身倦怠・せき・息苦しさ・食欲不振・行動中のねむけなどがあった。しかし、なんとか自力で下山（C_1 まで）したらすぐ直ってしまった。

C_2 から 6,400 mの C_3 へ登った時はあまり症状は無いが、息苦しさが一時的にひどかった。

6,690 mのトリスルⅡ峰アタックの時は症状は無かったが、歩くのが遅かった。

忘れ得ぬ人々

飛田和夫

今、タバコを吸っている。日本には無い変ったタバコ、インドのビリー。お土産に持帰り職場の人達へ。香りが良いとか悪いとか、タバコの葉だとか柿の葉だとか……。１本のタバコから会話が生まれる。

彼等もそうだった。差し出す１本のタバコから互いに笑顔が出、会話が生まれ、キャラバン・ＢＣでの生活は楽しさが増加する。会話といっても日本語とあやふやな英語と現地語、そして身振り手振りであったが。その彼らは、キャラバン中に露営地から故障者への助っ人、非常時には夜中の行動、ＢＣから連絡のため夜を徹してかけ下った事など……。私達のために良く働いてくれた。

私達は彼等の働きと、私達自身の調査・研究・トリスルという目的に向かう行動意識が実を結び、目的を達成する事が出来た。目的が達成された時の感激はひとしおだった。

いろいろな面について、興味と不安とを持っての28日間の短期遠征だったが、深く興味をもっていたのが高度障害だった。数多くの文献で知識は得られるが、実際自分の場合はどうなるのか。頭痛・はきけ・首すじの重苦しさ・登行の苦しさ・チェンストーク現象？・正常な意識とそうでない意識が入混った現象等、高度の影響と疲労によってと思われる症状を自分自身の体で体験してきた。それらは、28日間のトリスルを目指しての準備・行動を通じ、今後の基礎にして行かねば。

ジョシマートで、私達のバスを見送るハイポーターの１人が目を赤くしていた。キャラバン・ＢＣでの食糧の指示をしていた私に、トビタサンといって食糧の世話をもしていた彼だった。握手を交せばジーンときてしまった。

トリスルを通じ全国各地の18人の人達と、そして、より多くの人達を知る事が出来た。

ビリー、インドの香りが漂っていた。

職をすてたけれど

釣部恵子

遠征が終ってすでにふた月。登山中の苦しかったこともみな「忘却のかなた」に忘れ去られ、楽しかったことばかりが美しい思い出として残っていこうとしている。それでも時折、山にはいっていた日の１日１日の行動を断片的にではあるが振り返り、こと細かに思い出してみたりする。

今回私たちが目指したルートは、7,000 m峰に続く未踏のルートとは思えない位、ルートとしては易しく、高度な登攀テクニックを要求されることもなく、ただ雪面を登ることのみで、ほとんど問題はなかったように思われる。天候や雪崩等の外的条件を除けば、問題は高度順化だけだった。

入山・下山のキャラバンを除けば、実質の登山期間10日間という極めて短かい期間に 7,000 m峰をやるのだから、その間の行動内容は見ずとわかってくる。順化に失敗すれば登頂できる見込みはまずない。だから多少の無理は覚悟の上だったし、また、苦しいのが当たり前なのがヒマラヤ登山であると思っていた。しかし、実際、BCにはいってからの行動は苦しかった。毎日の荷上げ、ルート工作という一連の作業が進められていくなかで、私もわずかばかりの荷を背負ったが、次第に高度をかせぐに従い、下痢・はき気・頭痛等、それなりの障害が出はじめた。順化が追いつかないまま、身体は思うにまかせず、さほどの荷上げも出来ないまま、他隊員と共に上部キャンプへ上がっていった。結果的にはトリスルⅡ峰の頂上に立つことができた。遠征は、あっという間に終った。「ヒマラヤに来て荷上げの出来ない者は頂上に立つ資格はない、やはり体力だ」と、つくづく思う。でもやはり、まともに順化してコンディションの整った男性隊員にはもとよりかなわない。ただ遠征のお荷物にならず、頂上を踏むことができたのは、他ならぬ隊長並びに隊員皆さんのおかげと、感謝している。

日本を出る前に、隊員の中で私1人職を捨ててきたわけだが、結果としては、やはり行ってよかった、と職にありつけない今でもそう思っている。

今後の展望としては、今回の遠征で得た経験を布石として、低くてもよい、自分の力量に合った山を、やはり女性同志でやりたいと思っている。私の希望である。それに向けて、次の新しい計画への原動力にしたい、そう考えている。

心に刻んだヒマラヤ

今井清和

短かい期間であわただしい毎日でしたが、日本では味わえぬ色々な体験が出来たことは、貴重であった。5億5千万人が住む広大なインド、バイタリティあふれる街の人々、市外に出ると1日中バスで走っても、ほとんど変らぬ風景、そんな大きさの中で営々と働く人々の姿が、強く目に写った。日本と異なった風土と数千年の歴史の中で、風俗・習慣・物の考え方・行動様式など、我々が知らない深みと生活の知恵があるのだろうと思った。

登山行動中は、上部キャンプ間の雪原歩きが頭に焼きついている。高度の影響か、暑さか、気力不足か、ザックを投げ出し横になると動くのがいやになった。Ⅱ峰の登頂は夜明けの少し前で、着いてまもなく鳥が翼を広げたようなトリスルⅠ峰が黄金色に染まり、ナンダ・デヴィが遠く冷たく輝いた。太陽の光がさした瞬間は荘厳なまでに美しかった。冷たい風の中、広い頂で何も思うこともなく、ただ寒さに震えながら周りの山々を心に刻みつけた。

海外登山など数年前までは夢だと思っていた。ヒマラヤ、ヨーロッパ・アルプス、その他外国の山の写真を見たり本を読んだりして楽しんでいたが、身近かなものではなかった。しかし、3年前にエベレスト方面をトレッキングして以来、本当に登ってみたいと思うようになってしまった。実際に高所登山を体験して、体力はもちろん、精神力・忍耐力がどんなに大切か、改めて感じさせられた。また、体調作りのむずかしさなど、自分の体で感じ取ってきたことは、良い経験になったと思う。帰国してからガルワールの山・ヒマラヤの山々について見直している。

いつの日か、また、海外の山を登りに行きたいと思っている。

新たな出発のために

和田誠治

ヒマラヤは、私にとって長い間の憧憬の的であった。しかし早く憧憬の山から現実のヒマラヤ遠征へと準備を進めたく、数年前より個人的準備と研究を進め、カラコルムへの遠征が決った。しか

し若輩の私は、準備に夢中になるばかりに隊員予定者1名を遭難死させてしまった。この事件のために、隊は分裂した。一部の者は翌年インド・ヒマラヤのムルキラをめざした。また、一部の者は遠征計画から退いてしまった。私は、自分たちの力の無さを痛感して新たな遠征計画にも参加せず、また、憧憬のヒマラヤから手をぬく事もできなかった。その後数年してカラコルム遠征計画の時の隊員が1名ネパールヒマラヤをめざす事になった。私は、これらの隊員との会話の中から自分のヒマラヤ遠征を進めようと思いたった。それは、絶対に無理の無い登山であった。その時の自分にはどこの山を登るという事よりは、遠征を体験して次の大きな遠征にその体験を生かす事であった。

そんな時ＨＡＪを知り、ＨＡＪのヌン計画が自分の目的に合ったものであるので参加を決めた。

トリスル遠征は、以上の様な意味があったので私は多くを望まなかった。私のトリスル遠征は成功であった。それは帰国後日毎に確認されている。

ヒマラヤ遠征に際して色々な予想を持ったが、自分の考えとヒマラヤ遠征の現実があまり異ならない事に驚き、必要な事はかならず準備しなければいけないと認識し、多くの反省もした。

登山中、私はリエゾンと行動を共にしたので、リエゾンという役職にも認識を新たにした。ポーターも、これ程までに隊に貢献してくれると思わなかった。彼らの素直な発言や行動は想像を上回るものがあった。全体に現地の人々や生活に対して、私は好感を感じえたし、風土も肌に合う様な感じがした。

私の登山感から言えば、登山は過程も重要だと思う。登頂だけに登山の意味があるわけでなく、登山過程で生じる多くの問題をいかに解決して行くか、それが登山だと思うから。遠征後多くの問題が有ったとしても、それはより良い登山ができる準備で良い事だと思う。ただ、問題があるならそれらをはっきりさせて次の遠征の助けにすべきだと思う。そのような意味でトリスル遠征は、遠征というものを初めて体験する自分に多くの意味があった。

早くトリスルでの体験を生かす新たな遠征を実行したいと思う今日このごろである。

みんなに支えられて

真島博志

むし暑い夜のニューデリーに到着した時やっと来た、来ることが出来たのだという喜びと、これから始まる登山活動に対する不安が心の中で複雑に交錯する。だが来た以上は山に全力でぶつかり無事に帰国するのだとあらためて自分に言い聞かせる。

だが、実際はどうだったのだろう。無事トリスルⅡ峰に登頂することが出来、元気に帰国することは出来たのだが。

ベースキャンプまでのキャラバンは想像以上に苦しかった。頭痛・天候不順・異国という意識から来る精神的不安等が、順化促進のために持つ15kgの荷を重くしたが、エーデルワイスの美しさ、素晴らしいベタルトリ・ヒマール、雪煙を上げるナンダ・デヴィ、デヴィスタンに続くP. 6648等に目をやるたびに、疲労もどこかにいってしまう。

ＢＣ到着。これからの登山活動を思うと心がはずむが、正直なところバテたという気持の方が強かった。前期の登山活動期間（休養日まで）は、高度障害のせいか頭痛・食欲不振・睡眠不足に苦しみ、最後には、ダウンしてしまい、皆に大変迷惑をかけてしまった。

後期（休養日以後）は、前期の体調の悪さがうそのように回復し、無事Ⅱ峰に登頂することが出来たのだが、自分自身の行動を振返ってみると満足出来る点が少なかったように思われる。その1つが、前期にダウンした時、皆にサポートされC1に下山する時の私の心理である「どうして皆が私をサポートなどしてくれるのか、自分は少々バテているだけなのだ、1人で下山する力・気力もあるのに」。皆に心配・迷惑をかけておきながらなんと自分勝手な心理だ。しかし、私はあの時そうでも自分自身に言い聞かせなければ自分の糸が切れそうな気がし、自分に対して変に強気であったような気がする。みんな、どうもありがとう。素

直な気持・精神的余裕・体力等、色々と自分に不足しているものをみんなから学ぶことが出来た遠征であった。これを必ず次のステップにし、再度、自分に挑戦したいと思う。

感謝をこめて

高原　修

まず第1に、私達がやろうとしたのは登山であって、それ以外の何ものでもない。ただ、対象がヒマラヤであり、隊員が全国からの集まりであった点が今迄の登山との相違したところである。未知の高度への期待と不安や、メンバーシップへのそれは経験がないだけに大きなウェートを占めた。

私自身、今回の国内でのメンバーシップのあり方に失望を抱いた時もあったが、この種の問題は、各人の自覚と積極的に取り組む姿勢があれば、結果的にはメンバーの結びつきを強くするという良い結果も出てくると思う。真剣に悩めばそれだけ精神力も強くなるわけである。

国内でのトレーニングと現地でのキャラバンには計画的にのぞんだ。貴重な体験を通じてアドバイスして下さった方々の意見を充分に生かそうと思い、特にキャラバン中は多少のトレーニング不足を補う積りで、自分なりに負荷を工夫し、速度もいろいろ変えてみたりした。そのために、自分で何かと用事を作り全力で臨むという方法だった。やるだけやって動けなかったら仕方ないと思っていたが、あくまで自分のペースにもとづいての事であった。私は幸運に恵まれてⅠ峰に登頂する事が出来た。しかし、任務のために止むなく高度順化の遅れてしまった人たちの尊い働きのあったことを忘れたくない。いつも変らぬ笑顔や、黙々と任務に励むその姿に、安らぎを覚え、どれほど勇気づけられていた事だろう。

私にこの大きな喜びを与えて下さった方々に心から感謝している。私は登山に来ていながら、登山以外の真実をも学んだと思う。

私のトリスル

西田茂夫

私たち本隊は、9月中旬成田を発ち、空路デリーに着いた。インド北部は、100年来の大洪水で道路は寸断されていた。

日本を発って、9日目にBCに着いた。私はダランシ・パスよりディブルゲータ間で高度障害にかかり、多少体の調子が悪かったが後は順調にいった。

9月19日より登山行動が開始された。初日の荷上げは不安と新しく高度をかせぐ為に大変であった。C_1・C_2のキャンプ建設と荷上げが終り2日間の休日となった。しかし、私の友人である桑原氏の体調が良くなく、キャンプ入り後3日目にヘリコプターでの救出要請にポーターが行ったとの連絡をC_1からC_2の荷上げの時に聞き、大変心配であった。

10月24日、ヘリコプターがBCに来て桑原氏を救出しジョシマートの病院に行き、少し元気になったと聞き安心した。

25日の朝のミーティングの席上、28日・29日のアタック隊の編成発表があった。私はトリスルⅠ峰のアタック隊として隊長より呼ばれた時、不安と期待とで胸の中がいっぱいだった。26日よりC_3の荷上げの開始である。新しく高度を得る時大変苦しく、頭がズキズキと痛む。C_3を6,400 mのところに建設し、28日にはアタックである。28日午前1時起床、前夜は緊張の為あまり熟睡は出来なかった。朝食をし、前夜準備した装備の点検などをし、2名ずつアンザイレンをして急傾斜面を登って稜線まで行った。稜線をさらに登って行くころ、ようやく陽がさして、眼下にヒマラヤの山々が見えた。ピーク直下の急傾斜面を私は中岡さんとスタカットで登り、待望のトリスルⅠ峰に登頂した。

頂上はなだらかな丘という感じがした。南稜より来ると、正面にナンダ・デヴィが見える。やは

りガルワールのボスという感じがした。頂上に20分程度いて下山した。私は下る時、急斜面をトラバースする時スリップをし、一瞬ひんやりし別に怪我などなく、ひと安心。午後3時頃 C_3 に到着し、C_3 を撤収しなだらかな雪原を下降、午後9時に C_2 に到着した。

私の今回の遠征は、初めての経験と反省のあった登山であった。

驚きの日々

桑原健一

やっと来た。

広々と開けた地平線に胸をおどらせ、何もかもに目を見はり、一路、ジョシマートまでつっきる車にゆられながら、インドというよりは外国へ来たという思いがつのる。

ポーターの元気がよいというよりも、少しやけ気味のナンダ・デヴィの歌を耳にしながら、急登にクソッと、自らを励まし、歌声に近づいて行く。

白銀を一層強調するかの様に、それを見せ隠れする山々。吸い込まれそうな青い空を走る白い雲や、デヴィスタン、ナンダ・デヴィの雪煙に感激し、まわりの山容に圧倒されながら、惜しみながら景色を変化させてゆく。

あらためて、ポーターのすごさに舌をまきながら、よく働く彼らに感心し、BCまで何とか、かんとかついてゆくのがやっとであった。

何ともすごい。

すごいという感じは、行動することによって一層身にしみてこたえる。

驚くことばかりのなかで、驚きついでではなかろうが、病院の中で目がさめた時も驚いた。

結局、高山病という事で落着いたが、ようやく元気になったきょうこの頃、世話になったドクター・隊長・仲間・協会の方々はもちろん、他の多くの方々に御心配・御迷惑をおかけし御礼の言葉もありませんが、この機会を、おかりして、御礼を言わせていただきます。

本当に色々ありがとうございました。

体が本調子になり、再びといっても遠いことではないのですが、山へ登ることを夢に見ながら、ガンバリ続けたい。

遠征で得たもの

八嶋　寛

1975年にネパール登山した私は、3年を経過して、新たに3つの目的を持って今回の登山に参加した。登山隊の全般的な知識を学ぶこと、高所の経験をするために7,000 mを越えること、自由に旅行できるようになることなどである。

7月21日大阪空港を発ったのは、ヌン隊の先発隊員としてである。

9月初め、ヌン隊が無事終了した時点でトリスル隊の隊員となったわけであるが、それには、ヌン隊の沖隊長とトリスル隊の稲田隊長の親身なる配慮のおかげであった。というのは、私はヌン終了後、トレッキングで同行するつもりでいた。ヌン登山は成功であったけれど、私は7,000 mを越えることが出来なかった。それを配慮して、隊の準備にも全く加わらず、しかも、面識のない私を隊員として処遇してくれたのだった。ラッキーにも私はふたつの登山隊に参加することになった。

しかし、私は、トリスルの頂上へは行くまいと自分に言い聞かせていた。参加できるだけで充分であったし、サポート役に徹すべきだと思ったからであった。結果的には頂上まで行き、自分の意志もかなり適当なものだと感じている。最大の収穫は、良き友を多く得たことでした。私も以前に地元からの登山隊に参加し、その後も再びと計画を考えており、それは今でも変っていない。

しかし、それは異った価値が今回の両登山隊の方法にはあったと思っている。

10月18日、トリスル隊の残務を終え、私は、3っめの目的のため、アムリッツァー行きの列車へ乗り込んだ。その後、6ケ国をまわり、12月11日に成田へ着いたのであった。

回　想

リエゾンオフィサーのこと

副隊長　野　中　和　雄

ＩＭＦで、リエゾンのくるのを今やおそしと待ってる所へ軍隊のトラックでやってきた。ハンサムな好青年であり、彼とならうまくやって行けそうな気がした。彼の名前は、ムケシュ・チョープラ（25才）で、ラダックのレーのパラシュート部隊にいるという。ヨークホテルで、装備の整理を彼に手伝ってもらっているときにトランシーバーが出てきた。貸してくれときかないので貸してやった。彼女とデリーの市内で使用していたとのことで、警察官につかまり、あわててホテルにやってきた。使用許可書を見せて警察官に帰ってもらった。そのときの彼の言うのがいい。「警察より軍人の方が上だから」とさかんに説明する。デリーからリシケシまでは、トラックの荷台に乗り、歌を唄い大さわぎしながらの旅であった。ほんとうに良い友達でガイド役だった。

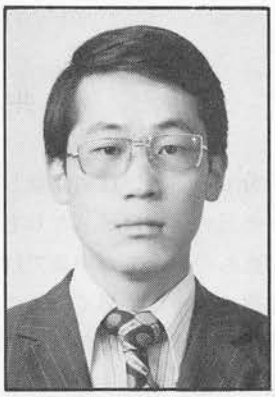
リシケシから先の道路が、大雨のため土砂崩れが多数でており、道が通れないとわかると、ここではホテル代など無駄だから俺の家に行こうと誘ってくれた。好意に甘えて一夜泊めてもらった。アルバムを見せてもらったが常に生徒の代表で表彰されている彼であった。のちに、彼にどういうことでＨＡＪのリエゾンになったのかと聞いたら、「今年度の登山隊の中でＨＡＪ隊がNo.１である。リエゾンの中では俺がNo.１である」という。

彼のアルバムからなるほどと感じられた。キャラバン中はほとんど一緒に歩き、休憩のときは30分寝かせてくれという。彼には、あのキャラバンルートはつらかったようだ。そして早起き（５時30分頃）が苦痛のようだった。デリーを出てからキャラバン中も、ＢＣ入りしてから、それこそ毎日彼女に手紙を書いていた。よく書くことがあると思う。本隊がくるまでには全隊員の名前を覚えようと、名簿を見てはどういう人か、どんな所に住んでいるかとか質問してくる。特に２人の女性がくることを非常に楽しみにしていた。本隊がＢＣ入りしてから隊員の顔を覚えるのが早かった。

キャンプファイヤーのときなどは名司会ぶりだった。良くしゃべる男で、隊員たちと大変仲良かった。とっつきにくいというリエゾンのイメージはまったくなかった。トリスルへ登れなかったのは残念だった。あと１日でも早く高度順化出来ていれば登れたことだろう。とにかくいい仲間だった。いつの日か、また、彼に会いたい。

追　悼

亀井建樹



私たちの登攀隊長および渉外担当として、その活躍を期待されていた亀井建樹氏は、1978年6月20日カラコルム・ハチンダール・キッシュ（7,163 m）において遭難死亡した。

彼は所属する山嶺登高会カラコルム登山隊々員としてハチンダール・キッシュに参加したのち、インドにわたり私たちと合流し、トリスルに向う予定であった。

遭難は、頂上を断念しＢＣに撤収するその日に起った。まことに神のいたづらとしか思えぬような痛恨事である。

隊員の多くにとって、亀井建樹氏とは実に短かい期間のつきあいでしかなかった。けれど彼が私たちの隊に与えた影響ははかり知れないものがあり、この隊の性格を作る過程で彼が果たした役割は高く評価されるものがある。

幸い私たちは、彼の意志をついでトリスル（7,120 m）の登頂に成功し、全隊員が無事に遠征を終えることが出来た。

いまこの遠征の報告書を編むにあたり、ありし日の彼をしのび、その死を悼みたいと思う。

いつも他人を思いやり、優しさの中に限りない山への斗志を秘めて私たちを導てくれた彼。

もう再び私たちの前にあらわれることがないなんて、今でも信じられないが、時の流れは冷厳にその事実を押しつけてくる。

息子　建樹のこと

亀　井　正次郎

息子　建樹はヒマラヤの山からもう帰ってこないのか。次男　建樹は子供の時より現在まで、愛称をタンチャンといった。私の好きな呼び名である。

タンチャンはヒマラヤの山で遭難して死んだという。4月のはじめに元気な姿でヒマラヤに出発したが、6月20日に遭難死したという。遺骨は帰ってこない。遺品は帰宅した。葬式は終った。法名瑞光院大岳霊樹居士という。

いまだに私は、建樹の死を信じられない。信じたくもない。今でも家に、亀井建樹あての手紙と郵便物が送られてくるが、建樹からの手紙はこない。世の中、戦後いろいろと価値感が変ったが、息子が親より先に若死するという不幸、これ以上の不幸はない、というのは今も昔も変らないだろう。こんなことがあってはならない。

建樹の残した家族は両親と兄との3人。親たちは老境に入る年になり、息子はますます一人前の人間に成人した。
平均以上の体力と健全な思想の持主となって親を安心させてくれそうな時期であったのに。
親バカと言われても親には自慢の息子であり、親を大変喜ばせてくれた息子であった。
その建樹が親を裏切って先に死ぬ子とは思いもよらないことであった。人生でこれほど最大の不幸はない。

両親が嘆き悲しめば、兄の秀樹は「子供は親のものではない」という。その通りだと思う反面、私は親のものであるとも思う。

建樹がヒマラヤに遠征の時、万一の事があった場合、親不孝者といわれるのが一番嫌いな言葉だといい残して旅立ったという。
勝手ないい分であるが、建樹が悲しむようなことをいうな、と兄の秀樹は怒ったりもする。
建樹の残したものの全てがいまでは涙の思い出となった。建樹の大バカ、早く帰ってこいといいながら、位碑の前で涙を流す毎日である。
これでは建樹も喜ぶまいと思い直したり、早く帰って来てくれないかと念じたりする。早く建樹が喜ぶような毎日にしたいと思うのである。

今の若い人は、なにか命を粗末にしている傾向があるように思われる。命をもっともっと大切にしてもらいたい。息子　建樹だけでもないような気がする。若い人は死んではいけないと当たり前の事を思う。

建樹は小さい時から楽しい良い思い出のたくさんある息子であった。なぜどうして27才の若さで死んだのだろう。

建樹は私が27才の年に病院で生れた。私は子守り歌を知らないので、"荒城の月"を赤ん坊の建樹に唄って聞かせた。だから、建樹の子守り歌は"荒城の月"の歌である。
2人の子供たちは、私の唄う"荒城の月"の歌でいつも寝た。ついこの間の事のように思われる。
"荒城の月"の歌は建樹の小さい時の思い出につながる。

小さい時から、いつも元気のよい子でなまキズが絶えなく大食漢であった。幼稚園、小学校は野球、中学はバスケット、高校はサッカーと熱中し、何にでも全力投球した。大学は家庭教師と学生運動そして登山に熱中して社会人になった。
思い出は限りない息子である。
成人した建樹には親がいろいろと教えられるものがあった。息子に教えられることは非常に嬉しい

ことであり、かげながら喜んでいた。また、親が息子に教えることも嬉しいことの一つである。知っている事・教えたい事・いろいろなものを教えようと思っているうちに、本人はいなくなってしまった。

将来、建樹と親子で一緒に仕事をやる話もした。約束もしてあった。いままでに私の仕事を何回か手伝ったこともあり、楽しみの深い吾が子であった。建樹の机の上でいまこれを書いている。机の引き出しをあければ、息子の書いた新旧の手紙などがある。筆まめな子供で、旅先からよく便りをくれた。息子からの手紙はどんなものでも嬉しかった。今となっては建樹からの便りは2度とこない。

建樹の残したもの・古着のシャツ・いろいろな持ち物・本人が書いた書類などみな懐しくてたまらないものばかりである。

去る9月10日に出発したヒマラヤ・トリスル遠征隊の稲田隊長は、出発前「隊員全員が無事に成功して帰国できるよう、みんなで建樹君に頼みました。建樹君が全員を守ってくれるので安心して行きます」といって出発された。

隊員20名のところ建樹の死亡により、19名であった。

やがて現地から便りがきた。「いろいろな困難と病人の続出などで多難ではあったが、目的地のヒマラヤ・トリスルⅠ峰7,120 mの登頂に成功した。建樹君の遺品も頂上7,120 mの地点にしっかりと埋めました。そして冥福を祈りました。隊全員無事です。これは建樹君が全員を守ってくれたおかげです」との稲田隊長の便りであった。

そして10月7日　稲田隊長以下全員19名無事に目的を果たして帰国された。

建樹は良い友人・知人が非常に多い子供であった。建樹はいつまでも友人・知人に忘れられないでほしいと思う。友だちの胸の中に、お世話になった人びとの間にいつまでも生き続けてもらいたいと願っている。建樹は不帰の人となっても、お世話になった友人・知人の御恩は、いつまでも忘れないと思う。

このつたない雑文は、息子　建樹が短い命ではあったが多くの良い友人・知人に恵まれ、多くの方々に大変お世話になって、幸せな一生を送らせていただいたそのお礼の目的で書きました。

建樹は良い友人を持ち、幸せな息子でありました。

最後に、2度と私のような家族の悲しみを作らないよう、このような悲劇を2度と起こさないよう、みなさま1人ひとりにお願い申し上げるものです。

吾子は帰らず

亀井節子

悲しきと人に云へるはまだ浅き
　悲しみなりと思ふ我かな

魚等食いたしと云ふ文残し
　吾子は帰らずヒマラヤ遠し

山に逝きし吾子を想へば縁もなき
　山の写真も涙して見つ

外国に眠れる吾子のレリーフの
　写真を見れば胸ふさがりぬ

吾子のそれに似た足音の玄関に
　近づき来れば身を固くして待つ

ヒマラヤはあまりに遠しせめて汝に
　近づかんとて槍に登りぬ

夜具の衿に顔を埋めて泣き居たり
　ただ悲しみの胸をみたして

神の御手の中で

隊長　稲　田　定　重

9月18日　ガルワールの山々が見守る中で私は、故亀井建樹登攀隊長の死を悼む追悼の辞をのべていた。全隊員とリエゾンオフィサー、ポーターたちが頭を垂れて君のことをそれぞれの想いで考えていた。舌足らずな私の言葉でも意は通じたのだろうか。リエゾンオフィサーのCaptain Chopraは逢ったこともないながら目をしばたかせていた。

「亀井君、今私達はトリスルのベースキャンプに着きました。周囲には美しいガルワールの山々が広がっています。この美しい山々を君と共に登りたかったのに、君はもういない。何故、君はトリスルへの途中でたおれてしまったのか、私達はきっとトリスルの頂に立つだろう。なぜならば、君のたましいが私たちを必ず守ってくれると信じているからです。私たちは、君の写真を頂上の万年雪の中にうめてくるつもりです。ヒマラヤは神々の住むところと聞いています。ナンダ・デヴィの女神に見守られながら、どうか安らかにねむって下さい。君の夢であったカンチェンジュンガ縦走は、私たちがきっと実現します。

亀井君　では永遠にさようなら。」

私たちのトリスル遠征には、短期間とはいえ、さまざまな苦労があった。ヘリによる隊員救助はその最大なるものであった。ヘリよ、早く来てくれ！　ただ祈るしかない時、私は君のことをしきりに思っていた。

東京出発前夜、君のお父上を入院先に見舞って出てくる時、お父上はわざわざ玄関まで見送ってこう言ってくれた。「建樹がついていますから皆さん絶対に大丈夫ですよ」

「亀井君がついている」ヘリ救助に限らず、苦境に立った時、私はいつも君に励まされ、心を鎮められていたように思う。また、「こんな時、君がいてくれたらなあ」と何度思ったことだろう。そして15名のサミッターをお土産に全員一人も欠けることなく日本の土を踏むことが出来た。

「これで亀井さんにも顔むけが出来ますね」隊員の誰しもが言っていたことである。

君をこの遠征隊の中に引きこんだのは私であった。78年2月のことであった。語学にすぐれた才能を持つ君は、困難なインドの渉外を必ずこなしてくれると信じていた。それに対して君は、「カラコルムからガルワール、そしてカンチェンジュンガ偵察と一年に三つも山に登れるのは最高の幸せです」と喜んで引き受けてくれたものである。

その後の君の働きはめざましかった。「パッケージ登山には絶対にしない」という信念で、先頭に立ってチームづくりを進めた。関東地区集会の中心になり、隊員の融和と企画推進にあたった。折しも、山嶺登高会カラコルム登山隊員としての出発を目前にして、どれほど忙しかったろうかと思うとその情熱には頭が下がるのである。3月28日が君との最後の出会いであった。前日、関東集会のあと壮行会を盛大にやり、更に浦和の君の家に来て、午前2時まで気炎を上げたことがなつかしく思い出される。4月3日　先発としてカラコルムに向けて発った君は、忙しい中よく手紙をくれたものである。私だけでなく隊員全員に出してくれ、遠く離れていても同じ隊のメンバーとして心は離れなかったのである。ハチンダールでは極めて困難な登攀を強いられながらも、君はその先頭に立ってルートを開いて行ったと聞いている。

それが何という運命のいたづらか、登山活動の最終日にアクシデントが起こるとは。

6月23日午後9時　東京の隊員から知らせてきた君の遭難のニュースは、たちまち全国をかけめぐり、全隊員が悲しみに打ちひしがれたのであった。私達の隊にとって、君が欠けることは全くの痛手であった。そして、何よりも君の快活さが隊の中から消え去ったということは、遠征の楽しみの大きな部分を奪い去られたようなものであった。けれど、隊は悲しみの中から立ち上り、困難を排

除して山に向い、登り、そして帰ってきた。その成果は、君がめざしたものより小さく、また、不満足にちがいないだろうが、何とか顔むけできるのではないかと思っている。

想うに、私と君とのつき合いは、わずか2年間にすぎなかった。1976年5月に仙台で会ったのが最初である。その時、私と西郡が出した1978年カラコルム計画の転進案を見事覆えし、バツーラに向わせたのは君の熱情あふれる決意であった。

それから、君はカンチェンジュンガ計画の文字通りの柱となり、老いさらばえた考えにおちいりがちな私たちをいつも叱たし、ふるい立たせてくれたものである。

1977年6月には、バツーラⅡ峰偵察隊長として、たった2人でカラコルムに向い、見事その任を果たした。しかし、行程途中で肺炎に倒れた君は、私との国際電話で、完全に日程を消化できないで帰らなければならない残念さに泣いてわびていた。責任感の非常に強い人間であったことが印象っている。

わずか2年間のつき合いとはとうてい思えないほど、私は君から感化をうけ、君は私の要請にいつも打てばひびくようにこたえてくれた。育った山の環境がちがうとはいえ、共鳴することは驚くほど多かった。

君が去った今、カンチ計画は80年偵察を間近にひかえて現実に動き出している。非常に困難ではあるが、私たちは必ずやりとげるという確信に満ちている。君の死は、私たちの陣営にとって、筆舌に尽せない損失であったけれど、残された者は君の死を絶対に無駄にしない決意で取組んでいる。トリスルは終った。トリスルに参加した幾人かは、今度はカンチェンジュンガに向って進んでいる。トリスルがそうであったように、カンチでも私たちを確実に守ってほしい。私たちの心に君はいつまでも生きつづけるだろう。どうか、この報告書を読み返しながら、私たちのことをいつまでも記憶していてほしい。

ヒマラヤは神々の住むところというではないか。岩と雪は君がもっとも愛した存在であった。そのふところにいだかれて神々の御手の中で安らかにねむってくれ。さようなら、亀井君。

鮮烈な想い出

隊員　角　田　不　二

6月24日午前5時10分頃だったと記憶している。まどろみの中で、私は電話の受信音を聞いた。時ならぬ電話にやや緊張を覚えたが「トリスルの隊荷の件かな？」などとチラッと考え、受話器をとった。案の定、稲田隊長の声。こんな時間に電話をくれるのは、この人以外にない。が、次の瞬間、いきなりぶん殴られたような衝撃に襲われた。

「亀井君が死んじゃったよ。」……時間が止まったような空白……そのあと何をしゃべったのか記憶にないが、受話器を置いてから、山嶺登高会の在京本部、沖氏、野中副隊長とたて続けにダイヤルをまわした。しかし、それらの動作は何が何だかわからぬままのもので、私が本当に彼の死を認識したのは、それから数時間後だった。突然悲しみが襲ってきたのだ。誤報だと思いたかった。誤報であってくれと何度も祈った。何に祈っているのか自分でもわからなかったが、ただ祈らずにはいられなかった。しかし、その後の経過は全く情容赦のないものでしかなかった。私は天を恨んだ。

初めて亀井岳兄に出会ったのは、この年の2月、冷たい北風の吹く日だった。宇都宮市で開かれた日本ヒマラヤ協会 Expedition 研究会の会合の席で、彼は初対面の私にいきなり旧知のような態度で話しかけてきたのである。私は彼の笑顔を見て「何んて人なつっこい人だろう。」とその時思ったのだが、その"人なつっこさ"こそ亀井建樹という人間の魅力の原点であったように思う。

彼と接した殆どすべての人が、知らず知らずに彼に魅せられ、彼のペースにはまり込み、いつか彼とともに"何か"をやることに喜びを見い出す

ようになる。私などは早くも2度目の対面でそうなってしまった。2度目というのは、その2週間程後、トリスルの打合わせの為に北浦和で会った時のことである。トリスルの話は30分程で済んでしまい、そのあと飲屋に席を移し、81年にＨＡＪが計画しているカンチェンジュンガのこと、Exp研や山嶺のこと、登山界の話題、さらにはお互いの抱負からライフワークの構想に至るまで、6時から始まって延々深夜の12時まで話し込んだものである。本当にすばらしい人に出会ったと、私はその時、心底そう思った。

その後、彼がカラコルムに出発するまでの間に5～6回会っているが、最初に出会った日から数えてもつきあった期間は、僅か2カ月足らずにすぎない。そんな短い期間にこれほど鮮明且つ強烈な印象を残していった人物は、今日までの私の人生の中で彼以外にない。彼と一緒に行った山と云えば、トリスル隊の合宿の御岳山ぐらいのもので、ついに山行らしい山行はともにすることなく終ってしまった。「幕岩、いつでもつきあってやるよ。」唐沢岳幕岩に多くの記録を持っていた彼は、よく私にそう誘いかけてくれた。でもあの頃彼は3つの遠征をかかえて多忙を極め、それどころではなかった。しかし、彼はどんな情況の中にあっても、誰に対しても、いつも前向きにザイルを組む意志があることを表明していた。岩登りが下手であろうが上手であろうが、また所属がどこであろうとそんな事は彼にとって問題ではなかった。真剣に山と取り組む意志がありさえすれば、それでよかったのである。私は鈍重な人間だが、その点についてだけは、彼から及第点をもらっていたらしい。

彼の死が確定的なものになった時、私は隊長の稲田氏からトリスルで彼の代行を務めるように云われた。もとより私などに彼の代行が務まる筈もないと思っていたが、そんなことを云っていられる事態ではなかった。その頃、ガルワール・ヒマラヤには外国人立入禁止令が出ていたのである。トリスルはすでにⅡ峰で許可を取得していたが、ＩＭＦから計画変更を求められることは、目に見えていたし、カトマンズ在のH･A J会員菊地氏も「可能性は50％」と云ってきていた。頼りの亀井氏はすでになく、私は能力もないのに非常な重荷を背負い込む形となった。亀井氏の葬儀は、真夏の太陽が照りつける中で執り行なわれたが、その時私は彼の霊前に誓った。「トリスルは絶対に成功させます」と。遠征は幸いにも、稲田隊長・野中副隊長他多くの隊員諸氏の活躍によって、一応の成功を見た。9月28日、私はⅠ峰の頂上で彼の写真を見つめ、「亀井さん、登ったよ」そうつぶやいて、遺品の眼鏡とともに埋葬した。瞬間、彼のあの人なつっこい笑顔が甦ってきて、私は絶句した。そして、その笑顔にカンチェンジュンガがオーバーラップした時、私はまた新たな誓いをたてた。私の人生の中にキラリと光芒を放って通りすぎた岳兄亀井建樹、きっと私はあなたの思想と行動の後を継ぎます。

どうか安らかに……合掌。

トリスルとその周辺

稲田定重

トリスルは広大なナンダ・デヴィ内院に隣接しているために、初期の登山史はナンダ・デヴィ内院への試みに深くかかわっている。
けれど、それとのかかわりを述べることは煩雑であり、また副次的位置づけともなる。ここではトリスルを主体とする純登山について記し、併せて周辺山群（ナンダ・デヴィを除いて）の登山年表を掲げることにとどめたい。

トリスルは、その独特の山容からヒマラヤ登山史の中でもユニークな位置を占め、それなりの役割を果たしてきた。

今回の私たちの「登山学校」も過去にトリスルが果たしてきた位置の中にまさしくはめこめるものであろう。

パイオニアたち

トリスルは、最初に登頂された7,000m峰であることは広く知られている。初登頂後も恐らくパミールの山を除いて最も多く登られた7,000m峰であろう。1977年現在で第24登までなされ、70名以上が頂上に立っている。
ナンダ・デヴィの南西にあり、西南面から見ると仲々鋭い山容をしているが、北面からは鈍重な山である。

Ⅰ峰（7,120m）、Ⅱ峰（6,690m）、Ⅲ峰（6,008m）に分れている。

トリスルとは「三又の鉾」という意味である。西南のラニケット方面から見るとⅠ～Ⅲ峰が立って三つの鉾のように見える。ナンダの女神を守る山である。

1907年　ヒマラヤの先達であるロングスタッフは、ブルース、マムら当代のベストメンバーを揃えてリシ・ガンガを遡上した。

彼らは、時期が早過ぎて雪のためリシ・ガンガに下ることが出来なかった。一旦、ラタに戻って休養をとり、今度は北方のバガニ氷河からヲマニ氷河に越えて、ラマニでリシ・ガンガを横断した。

ラマニのすぐ下で平凡な流れをもって合流してくるトリスル谷をつめてトリスルに向った。

格別の苦労もなく、6月5日　氷河末端の草地にキャンプを張った。（多分ベタルトリ・ヒマールから流下する氷河支流を渉った背後の草地で“デオラリ”と称するところ）　ここをベースとして更にサイドモレーン沿いに進み、トリスル北稜に取り付いて二つの前進キャンプを出した。
6,100m地点でひどい風雪におそわれ、テントも悲惨な状況になったので一度草地のベースに引返した。ブルースは、足を痛めていて後発で来ることになっており、またマムも体調を崩していた。

6月11日　ロングスタッフはガイドのプロシェレル兄弟とグルカ兵のカルビールを伴ってBCを出発し、5,320mにキャンプした。

翌日は午前5時30分に出発し、スムーズに高度を稼ぎ、午後4時に頂上に達した。
この日、彼らは高差1,800mを往復するという速攻をなしとげた。7,120mは、それまで登山者が到達した最高々度であった。

ヒマラヤの初期登山は、このようにアルプススタイルが多くとられている。しかし、彼らの多くは、他の山域を彷徨する中で結果的に初期の高度順化を獲得していたことを見逃せない。

第2登も少人数の速攻によってなされた。
ピーター R. オリバーは、単身で現地ポーターを雇っただけの全く身軽ないでたちであった。1933

年6月16日、トリスル氷河左岸4,500mにBC設営。18日C_1(5,180m) 19日C_2(5,800m)と設けた。予定では、6,400mにC_3を設けアタックするわけであったが、サポートが来ないので予定が狂ったのである。

3人のポーターをC_3予定地に待機させ、ポーターのケザール・シンと共に一気に頂上をめざした。ブレーカブルクラストと地吹雪に悩まされながらも、彼らは午後2時45分登頂に成功した。
激しい吹雪だったので早々に頂上を後にし、極度の疲労の未にC_3予定地に着いた。彼らは、更に気力をふりしぼってその日のうちに5,180mのC$_1$まで下ってしまった。高差1,300mを登り、2,000mを下るというすばらしい行動力であった。

オリバーの名はヒマラヤの初期登山史の中でしばしば見うけるが、当時インド駐留の英軍将校にはかなりの行動の自由があったようである。

以下、トリスルの登山史をあげると別表のようになる。実に多くの登山隊が入っており、今後も引続いてリザーブされている。
エベレストとはまた違った意味で、この山は今後何登されようとも訪れる隊が絶えないであろう。
トリスルの良い点は、少人数・短期間で7,000mの高度を体験できることである。

Ⅱ峰の初登、他

Ⅱ峰(6,690m)およびⅢ峰(6,008m)の登頂は、1960年のユーゴ隊によってなされた。
S.ケルスニックを隊長とする7名の隊は、当初ナンダ・デヴィを申請したがトリスルに許可が下りた。南面からのトリスルはこの隊が初めてであった。

グワルダムでピンダール河と分れ、カイル川をつめて源頭のビダルグロア氷河上にBC(3,900m)を建設した。
アタックキャンプは、Ⅱ峰とⅢ峰のコル(約6,000m)の直下に設けた。
ここからⅡ峰に向けてスノードームをトラバースし、稜線上にC_3と上部にC_4を設けた。
6月5日早朝、マコータとクナヴェルが稜をたどって頂上に立った。

Ⅲ峰は、C_2からマコータとクナヴェル、隊長のケルスニックが加わって6月7日に登頂した。途中、40mの氷壁を越えるだけで後は容易な緩傾斜が頂上まで続いていた。

トリスルを中心として、ロンティ氷河の周辺には6,000m峰が数多くあり、アプローチも比較的容易なので、手軽な小遠征の領域となっている。

西南面のナンダキニ河側は切れ落ちており、ここからは興味あるルートをとることが出来る。
ピンダール河流域は、インド政府も良いトレッキング・登山のエリアとしてPRしている。

(この稿は、一部分「世界山岳地図集成ヒマラヤ編『トリスル』稲田定重　学習研究社」から引用した。)

主要文献(初期登山史に関して)

Longstaff, T. G.: Six months' Wondering in the Himalaya, AJ, No. 173, 1906,
: The My Voyage, John Murray, 1959 (望月達夫訳「わが山の生涯」白水社 1957)
Mumm, A. L.: Five Months in the Himalaya. Edward, 1909 (丹治節雄訳「ヒマラヤの五ケ月」あかね書房1968)
Oliver Peter R.: Dunagiri and Trisul 1933, HJ, Vol. 6, 1934,
Kunaver, A. : Yogoslav Expedition to Trisul Group 1960, HJ, Vol. 22, 1959～60
深田久称 : ヒマラヤの高峰Ⅰ「トリスル」白水社 1973
黒田孝雄 : 山岳第32年3号「ガルワール・ヒマラヤの登山年譜」日本山岳会

トリスル登山年表

年	国名	隊長名	登頂月日・登頂者		摘要	文献
1951	インド	G. シン	6.23	G. シン、R. D. グリーンウッド、ダワ・トンダップ	インド最初のヒマラヤ遠征隊 このあとラタバン(6,166m)第2登	HJ 1952 P 112～114 AJ 1955 P 257
	フランス	R. ウォルター	6.24	R. ウォルター、ニマ・テンジン		Alpinismus 1957 P 57～62
1956	インド・西独	K. F. ブンショウ	6.13 6.17	K. F. ブンショウ、ギャルツェン F. ヒューバー、A. ヒューバー	前夜C2発ヒマラヤ最初の夜間登攀	HJ 1957 P 126
1958	インド	N. クマール	6.4	P. P. メータ、アン・ニマ		HMI News Letter No. 7
1964	〃	M. S. コーリ		試登		
	〃			女性隊		
1968	〃	R. タッカー	6.23	Miss. N. パテル、I. ハキム、S. デーブ、プー・ドルジェ	グジャラット遠征隊 大量16名登頂	AAJ 1969 P 451
			6.24	R. タッカー、S. デサイ、D. シェーカー K. パテル、M. バット、R. パテル、R. ペインター、H. パテル、P. ガンガディア、A. パンドシャ、B. シュララ、ニマ		
1970	〃	Miss. M. アグラワル	6.4	アグラワルと2人のシェルパ	ボンベイ女性隊	
	〃	H. シン	6.7	H. シン、M. シン、B. ラマ、H. ラマ アン・チョターレ	ITBP 隊	HJ 1970 P 197～200
1971	〃	O. P. シャルマ	6.6	O. P. シャルマ、シェルパ・ミングー	デリー山岳協会	HJ 1971 P 359
1972	〃	D. アムベガオンカール		試登		HJ 1972 P 201
1974	〃	B. ダッタ	9.21	S. ダス、A. セン、J. ミトラ、D. M. キンド、ニマ・ドルジェ、S. シン		
1975	〃	Lt. Col. N. クマール		スキー登山、陸軍、ITBP、BSF他選抜	スキー登山	
	西独		5.17	M. ビオック、L. ブットナー	無許可登山（スキーで下降）	HJ 1974～75 P 176
	アメリカ	M. クラーク	6.9	M. クラーク		AAJ 1976 P 525
	〃	P. トリンブル	9.4	F. トリンブル、B. カーソン、D. エメット	2週間の速攻、1人転落死	Himavanta 1975 Sept

年	国名	隊長名	登頂月日・登頂者	摘要	文献
1975	アメリカ		F. モーガン、H. ブルインジェス		
	日本	野田四郎	隊員4名で初の冬期7000m峰をめざしたが、積雪のためポーターが進まず		Himavanta 1975 Sept
1976	インド	Jamadar Lt. Col. N. クマール	5.17 D. シン、ビジャイ、ドルジェ・シェルパ	スキーで下降し、1時間でC_1へ	AAJ 1977 P255
			5.20 S. シン、B. S. バフナ、H. ドルジェ、D. R. シッワ、ナワン・シェリン		
	ユーゴ	T. サゾノフ	5.15 S. マレンク、A. グラッセル	ロンティ氷河から西壁ルートで新登頂 高差2,700m 斜度55°	AAJ 1977 P256 Himavanta 1976 Nov
			5.16 V. マチジェビック		
	西独	S. ハップファウアー	10.2 10.6 .リエゾンも登頂した。		AAJ 1977 P255～256

トリスル周辺登山年表

年	山名	標高	国名	隊長名	登頂月日・登頂者等	摘要	文献
1925			英		H. ラットレッジ、T. G. ロングスタッフ	踏査 トリスルとナンダ・グンティ	AJ 39 P71～79
1932			〃		H. ラットレッジ	Sunder Dhunga Khal(5,520)に達した	HJ 5 P28～32
1934	Maiktoli	6,803	〃	W. H. ティルマン	9.12 E. シプトン、アンタルケー	初登、内院南氷河探査中に登頂 ティルマンは体調を崩して登頂せず	E. シプトン「Nande Devi」
1944	Tharkot	6,099	〃	W. ノイス	6月初旬？ J. ローリンソン、W. ノイス	ムリットニィ氷河から 初登	AJ 1944 P403～408
	Bhauljuri (Maiktoli S)	5,922	〃	〃	W. ノイス（単独）	ノイスは前年にナンダキニ川の源流を探っている	
	Nanda Ghunti	6,309	〃	B. R. グットフェロー	試登 5,260mのキャンプの上で中止		AJ 1945 P202～205 HJ 1946 P96～100
1945	Lonti	6,063	〃	P. L. ウッド	試登 5,700mまで	（ナンダ・グンティとのコルまで）	HJ 1947 P44～52
1947	Nanda Ghunti	6,309	スイス	A. ロック	9月 R. ディテル、A. ロック、アン・テンジン	初登 ガンゴトリ山群での活動後	AJ 1947
1951	Mrigthuni	6,855	インド	R. D. グリーンウッド	試登 6,700mまで	トリスルの第3登成功後	HJ 1952 P112～114
1956	Bethartli H	6,318		K. F. ブンショウ	初登 他にムリットニィの6,000mまで	及び Devistan 試登	HJ 20 P126
	Mrigthuni	6,855		G. シン	中止（ディブルゲータで隊員が肺炎で死亡）		HJ 20 P126
1958	Mrigthuni	6,855	インド	G. シン	6.19		AJ 1958
1961	Devistan I	6,678	〃	G. シン	6.16 G. シンら7名 初登		AJ 1960 P390

年	山名	標高	国名	隊長名	登頂月日・登頂者等	摘要	文献
1961	Maiktori	6,803	インド	G. シン	6.21 G. シンら8名 第2登		
1963	Tharkot	6,099	〃	K. P. シャルマ	6.1 K. P. シャルマら5名 第2.3登	東稜から同日中に2パーティ登頂	HJ 1964 P184～185
1964	Mrigthuni	6,855	〃	Mrs. J. ダンシース	10.10 10.12 R. ベクワンら4名登頂	女性隊	HJ 1965 P 107～112
	Devistan Ⅱ	6,529	〃	Capt. N. クマール	6.24 ナワン・ゴンブ、ダワ・ノルブ	初登 ナンダ・デヴィ第2登後に登頂	HJ 1964 P 52～56
1969	Tharkot	6,099	〃	H. カパディア		試登	HJ 1969 P 123～129
	Tharkot	6,099	〃	S. チョーダリー		〃	AAJ 1970 P 195
1970	Bethartoli	6,318	〃	R. G. デサイ	6.4 R. G. デサイ 他	ベタルトリ・ヒマール(6352) 試登	HJ 1970 P188～196 AAJ 1971 P443～444
	Tharkot	6,099	〃	S. ボース			
	〃 Ⅱ	6,035	〃		初登 Tent Peak ともいう		
	Mrigthuni	6,855	〃	A. P. シン	10.4 A. K. シャルマら8名登頂	ベタルトリ南峰の試登も行う。	
	Bethartoli S	6,318	〃	A. P. バルワ	9.28 第3登	ベタルトリ・ヒマール試登	AAJ 1971 P444
1972	Tharkot	6,099	〃	Miss. S. ミトラ	試登		HJ 1972
	P. 5817		〃	P. チョーダリー	10.15 登頂 Tharkot の南		
1974	Devistan Ⅰ	6,678	〃	A. シャー	10.3 J. シン、K. バハドール	第2登	HJ 1973～74 P223
	Unnamed	6,468	〃	B. ダッタ	9.23 P. バネルジーら5名登頂(初登)	トリスル北稜上の無名峰、トリスルも登頂	AAJ 1975 P205
	Devitori	6,788	〃	H. カパディア	6.13 H. カパディアら4名 初登		HJ 1973～74
	Ronti Saddle		〃	H. サクセナ	9月 デリー山岳協会		
1975	Devistan Ⅰ	6,678	日本	渡辺正蔵	5.24 渡辺正蔵ら8名登頂（第3登）	全員登頂（リエゾンオフィサー含む）	同隊実行委員会「Devstan Ⅰ
	Nanda Ghunti	6,100	〃	杉本恭二	10.6 杉本恭二、市川豊 初登	信大	AAJ 1976 P526
	Mrigthuni	6,855	インド	S. バッタチャリア	9.21 N. ロイら 6名登頂		
	Devitori	6,788	〃	S. ゴーシュ	第2登		
	Tharkot	6,099	〃	K. M. ダス			
1976	Maiktoli	6,803	日本	近藤和美	10.12 両峰登頂後交差縦走を完成	東京都労山隊	岳人1977・1
	Devitori	6,788	〃	〃	マイクトリ7名 デヴィトリ4名		
	Devistan Ⅲ	5,977	〃	森田稲吉郎	9.2 登頂	長野県労山隊	同委員会「1976年ナンダ・デビー偵察報告」
	〃 Ⅰ	6,678	アメリカ	D. G. グレーバー	9.4 東面から1隊がⅠへ、他隊		
	〃 Ⅱ	6,529			がⅡ峰へ、翌日Ⅱ峰登頂メンバー		AAJ 1977 P 253
					がⅠ峰へ、それぞれ登頂延8名登頂		AAJ 1977 P 257
	Bethartoli S	6,318		R. ヤン	登頂		AAJ 1977 P 253
	Mrigthuni	6,855		M. D. H. メック	10.5 登頂		
1977	Maiktoli	6,803	日本	福力仁志	全員登頂	立命館大学山岳会 Panwari Dowar (6,663)を申請したが不許可で転進	
	Tharkot	6,099	〃	原 真	23名登頂 出発から帰国まで28日間	JAC 高所登山委員会主催	

お世話になった方々

（敬称略・個人的関係を除く）

インドサイド

在インド日本大使館
鴨原総領事　奥田一等書記官　小林書記官
バレーリー陸軍病院
Comdr. Jogindar Singh (Air India登山・トレッキング担当、インド・サセルカンリ遠征隊々長)
K. P. Kapoor
Cox & Kings (Capt. Swadesh Kumar, A. Y. Gonsalves、他)
Capt. K. S. K. Mani (Joshimath Army Base)
H. C. Salin (Predident of IMF)
Munshi Rum (Officer of IMF)
R. P. Sharma (Liaison officer of Italian Exp.)
S. S. Soni (Manager of Hotel York)
S. Hem Singh (日本語通訳・桑原隊員をフォロー)
Sqn Lors Yohan (インド陸軍軍医中佐)
Sqn Lors Ac Chopra (陸軍中佐・パイロット)
S. Rajagopalan (Staff Correspondent of The Hindustan Times)
Mr. Yashupa (Manager of Hotel Nanda Devi)
ジョシマート軍管区司令官（准将）

日本サイド

アド・スポーツ（近藤龍良・三浦高子）
青木洋（秀山荘）
安西憲一
岩手県山協ガルワール・ヒマラヤ登山隊
在日インド大使館
植竹清孝
Air India（秤井照和、他）
カメラの後藤（釜石）
亀井正次郎（故亀井建樹隊員御尊父）
外務省領事部二課（山本事務官、他）
外務省文化事業部文化二課（峯村事務官）
近藤和美（日本勤労者山岳連盟）
コイケ薬品KK（千葉）
国立千葉病院
山嶺登高会カラコルム登山隊（緑川広隊長、山森欣一副隊長、他）
HAJ Expedition 研究グループカンチェンジュンガ委員会（委員長　清水澄、他）
菊地　薫
さかいやスポーツ（東京）
酒井甚四郎商店（浦和）
シャモアスポーツ（東京）
中外薬品KK（名古屋）
富岡印刷所（福島）
KKトーモク（岩槻）
トモミツ縫工
長崎海外登山研究会（遠藤康治）
HAJカラコルム登山隊（隊長　西郡光昭、隊員伊藤満、他）
HAJカシミール登山隊（隊長　沖允人、他）
日通航空
野島和光堂（焼津）
花崎　洋
桧山　隆
富久浦酒造（東京）
増田秀穂
門司山岳会（厚地豊道、他）
吉藤商事（水戸）
吉沢製紐所（東京）

Twenty eight days in the Trisul

Sadashige Inada
The Himalayan Association of Japan

In 28th September 1978, we Himalayan Association of Japan (HAJ) Garhwar Himalaya Expedition climbed the Trisul Main Peak (7120m), Trisul 2 (6690m) and Unnamed Peak (about 6100m) on the north ridge from the Trisul Main Peak. Had a only ten days from established Base Camp.

We first planed to Nun(7135m) in August 1978 and obtained its climbing permission. But, that permission cancelled with unknown reason in December 1977 from Goverment of India. That case was gave a blow to our expedition. At once, we were dispatched to India Mr. Masato Oki the Directer of HAJ for obtain to climbing permission for the Trisul Main Peak. But refused that application allone's efforts.
That reason was already gave to the other expedition during Autum of 1978. Secondly, we requested to Trisul II, then obtained permission during from September to October in 1978. The expedition branches off in to two, becouse insisted was few members climb to Nun. So they were presented application to Nun.
Now they were obtained its permission on March 1978.

The HAJ Garhwar Himalaya Expedition 1978 were organized members as follows .
Sadashige Inada(Leader 38 years old), Kazuo Nonaka(Vice leader 29), Fuji Tsunoda (Climbing leader 25), Setsuo Suzuki (24), Hideo Hatakeyama (33), Takao Iijima (25), Hideko Annaka (28 woman) Isato Kitagawa (25), Keiko Tsurube(24 woman), Hisashi Nakaoka (28), Kazuo Tobita(32), Teruo Nojima(Docter 27), Kiyokazu Imai (33), Seiji Wada (29), Hiroshi Majima (23), Osamu Takahara (34), Shigeo Nishida (27), Kenichi Kuwabara (29), Hiroshi Yashima (28)
The Goverment of India appointed Captain Mukesh Chopra(25) as Liaison Officer. He attached parachute regiment stationed at Leh in Ladakh. He was excellent liaison officer and with all one's energy for our expedition.

Our expedition was organaized collected members from various place of Japan. The comon name was called "Himalayan Mountaineering Institute of HAJ". The HAJ was founded 1967, then had about 1000 members. Since 1971, we were enforced expedition as follows.
1971 Haramuk(climbed) 1973 Kanjeralwa(6612m First ascent) 1974 Lamjung Himal (6983m 2nd ascent) 1975 Rishi Pahar(6992m First ascent), Saf Minar(6911m First ascent), Bamchu(6303m First ascent), Nun (7135m Attempt until 7000m) 1976 Afghan Hindu Kush(some over 5000m peaks climbed) 1977 PK. Communism(7482m climbed) 1978 Nun(Climbed),Batura 2(7710m First ascent from the south face)
Now, I was climbed to Rishi.Pahar in 1975.

Toward the end of August 1978, we sent to India as advance party Kazuo Nonaka and Fuji Tsunoda for managiment of our expedition. We were much work for severe in customs malities. We sent all our luggage from Tokyo to New Delhi by plane on bigining of July. It was that luggage should arrive at New Delhi after five days, but did not passing customs after one month for difficult procedure. Mr. Kaoru Kikuchi was just during one's in Kathmandu for managiment of HAJ Kangchenjunga expedition 1980 and 1981. We called him and he flew to New Delhi on

15th July. He was with all one's energy for customs clear at our luggage.
On 7th August, all our luggage was transported from airport to Hotel Yolk at last.

During two weeks worked advance member for supply of equipment, foods and other arrangement by take support of Cox & Kings(Agent). Late in the evening of 3th September, our advance party were started to the Garhwar Himalaya. But be visited by flood after one hundred years a way the Hindustan plain and Garhwar hill area. They had so much troubles as ahead to hill. Everywhere cut to pieces road of along the Alaknanda River and be full to the brim with danger. At last, they arrived in Lata on 10th September.

On next day, they started journey to the Base Camp with 42 porters and 40 sheeps. Then after four days they arrived Base Camp. The caravan route was passing the Dharansi Pass and along the Rishi Ganga and so in to the Trisul Valley.
The Base Camp established Tridang left side of Trisul Glacier. Altitude was 4750m according to our altimeter. At this place past other Trisul party had set up Base Camp.

On 10th September, the main body for 16th members were started from New Tokyo International Airport by Air India 301 flight and arrived at New Delhi Airport on midnight of same day.
Next day, we were stayed be compelled to do. That reason was all closed road and railway from New Delhi to outskirts for big flood. Today, Inada was visited to Indian Mountaineering Foundation(IMF), Embassy of Japan and Comdr. Jogindar Singh for greetings. Late in today we informed opened Yamuna Bridge.

On 12th September, we started from Hotel York to Rishikesh by charter bus. But we were so late arrived to Rishikesh with road trouble for flood. Next day, we headed to Joshimath along the Alaknanda River but also so late like a yesterday by road trouble.
Next morning, we reached to Lata start point of approach march but could not start of caravan that reason missed of porter arrange.

On 15th September, we started approach narch from Lata to Base Camp with 50 porters and 120 sheeps. A sheep carryed 10 to 14 kgs by cloth bag with on the that back. The caravan was stayed Lata Kharak, Dibrugheta, and Bethartoli then reached Base Camp on 18th September.
In Bethartoli, Setsuo Suzuki be taken heavy ill and so we sent two porter to Base Camp. The advance party, Nonaka and Tsunoda carried down oxygen bombe from Base Camp to Bethartoli at midnight, but we were so rucky his ill was as return after two days.

On 18th September, we were arrived Base Camp along the left side moraine of Trisul Glacier. Then we set up 12 tent including a large mess tent ands maked a kitchen by stone. We employed two High Altitude Porter, three Kitchen Porter and three Base Camp Porter. Our High Altitude Porters name were Narain Singh and Gobinda Singh. Both porter who had cooprated with us very seriously during the period of our expedition.
The first time we had meeting in memory for Mr. Tateki Kamei. Mr. Tateki Kamei was climbing leader of the our expedition and so exllent climber in Japan, but he was died Mt. Hachindar Chish in Karakorum on 20th June 1978.
On 19th September, we began climbing activities to Trisul. Twelve members and two porters for establishment Camp 1 and loads up. And so we were set up the Temporary Camp 1 at eight of 5050m left side of Trisul Glacier.
Next day same members went up to Temporary Camp then that camp transfer where more than 100m high and mostly members stayed Camp 1(5150m). The route from Base Camp to Camp 1 was first through side moraine then go down to glaciers. That route was no difficulty but distance was so long, I thought so about six-half kms. The place of Camp 1 was end of east ridge from Trisul Main Peak.

On 21th September, Tsunoda and Yashima started Camp 1 eary morning for reconnaisance to branch glacier frow out from the between Trisul Main Peak and 2nd Peak. They were reached point 5950m in that glacier and so they found good place for Camp 2 at point 5850m on the snow platau in glacier. Other eleven members were lords up until to that point and

returned to Camp 1. Today Nonaka and Nojima went up to Camp 1.

Next day all the members of stayed in Camp 1 loads up a lot of luggage to Camp 2 and stayed this camp. The route was along the east ridge as no technical difficulty except part of hold fast to east ridge. At that time, Kuwabara changed for the worse the condition of a disease in Base Camp. I called to Doctor Nojima from Camp 1 to Base Camp by walkie talkie.
He was rush to the Base Camp and so arrived 11 : 00 am. He was treated with all one's might. His illness was taken diagnosed as Bronchitic. While I was decided requist to army base in Joshimath be sent of hericopter for his aid. So I sent Narain Singh to Joshimath Army Base by mutual consent between liaison officer.

Though next day not arrived hericopter.
The members of stayed in Camp 2 were went up to point about 6000m height then went down to Base Camp. The closed activities first step for acclimatization.

During after two days all the members were rest in Base Camp. On morning of 24th September, came flying hericopter to Base Camp at last. Kuwabara was lost no time brough to hericopter and so went down with Inada. Hericopter flying along the Rishi Ganga and arrived to Joshimath Army Base only twenty-five minute. Kuwabara was went to Joshimath Army Hospital as to temporary and so hericopter was once more flying to Base Camp carry with Inada and Narain Singh. The hericopter again accomdated Kuwabara from Joshimath Army Hospital and flew to Bareilly Army Hospital in north of New Delhi.

He was leaving hospital end of September and met to all the members in Hotel York. Now, he is completly restred in hearth.

On 25th September, Inada, Nojima, Wada and liaison officer advanced to Camp 1 for acclimatization with other two members and two porters. Next in the morning eleven's main body were started Base Camp for began to attack activities. They were rest short time with Camp 1 then after went up to Camp 2. Though stayed in Camp 1 two members went up to Camp 2. Wada and Capt. Chopra were go and come back from Camp 2 for accrimatization.

Hatakeyama and Suzuki started Base Camp climbed up to 5495m in north ridge from the Trisul Main Peak and established Attack Camp after returned to Base Camp.

On 27th September, all the members of the Camp 2 started at 4 : 30 am. In our plan of party organization as follows.

Trisul Main Peak Party Tsunoda (leader), Yashima, Tobita, Nishida, Takahara and Nakaoka.

Trisul 2nd Peak Party Nonaka (leader), Iijima, Annaka, Kitagawa, Imai, Tsurube and Majima.

Unnamed Peak 6100m Hatakeyama and Suzuki

The Trisul 2nd Peak party were holds set up the Camp 3 together attack of Trisul 2. But could not reach to summit for so long route and a lot of luggage. They were stoped where place of about 6400m then established Camp 3 in that place. The route from Camp 2 to Camp 3 were so long route, snow was soft and had some crevasses but no technical difficulty.

In Trisul Main Peak party Tsunoda and Yashima reached about 6600m Col of between Trisul Main and 2nd Peak for reconnaisance activities and maked route to Main Peak. Other members were carried up attack luggage to Camp 3. Inada, Nojima, Wada and Capt. Chopra went up to Camp 2.

On eary in the morning Hatakeyama and Suzuki started from Base Camp for the ascent to Unnamed Peak 6100. They were smoothly climbed up on snow slope of the north ridge and reached that summit. On the summit, they found the one's mark of predecessors.

On 28th September, an opportunity offers of ascent day. Today the weather was so bad since arrived in Base Camp. The snow fall continued since yesterday night and was blowing hard. Now fresh snow was 30cm deep covered on the route.
In all the stayed Camp 3 members started at 2 : 30 am. The out side was very cold and utter darkness. The Trisul 2nd Peak party be so afficted by many crevasses at below the col. The party was passed over crevasses area then reached on the col. The distance from this

point to the summit of Trisul 2 was estimated to be about 1000m, but this route was so deep snow. They were headed take by turn in russel a snow. At 6 : 00 am. they reached summit of Trisul 2. The summit was wide dome about at 600 square meter. They stayed 30 minuts on the summit then returned direct to the Base Camp except few members.

The Trisul Main Peak party also started Camp 3 at 2 : 30 am. They were so troubled with losed route for deep snow and darkness. They reached about 6700m height at 7 : 30 am. and I received word by walkie talkie, they said be all anxiety go ahead to summit for so bad weather. But I decided and indicated to then be continue to attack becouse I thought so weather is clear 'will not be long before. The snow was hard and south ridge was birgin route. The slope the ridge was about 30 to 45 degrees and ropes were no fixed in all the way. But we were lucky, weather is clear and could look upper part. They ahead completering in few imitation summit. The attack party reached 7000m at 9 : 00 am. and began to climb steepe slope of summit pyramid. The slope of the ridge was about 50 to 60 degrees. They were carefully climbed up with staccato climbing. Just 10 : 00 am. they were succeeded new ascent of Trisul Main Peak from the south ridge. The summit was small snow triangular. They could look wonderful view landscape of 360 degrees to the Kamet, Nanda Devi, Nanda Kot, peaks of West Nepal and other so many peaks. They were stayed in summit at 30 minuts for operated cellemony of summit. And so buried photo of Mr. Tateki Kamei in to eternal snow.

On one's way back was so difficulty and sliped one of member in traverse route but taken saved for secure of following member. However, Takahara had a eyesight obstacle in above the Camp 3. But he did the came down by singlehanded accept as support of other members. At 9 : 00 pm. they were arrived Camp 2 and accepted treatment hot drinks and soup by Inada Wada and Capt. Chopra.

Next day, all the members wers came down to Base Camp. This night, we operated success party with make a big fire. That party was very splendidly and be rich internatinal with join of Polish Expedition and Itarian Expedition.

On end of September, we were withdraw Base Camp and leaved for home.

In returning journey was with 39 porters. We arrived Lata only three days as during weather was clear and could look nice view of Nanda Devi, Bethartoli Himal and other famous mountains.

On 4th October, we were came back to Hotel York in Delhi. After two days started for return to Japan by Air India flight. On 7th October, main body were arrived New Tokyo International Airport. The some members enjoyed iourney of after expedition in Pakistan, Afghanistan, Nepal and various place of India.

The finished expedition with during only twenty-eight days as from start Japan until home comming to Japan.

あ と が き

◇　遠征は、レポートがまとめられた時点で終了するという。

私たちのガルワール・ヒマラヤ遠征は、隊の正式発足からちょうど1年をもって終りを告げたわけである。ふつう、ヒマラヤ遠征は、準備を含めて3年ぐらいを要するといわれる。

登攀活動が"短期速攻"であったように、矢のように流れ去る時日の中で「トリスルの1年」も、また、幕を閉じようとしている。

◇　このレポートに収録したいことは無数にあった。登攀活動に関する諸指標および物資に関する分析、トレーニング・登山学校システムの試論、速攻の位置づけと史的な考察・可能性等々……。

しかし、私たちの持ち時間ではまだ下書の域を出ていない。いつか、まとめられる時が来るであろう。

また、全員の生の声がもっと多く収録されてしかるべきだったと思う。

私たちは、遠征が終り隊が解散しても、かつて苦楽をともにした仲間としてのつながりを永続的に持とうと思っている。

どこかの山のテントの中から、幸いにして次の大いなる夢が築かれる機会が訪れた時、いったいトリスルとは何であったかがはじめて解明されるような気がする。

◇　この遠征に参加した多くの人間は、また、果てない高みを求めて歩き出そうとしている。

幾人かは、近い将来の8,000 mをめざして既に準備の渦中にいる。

ベルグ　ハイル！　仲間たちに幸いあれ　　（飛田記）

1978年12月

＜編集担当＞

飛田和夫　安中秀子

稲田定重

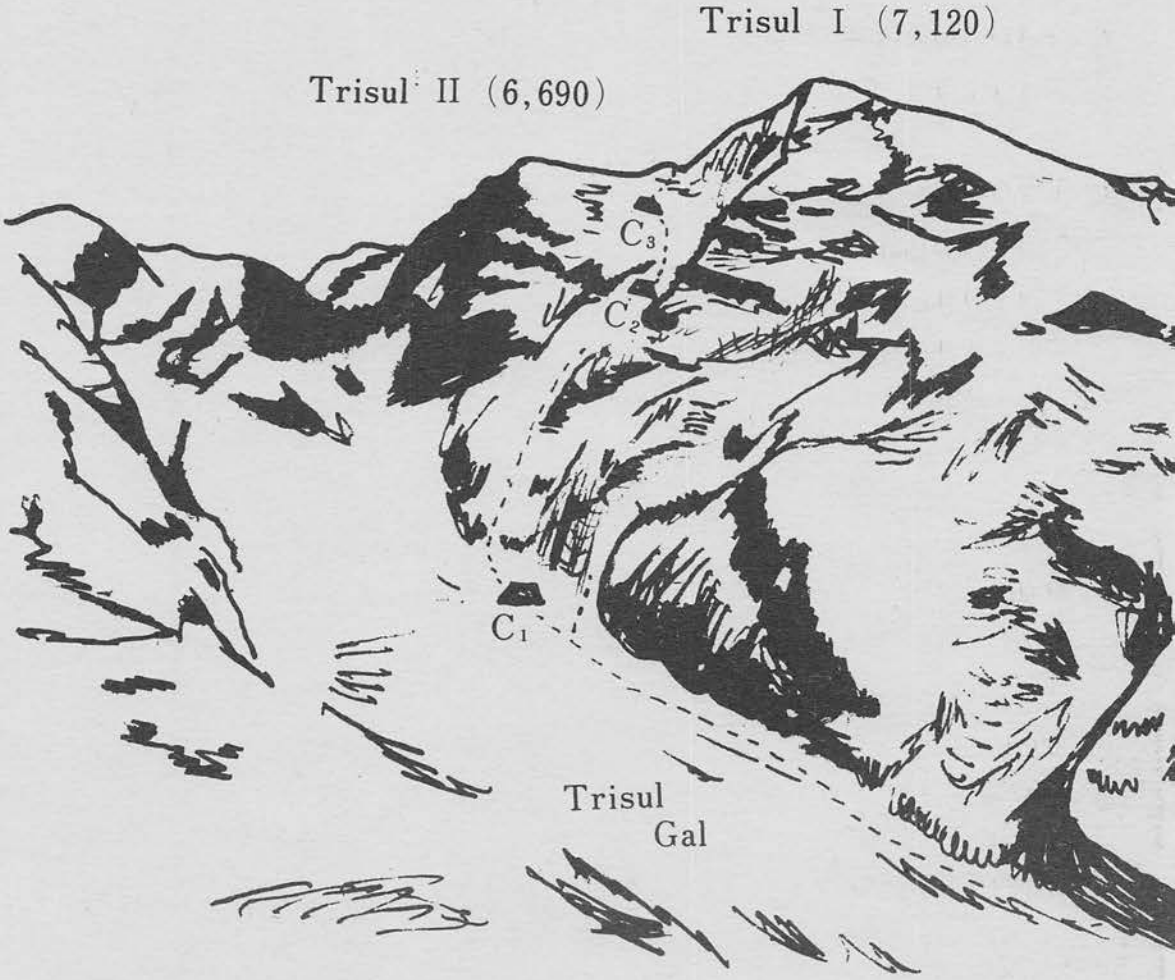
トリスル　28日間

編　者　飛田和夫　安中秀子
　　稲田定重

発行者　1978年日本ヒマラヤ協会
　　ガルワール・ヒマラヤ遠
　　征隊　　稲田定重
　　〒979-15福島県双葉郡
　　浪江町樋渡字西御門70

発行日　昭和54年2月21日

印刷　新栄社写真美術印刷株式会社　非売品



BC. 4,750　　C1. 5,150　　C2. 5,850　　C3. 6,400

SKETCH—Devistan I 頂上から

（1975年岩手県ガルワールヒマラヤ親善登山隊撮影写真による）

飛田和